
未来少年 2nd

オリマリオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来少年2nd

【Nコード】

N2468R

【作者名】

オリマリオ

【あらすじ】

東暦2011年、4月。超能力戦争から2年。サイコキネシスト、略称サイコスト。彼らは超能力者として、この世界で暮らしている。

サイコストでもあり、エスパーでもある魂波闘也はエスパーの指揮官として、エスパーをまとめていた。

そんななか、闘也は一人の少年との再会を果たす。

彼の名は、あかびぐれん赤火紅蓮。

しかし、彼はエスパー島から、コピーングリスバンと呼ばれる道具

を盗み出していた。

反乱兵鎮圧部隊として紅蓮は闘也達と行動を共にしていく。

文章見直し、及び付加削減した改訂版。

未来少年の続編となっているので、前作も目を通していただけると幸いです。

0、プロローグ（前書き）

この小説に登場する地名、人名等は、全くのフィクションなのでご了承ください。

また、死亡シーン等、残酷なシーンもあるのでご注意ください。

文章見直し、及び付加削減した改訂版。

未来少年の続編となっているので、前作も目を通していただくと幸いです。

また、話もある程度は理解が早くなると思うので宜しく願います。

0、プロローグ

東暦二〇〇九年二月五日、この日、サイコネシストとエスパーによる戦争は、エスパーの降伏という形でその幕を閉じた。

人はこの戦争を、超能力戦争と呼んだ。

その中で、英雄としてあがめられた五人の少年達がいた。

そのうちの一人、魂波闘也^{こんぱとうや}。彼は五人の中で特に優れた能力を用い、エスパーと戦った。

だが、実は彼もエスパーだった。しかし、闘也自身はそのことを知らず、戦争を起こした父、ソウリール・エスパーと戦うことを決意した。結果、父を殺したことを後悔した闘也。そこに現れたのは、闘也の祖父と名乗る男だった。

その男の名は、キラ・エスパー。

エスパーを生み出したとされる神の存在だった。数十年前に帰らぬ人となった彼を復活させたのは、エスパー軍最重要組織、ESPが開発したルシーラというエスパー量産ロボ。

ルシーラは、ソウリールの命令により、死んだエスパーのエネルギーを集め、それを凝縮し、キラを蘇らせることに成功した。

だが、キラさえも、闘也達によって滅ぼされ、ようやく、超能力戦争は終結した。

そして、超能力戦争終結から二年の月日が流れた。戦争により被害を受けた災天をはじめとする各地域は、その二年という時間をかけて、復興作業が終了した。そんな世界情勢の中で闘也は、共に英雄としてあがめられ、闘也の相棒として戦ってきた少年、波氣乱州^{はきらんす}と再会した。

その二人と共に、災天中央高校に入学したのは、こちらも英雄である、遠藤的射^{えんどう まとしい}、白鐘由利^{しらかね ゆり}という二人の少女達だ。

四人は、この災天中央高校にて、新たな生活を始めたのであった。

ちなみに、残る一人の英雄、風見秋人^{かざみ しゅうじん}は、あまり頭がよくないがために、中央よりも下のレベルの高校に入学した。

闘也は、日本復興後、エスパーの指揮官の座を離れたが、すぐに帰ってきて欲しいと言われ、再びエスパーの座に戻ることにした。そして、太平洋上に、ハワイほどの島を建設させ、そこに全エスパーを暮らさせることになった。

この『エスパー諸島』と呼ばれるこの島々は、身分によって、住む島を分けさせた。上の身分の島はもちろん、下の身分の島にも、入ることを禁じた。島民たちを指揮するものも、彼らと同じ身分の者。闘也は、『無差別システム』と名づけたこのシステムで、彼らの中に、格差社会を作らないようにした。

この、身分ごとに住む島を分ける『無差別システム』は一見、逆に格差社会をつくるのではと思われがちだが、統率者も同じ身分なため、世間からは『名前だけの格差社会』と言われ、好評だった。

そして、その中の、中級身分のエスパーたちが住む、Mエスパー島では、主に工業が盛んに行われている。そして、そのうちの一つの巨大工場で、警報が鳴り響いたのは、その年の四月のこと……。

1、少年の強襲

少年は走っていた。ただ求める物のために、たった一人で、敵地とも言える場所に。

『シンニユウシャ、ハツケン。シンニユウシャ、ハツケン』

コンピュータの音声が彼のいる建物の壁や床に反響しながら鳴り響く。少年は持っているハンドガンの引き金を引き、防犯カメラを破壊していく。それでも、少年の足が止まることはない。

「Dブロック、突破」

少年は一言そう呟く。誰に言ったわけでもない。自分自身に、そう認識させるためだ。この先には、通常の兵士もうようよしている。先ほど以上に、気を引き締めて進まなければならない。

少年は壁によりかかり、T字に分かれた通路から、敵が来ていなかを確認する。こちらに走ってくる男達の姿が見える。少年はハンドガンをしまい、肩に掛けていたアサルトライフルに弾を詰め込み、装填する。安全装置——セーフティを解除する。そして、タイミングを見計らい、向かい来る男達を、アサルトライフルで撃ち始めた。

銃声が聞こえたのと、味方が何人が倒れたのに気づいた彼らは、一斉に少年へと銃を向けた。

「敵だ！撃て撃てえっ！」

何十発もの弾丸が少年に向かって飛び込んでくる。少年はそれを壁に隠れてやり過ごす。そして、再び体を乗り出し、残っている男達を撃ち倒した。

「Eブロック、突破」

次のFブロックに、例の物がある。少年は、ただひたすら、そのために命を懸けて走り続けていたのだ。

銀色で固められた鉄の通路を、少年はいまだに駆け抜けていた。どこにも錆付いている部分はなく、輝きを放っているようにも見え

たのは、この工場が出来て間もないことを思わせるには十分な判断材料だった。

しばらくして、巨大な扉の前までたどり着く。扉の前で、敵がないかどうかを、銃を構えながら確認する。周辺に人はいない。扉にはセキュリティがかかっている。彼は、先ほどまで倒してきた兵達の中に、研究員がいることを知っていた。そのため、彼はその研究員の指紋を取ってきていた。少年は、それを利用してセキュリティを難なくパスする。

巨大な扉が開く。少年はバイザーを装着する。赤外線レーザーが張り巡らされている部屋の中央に目的の物があつた。

彼は、本物のスパイさながらに赤外線が作動していない部分を通り抜け、目的の物までたどり着く。目の前に輝くそれは、まさしく少年が求め続けた物だった。

「コピーングリスバン……」

彼はその物の名は呟くように口に出した。全体を白いカラーリングで統一されたコピーングリスバンは、彼にとっては、ダイヤモンドよりも価値のあるものだ。そして、それに付属するように、六角形の石が置かれていた。透明なその石もまた、彼には必要な物であり、コピーングリスバンにも、必要不可欠な物だ。

彼はしばし、それらに見とれたあと、それを持って、再び赤外線を潜り抜け、部屋から飛び出した。少年は走る。元来た道を走り、その場所から立ち去ろうとする。

少年は走り続ける。だが、それを拒むように数人の男達を取り囲む。

「ソルジャーエスパーか」

男達はそれぞれが剣を持ち、構えていた。少年は周囲を警戒しながらコピーングリスバンを右腕に装着した。

「コピーリスの力、試させてもらう」

少年はそう呟くと、左手に石を持ち、自らに見せ付けるようにその石を前に構えた。少年は、勢いよくその石をコピーングリスバン一

「略称コピリス——にはめ込んだ。そして、開いていたふたのようなものを閉める。それに反応してコピリスが起動する。」

『パワーストーン——コピー』

コピリスに内蔵されている音声^{コピー}が、彼には歓迎の声のように聞こえた。彼は全身に複製^{コピー}の力を身に纏う。

そう、彼の能力は複製^{コピー}。しかし、物を増やすのではない。他の超能力を自らの物にする力なのだ。そして、少年の奪い取ったコピリスは、その力は無限に引き出すための物。

「これより戦闘を開始する」

少年のいたって冷静な言葉に怒りを覚えたのか、男達は少年に向かって走り出す。数は五。少年は一人の男の顔を勢いよく強打する。そして、そのまま逃げるように五人の後ろに回りこむ。

すると、彼の握られた拳の中で、何かが生成されていく。拳を中から押し出すように生成されたのは、先ほどはめた石と同じ形状である、コピリスにはめる、パワーストーンと呼ばれるものだ。少年は、閉じられたコピリスのふたを開ける。そして、そのパワーストーンを二つ目の穴にはめ込む。

『パワーストーン——ソード』

彼の目の前に、一本の剣が現れる。その剣は、彼らが使っている剣と同じ剣だ。そう、これこそが複製^{コピー}の力。相手の能力を全てこちらに複製し、吸収される。精神的な能力であろうと、実体のある能力でも。少年はその剣を振りかざし、男達へと向かっていく。

「うおりゃああ——！」

男達はそれぞれに雄叫びを上げ、少年に切りかかる。だが、少年は無言のうちにそれらの全てを流れるようにかわし、すれ違いざまに切り刻む。

五人は、一気に劣勢となった。数で押せば勝てると思っていたが、そうではなかった。少年は、慈悲など見せない。見せる必要も、与える必要もないから。

少年は足に装着された排出装置、コピーフットバン、略してコピ

フから、一つの石を取り出す。もちろん、それはパワーストーンだが、先ほどもでのとは、少しばかり性能は違う。少年は、その石を、コピリスのところまで持ってくる。今度は先ほどの二つが入っている場所ではなく、その反対側のところにはめ込む。音声が再び発せられる。

『タイプツール——サンダー』

それにあわせて剣が雷を帯びる。少年は、コピリスについているボタンを押した。それに反応して、コピリスの音声が発せられる。

『フィニッシュアタック——サンダーソード』

雷を帯びた剣を、少年はゆっくりと後ろに引く。そして、それを間に勢いよく突き出す。そこから、雷を帯びた刃が半透明なまま、彼らを貫いた。

「戦闘………終了」

少年はちいさくそう呟くと、一気に元来た道を走り、工場を抜け出す。そして、工場の裏に広がっている海のすぐ横につけてあった白いグライダーに飛び乗る。そして、助走をつけ、ゆっくりとエスパ―島の海を飛んでいく。

少年——赤火紅蓮^{あかびぐれん}は、日本へと帰っていった。

2、英雄との再会

紅蓮は、ゆつくりと学校の中を歩き回っていた。桜の花びらは外で舞い散り、校内では生徒達が話しながら歩いている。

その中で、紅蓮はサイコストを見つけた。二人組だ。一人は全く知らないが、もう一人は、彼にとって、大切な人間だった。

「闘也……だよね？ 炎天北小学校の」

紅蓮は、その一人——魂波闘也に話しかけた。数瞬の間、驚きに包まれ、また、歓喜にみち溢れた。

「小学校？ まあ……そうだけど」

どうやら、向こうはこちらがサイコストであること、そして、自分が唯一友と認めた人物であることをまだ気づいていないようだ。紅蓮は目の前の闘也に向かった言った。

「赤火紅蓮です。闘也さん」

紅蓮は、闘也に対しては敬語を使っている。先ほどは、気が動転して、ちよつとタメになってしまった。紅蓮はそうしてしまった自分に苛立つて歯噛みした。

「え！ ぐ、紅蓮！？」

闘也は驚きながら、紅蓮の顔を見やった。隣にいる少年が、闘也にベタな質問を投げかけた。

「知り合いか？」

「小学校時代、唯一俺が友と認めたやつだ」

少年は疑問の声と顔を作ったが、すぐにかき消し、手を出してきた。その顔は笑っている。

「俺は波氣乱州。よろしくな」

紅蓮は、その手を払った。乱州は、「いつてえ」と言いながら僅かに赤くなつた手の平を押さえた。

「俺は闘也さん以外に従う気はありません」

「おいおい、心外だなあ。俺はお前に従えなんて言っていないぞ」

乱州はしかめっ面を作る。紅蓮は、挑むような目つきで、乱州を睨む。だが、興味がうせた為にすぐに目をそらし、闘也達とすれ違つて、歩いていった。

「あれがお前のお友達かよ。生意気だな」

「昔からああなんだ。許してくれ」

闘也は軽く手をあげ、謝罪の意味を込めた。乱州がその後を追う。

「別に闘也が謝る必要ねえって」

乱州はポンと闘也の肩を軽く叩く。

「はやく日誌とつて来いよ。時間ないぞ」

「あ、わりい」

その手を肩から放し、乱州は職員室へと入っていった。

紅蓮もこの高校に入学した。あの二年前の超能力戦争の時にいたのかは分からない。一緒に戦ったのかも分からない。彼が戦争時、どこにいたのか、何をしていたかも分からない。

「おまたせえ」

乱州が日誌を持って職員室から出てくる。闘也は、乱州が追いついてくるのをまつてから、ゆっくりと歩き出した。

授業時間になった。紅蓮はシャーペンを動かし、黒板の内容をノートにまとめている。紅蓮は、闘也ほどに頭がよかった。

「では、この方程式を………赤火」

「はい」

紅蓮は、黒板に白い字で書かれた方程式を、ゆっくりと解いていく。が、その手を止めることはなかった。彼はもう答えなんて分かっていた。簡単すぎる方程式だ。高校の授業は、やはり最初は中学の復習あたりから始めるものだった。二年前まで行われていた超能力戦争とその復興による学力の低下が原因であるのは仕方ないが、それ以前からあった『ゆとり教育』の影響もあることは疑いきれない。

答えを書き終えて席に戻ろうとしたとき、唐突に窓ガラスが割れ

た。割れた破片が周辺に飛び散る。窓ガラスの周辺にいた数人が逃げようように頭を抱えた。そう、窓ガラスは内から割れたのではない。外から割れたのだ。紅蓮はすぐに窓からその原因を探った。

銃声が外から聞こえる。それを察知した紅蓮はすぐさま窓を避けるようにしゃがんだ。紅蓮のいたところに、銃弾が通り過ぎた。

「エスパーか……」

紅蓮は推測した。おそらく、最近出始めたという反乱兵であろう。

闘也の統べるエスパーのありかたに不満を持ったものが、自ら闘也へと襲い掛かってくる。

紅蓮は、驚いている生徒達を尻目に、教室を飛び出した。

紅蓮とは別のクラスだが、乱州とは同じクラスである闘也は、隣の教室でのガラスの粉碎音と銃声から、エスパーの存在を認識する。「乱州っ！」

闘也は窓を開ける。そして、闘也は窓から飛び降りた。そこまでの行動には何一つ、迷いはなかった。闘也の今の行動は、彼自身、躊躇いはなかった。

「ちよっ！ 待てって！」

乱州も続くように飛び降りる。だが、手だけが窓のふちにがつちりと掴まれていた。

乱州は、闘也が地面に着陸する寸前に闘也を捕まえた、そして、窓に掴まっている右腕を伸ばし、闘也を掴んでいる左腕を縮めていく。こうすることで、乱州自身は降下しながら、闘也も影響はないということになる。

「よっこらせつと！」

乱州はそういいながら地面に降り立つ。すでに乱州の腕から離れ、地面に降り立っていた闘也は、伸ばした右腕を縮めている乱州に伝えるように言った。

「結構数は多そうだ」

「リョーカイ！」

二人が来たのを見つけたのか、エスパー達がグラウンドの陰から姿

を現す。数はざっと数えて三十ほど。その三十人が闘也達を見て止まった。彼らの意志は固そうだ。すぐに立ち退いてくれる気配はない。

「エスパー軍指揮官兼エスパー首相。反乱兵鎮圧部隊隊長、魂波闘也」

「エスパー反乱兵鎮圧部隊副隊長、波気乱州」

それを聞いたエスパーたちをまとめている頭であろう一人がにんまりと口元を笑わせる。

「闘也！ あんたのやりかたは納得できん！ 俺たちの手で殺してやる！」

「殺るつてのかよ！」

乱州が、エスパーを挑発するように言った。その言葉は、実際に彼らを挑発することとなった。

「ジヨトだゴラア！」

走り出したエスパーたちをさえぎるように、一人の少年が道を塞いだ。

その少年の名は、赤火 紅蓮。

3、償うか、対立か

紅蓮は、鬪也達を見る。乱州はもとより、鬪也も驚いている。それもそうだ。自分は、小学校のころは、能力という能力がなかった。サイコストでありながら、まだその複製の能力を全くと言っていいほど使いこなせてはいなかった。

「戦闘を開始する」

鬪也に向かつて、紅蓮は告げる。戦闘となると、紅蓮は鬪也にさえ敬語を使うことが激減する。一応、「鬪也さん」と、さん付けはするのだが。

紅蓮は、コピフからパワーストーンを抜き取る。そして、腕にはめられたコピリスに、パワーストーンをはめ込み、勢いよくふたを閉める。

『パワーストーン——コピー』

コピリスに内蔵されている音声が、はめ込まれたパワーストーン的能力名を言い放つ。彼の拳に力が宿る。全てを手に入れる力。誰にも負けることはない、森羅万象を掴み取るための力。

「それは……まさか」

鬪也は、信じられぬような顔で、コピリスを見つめていた。エスパ以外が、あの島に入ることはできない。食料の調達等で来た者も、海域に入るだけで厳重な審査が行われる。

鬪也は、エスパに、エスパ島からの離島は許していない。再び、超能力戦争が起こるのを防ぐためだ。だが、それと同時に、サイコストはおるか、一般人すら、エスパ島への立ち入りは禁じていた。唯一、エスパ以外で入れるならば、それは、自分をはじめ、乱州なども入隊している「反乱兵鎮圧部隊」のみ。

そして、鬪也は確信した。あれは、中級エスパの住むMエスパ島で開発された、自分達^{エスパ}を守るための力、コピングリスバンだ

と。

しかし、今はそんなことよりも、目の前の反乱エスパーを抑えることが先であることを、闘也は十分に承知していた。闘也は、すぐに乱州と共に走り出し、両手には小型の剣が各一本ずつ握られていた。

「ツインソード」

ウエボン

闘也の能力である武器より生み出される、二本の剣。しかし、あの風情を、『殺さずに』倒すためには、やはり数が必要だ。

「ソウルッ！」

闘也は、自らの傍らに、自らの分身を生み出す。少し白くなっている闘也の分身、それは、闘也の能力から生み出されている魂。もちろん、その数は一つではない。

半数の魂は近接武器を手に持ち、エスパーへと走る。もう半数は、遠距離武器である銃を装備している。近接武器には、棍、ハンマーといった風情だ。

「おとなしく降伏しろ！ 島へ戻れ！」

軽く無謀な説得をした後、闘也は一人のエスパーの足を斬る。斬られた痕から、血がにじむように出てくる。闘也は敵陣のど真ん中で、剣を一気に巨大化させ、周囲をなぎ払うように切り裂いた。

「ビッグソード」

両手持ちの巨大な剣は、たった一振りで、周囲のエスパーたちを次々と戦闘不能の状態にしていく。

「ステイック」

闘也は棒を作り出す。そして、それを振り回し、周りのエスパーたちに向かっていった。

紅蓮はエスパーたちの攻撃をかわしながら、チャンスをつかがう。一人のエスパーが不覚にも紅蓮の回避終了に合わせて、リロード（銃に弾を詰める作業）を開始した。このときこそ、紅蓮が優勢となる第一段階だ。

紅蓮は、リロードしているエスパーの腹部を殴りつけ、そのまますれ違う。そして、一気にエスパーたちから離れると、握られた拳の中に、パワーストーンが作られるのを感じた。紅蓮は、それをコピリスにはめ込み、ふたを閉じる。

『パワーストーン——サブマシンガン』

短機関銃——サブマシンガンを紅蓮の前に実体化させる。紅蓮は、得物を持ち、距離のあったエスパー達へと近づいていく。そして、引き金を引き、鉛の弾丸を撃ち出した。

弾に当たったエスパー達が、まるでドミノを連想させるように、鮮やかに倒れていく。紅蓮は、頭や心臓は狙わず、足を狙い続けた。だが、足しか狙わないことに気づいたのか、数人のエスパー達が軽やかにステップを踏むようにして、紅蓮との距離を詰めてきた。紅蓮は、発砲をやめ、コピフからパワーストーンを取り出すと、コピのストーンを抜き取り、かわりにそのパワーストーンを入れ、ふたを閉じた。

『パワーストーン——ソード』

コピリスに内蔵されている音声が紅蓮の鼓膜を刺激する。紅蓮は向かい来るエスパーたちとすれ違いざまに剣を脚部にめり込ませる。攻撃を受けたエスパーが次々と体を崩れさせる。足を攻撃されては、移動なんてそうそうできるものではない。

その光景を目の前で見せられたためか、エスパーの一部が、紅蓮に向かってその銃を撃ち込む。紅蓮は、その弾幕を左に避ける。すぐに体勢を立て直し、コピリスに短機関銃のパワーストーンを滑り込ませるようにはめ込む。

『パワーストーン——サブマシンガン』

紅蓮の左手から握っていた剣が消え、代わりに銃がその手に乗る。紅蓮はすぐに銃を撃ち始めたが、そこにはすでにエスパーの姿はなかった。戦闘不能となっているエスパーたちの中で、ただ二人、砂煙の中にその姿を捉えた。

魂波闘也。波気乱州。前大戦時の英雄の二人だけが、そこにいた。

紅蓮は、コピリスからパワーストーンを抜き取り、コピフに一つずつゆつくりとしまう。紅蓮は、ゆつくりと闘也へと近づく。今、紅蓮は完全非武装だ。コピリスをはめてはいるが。

「闘也さん……」

紅蓮は闘也達との距離を縮めていく。五メートルの距離もなかった。紅蓮が、もう数歩で闘也とほとんど距離のないところまで近づいたとき、紅蓮の動きはぴたりと止まった。意図的に止まったのではない。反射的に止まったのだ。

刹那、闘也は瞬間的に接近し、紅蓮の首元に剣先を向けていた。

紅蓮は、首元に剣先が触れていることに気がつくのに数瞬の時間を有した。

「な……何を……」

無論、紅蓮は自分が剣先を向けられる意図が分からない。むしろ、手をさしのべられるはずだ。何せ、自分は協力したのだ。例え、それが他国の者という認識であれ、反乱兵の鎮圧部隊だとかでなかれ。「紅蓮。お前を、窃盗及び施設襲撃の罪で逮捕する」

紅蓮は完全に身動きが取れなくなっていた。少しでも怪しい動きをとれば、殺さなくとも、戦闘不能状態までは追い込むのは容易いはずだ。背後で倒れているのエスパー達みたいに。

「コピーングリスバンは、エスパー達に、守るための力として開発させた物だ。お前にあげるために作らせたのではない」

闘也の声は、小学校の時は無論、数時間前にあったときの口調とはまるで違った。そこには、友好的に、かつての旧友との仲を懐かしむ姿はどこにもなかった。そこにあったのは、守るべき物のために戦っているという目とそれに恥じぬ立ち振る舞い。僅かな隙も見せない。気を張っていて、緩む様子が全くない。一体いつまでそうしていられるのか、紅蓮は気になった。だが、彼はそんなことを口に出す気はない。言う必要などないから。言ったところで、状況が変わるはずはないから。

「別に、サイコストだの日本だのと戦争をする気は毛頭ない。また、

あんなことになるのはごめんだからな」

あんなこと——超能力戦争のことであろう。超能力戦争と呼ばれた戦いは、五ヶ月ほどでその戦いの幕を閉じた。結果は、サイコストの圧倒的勝利。そして、その中心となつて戦っていたのが、闘也を中心とする五人の少年少女達だった。紅蓮は、前大戦時、彼らの名を頭に刻み込んだ。

全てを司る力を持ち、相手に対して弱点を全く見せなかったといわれる、白鐘由利。

疾風の如き速さと天使を連想させる翼を持っていた、風見秋人。

どんな遠距離であろうと、その射撃を外すことはなかったといわれる、遠藤的射。

体を自在に変化させ、仲間との連携を確かなものにした、波氣乱州。

そして、己の魂と共に、数多の武具を使いこなした英雄、魂波闘也。

彼らの前に、エスパーは無力であつたと言われている。紅蓮は、彼らの戦いを見ていたわけではないので、本当にそうなのかは分からない。だが、彼らの活躍によつて、戦争が、サイコストの勝利で終わったのは間違いない。だが、それだけではない。この戦争によつて判明したのは。

闘也は、本当はエスパーであつた。だが、闘也自身にその自覚はなく、自分がサイコストなのだ信じ続けて戦い続けた。戦いの中で、闘也は母を殺され、父を殺したということもあつた。

闘也は、仲間に含まれながらも、どこかで孤独のまま戦い続けた。戦争の先の答えも分からぬまま、ただ闇雲に戦い続け、その戦いの中から何かを学びとつた。だが……。

俺には、その何かは分からない。

「だが、二つほど選択肢を与える」

闘也は口を開く。紅蓮は、食い入るようにその言葉に耳を傾けた。

「このまま逃げて対立するか、俺たちと一緒に反乱兵鎮圧部隊とし

て戦うか」

闘也は、それから少し間をおく。沈黙が張り詰めている緊張の糸を更に引き伸ばす。

「だが………」

闘也の口調が暗くなり、声の高さが、一瞬にして低くなった。

「対立して、長い間生きられるとは思うなよ」

対立したら、その先に待っているのは死か。だが、紅蓮はまだ夢をかなえてはいない。彼の、今まででたった一つだけ、望み続けた願いがある。

紅蓮は、こんなことで、夢を失うわけにはいかない。その強い意志だけは、決して揺らぐことはない。彼自身、そう自分で確信していた。そして、その望みを叶えるためには、今自分が手にしているこれしかない。

「コピリスを使えるのなら、反乱兵鎮圧部隊として行動します」

紅蓮の意志は固い。闘也も、それを分かっているはずだと、紅蓮は感じていた。何せ闘也は、小学校時代、自分が唯一友達だと認めた者だから。闘也も、紅蓮だけが、唯一の友達と認めてくれた者だから。

かつての友と、唯一の友と、剣を交え、拳をぶつけ合う気はない。無論、殺しあうなんてもつての他だ。共闘しか、今の彼に道はない。「分かった。お前を信じよう」

闘也の声が、重傷者だらけのグラウンドの中にかすかに響いた。

4、疾風の英雄と彗星たち

炎天南高校。炎天中央高校よりも学力が低く、有名でもなければ、特別なにかすごいところがあるわけでもない。

だが、そんな南高校が、唯一誇れることが、この春にできた。それは、今年入学したある一人の少年がきっかけだ。彼は、前大戦、超能力戦争にて活躍した英雄の一人だった。

「四十八点かよ……」

入学早々に実施されたテストの答案を見て、少年は少し顔をゆがませる。彼は、闘也のように頭はよくない。でも、闘也以上の速さを持っている。

「また悪かったのか？ 秋人」

周囲から、励ましているようで、バカにしているような声が聞こえる。

その少年は、風見秋人。超能力戦争にて活躍した英雄の一人である。彼の入学により、南高校は、いい宣伝になると思っていたが、彼のあまりの知能の低さに、絶句し、肩を落とす職員が南高校にわんさかいた。

しかし、そんな知能の低さを補うかのうちに、彼には常人以上の戦闘能力があった。

校内に警報が鳴り響く。秋人はすぐに授業を抜け出す。秋人にしてみれば、エスパーの襲撃が授業を抜け出すいい時間稼ぎとなっていた。勉強なんてする気はない。だが、それでも戦うことで守ることは、大いに気があった。

秋人は、校門まで押し寄せてきているエスパーを見据える。口元を笑わせると、向かい来るエスパー達へと猛ダッシュする。彼は、戦闘となれば、止まることはない。彼は、高速スピードの能力を持っていた。「遅いっ！！」

秋人は一瞬にして、通り抜けた直線状のエスパーをなぎ払う。エス

パー達が持っていた銃で秋人を撃ってきた。連携が取れているせいか、秋人の側面も弾幕に包まれる。横に逃げられないなら――。

「縦に避けるっ！」

秋人は白い翼を展開させて空中に飛び上がる。上空へと飛び上がった秋人は、尚もはなたれる弾丸を弄びながら避けている。秋人にしてみれば、鉛の弾丸など、赤ん坊のハイハイくらいにしか感じられない。秋人は、弾丸を、巨大な翼で受け止める。めり込む弾丸の黒に、だんだんと翼が包まれる。負けを思わせる状況だが、これも作戦の一つだった。

カウンターウイング

「反射翼撃！！」

秋人は受け止めた弾丸を一気に撥ね返す。それぞれの弾丸が、今度はエスパー達に降り注ぐ。遠距離攻撃のできない秋人は、この方法で上空からの攻撃をする。

「黒流星【鉄槌】！」

三つの黒い影が秋人に手を貸す形でエスパー達に攻撃を行う。エスパー達は、そのうちの一人が起こした衝撃波によって吹き飛ばされる。たった今現れた彼らは、黒い三彗星と呼ばれる、不良集団だ。集団といっても、三人しかないのだが。

黒い三彗星は、全員がブラックホールの力を利用した能力を持っている。リーダーの黒田はブラックホールの力によって移動する黒^{レポート}動、肉体派の黒岸がブラックホールを逆流させることでの攻撃をする黒^{ブラックアタック}撃、頭脳派の黒谷がブラックホールの力をそのまま使った黒^{ブラックホール}吸を使うことができる。

そして、彼らは秋人達とは違うタイプだ。彼らは、人工的にその能力を手に入れた、改造超能力者――カスタムサイコストと呼ばれる者達だ。カスタムは、前大戦時終盤に、サイコスト側が作り上げたものだ。一般住民の中で優れた運動能力を持つ者達だけに許可が下りた。

「逃げるなよっ！！」

黒谷が黒吸の力でエスパー達を吸い込む。そして、そのブラックホ

ールを黒岸へと投げ渡す。

「さあ、ねんねの時間だああっ!!」

黒岸が、秋人目掛けてエスパーを次々と撃ち出す。秋人は一人ずつ飛んでくるエスパー達の腹部に、拳をめり込ませ、足をつまむ。秋人の攻撃により、エスパー達はまるで雨のように地面へと落下していく。秋人は、それに見向きもせず、ただ飛んでくるエスパーを叩き続けた。

「これで終わりか」

秋人は、地面にゆっくりと降り立つと、広げていた白い翼をかき消す。そして、ポケットから黒い携帯電話を取り出すと、電話帳から一つの名前を選び、その番号にかけた。

「あ、もしもし？ 由利ちゃん？」

「ちゃん付けはいいかげんやめたら？ 子供よ」

電話の向こうにいるのは、前大戦の英雄、白鐘由利。秋人がサイコストとなったきっかけともいえる存在だ。秋人は、基本的に女子自体とはあまり話すことはない。だが、共に戦争をくぐりぬけてきた仲間の女子には親しく話しかけ、ちゃん付けして読んでいる。最も、向こうがそれを受け入れているとはいえないが。

「こっちのエスパーの処理、頼むよ」

「自分でやってよ。こっちだって今日反乱兵が来たんだから」

「えー。めんどいなあ」

「じゃ、そっちはよろしく」

「え、ちょ、おま——」

そこで電話が切れる。電話の向こうではもう由利の声は聞こえない。全く、こっちから頼んだのに用件を聞き入れないなんて。

秋人は携帯電話をポケットに戻し、ポケットに手をつ込んだまま学校へと戻っていった。処理なんてする気はない。でも、勉強も秋人にとっては面倒な物だ。どちらをとろうか迷っている間に、中にいた教師に襟を掴まれ、学校へと引きづられていった。

ま、これで処理はしなくてもいいから、よしとするか。

秋人は、それでも学校での勉強が嫌だったので、重い足取りで学校へと戻っていった。

5、失うわけにはいかない

反乱兵の襲撃から二日。紅蓮は今日も静かに机に向かう。コピリスを盗み出した罪が大きいことは分かっている。闘也の怒りがあそこまでなのも、紅蓮には納得ができた。

いくらサイコストであるとはいえ、闘也もエスパーの血を引継ぎし者。エスパーとしても、生きていかなければならない。だからこそ、闘也はその運命を正面から受け止めて生きている。

自分に、反乱兵鎮圧部隊が務まるのだろうか。足手まといにはならないと思うが、大きく役に立てると思っではない。ただ、紅蓮には、一つの思いがある。

（俺は与えられた任務を遂行するのみ）

それは、彼の中で揺らぐことのない決意。余計な事に一切手を出す気はない。出して、得になることもない。

やがて、授業が終わると、紅蓮は一人、屋上へと進む。紅蓮は何も考えずに屋上にいることが好きだ。茶色がかった髪を風になびかせ、次なる任務を静かに待つ。紅蓮にとって、この時間が休息と言ってもよかった。だが、その休息を壊すやつが現れた。

「やつほー紅蓮！ まあたぼけつとしてんの？」

黒く、長い髪を後ろにまとめている少女が紅蓮の肩をポンと叩く。

紅蓮は嫌悪して声を出す。

「何しに来た。邪魔だ」

紅蓮は、相手が女だからとか、子供だからとか、老人だからとか言っって手加減をしない。

自分と馴れ合っているのは、闘也さんの他ない。

他のやつと馴れ合う気はない。誰の助けも借りる気はない。逆に、貸す気もない。

その少女は、紅蓮とは、中学校からの付き合いだ。だが、紅蓮は常に彼女に対して拒否反応を起こす。彼女——藤森奈美は、それで

も抵抗するように紅蓮に話しかける。

「紅蓮ってあれでしょ？ 超能力者なんでしょ？」

紅蓮は黙る。分かっているなら聞く必要もないだろう。確認する必要もないはずだ。名簿の中には、サイコストが誰かも記されているのだから。

「何故だ？」

「え？」

「何故お前は、俺に付きまとう」

紅蓮はじつと、奈美の目を見つめて——というよりは、睨んでいる——問いかけた。

「それは……」

今度は奈美が黙り込む。そのとき、屋上のドアが蹴破られた。エスパード。エスパードのエネルギーを確認した紅蓮はすばやく戦闘態勢に入る。

「戦闘レベル確認。数、六。赤火紅蓮、戦闘を開始する」

紅蓮は誰にともなくそう呟く。サイコストではない奈美は、紅蓮の後ろへと回り込む。紅蓮は、奈美にささやくように言った。

「俺が突破口を開く。その間にお前は逃げろ」

そう呟くと、紅蓮はコピフからパワーストーンを取り出し、勢いよくコピリスにはめ込み、ふたを閉じた。

『パワーストーン——ソード』

紅蓮の前に実体剣が姿を現す。紅蓮は、それを左手で握り締める。

紅蓮は一瞬奈美を心配するように見た後、すぐにエスパードへと走り出した。

奈美は、屋上に取り付けられている手すりに後ろ向きで這うように、ゆっくりと移動していた。奈美は、紅蓮を信じている。きつと、紅蓮が自分を助けるはずだと。

「紅蓮……」

奈美は小さく、目の前で戦っている少年の名を囁く。無論、彼に聞

こえているはずもないだろう。紅蓮が、腕にはめている何かに、石をはめ込む。

『タイプツール——ファイア』

機械が出すような音が聞こえた後、紅蓮の剣から炎が吹き出た。何者も寄せ付けない灼熱の炎。紅蓮はそれで、エスパー達を追い詰める。

「奈美！ 行け！」

紅蓮が奈美に向かって叫ぶ。奈美は、すぐに屋上から逃げ出す。

奈美は、屋上から抜け出すと、すぐに階段を数段飛ばしながら降りる。エスパーの反乱兵の鎮圧だか重圧だかのサイコストがいたはず。いくら彼がサイコストとはいえ、一人では苦しいだろうと考えた奈美の賢明な判断だった。

とあるクラスに駆け込む。そこにいるのは、血だらけの生徒達の中で一人、息を荒くして座り込んでいる少年だった。自分よりも大人びている少年に、奈美は急いで話しかける。

「どっ……どうしたんですか！？ これは一体……」

少年は、その口を開こうとはしない。ふらふらと立ち上がると、奈美とすれ違って屋上へと向かっていく。これはただ事ではない。いや、エスパーが来ている時点ではただ事ではないのだが。

奈美は、すぐに隣の教室をのぞく。そこにも、血だらけになって倒れている生徒達がいた。その隣も同じだった。自分が教室を離れていたほんの数分の間に、学校が、生きた墓場のようになっていた。ていた。

奈美が見つけた唯一の生き残りの少年、闘也は、屋上を目指していた。さきほどの彼女は屋上から降りてきていた。屋上に誰がいるのかは分からないが、エスパーも、サイコストの感覚もしていた。それにしても、一体あいつらはなんだったんだ。エスパーでもなければ、サイコストでもない。能力なんて持っていない。それなのに、

彼らは、非超能力者——ノーマルだけでなく、自分達サイコストもここまで追い込んだ。そして、何よりもの失態は、仲間である乱州たちをさらわれたことだ。運良く自分は見逃された。だが、闘也はそのことに苛立ちを覚えていた。自分は、サイコストとして認められなかった気がして。

屋上では、紅蓮がエスパーと戦っていた。剣でエスパーの攻撃を受け止め。腹部に蹴りを入れ、エスパーの一人を後ずさりさせる。そのエスパーが、傷だらけの闘也を見つける。

「闘也あ！　なんだあ？　その情けねえ姿はよお」

エスパーの一人は少しずつ闘也へと近づいていく。闘也だって戦士だ。いつまでも、やられてばかりではない。

そのエスパーの右足に、槍が突き刺さった。闘也は、苦し紛れに刺しこみ、そして抜き取った。

「ランス
槍」

闘也は、この二年間の間に、武器の能力の中で成長していた。いままでの武器であるソード、スティック、ハンマー、ガンに加え、さらに倍近くの武器の具現化能力を習得した。そのうちの一つが、今繰り出したランスだ。

「紅蓮………」

闘也は、少年の名を呼ぶ。紅蓮は、闘也には気づいてはいない。紅蓮が、コピリスに付けられているボタンを押す。

『フィニッシュアタック——ファイアソード』

コピリスの機械音声がその能力を発する。紅蓮は一回転して、エスパー達の足を焼き斬った。

「ぐあああつー！！」

エスパー達の悲痛な叫びが闘也の胸の奥を刺激する。いくら同じことを二年前にやっていたとはいえ、同胞達が傷つけられるのは、今となっては目を背けたくなることだった。

「紅蓮」

闘也は、先ほどもよりも声量を大きくする。闘也の声に気づいた紅蓮

がこちらに向き直り、普段見せることのない驚愕の表情を闘也に向けた。

エスパーの殲滅が完了したところで自分を呼ぶ声がした。屋上の出入り口を見ると、そこにいたのは闘也だった。体は傷だらけで、とてもまともに戦える状態ではない。

「闘也さん!!」

紅蓮は、倒れこむ闘也を支える。闘也が少量の血を吐き出す。

「紅蓮……………」

闘也は、すでに何もかもがぼろぼろだった。これが前大戦の英雄の姿なのかと思ってしまう。実際、紅蓮もそう思っていた。まさか、自分でも倒せるエスパーで、やられるはずはない。何が、闘也をそこまで追い込んだのか、紅蓮には見当がつかなかった。

「俺の仲間を救ってくれ」

「闘也さん以外、助ける気はありません。無論、闘也さん以外の命令も聞く気はありません」

自分は、闘也以外に頼るものがない。もしかしたら、単にすがっているだけかもしれない。なぜ？

弱い自分を隠したいから？

闘也しか、信じられないから？

自分で、心を閉ざしているから？

闘也は、待つてましたとばかりに少し笑ってみせる。闘也は顔を上げ、紅蓮を見つめ、まるで風のように、囁くように紅蓮に言った。

「じゃ、これは命令だ。俺の仲間を助ける」

「……………」

紅蓮は押し黙る。確かに、闘也以外を助ける気は、紅蓮には微塵もない。だが、闘也の命令以外は聞く気はない。つまり、闘也なら命令してもいいということ。そこに、助けるという命令が入っていたとしても。

「これ以上、何も失うわけにはいかないんだよ」

闘也は、そこで口を閉じる。紅蓮は、下を向いたまま、闘也に宣言した。

「任務……了解」

それは、闘也の仲間を助けると誓ったことになる。紅蓮は、ゆっくりと立ち上がり、赤黒い校内とは正反対の、青い空を見上げた。

6、覚悟はある

闘也を支えている紅蓮は、青空を見上げた後、ゆっくりと視線を闘也へと戻す。闘也も、紅蓮同様空を見上げていた。そこには何もない。答えが存在しない。それでも、そこに何かあると信じて、あるいは目的もなく、とりあえず見上げて心に癒しを求めるゆえに。

「紅蓮！」

屋上に、奈美が飛び出してくる。紅蓮は、やはり表情を固くする。それでも奈美は、抗うように笑顔を作ろうとしている。だが、それができるはずもない。紅蓮はまだ見ていないが、教室は肉体のある墓場のようなし、屋上もまた、戦いの爪痕が残っている。

「何をする気なの・・・」

奈美は紅蓮に問う。紅蓮は、何の躊躇いもなく口を開く。

「森羅万象の超能力者となる」

言葉としては長ったらしいが、意味はいたってシンプルだった。

森羅万象——この世の全てのもの。

俺は、森羅万象の超能力者——オールサイコストになる。

幻とも言われる、サイコストの能力中最大の力。何にも負けることのない力。森羅^{オール}万象。

俺は、必ず森羅万象のパワーストーンを手に入れて見せる。そして、全てを司る超能力者となる。そのために、手段を選ばないわけではない。それでも、多少非人道的といわれてもいいことをしてでも、この夢を叶えたい。単なる欲望に過ぎないのかもしれない。だが、俺はやれると信じたい。単なる自己中に過ぎないのかもしれない。それでも、俺は夢を諦めたくはない。

「俺は反乱兵鎮圧部隊の、赤火紅蓮だ」

彼はきつぱりと、自分の身分を告げた。自分は、もしかしたら初めて、名前以外に自分を表せるものを手に入れたのかもしれない。でも、この肩書きに頼る気はない。もし、肩書きに頼るなら、『森羅

万象の超能力者』という肩書きに頼りたい。すがりたい。それまでは、実体のないものにすがる気はない。

「なれると思ってるの？」

それは目の前で遠すぎる夢を言い放った紅蓮に対しての冷やかしかではなく、心配の言葉だった。自分は何もできないからと、せめてその気持ちを受け入れようとしていた。

「覚悟はある」

紅蓮は、静かにそう告げる。紅蓮は、鬨也を自分の肩に腕を回させ、ゆっくりと、屋上を出て行った。

奈美は、たった今屋上を出て行った紅蓮の言葉を受け止めた。

（覚悟はある……か）

紅蓮は、その言葉にいつも嘘や偽りはない。でも、嘘ではないことを言うせい、意味が理解しづらい言葉も時折発することがある。でも、今の紅蓮は違った。はつきりと、覚悟があることを示した。

「紅蓮……」

自分はどうすればいいだろうか。このまま、この場所で震えている？ 世界の情勢も、紅蓮たちが戦い続けていることも知らぬまま、ただひたすらに待ち続ける？ 場合によっては、紅蓮が死んだことも分からぬまま……。

いや、と、奈美は首を横に振ってその想像をかき消す。奈美は、屋上からすでに見えない紅蓮の後を追って出て行った。

自分にでも、できること、手伝えることはあるのではないのか？ 力になれるとは思わない。一緒に戦えるとは思っていない。奈美は、尚も階段を降り続けた。その歩みは止まらない。すでに、彼女の行動で決断が下されていた。自分は、足手まといになるだけでも邪魔な存在だとしても、自分は紅蓮を支えていたい。なんとなく、世話を焼きたくなった。

こんなに軽い気持ちなんて……。

奈美は、少しうつむく。世話を焼きたいなんて理由では、それこ

そ、邪魔にしなければならないだろう。自分には、きっとその理由が他にはあるのだろう。でも、今自分はその答えが見つからない。見つめる力がない。きっとこれを探すのは、どんなサイコストでも無理であろう。自分の隠れた心を見つけられるのは、自分しかない。

「奈美」

自分の名前を呼ばれて奈美ははっとして足を止めた。

「紅蓮………」

今日、何回この名を呼んだだろうか。教室の光景を目にした後では、数える気にもならない。そもそも、数える必要はないであろう。紅蓮は少しばかりこちらを見つめる。だが、すぐに視線をそらし、一階へと降りていった。

「私も………」

奈美は唐突に口を開く。紅蓮が振り返る。再び、こちらをまっすぐに見つめてくる。

「私も、紅蓮と一緒に行く」

「必要ない」

答えは、言って一秒も経たぬうちに返ってきた。文字通り、即答だ。奈美が理由を訊ねる前に、答えは来た。

「邪魔だ。俺の戦いに」

紅蓮は視線をそらし、再び歩き出す。紅蓮はすでに一階にいる。奈美は、急いでその後を追う。すぐ後ろまで来たとき、剣先を首元に当てられた。

「お前を殺す。従わないなら」

「私は従うために生きてるんじゃない」

奈美は、今までにない強い視線で紅蓮の瞳を見つめる。紅蓮は微動だにしない。紅蓮は、剣を消すと、再び奈美に背を向け、反対方向に歩き出した。

「紅蓮………」

紅蓮の背中を見つめることしか、今の奈美にはできなかった。

ふと気がつき、首元に指を当てる。こするように首に指をやった

あと、首から指を離し、それを見た。微量の血が、奈美の指についた。奈美がその指から前に視線を戻したとき、すでに紅蓮達の姿はなかった。

7、ミッションリザルト1

東暦二〇一一年。超能力戦争終結から二年の月日が流れている。

エスパーとの戦いに勝利を収めたサイコスト。サイコストでもあり、エスパーでもある少年、魂波闘也。彼は太平洋上にエスパー島という島を建設させ、全エスパーをそこに居住させることに決定した。

その中に中級エスパーの住むMエスパー島がある。そこでは、さまざまな工業製品が開発されているため、科学的には一番進歩している島である。

その数ある工場の一つで、警報が鳴り響く。そう、工場に侵入者が現れたのだ。エスパー達は侵入者を食い止めようと保安部隊を動かし、応戦したが、侵入者に被害はほぼ全くなく、侵入をそのまま許してしまった。

侵入者である赤火紅蓮という少年。彼は、この工場で開発されている『コピーングリスバン』と呼ばれる物を持ち出そうとしていた。そして、万全のセキュリティと、数々の保安部隊を突破し、コピーングリスバン——略してコピーリス——を盗み出したのであった。

紅蓮は、炎天中央高校に入学した。そこで、前大戦の英雄であり、そして紅蓮の旧友である闘也と再開を果たす。炎天中央高校には、闘也の他にも、波気乱州、遠藤的射、白鐘由利といった、超能力戦争の英雄の面々がそろっていた。

その中で、闘也以外とは対立姿勢をとり、友好的な関係をとろうとした乱州を拒んだ。闘也とは、まるで解かれない絆——というより、紅蓮の闘也に対する忠誠心——で繋がっている。

炎天南高校では、これまた英雄の風見秋人がいた。その他には、黒い三彗星と言われる元不良軍団がいる。改造超能力者——カスタムサイコストである彼らも、超能力戦争を戦った。最も、闘也達の

ように英雄にはなっていないが。

闘也達は、エスパーの頂点である闘也の政策に不満を持ち、たびたび反乱を起こすエスパーがいる。闘也達は、そんな反乱兵を抑える部隊を結成し、日本の防衛に努めている。

それが、反乱兵鎮圧部隊。

そして、紅蓮がコピリスを盗んでいたことを知った闘也は、紅蓮に、対立するか、鎮圧部隊として協力するかを選択を迫った。勿論、紅蓮は協力を選んだ。闘也と対立してまで乱州達と対立するよりも、闘也と共に戦うことを選んだ。

それから二日後、エスパーの反乱兵を学校の屋上で殲滅した紅蓮。そこに、傷だらけの闘也が現れる。見れば、学校はすでにいつもの活気はなく、すっかり荒廃していた。あちこちに血だらけの体が転がっているその様子を全く気にせず学校を出て行く紅蓮。紅蓮は、闘也の要求に応じ、闘也の命令という形で、さらわれた英雄達を助けることを決めたのであった。

8、サイコスト狩り

紅蓮は、闘也の治療を進めながらも、闘也の感覚を頼りに、闘也と共に戦ってきた英雄達の所在を探していた。なんでも、闘也は彼らの反応は通常よりもずっと強く感じられるからだそうだ。

紅蓮は、ふと足を止めた。人、いや、これはサイコストの気配だ。闘也も気づいているようで、周りを見回した。反乱兵はエスパーだ。サイコストではない。でも、わざわざ自分達のところに、仲間に入れてくれと頼むようなことをするだろうか？英雄を助けるという目的を持って、加勢しようとするのか。いや、そもそも英雄を助けるなんてことは、自分と闘也、そして奈美しか知らない。

「獲物発見。サイコスト狩りを始める」

二十代後半の男の声がする。やがて、その姿が見える。後ろにも、数人のサイコストがいる。彼らと紅蓮達の違いは一つ。

彼らは改造超能力者——カスタムサイコスト。

ちなみに、そうでないサイコストを、世間では純粹超能力者——

ピュアサイコストと呼ばれている。無論、紅蓮や闘也はピュアだ。

「サイコスト……狩り!？」

闘也は驚きの表情をその英雄らしい顔に僅かに見せる。一方の紅蓮は、全く表情を変えることはない。

「ソード……!」

カスタムの男達は剣を実体化させ、こちらへとまっすぐに向かってくる。紅蓮と闘也はそれぞれ別方向に避ける。紅蓮は、コピフからパワーストーンを取り出す。白く輝くその石を、コピリスへとめ込む。そして、そのふたを閉じる。コピリスから内蔵音声が流れ出す。

『パワーストーン——ソード』

紅蓮の前に、剣が出現する。左利きの紅蓮は、その剣を払うかのように左手で握る。

「新しい力、見せてやる」

闘也は、そう呟くと、短い鎖につながれた二つの棒を取り出し、まるで威嚇するように振り回した。

「ヌンチャク！」

闘也が習得した新しい武器、そのうちの 하나가ヌンチャクだ。ランスに続く新たな力。

「敵確認。カスタムが五。赤火紅蓮、戦闘を開始する」

紅蓮は誰にともなく言い放つと、左手に握り締められた剣を振り回し、カスタム達に斬りかかった。カスタムはそれをいとも簡単にかわし、背後から剣を振り下ろす。紅蓮はすぐに向き直り、剣で受け止める。カスタムが徐々に紅蓮を押していく。紅蓮は、コピフからパワーストーンを取り出し、ソードの石がはめられている反対側の部分にそれをはめ込んだ。

『タイプツール——ウオーター』

その音声が入ると同時に、紅蓮の剣が水剣へと変貌する。超高速でふきだす水は、どんなものも切り裂く。人は愚か、鉄を代表とする金属などもだ。その水がカスタムの剣を刃の根元から斬りおとす。

紅蓮は、その水剣でカスタムの足を斬りおとした。

闘也は、ヌンチャクを振り回しながらカスタムへと接近する。相手が振り下ろしてきた剣を鎖の部分で受け止める。そして、その鎖で剣を押し返し、間髪入れずにヌンチャクを叩き込む。

「サイコスト狩り……お前達もサイコストだろう!？」

「今の俺たちの任務は超能力戦争の英雄であるピュアの捕獲。最悪の場合、殺害」

カスタムのリーダーであろう男が剣を構えなおす。闘也はヌンチャクを變形させる。鎖につながれたヌンチャクは、一瞬のうちにハンマーへとその姿を変える。

「ハンマー」

持ち手の部分以外は巨大な金属の塊だ。銀色に輝くそのハンマーを、

闘也は軽々と両手で振り回す。カスタムは必死の抵抗を見せつけ、そのハンマーの打撃を避ける。そこで闘也は、振り下ろすと見せかけて地面すれすれで止める。そして、カスタムが着地したところでカスタムではなく、地面に向かってハンマーを振り下ろす。大地が揺れ、カスタムが体勢を崩す。闘也はその隙を見逃さず、足をハンマーで潰す。

「ぐっ……」

カスタムは小さくうめき声を上げる。闘也は殺気に満ちた声でカスタムに問うた。

「炎天中央高校を襲ったのも、カスタムか」

その質問に、カスタムは息を荒げながらも答える。

「カスタムと連立しているノーマルだ。エスパーでもない」
「どうりで、あのときはサイコスト反応がしなかったわけだ。」

敵はカスタムだけではない。エスパーだけでもない。いや、エスパ―はむしろ味方につけたい。だが、下手をすれば、サイコストの反乱兵として自分が襲われる可能性も否定はできない。

「カスタムは、全て関与しているのか？ このサイコスト狩りに」
「対象は全てのカスタムサイコスト。お前の知り合いにカスタムがいれば、そいつらも皆、俺たちと手を組んでいる」

闘也の知る限り、知り合いでは黒い三彗星が思い当たる。あの性格だ。裏切ったとしても、おかしくはない。

現在、世界中にサイコストはいる。ピュアもカスタムも。現在のサイコストは、世界で約一億人である。そして、そのうちの三分の二、六千万人以上がカスタムサイコストだ。その中の日本では、サイコストは約三百万人、その中でカスタムは二百万人ほどいる。そのカスタムが、その圧倒的物量で攻め入り、ピュアサイコストを捕獲し、時に殺す。

そんなことは、許されぬ行為だ。例えその能力のつき方が違って
も、最初からなっている者、改造されてなった者でも、超能力者――
同胞であることに変わりはない。

「なら宣言しよう」

闘也は小さく呟く。だが、その声は紅蓮にも届いていた。

「エスパー反乱兵鎮圧部隊は、これより、カスタム反乱兵鎮圧部隊も兼ねて始動する」

闘也の宣言に、紅蓮は、どことなくほっとしていた。

もう、同胞だからと迷う必要はない。自分には、サイコストという同胞しかいない。闘也の、二つの同胞を持つということは、理解できない。だが、彼は今日までで、超能力戦争でエスパーという同胞を殺し、今また、サイコストという同胞と戦っている。戦闘技術からして、殺すことは、まずないだろう。でも、野放しにするとは思えない。

「サイコスト狩りを今すぐやめろ」

闘也は強く言い張った。仲間が今まで捕まり続けている。何人も。それは、闘也の知っているところでも、知らないところでも。

紅蓮はゆっくりと剣を構えなおす。戦闘の続行が可能な人数は三。闘也がハンマーで倒した一人と、紅蓮が水剣で倒した一人が抜けている。

「赤火紅蓮。残存戦力を撃破する」

紅蓮はコピリスのボタンを押す。それに反応してコピリスの音声が届く。

『フィニッシュアタック——ウォーターソード』

紅蓮は協力噴射している水を真上に構える。姿勢をかがめる。だが、その剣先は空へと向いている。闘也が自分の後ろに回ったのを確認すると、紅蓮はその剣を素早く振りぬぎ、カスタム達の足を完璧に切断した。

「終わったな……」

闘也が、半ば空しさ混じりの声を吐き出す。紅蓮も、コピリスからパワーストーンを抜き取ると、コピフへとしまいこんだ。

サイコスト狩り。首謀者は前大戦末期、サイコスト側が戦線投入した、一般人を人工的にサイコストへと変えた改造超能力者——カ

スタムサイコスト。実行しているのは、カスタム、及びノーマルと言われる者達。ノーマルは、エスパーでもサイコストでもない、一般人のことだ。目標は、^{ターゲット}命を授かったそのときからサイコストである、純粹超能力者——ピュアサイコスト。その内容は、ピュアの捕獲、最悪の場合は殺害。重要な目的は想像がつく。これは、紅蓮が勝手に想像しているに過ぎないが。おそらくは。

「ピュアの完全抹消………」

闘也は、紅蓮が呟いた言葉を聞いて啞然とした。ピュアの完全抹消……。聞いていただけでその行く末が見えるようで恐ろしい。

「それがお前の予測している目的か。サイコスト狩りの数瞬の間をおき、紅蓮が返答する。」

「はい」

紅蓮の考えていることは分かる。なら、なぜ殺害をしない？一思いに殺さない？抹消が目的ならば、捕獲などなんの意味も成さない。

だが、その疑問は目の前に現れた少年によって解決された。

「殺す」

その少年は、超能力戦争の英雄、風見秋人であった。

9、すれ違う行動、交錯する拳

目の前にいる英雄に、紅蓮は挑むような目で見ていた。いや、その目は、見ているよりは睨んでいる。視線を全くそらすことなく、ただ睨んでいる。

「秋人」

闘也は秋人の名を呼ぶ。だが、秋人はその問いかけに、明るい笑顔で返してくると予想とは違う反応を見せた。

「殺す！」

「秋人………？」

様子がおかしい。それは、秋人が現れたときから紅蓮が感じていたことだった。予想通り、秋人はあの伝説的な英雄とはまるで別人となっていた。おそらく、今の風見秋人は、超能力戦争の英雄なんかではない。

「俺は………^{ジュン}Pカスタムだああっ！！！！」

秋人は俊足で闘也の目の前まで接近し、腹部に強烈な拳を入れる。

闘也は一気に吹き飛ばされ、靴の裏が一気に磨り減る。なんとか体勢を立て直した闘也は、殺傷能力のない武器、スティックを構える。

「闘也さん！」

「紅蓮！！」

自分と呼ぶ声が聞こえたのは、腹に鈍い痛みを感じてからだ。体が地面から離れる。減速のしようもなく、近くにあったコンクリート製の塀に体を腰からぶつける。痛む背中に、崩れた塀の破片が追いつちをかける。紅蓮は、とりあえずはその塀からその身を離す。腰の痛みからか、上手く立ち上がることができない。

「赤火紅蓮………戦闘を………開始………する………」

途切れ途切れにその言葉を紡ぐ。紅蓮はゆっくりと立ち上がる。腰に激痛が走ったが、今の彼にそんなものはいしたことはなかった。

闘也さんを傷つけた。ならば自分は、その加害者の魂をこの世から消し去るのみだ。

『パワーストーン——コピー』

パワーストーンをはめ込んだコピーリスからいつもと変わらぬ音声が発せられる。紅蓮は、複製の力を身に纏う。自らの本当の力。ここから全てが始まるのだ。自分の原点は、ここ——複製という能力——にある！

「敵の排除を開始するっ！！！！」

紅蓮の叫びが、三人しかいない小さな戦場に響きわたった。闘也は走り出した紅蓮に声で止めようとした。

「紅蓮止める！そいつは秋人じゃない！正気を取り戻すまでは・・・

・・・」

「あれは敵です！！」

きっぱりと紅蓮は告げる。紅蓮は尚もその足を止めようとはしない。闘也は半ば絶句していた。

違う。秋人は敵じゃない。仲間だ。共に戦場を潜り抜け、戦い抜いてきたかけがえのない戦友だ。超能力戦争という、絶望を覚えさせる戦争の中で、生きる希望を見失うことなく、ただ戦争終結という光だけを信じ、戦ってきた。

だが、紅蓮はそんな闘也の思いをやはりきっぱりと拒んだ。

「秋人でないなら、遠慮はしません！」

「そういうわけではない！」

闘也はいうが早い飛び出していた。迷うことはたくさんある。超能力戦争でも、迷いを抱え、だが、時としてそれを振り払って戦ってきた。エスパーの創設者ともされるキラ・エスパーと違って、どこか心に迷いを覚えながらも、仲間との繋がりを信じ、覚悟という力で斬った。

今でも迷いは脳を埋め尽くすほどだっただけである！

だが、人は迷う生き物だ。迷うから進化してきた。迷うからこそ、

その迷いの末の決断が——大きな意味を成す！

「よく考える！ 悩め！ 迷え！」

闘也はスティックを紅蓮に向かって振り下ろす。紅蓮はそのスティックの攻撃位置を知っていたかのようにかわす。そして、闘也を横目でちらりと見ると、一気に闘也の後ろへと抜けていった。紅蓮が握り締めた左手を秋人の腹部へとめりこませた。

「複製^{コピー}」

紅蓮の左手の中に、パワーストーンが生成される。その石がなんの能力を持っているかは、闘也はすでに分かりきっていた。

「迷っていれば、時は過ぎる。過去は取り戻すことはできない。なら——」

紅蓮はパワーストーンをコピースにはめ込む。しっかりと固定されたパワーストーンは、紅蓮の目には新鮮だった。紅蓮はそのふたを勢いよく閉める。

『パワーストーン——スピード』

瞬間、紅蓮の姿は闘也の視界から消えた。紅蓮は一瞬にして秋人の背後へと回り込み、蹴りを繰り出す。

「がはっ……！！」

秋人がうめき声を上げる。紅蓮は素早く着地する。そして、ゆっくりと立ち上がり、それと同時にゆっくりと頭を上げる。

「今この時、迷うよりも、行動することの方が、意味がある」

紅蓮は淡々とした口調で話す。闘也の前には倒れている秋人がいる。正気を失っていることは知っている。だからこそ、闘也は秋人からはある程度の距離はとっていた。

「思想することは、なんの意味もない。行動しなければ、当人達の時間は進まない。世界の時間しか、流れることはない」

紅蓮の言っている言葉が、闘也の過去と繋がる。

記憶の片隅にある、紅蓮との記憶。六年生？五年生？それすら分からない。三年以上前の話だ。闘也自身も、自分が戦争するとは思

つていなかったし、その英雄になるとも思っただけじゃなかった。

「はい、皆さん。皆の好きな四字熟語はなんですか」

担任である女教師の声が教室に響き渡る。闘也は無論何もいう気はない。それを知っているのか、担任は闘也には四字熟語は聞かなかった。

その中で、紅蓮はとある二つの四字熟語を上げた。その当時から、僅かに目じりの上がっている鋭い目つきをしていた。闘也は別として、他の子からは、やや距離を置かれる存在であった。勿論、気持ち悪いからというのもあるが、なによりも、彼から発せられる気が、恐怖を呼び起こすからだ。その顔立ちからではない。彼そのものからだ。

「はい、じゃあ紅蓮君」

担任が紅蓮を指名する。自分よりも小さい机に手をつき、立ち上がりながら、椅子を足で押す。その鋭い目つきのまま、紅蓮は言った。

「粉骨碎身、そして、森羅万象です」

決して大きい声ではない。闘也も、その発言を記憶のどこかに閉まっていたままであった。

そう、彼は今、それを成そうとしている。粉骨碎身——紅蓮なりの解釈なら——考えている暇があるなら、行動したほうがいい。行動しなければ、何も始まらない。何も進まない。何も終わらない。

「くっ……」

今になって、闘也はサイコスト狩りを憎んだ。なぜこんなことをするのか。サイコストにもエスパーにも、もちろん、ノーマルにも、本当ならば罪はないのだ。それでも、なぜカスタムはピュアに対して『サイコスト狩り』を行うのか。自分達もサイコストなのだ。同胞なのだ。

そして、その同胞の中で仲間として戦ってきた秋人。本当はピュアなのに、カスタムにさせられたというのか。

「ピュア同士が戦うなんて——」

間違っている。超能力戦争の終結。そのとき考えていた未来とは遠くかけ離れている現実が目の前で起こっている。なんとか正気に戻さなければいけない。どうやって戻す？戦うことしかできなくなってしまうっている少年の正しいはずの心を。

闘也は、ゆっくりとスティックを構えなおす。

——紅蓮の言うとおり、たまには考えずに動くのもいいかもしれない。だが、あくまで自分は自分のやり方を貫き通す。

「誰も死なせはしない！」

死者を出さずに戦う。体に異常を来たすことはあっても、絶対に死には導かない。更正させるための光へと導かなければならない。超能力戦争の時には思いつくはずもなかった戦い方が、彼を動かす。

けど、もし秋人が正気を取り戻したとき、とても一緒に戦えないようでは困る。だからこそ、彼はスティックを構える。秋人はゆっくりと立ち上がり、こちらをまっすぐに見てくる。その目に今までのようなにこやかなものはない。それは目だけではなく、顔も、その体勢もだ。

「正気を戻せ！！！！秋人オオオオツ！！！！！！」

闘也のスティックがほのかな光を放つ。闘也はそのスティックを片手で振り回す。時計周りに動くスティックが、秋人のわき腹をこの上ない威力で打ち込んだ。

そのとき、闘也に迷いはなかった。

紅蓮は、その光景を少し離れた場所で見ていた。秋人が闘也のスティックをもちにくらい、一気に吹き飛ばす。紅蓮は、追撃をしようとはしなかった。紅蓮はゆっくりとパワーストーンをコピリスから取り出す。コピフにそれをしまうと、ゆっくりと闘也の方へとゆっくりと歩いていく。

紅蓮は闘也の前に立つ。そして、紅蓮はゆっくりとその姿勢をかめる。右ひざが地面につく。

「誰も死なせない戦い……………」

しかし、その姿勢から一変、瞬間的に紅蓮の体勢が変わる。拳を後ろに引き、すぐに前へと突き出す。闘也の頬の感触が紅蓮の拳に伝わる。闘也が二、三メートル吹っ飛ぶ。

「闘也さん……あなたは——」

紅蓮はゆっくりと近づく。それでも、それなりの距離を闘也とはとっていた。紅蓮は、普段出すことのない声を張り上げた。

「あなたはそれでも戦士なんですか——」

紅蓮の声は、闘也には痛いほど届いている。

戦士。戦う者。弱い敵も強い敵も構わずなぎ倒し、世界に平和をもたらしていく。紅蓮は、敵を倒せば、世界には必ず平和が訪れると信じている。実際、あの超能力戦争もそうして終結を迎えたのだ。エスパーをただひたすらなぎ倒していき、やがて終結した。紅蓮は、その間、闘也たちとは全く戦うことはなかった。戦いを傍から見ていただけだった。

「戦士が、情なんてもったら、戦士じゃないです」

紅蓮は自分では怒りが爆発していると思っていたが、闘也から見ればすでにその熱は冷めていた。

「なら、俺は戦士じゃなくていい」

「っ……！！！」

「単に『戦ってるサイコスト』でいい」

紅蓮は押し黙る。言い倒したつもりが、逆に押し倒されていた。紅蓮は、闘也の言葉の返答に迷い、しばらく黙る。

「戦うのは戦士だけじゃないし、戦士が戦うとも限らない」

紅蓮へとゆっくりと闘也が近づいてくる。反撃を食らうかと僅かに身構えたが、闘也は軽く肩を叩いて紅蓮から離れていく。

「考える、紅蓮。人は、戦士とそうじゃないものに二分されるわけではない」

紅蓮を通り過ぎると、闘也はその足取りを速めることも遅めることもなく、英雄——いや、仲間の下へと歩いていった。

10、戦いの黒幕

炎天からはかなりの距離である場所に、それはあった。ここは、大体四国のあたりである。なぜ大体四国なのか。ここは、本州と四国の間に建設された海中施設だったからだ。

「魂波闘也以外に、やっかいなピュアが現れたな」

一人の男が、部下が送ってきた映像を眺める。そのやっかいなピュアとは、紅蓮のことである。無論彼らは、その少年の名が紅蓮であることは知らない。

「こいつの腕についているのはなんだ？」

男は、紅蓮の腕についている白い不思議な物体の正体を側近に問い詰めた。側近はあらかじめその質問が来るのを分かっていたかのように、手元の資料からその答えが載っているページを開き、読み始めた。

「コピーングリスバン。Mエスパール島にて開発されましたが、この少年によって強奪。パワーストーンと呼ばれる石によって、様々な能力を使うことが可能なようです」

映像の中で少年が、コピーリスにパワーストーンをはめ込んでいる。その石をはめた瞬間、少年は姿を消した。いや、実際に消えたわけではない。高速の能力によって、見えないほどに速いのだ。

「青水はどこにいる？」

「現在、炎天に向かっています。現在待機中ですので、今からでも命令できますが……」

「ああ、分かった。命令は俺からしておく」

側近の言葉を途中でさえぎり、男は返事をする。映像を止めると、側近にコピーを求めた。口で言わずとも、その手の動きによって指示を出す。側近は、やはりその動きを理解しているようで、「かしこまりました」と頭を下げると、男の部屋を後にした。

部屋には、男一人となった。男は、キーボードをすばやく叩くと、

映像を呼び出す。映像には、ぐっすりと眠っている少年の姿があった。男は少年の名を呼ぶ。

「青水」

呼んでは見たが、返事は愚か、全くの反応を見せなかった。男は少しばかり苛立ちを含んだ声で再び少年の名を呼ぶ。

「青水………」

それでも、尚、反応がないまま寝顔を映像にさらけだしている少年に堪忍袋がはちぎれたようで、男は叫んだ。

「青水冷雅!!」

「はひいっ!!」

さすがにその叫びが耳に響いたのか、少年は飛び起きて返事をした。しかし、そんなみつともない返事をした後に、その男の姿を映像に見つけると、すかさず敬礼した。

「はっ!」

「はっ! じゃない! 何回呼んだと思ってるんだ!」

「えーと……三回ですか?」

「五回だ!」

男はわざと嘘をついた。逆に言えば、冷雅の答えは全く当たっているのだが、男はあえてそのことについては黙っていた。そうして呼ぶ回数を多くすることで、これからの意識を高める必要があるからだ。それを言えば、三回でも十分駄目なことはダメなのだが。

「まさか。黒田様は必ず少し間を空けるじゃないですか。映像開かれてから、まだ二十秒しか経ってません。とても五回は呼べませんよ」

冷雅の言葉に「ちっ………」と言葉を漏らし、舌打ちする。

黒田と呼ばれた男は舌打ちした顔の面影を消し去り、真顔になって青水に言った。

「では、本題に入る。お前は今、炎天に向かってるそうだな」

黒田は青水の答えを待つ。無論、その答えはすぐに返ってくる。

「はい。炎天で何かしろと?」

「とある少年が腕にはめているコピーングリスパンを強奪してこい」
黒田は、清水に命令を下す。清水は短く返答すると、映像を切った。
黒田はゆっくりと椅子に腰を下ろした。手元にある小さな写真には、
自分と、その自分によく似た少年がいた。
超能力戦争にも参加し、不良からは一応足を洗ったようだが、カス
タムになったことに関しては問題だった。

『サイコスト狩り』の特徴上、カスタムは全員がこれに関与しな
ければならない。黒田と暗志は、超能力戦争の開戦以来、連絡が取
れていない。なぜなら、彼は四国に単身赴任していたからだ。その
途中、超能力戦争が起こったのだ。当たり前のことではあるが、も
ちろん、炎天に戻る手段など一つとしてない。戦争中だ。空から飛
行機で向かえば撃ち落とされるし、電車に乗ろうも、兵隊のサイコ
ストばかり。狙われてもおかしくはない。徒歩でいこうにも、距離
が遠すぎる上に、満足の食料調達もできないのだ。餓死してしまっ
ては元も子もなかったのだ。

超能力戦争が始まり、四ヶ月が経とうとしていた。開戦の理由が
知りたいのもあり、彼はサイコスト協会へと足を運んだ。地下に作
られたサイコスト協会では、人だかりができていた。その人だかり
のほとんどは男。そして、その中の三分の二以上が、体のゴツい大
男と呼ぶのにふさわしい者達だった。そう、そこで彼は出会ってし
まった。

改造超能力者——カスタムサイコストという存在と。

その瞬間、彼の中にふつふつと思いが湧き上がってきた。その思
い、というよりは、感情であろう。その感情は。怒り。

なぜ戦争を起こしたのか。関係ない自分達を巻き込んで、何が楽
しい。確かに、戦っている超能力者達の中には必死になって戦って
いる者達もいる。将来教科書に載るかもしれないほど英雄的な存在
も現れるだろう。だが、それでも、その陰で苦しんでいる人達がい
るのだ。彼らがそのことを熟知し、考えてくれていても、戦争をし

ていることに変わりはない。

そして、中には、そんな戦争を楽しんでいるやつもいるはずなのだ………！

戦いを楽しむことになんの意味があるというのか。戦いに身を投じれば、殴り殴られ、蹴り蹴られ、撃ち撃たれ、斬り斬られ、死なせ死に、殺し殺される。そんなものを楽しむことがおかしい。自分の無力さを嫌悪する。もし自分に力があれば、そんなやつらも、エスパーも全てを倒していたい。いや、倒していたはずだ。

戦いを終わらせたい。これは、平和を望む者全ての願いだ。だが、おさまったところで、再び新たな戦いが始まっていく。戦いが始まっているわけではないが、前大戦時の名残として、エスパーの反乱兵が沸きだしている。

全ての戦いの根源は、サイコストにある。

サイコストがいなければ、超能力戦争も起きなかった。反乱兵も無論、沸きあがることはなかった。超能力戦争だって、エスパーがサイコストに対して行った戦争だ。一般市民のことを考えもしていなかった。

黒田の前に、コーヒーが置かれる。砂糖が少し多めに入っているコーヒーである。彼が自ら指示した味どおりに、側近は作って持ってきた。

「ユル」

「なんでしよう、闇亜様」

側近は今日初めて、闇亜の名を呼ぶ。黒田闇亜。それが彼の名だった。親がなぜこの名前をつけたのかは分からなかった。

「エスパーの動向が知りたい。偵察部隊を出すよう指示しろ」

「承知しました」

側近——ユルは、深々と頭を下げると、背を向け、闇亜の部屋を後にした。

日本より東、つまりは太平洋上の島のある一室で、数人の男達が頭を悩ませていた。ここは、エスパ―諸島である。その中のレスパー島に位置する最高議会で、数人の男達が頭を抱えていたのだ。

レスパー島は、レスパー島よりも高位のレスパー達に住む島である。ここの議会で決められたことは、各島主と相談の後、各島々へと報告がまわっていく。今回の議題は、もちろん、コピーリスが奪取されたことに関してだ。

「この事態をどう対処しますか？矢川議長」

矢川博雪。エスパ―最高議会議長。後ろに長く髪が伸びていて、後ろで結ばれている。眼鏡の中の細い眼光が、手元の資料に滑る様に走っていく。

主犯、サイコスト赤火紅蓮。副犯なし。内部からの情報の漏れ、なし。インターネット上での検索結果、該当なし。目的、コピーン 그리스バンの強奪。概要、レスパー島にて開発されていた能力複製装置、コピーン 그리스バン。四月二日、強奪事件発生。負傷者、六十三人。うち、死亡確定人数が二十五人。四肢のいずれかの切断被害者、十人以上。エスパ―諸島憲法により、判決、極刑、よくて終身刑。

「そいつは今どこにいる？」

博雪は周りにいた男達に訊ねる。彼らからは意外な言葉が返ってきた。

「闘也様がついているそうです」

博雪は少しばかり目を見開く。といっても、元々鋭い、細い目つきのため、近くにいない男達はそのことに気づいてはいない。

「分かった。闘也様の独断で、赤火紅蓮の判決を決めてもらおう」博雪はホチキスで止められた資料を表紙まで戻す。席を立ち上がると、歩きながら彼らに言った。

「以上が結論だ。解散」

「はっ……」

それに引き続いて議員の男達が次々と席を後にしていった。博雪は

議長室の椅子に腰を下ろすと、念力作動型情報処理機を取り出す。これは、一般的には、サイコパソコンと言われている。従来のパソコンと違い、念力で動かすため、電気を全く使わない。ノーマルでは使えないのだが、サイコストやエスパーにとっては、軽い念力を送る程度ならば、どんな弱い者だとしても、休憩時間を挟まずに五時間は送り続けられる。

サイコパソコンで赤火紅蓮の情報を探り出す。特別に全エスパー、サイコストの閲覧が可能であるページへとリンクすることができる。これができるのは、サイコスト、エスパー含め、数人しかない。博雪が知っている限りでは、自分、闘也、S、M、Lエスパー島主、サイコストのお偉いさん方。名前は忘れた。

出てきた検索結果には、博雪は思わず声を出した。

「な・・・・・・・・」

いや、そんなはずはない。この情報場の管轄外など・・・・・・・・。

「ない・・・・・・・・だと・・・・・・・・？」

検索結果に、赤火紅蓮の情報は一つとしてなかった。その後も数十分調べ続けては見たが、全く見つかることはなかった。まさか、自らの検索の能力にもかからないなど・・・・・・・・。

「くつ・・・・・・・・何故・・・・・・・・」

彼はその目に悲観と憤怒を浮かべながら、サイコパソコンをシャットダウンさせた。

11、思い出す戦い

秋人は目をゆつくりと開けた。ここはどこだろうか。自分は何をしていたのか、まだよく把握できていない。今の秋人そのもののさえも把握できていなかった。秋人を覗き込む顔が見える。秋人はゆつくりと体を起こす。

「秋人」

いつだかも聞いたことのある声が自分と呼ぶ。目をしっかりと開く。目の前に闘也がいた。秋人はその体を立たせる。目の前には炎天の住宅街の一部がしっかりと見えていた。

「闘也……俺は……」

秋人は戸惑いを見せる。今まで自分は何をしていたのだろうか。最後に自分が見たのは、サイコストオーラを持った者達が、学校に攻め込んできて、それから……。

「サイコスト狩り」

闘也が呟く。その言葉の意味を秋人は理解しきれていない。サイコスト狩り……。自分は狩られたのか……。サイコスト、つまりは味方に。

「やつらはカスタムだ」

「カスタム……だと……?」

秋人は顔を歪ませる。カスタムといえば、二年前の超能力戦争の時に作られた人工的なサイコストだ。そのカスタムが、同胞達を自分のような殺人鬼に変えているというのか……。

「いつから気を失っていた?」

闘也の方が聞いてきた。こちらが聞きたいくらいだが、とりあえずは答えた。

「四月の……十七日だったか……. 那时候、カスタムが攻めてきて…….」

秋人は、脳の片隅に置かれている記憶から情報を引き出した。今度

は鬪也が顔を歪ませ、誰にもなく呟いた。

「こつちと同じ……」

「中央もあつたのか……!!」

まるで威嚇でもするかのように、秋人は一歩、鬪也に向かって踏み出した。鬪也の方は、詰め寄られたにも関わらず、一歩として後ろには下がらない。

「おそらくは、全国で行われている……」

「そんな……じゃあ、乱州達は……!!」

秋人は鬪也の肩を掴んだ。鬪也は、その顔を沈ませ、呟いた。

「学校はボロボロ、サイコストは皆連れてかれた」

「そんな……!!」

秋人は鬪也の肩から自分の手を離す。沈み込んだ二人は、残りの仲間のことを考えていた。

今、彼らはどうしているのだろうか。もし、自分と同じようにさ
れているとしたら、彼ら全員と戦わなければならない。そうならば、
誰か一人だとしても、殺してしまう危険性がある。幸い、自分はま
ともな殺傷武器みたいなものはないし、殺されはしなかったから、よ
かったのかもしれない。だが、残り三人は全員が殺傷能力を持つて
いる。

乱州は、巨大な拳を作り出せば潰し殺せるし、その腕を剣にだっ
て変形できる。場合によっては、無敵な体に変えられるかもしれない。
い。

由利も、火で焼かれ、水で溺れさせ、雷で痺れさせ、風で呼吸を
できなくし、地で体を打ちつけられる。

的射ならば、射撃の能力でいつ狙撃されてもおかしくない。近距
離でも、水を噴出した水剣で襲い掛かってくる。

だが、自分を含めて多くのサイコストがさらわれたというのに、
なぜ鬪也だけが連れ去られることなく残ったのだろうか。鬪也のサ
イコストとしての能力は恐ろしい。向こうにしてみれば一番欲しい
獲物であるはずだ。鬪也を見つけれないわけもない。

「闘也さんっ!!」

今度は聞きなれない声が聞こえてきた。闘也はもちろん、秋人もその声の方を見た。

「カスタムです……!!」

すでに付近には、軽く百はいるであろうカスタムサイコストが迫っていた。秋人は、軽く地面を蹴るように滑らせる。

「仲間に手出しさせてくれたお返しさせてもらうぜ!」

「ああ!」

闘也と秋人は身構えた。

紅蓮の声に応じた闘也と秋人が身構えたのを見ると、紅蓮はコピフからパワーストーンを取り出した。肩の辺りまで持っていていき、半回転させると、勢いよくコピリスへと突っ込み、ふたを閉じた。

『パワーストーン——コピー』

その音声が聞こえたのを確認すると、紅蓮はカスタムを睨みつけ、誰にいうわけでもなく言い放った。

「赤火紅蓮。反乱兵、カスタムサイコストに対して、戦闘を開始する!」

紅蓮はそれを言い終わると一気に敵陣へと地を蹴って走り出した。自分は、反乱兵鎮圧部隊だ。もう容赦はしない。

闘也は小型の剣を二本作り出し、走り出す。秋人は、紅蓮や闘也よりも先に、カスタムを殴り始めていた。

紅蓮もすぐにカスタムまで接近する。カスタムが剣を横振りして斬り付けてくる。紅蓮はしゃがみこんでそれを回避し、そのしゃがんだ反動で飛び上がり、そのカスタムの頭を殴りつけた。その場に倒れこんだカスタムの後ろから、さらにカスタムが迫る。

「紅蓮!」

闘也が剣を銃へと切り替え、鉛の弾丸をカスタムへと撃ち出す。この距離だけあって、狙いは正確で、カスタムの腹部を直撃していた。

腹を押さえているカスタムを左手の拳で払うように殴りつける。
横方向に倒れたカスタムに目を向けることもなく、紅蓮は目の前の
カスタムに蹴りを入れた。

紅蓮は蹴りの反動を使い、少し後ろに下がると、コピフから剣の
パワーストーンを取り出す。紅蓮はそのパワーストーンをすぐにコ
ピリスへとめ込む。コピリスから、すでに聞きなれた音声が聞こ
える。

『パワーストーン——ソード』

その音声が静まると、紅蓮の前に実体剣が現れる。紅蓮はそれを左
手で少し横暴に掴み、目の前のカスタムへと再接近する。姿勢を低
くし、滑るように接近し、カスタム達の足を膝下から切り落とす。
数としては四人だ。その瞳に一切の慈悲はない。

バランスを崩して倒れたカスタム達にやはり目を向けることもな
く、次なる敵を斬り付ける。腕が斬り落ちる。紅蓮は全く止まるこ
とはない。自分は任務を遂行するのみ。感情を持つ必要はないし、
持ったとして使い道はない。他の人はどうなのかは知らないが、自
分では本当に使い道は分からなかった。

「てやあああつ——」

紅蓮は目の前の敵に体当たりし、そのまま一気にその周辺にいたカ
スタムを横振りして切り裂いた。彼の動きに反応してか、剣が少し
ばかり伸びる。切り裂かれた者の中には、そのまま息を引き取った
者だっているだろう。だが、紅蓮は止まることなく、カスタムを斬
り続けた。

同じだ。

二年前と同じだ。

あのときと違うといえば、エスパーがカスタムになったことだけ
だろう。

二年前、超能力戦争の開戦より、エスパー軍は数万、いや数十万
のエスパーで構成されていた。エスパー達の数は日本にいた数では

おそらくは守りきれなかったのかもしれない。

その中で、エスパーの殲滅を確かなものにした。斬り、殴り、潰し、撃ち、エスパー達を殺し続けてきた。そのときは、自分が同胞であるとは知らずに。

おそらく、エスパーの兵士達も同じだっただろう。目の前で同胞を殺す者もまた、同胞であることに。

これでは、サイコストの数は激減してしまう……！！
降伏しか、彼らを救う方法はない。だが、それを成すためだから、犠牲を出すのはよくない。大量殺人を犯せば、カスタム達は恨みを持ち、さらなる猛攻を加えてくる。しかし、だからといって一人も殺さずに戦ったとして、相手がありがとうございますと降伏することもないだろう。自分達が馬鹿にされたと勘違いし、カスタムを治療して再び戦線投入してきてもおかしくはない。

戦うしか道はない。でも、だからといって、人を殺すだけが、人と人との戦いではないはずだ。

闘也が右腕から右足にかけてカスタムを斬りおとす。そこから止まることなく、流れるように隣のカスタムの両足を切断する。そして、その二つの攻撃によってしゃがみこんだ闘也は、右足で地面を蹴り、正面のカスタムを斬り違った。腹部に斬撃の後を刻まれるものもいれば、ちょうど足と腹部の境目を斬られた者もいた。

「戦うのをやめろ！ 死にたいのか！！」

その言葉が癪に障ったのか、カスタム達は先ほどよりも激しい攻撃を行う。斬撃の中を斬りながらすれ違う。ようやくカスタムの人ごみがなくなった。カスタム達の後ろに回ったのだ。闘也は一本の剣を握りなおそうと、軽く上に放り投げ、右手で取ろうとした。

取ろうとしたのだ。

刹那、闘也の剣が消えた。いや、剣自体はしっかり見えている。すぐに周辺を見渡す。そこにいたのは、一人の少年である。右手にきつく握り締められた剣を、闘也はしばしの間見つめる。この一瞬で奪い取るということは、秋人のような速度系の能力か、あるいは・

・・・。

「なかなかの剣だ。想像から作られるだけあって、素材もいいし、なりより鋭い」

彼の評価はどれも良評価だが、それは、自分のものだからであろう。闘也はもう一本自分の剣を作り出し、目の前の少年に問うた。

「誰だ。お前」

「俺は青水冷雅。カスタム達の軍『カスタマー』の『虹七色』に所属しているイケメン君だ」

目の前の少年の自己紹介で——自称イケメン君であることを除いて——この戦いの裏が少しだけ見えたような気がした。

12、青き盗みの風

目の前の少年、青水冷雅の自己紹介から察すれば、今回この『サイコスト狩り』を始めた組織は『カスタマー』。無論、カスタムが中心で構成されてはいるが、中には能力を持たないノーマルもいる。だが、サイコスト狩りを行っていることから、おそらくピュアはいないと思われる。カスタマーの組織内での一つの部隊、もしくは、強者が集まった幹部組織と思われる『虹七色』。冷雅曰く、彼はその一員らしい。どの道、ここに現れたということは、サイコスト狩りが第一の目的のはずだ。

しかし、気になる点もある。確かに、あれだけの大部隊のカスタムを投入してきたが、こちらを疲弊させるには十分だ。いや、疲弊したところに強者を送り込んで一気に叩く作戦かもしれない。

だが、もし別の作戦があるとしたら、彼が一人で現れたのも納得がいく。彼が——大部隊のカスタム達を別に——一人の方が戦いやすいと判断し、一人で来たのか、あるいは敵の指揮官が一人の方がいいと判断したのか。どちらにしても、疲弊したところを一気に叩くわけではない。彼の能力を今一度振り返る。

出現はいきなりだった。俊敏な動きでこちらの剣を取り上げた。だが、豪快に力づくで取られた感じはなく、しなやかな動きでとっていた。秋人が持っている高速の能力では、あんなしなやかな動きはできない。彼は自らの知識の中から、冷雅の能力を引っ張り出した。

「その力……スナッチ奪取か!!」

闘也の読みが当たったのか、冷雅は少ばかり口元を挑むように笑わせた。

「さすが超能力戦争の英雄様だ。俺の能力をすぐに言い当てるとは」
小ばかりにした口調を気にすることなく、闘也は冷雅に問うた。

「狙いはなんだ」

「お前なら、分かるだろう？ 俺が何を狙ってるかなんて」

やはり、疲弊したところへの突撃ではないようだ。彼の能力からして、こちらへの攻撃というよりは、何かを、実体のあるものを狙うはずだ。この戦場で、自分が知っていて、価値のありそうなもので、実体のあるもの……。

闘也の中で一つのある物が浮かび上がった。

まさか——あれを！！

「お前つ……………！！」

「遅い」

一言闘也に言い捨てると、カスタムの大部隊の上を飛び越えてある一人の少年の前へと降り立った。

「しまった！」

この距離では、そう簡単に間に合わない。やつの狙いはただ一つ。

コピーングリスバン。

闘也の中で、様々な感情が巨大な渦を巻く。

怒り、悲しみ、喜び、憂い、その他諸々……。いつかもこんな感情を味わった。なぜか、それが今は思い出せない。でも、あのとき闘也は言ったのだ。

——コピーングリスバンは、お前のために作らせたのではない、と。

それは、紅蓮に向かって言った言葉だ。だが、それは紅蓮以外ならば誰でも持つていつてほしいというわけではない。誰でさえも、持ち出すことは許さない。

それは、エスパーの——同胞達を守るために作られた力だ！！

あれが自分にも紅蓮にもなくなってしまえば、エスパー達は、本当に自衛の術を持たなくなってしまう。同胞として、国家元首として、そして何より、数多の同胞達を殺してきた罪を償うために！！俺は…………盗らせるわけにはいかない！！

闘也の中で、全神経が研ぎ澄まされる。視界が三百六十度全て見えたような気分になる。見えてはいなくても、感覚で分かる。何が

どこからどのような動きで活動しているのか。視覚や第六感だけではない。嗅覚、聴覚も異常なまでの伸びを見せる。

「ムゲン!!!!!!!!!!!!!!」

闘也は一喝する。その一喝より早いか同じかの動きで冷雅の肉体を殴り飛ばす。その拳で吹き飛ばされた冷雅は、闘也の数十メートル先まで飛んでいった。

超能力戦争時、闘也含め英雄達は覚醒を起こした。その原理は未だサイコスト協会でさえ究明できてはいないが、協会は、この覚醒、そしてそれを引き起こす体内のシステム、発現の原理、それらを総称し、『ムゲン』とした。

発動中の身体能力、神経系の飛躍的な上昇はもちろん、能力も飛躍的に伸びる。中には、能力そのものが変わる場合もあれば、能力の効果が変わる場合もある。どちらにしろ、戦闘能力が急上昇するのには変わりはない。

闘也は右手に持っている剣と同じ大きさの剣を作り出す。そして、誰に言うわけでもなく、その武器の名称を呟いた。

「ダブルソウルソード……………」

紅蓮も秋人も、その姿を見て啞然としていた。

秋人は、その身を僅かに震わせながらムゲンを発動させた闘也の姿を見ていた。

四年ぶりの覚醒。この覚醒は超能力戦争以来である。もちろん、戦闘以外において、覚醒する必要はないからだろうが。エスパーに対しては一切覚醒せず、自分にすら覚醒しなかった闘也がいきなり現れた少年に対して覚醒する。秋人は、そのことに対し、少年に嫉妬心を抱いた。自分が弱いからかもしれないが、闘也には考えることも多い。もしかしたら、咄嗟の判断でそうしたのかもしれない。

どっちにしても、覚醒した闘也はやっぱすげえ。

ムゲンを超能力戦争以来起こしていない自分では絶対に届かない存在であろう。でも、闘也には闘也の戦いがあるし、自分にも同じ

ように、自分の戦いがある。ムゲンを発動させようとさせまいと、戦う意志を示していることに変わりはないのだろう。

秋人は、しばしの間吹き飛ばされた少年と闘也を交互に見ていたが、カスタムの大群がいることを思い出し、再びその大群の方へと体を向ける。彼らも秋人と同じだったのだろう。

『虹七色』の一人が吹き飛ばされた。それもたった一撃で。戦意喪失もあり得ぬ話ではない。

秋人は呆然と吹き飛ばされる様子を見ていたカスタムの際を突き、一気にその大群の中を駆け抜けた。その素早さに気づかぬうちに、カスタム達は自分達が宙に跳ね上げられたことを悟る。いや、悟ったところには、すでに地面に叩きつけられている。

「遅いぜ！ カスタムさん達！」

小ばかりにしている口調の秋人を攻撃するのは愚か、視界に捉えることすら困難を極めた。

秋人が走り過ぎ去った部分には瞬間的な亀裂が入る。その光景は、その通行進路上にいたカスタムが全て吹き飛ばされ、道を開けたような状態になっていたのだ。

『パワーストーン——ソード』

秋人以上に闘也のムゲン発動に気を引かれていた紅蓮が動き始める。秋人は少し笑って見せると、先ほどとは違うルートで、大群の中を走り抜けていった。

13、ミッションリザルト2

東暦二〇〇九年二月。サイコスト、エスパーの間で行われた超能力戦争は、エスパー側の降伏という形によって、その幕を閉じた。

東暦二〇一一年四月。超能力戦争終結から二年の歳月が流れた。

サイコストでありながら、エスパーの血をも持つ魂波闘也は、エスパー全員を、太平洋上に建設した島々、「エスパー諸島」へと移住させた。階級ごとに区分した島々の中には、その闘也の政策に異を唱え、日本へと攻め込むことも度々あった。

そんな彼らを静めるため、超能力戦争の英雄をはじめとする、『反乱兵鎮圧部隊』が結成され、人々はさほど怯えることもなく、平和に暮らしている。

エスパー島よりコピーングリスバンを盗み出した赤火紅蓮は、闘也に従い、反乱兵鎮圧部隊となった。だが、それから大きく間を開けぬうちに、炎天中央高校で、とある事件が起こる。ノーマルはほとんどが殺され、サイコストもほとんどが誘拐された。唯一その中で残っていたサイコスト、赤火紅蓮、魂波闘也は、さらわれた英雄達を救うため、動き出すこととなった。

その中で、紅蓮と闘也は改造超能力者——カスタムサイコストと戦闘になる。その中で明らかになった、『サイコスト狩り』の存在、純粹超能力者——ピュアサイコスト——の捕獲、殺害を目的として動き出すカスタム達。その規模は今ほ小さくとも、全国各地で小規模なサイコスト狩りが勃発していた。

その中で、半ばカスタムとなってしまうた、超能力戦争の英雄の一人、風見秋人が現れる。なんとか正気を取り戻させた紅蓮達であったが、その直後、かなりの数であるカスタムとの戦闘になった。

一方、エスパー島の最高議会では、コピーリスの強奪犯である者が闘也と行動を共にしていることを知り、いざという時には、闘也に紅蓮を討つという結果で議会終了というものになった。

さらにもう一方、四国と本州にはさまれたとある海中に、カスタム達の秘密基地が隠されていた。その中で指揮官を務めていたのは、黒い三彗星リーダー黒田暗志の父、黒田闇亜であった。闇亜は、とある一人の部下に指示を下した。その命令は、コピリスの強奪であった。

その命令に従い、紅蓮達の前に現れた少年、青水冷雅。彼は奪取^{スナッチ}の能力を持ったカスタムであった。

彼の言動により、カスタム達が集結した組織、『カスタマー』の存在、そして、その中の組織である『虹七色』の存在を紅蓮達は知った。

コピリスを奪取しようとした冷雅に対し、闘也は、覚醒システム、『ムゲン』を発動させる。超能力戦争以来の覚醒に、秋人は興奮し、紅蓮は啞然としていた。闘也の戦いは、二年前の時と変わらぬ動きであった。

が、その覚醒も虚しく、闘也は一瞬の隙を突かれ、コピリス奪取の阻止に失敗してしまう。

コピリスを奪われた紅蓮、覚醒した闘也の悔やみ、秋人の奪還、エスパーの決定、カスタマーの存在、そして、今だその姿を見せないかつての仲間達。

まだ、戦いは始まったばかりである……。

14、戦いの記憶

その夜、紅蓮は泣き続けた。人目を気にしている様子は全くない。ただただ、自分を責め、悲観的な部分だけをあらわにしていた。

俺は、コピリスがあつてこそだったのか……………？

俺は、コピリスに依存しすぎていたのか……………？

俺は、コピリスがなけれ弱いというのか……………？

俺は……………俺は……………。

「俺は…………俺はアアアアアッ！！！！」

静寂であるはずの夜の闇の中に、少年の悲痛な叫びが響き渡った。自分の能力を知ったとき、紅蓮はその能力を自在に使えるようにするため、日々訓練に努めた。小学校入学直前に言われたことであつた。唯一の超能力者であつた闘也を目の前に、神経を集中させ、その能力をそのまま使えるようにしようとした。しかし、それは全くといっていいほど成長の証はなかった。

台風が直撃していようが雷が鳴り響いていようが吹雪であろうがお構い無しに日々訓練を続けた。それを続けている間に、一年が過ぎ、二年が過ぎ、気づいた頃には、小学校を卒業していた。彼は、卒業式を境にその心を完璧に閉ざした。引越しをすることとなり、紅蓮は別の中学に転入することとなった。

その後、中学に入学してからは、ほとんど誰とも話さず過ごした。サイコストなんて無論いなかった。帰宅すれば休むことなく訓練を続けた。勉強など、する気もなかった。する必要等、どこにもなかった。授業中も、遠くにいる闘也のことしか、考えることはなかった。指名されたときは、その問題を即座に理解し、正確な答えを僅か三秒ではじき出していた。

そんな訓練漬けの生活を続け、十月になっていた。

十月。超能力戦争の開戦。

それを機に、紅蓮は戦闘に参加しようと試みた。しかし、エスパ

ーの能力は十分な情報がない上、紅蓮の能力はほとんど役に立たないものであった。

戦う力がない紅蓮は、家族と共に非難した。途中でサイコスト軍に、サイコストだからと引き止められたが、事情を説明し、通してもらっていた。

しかし、それは長く続かなかった。サイコスト軍は、「銃で戦闘に参加してほしい」と頼まれた。紅蓮は、親の了承を得るのに苦労はしたが、なんとか軍に入ることができた。銃を両手に抱え、入隊宣言をし、とあるサイコストの隊に入った。

緑色の軍服を身に纏い、胸にはサイコストとローマ字で書かれた刺繍が施されている。紅蓮は、隊長に深く礼をする。隊長は、紅蓮の姿を見て少し微笑んだ。

「お前、結構できそうだな。俺は隊長の木下正人。よろしくな」
差し出された手を払いはしなかったが、握ることもなかった。

「赤火紅蓮。よろしくお願いします」

それだけを言い、少し頭を下げると、すぐにその場から離れていった。上司にさえこの態度であったが、その戦闘技術は正人と同等のものであった。支部長から、隊長をやらないかと誘われたが、やる気など微塵にもなかったため、その誘いを断った。

数多のエスパー達と戦いを続けてきた。数で押されることもあれば、戦術で押されることもあり、窮地に追い込まれたこともしばしばあった。紅蓮自身、そのような状況に陥ったのは、一度や二度ではない。だが、紅蓮は隊の中では、その能力によってか、それなりの成果を挙げていた。

そんな中である一人のサイコストが、隊の助っ人として現れた。年は、紅蓮と同じ、あるいはさほど離れていないと見える。バランスのとれた体型に、よく動きそうな口が特徴的である。紅蓮は、直接彼と話すこともなければ、機にかけることもなかった。

「波気乱州君だ。俺の見る限り、かなりの腕の持ち主だ」
当時は気にかけてはいなかったが、紅蓮は現在に至ってそれを思い

出した。波気乱州。炎天中央高校襲撃前るとき、彼からさしのべられた友情の握手を拒否した。対立姿勢をとった。無論、現在もそれは変わらない。

彼は紅蓮が予想していた以上の戦果を挙げた。といっても、彼が自分達の隊と共に戦闘をしたのは一回だけではあったが。

そして、それから幾度もの戦いを潜り抜け、超能力戦争はようやくその幕を閉じることとなった。

超能力戦争が終了後、久々に我が家へと紅蓮は帰った。超能力戦争が終わる寸前だったが、両親は先に帰ったと避難所の人は言っていた。

紅蓮は、ゆつくりと居間のドアを開ける。各所に血が見えた。紅蓮は全身に悪寒を感じた。その瞬間は動きを止めたが、動き出した途端、止まっていた時には想像もつかないほどの速さで進んでいた。目の前には、血まみれで倒れた両親の姿があった。母は何かに手を伸ばし、父はその肩に手を添えている。

写真には、紅蓮と両親が写っていた。今の姿からは到底考えられない笑みを浮かべている。紅蓮だけが、その写真の中で笑ってはいない。ただまっすぐにレンズを見ていた。紅蓮はその写真を手に取り、一目惚れでもしたかのようにじっと見つめた。だが、その写真の中の紅蓮は、見つめる紅蓮とは正反対に、真っ直ぐに紅蓮を睨みつけていた。

お前が死なせたんだ。お前が両親を見捨てたんだ。

写真の中の紅蓮が、本当は聞こえないはずなのに聞こえてくる。

写真には全くの動きはないし、周りには自分と両親以外には誰一人いなかった。

これは、自分自身の声………なのか………。

「くそ………」

紅蓮は、自らの体を振るわせる。自分自身へと怒り、エスパーへの怒り、写真の中の自分へと怒り、そして、自分自身の能力への怒り。「くそオオオオッ!!!」

彼は、この日初めて、自らの感情で泣いた。
コピリスを奪われた今日と同じように。

15、霞む決意、見えてきた迷い

コピリスを失ったショックは大きく、朝になっても、紅蓮はまだ泣いていた。全身の力が思うように入らない。涙は出ていない。ただ膝を屈して、うずくまり、叫び声を上げているだけだった。傍から見れば鬱陶しく見えるであろうこの光景も、当人や関係者にとつては、目を背けなくなる事実ではあったし、同情する者もいるであろう。

「俺は……どうすれば……」

コピリスが、自らの右腕にない。

彼の悲愴感を余計にかきたてるように、パワーストーンが一つ、コピフから転げ落ちる。

「紅蓮」

頭の上から、一人の少年の声が降りかかる。闘也だ。その目には同情なんてものはない。だが、その目には彼が無慈悲な人間であるという証明はなかった。

と、安心していたのはその時だけであった。無理やり立たされ、腹部に重い一撃がのしかかる。闘也の拳が紅蓮の体を押し出したのだ。紅蓮は地面とほぼ平行に飛び、近くの塀に叩きつけられる。全くの進路のブレがないことから、どうやらこれを狙ったらしい。紅蓮には、なぜ殴られ、吹き飛ばされ、塀に叩きつけられたのかが分からない。

「迷うことは、悪いこととは言わない」

闘也はその口を開いた。

紅蓮はその意識は僅かながら吹き飛んでいたが、その言葉を聞き取れることはできた。

「だが、迷いながらも戦う。それが戦士……お前自身じゃないのか」

紅蓮の心に、脳に、体に、迷いという単語が無形の刃となって各所

を刺し、貫く。紅蓮は塀から零れ落ちるように倒れた。その目がゆっくりと闘也に向けられる。

「お前の決意は、そんなもんか、紅蓮」

「俺の……決意……」

紅蓮は、苦し紛れに呟く。綺麗事だけでは、世の中は渡っていけないし、人々をまとめることも、最悪、人と触れ合うことすらできない。汚い言葉をぶつけあってこそ、人と人は分かり合える。

俺の決意はなんだ？

綺麗事の中に、俺の決意はあるのか？

自身も希望も、何一つ失った自分に、差し伸べられる手はあるのか。

差し伸べられる手の持ち主にも、決意はあるのか。

迷いの中で自分は、決意があるのか。

「迷いの中の決意ではない。お前の根本的な決意だ」
根本的な決意。

「そうだ……」

思い出した。自分の、起源にして、目指す頂点でもある場所。いや、場所ではない。それは、起源にして、頂点であるべきものだ。

いつも、自分に言い聞かせてきた。

訊ねる奈美にも、それを伝えた。

俺は……。

「森羅万象の超能力者になる……」

その決意は、今でさえ、霞むことのない紅蓮の根本的なものだ。

彼の原動力でもあるのだ。揺らぐことも、霞むこともない、彼の夢。目指すべき頂点、彼の行う行動全ての原動力。

目の前から足音がする。一つではない。多数の足音である。紅蓮はゆっくりと顔を上げる。反乱兵。エスパーである。紅蓮は、わずかによるめきながらも立ち上がる。数は五十。紅蓮はエスパー達を睨みつける。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

カスタマー専用の兵士輸送艦、『CSR-01 アオミ』には、コピリスを奪取した青水冷雅が乗艦していた。傍らには、彼の弟である、青水河川あおみず かせんも同乗している。

ちなみに、CSというのはカスタムの略称したものであり、河川は気に入っているが、冷雅はそこまで気に入ってはいない。Rはレインボーで、和訳は虹である。つまり、簡単に言えば、これを利用するのは『虹七色』のメンバーが大半だということだ。

「作戦が成功したんだね。兄さん」

「たいしたことねえよ」

軽く返答した冷雅は、正面にいる河川から目を離し、携帯用のゲームを操作しはじめる。

シューティングアクションゲームである。目の前に出てくるたくさんの敵に銃をはなしながら、敵の砲撃をかわしていき、敵を殲滅させるなり、拠点を制圧するなどの任務をこなしていく。

「今、大地さんから連絡があったんだ。これからエスパー島に攻め込むらしいよ」

冷雅は、同じ虹七色の一員である深緑大地の顔を浮かべる。やや大きな目ではあるが、その目は鋭く、痩せ型ではあるが、筋肉が皆無というわけではなかった。

「分かった。俺はとりあえず本部に戻る」

「え？ 九州にわたるんじゃないの？」

「とりあえずの勝利報告ってこと」

「それじゃあ、僕の作戦に支障が出る」

河川の顔が歪む。子供っぽい顔をしている河川だが、言っていることは一人前である。

「兄に逆らうなよ」

「……………分かったよ……………」

口を尖らせる河川に少しなかり苦笑する。冷雅は立ち上がり、操縦席へと向かう。

操縦席の中のずらりと並んだパネルに目を通す。この艦——アオミ——は虹七色の移動手段のために用意された輸送艦の一号機である。冷雅はパソコンを操作し、自動操縦の輸送艦の針路変更を決定した。針路変更が完了すると、僅かに艦体が揺らぐ。僅かではあるが、アオミがゆっくりと下降を始めたのである。雲の間を突き進むアオミは、その後その雲を抜けた。冷雅は操縦席から離れ、再び河川にいる場へと戻っていった。

エスパ―諸島内の一つの島、Sエスパ―島の砂浜で、一人の少年が押し寄せては引いていく波を見つめていた。Sエスパ―島は、エスパ―諸島内では、いくなれば身分の低い、低級のエスパ―達が住んでいる。そこに住んでいる少年、エルガ・ハットは、常人の肉眼では決して見ることでできないほど遠くで動いている一つの輸送艦を眺め始めた。

「進路予想……高度、速度、咆哮より推測の結果、目的地は、水中………」

脇に抱えていたサイコパソコンを取り出し、計算処理を始める。地理分野に関して、彼はそこまで優秀なわけではないが、日本の各都道府県と県庁所在地程度なら、ほぼ全てを言い当てることのできる。「ん………?」

電子音がサイコパソコンより鳴り響く。電子メールが届いたのを知らせる音である。彼は一時計算処理を中止し、そのメールを読み始める。彼はそこで、自分が重大なミスを行っていたことを知った。

「Lエスパ―島にカスタムが侵略だと………!!」

もつとはやくに気づくべきであった。そうなれば、僅かたりとも準備はできていたはずだと言うのに!

エルガは立ち上がり、すぐ後ろに聳え立つ灯台の壁を走る。彼には、その重力を支配する能力さえも持ち合わせていた。ただし、視界に映っているものに限られるが。

「あれか………!!」

灯台の途中で、周辺を見渡していたエルガは、数隻の艦がレスパー島へと向かっていったのが見えた。

エルガは、通信回線呼び出し、レスパー島軍本部へと連絡を入れた。エルガはその口を開く。

「こちらエルガ・ハット。これより敵機を歪ませる」

彼の指先が、踊るように動き始めた。

紅蓮は五十のエスパーと対峙している。傍らには、闘也と秋人がいる。紅蓮はパワーストーンが収納されているコピフから、二つのパワーストーンを取り出す。コピフとサブマシンガンのものである。彼はそれを両手それぞれに持つ。縦長な六角形のパワーストーンを、逆持ちにする。逆持ちは、例えば短剣などを持つ時のグリップである。刃がどちらかと言えば自分の方に向いているため、リーチ、つまりは攻撃範囲が小さい。ただ、短剣はそれにより、通常の持ち方ではできないようなトリッキーな技や、特殊な技も出すことができる。

「ストーンカッター」

紅蓮はエスパーに肉迫し、すれ違いざまに左手に持っていたストーンを突き刺す。無論、それは心臓ではなく、腹部に向けられたものである。困惑しているそのエスパーが真横に見えた頃、紅蓮はしゃがみ、そのエスパーの足を切りつける。引き続いて、目の前の数人のエスパーの間を、しゃがんだまま突っ切る。通り過ぎたうちの数人はかわしたようだが、そのかわした人数よりも多くのエスパーが、足を紅蓮に切られた。

「真似させてもらう、紅蓮」

闘也はいつも使っているソードを、小型化する。通常では止まる大きさになっても、その勢いは止まらず、ついには短剣となった。

「ナイフ」

闘也は一言、その武器の名を呟くと、敵機を一気に切りつける。紅蓮以上の動きで、エスパー達を死なせぬように、だが、確実に戦力

を削っていった。

「おうおう、カッコいいねえ」

秋人は半ばふざけながらも二人を褒めた……。つもりだろうが、二人に届いている様子はなかった。それに、聞こえていても、まともに耳はかさないだろう。

「石・断絶剣！！」

紅蓮はそのパワーストーンを今度は通常の剣と同様の持ち方をする。パワーストーンが、紅蓮の腕ほどまでに伸びる。紅蓮はそのパワーストーンを持った腕を横に広げる。そのままエスパー達へとパワーストーンを入れる。無論、闘也の指示通り、狙うは足。心臓は狙ってはいけない。

最初のエスパーにそのパワーストーンが入った頃、紅蓮はその腕を交差させる。つまりは。左右両方の敵を斬ったのだ。そして、交差させた腕を、再び元の位置へと振り戻す。前方の敵すらも攻撃対象であった。

「もうやめろよ！ 俺の同胞達！！」
なかま

闘也は一人のエスパーを押し倒し、足を斬り、向かってきた数人のエスパーを一瞬にして通り抜けたかと思うと、そのエスパー達の足を斬っていた。

「戦闘……。沈黙……」

紅蓮は、いつものように、誰にとっても無くそう呟く。小さくなっているパワーストーンを、コピフへとしまいこむ。

「……………」

「闘也……………」

秋人は、闘也を心配してか、小さくその名を呼んだ。

16、虹の名の下

エスパー諸島上空に艦を置いていた虹七色のメンバーがいた。現在、数十人のカスタム兵を除けば、その全てがカスタマーのエリート達、『虹七色』である。

その中の輸送艦の一つ、『CSR-02 シゼン』には、虹七色の一人、深緑大地がその身を置いていた。先ほどから少しばかり揺れているが、問題はないであろう。

「光輝。周辺に敵は？」

「かなり遠くに一人。揺れてんのはそいつのせい」

「分かった」

大地は開いていた通信を切る。

ほとんどがカスタム達で固められた組織、『カスタマー』。その中で、訓練で一定以上の成績を収め、尚且つ超能力戦争にも出撃したことのあるもののほんの一部が、エリート集団、『虹七色』へと編入権を獲得するのである。その中の一人、深緑大地は四人目として入ってきた。つまりは、その当時、彼以外に三人いたこととなるが、そのうちの一人は、大地が嫌いな人物であった。

当時からいた三人のうちの一人目は、白亜光輝という少年である。そう、先ほど大地が通信をしていた少年である。大地は、光輝には信頼を置いている。その戦闘能力も、大地とはピツタリとピースが当てはまるようにちょうどいい。

ものすごい速さで降下していく光輝と大地。風が痛いほどに身にしみる。だが、二人はその感覚に慣れているのか、全く表情を変えずに落ちていく。

「敵機確認」

大地は呟く。光輝も、その一言を聞き、地上から来るエスパー部隊に目をやる。背面に、ジェットブースターと呼ばれるエンジン装置を背負っており、空中戦が可能になっている。降下部隊の迎撃に使

われることが多いが、迎撃できなければ、意味など成さない。

「光輝！」

「分かつてる！！」

光輝は自らを大地の正面へと移動する。エスパー達が鉛の弾丸を撃ち出して来る。光輝はそれを見ると、能力を発動させる。

ガード
「防御！！」

その一言が言い終わって一秒と経たぬうちに、弾丸が彼に直撃する。だが、彼はそれでもピンピンしていた。彼の能力は、ガード防御というものの。全ての攻撃を受け止め、時にその武器を破砕し、時には攻撃を撥ね返す。

スナイプバズーカ
「狙弾！！」

ガード防御の能力によって弾丸がはじき返されたところに、大地は飛び出す。肩に乗せたバズーカについている遠距離狙撃用のスコープを覗き込む。敵の位置、風向き、降下速度を計算し、適所にバズーカを撃ちこむ。

迎撃目的に飛来してきたエスパー三人を見事に撃ち落とす。これでこちらの位置が敵にははつきりと示されてしまったが、そこまで影響はない。彼らにとっては。

「ふう」

光輝は軽く息をつく。パラシュートが開かれ、ゆっくりと地上へと降下していく。風向きからしても、着地地点は、予定地点からさほど離れてはいない。

「油断はするなよ」

大地は一言、光輝に呟いた。

地上に着陸し、パラシュートを近くの砂場に投げ捨てる。二人は銃を構える。小型のハンドガンである。すでにリロードはしてある。前方から、複数の足音が聞こえる。おそらくは、エスパーの部隊であろう。二人は茂みに隠れ、様子を伺う。エスパー達は、砂浜で二人を探している。後ろを取られているとは気づいてはいないらしい。

「詰めが甘い！」

光輝は叫ぶ。その声と、ガサガサという茂みの動く音に振り向いたころには、エスパーは頭を撃ちぬかれ、地面の爆発に吹き飛ばされていた。

「ぬあああつー！」

「うあああつー！」

エスパー達の悲痛な叫びに耳を傾けるという行為は、今の二人にはなかった。大地はバズーカでエスパーを吹き飛ばし、光輝はそのエスパー達を撃ちぬいて、殲滅した。

大地が能力を解除してバズーカを消し、光輝がハンドガンを腰のベルトにしまいこんだ時、三つの殺気が彼らに感じられた。

「……ッ！！」

息を呑んだ大地に、一人の少年が切りかかる。大地はすかさず横転し、その斬撃をかわす。流れるように起き上がり、大地はバズーカを構える。振り下ろした剣を、今度はそのまま切り上げて攻撃してくる。大地は滑るように後ろに飛びのく。それと同時に、光輝が少年の剣を受け止める。防御の能力を発動させているため、ダメージはない。

「大地、後ろー！」

大地はその声に反応し、後ろの状況を確認する。光り輝く爪を両手に装備している少女が、大地に切りかかる。大地はすかさずバズーカを撃ち出す。空中にいたためか、その砲弾を諸に食らい、少女は吹き飛んだ。

「一筋縄じゃいかんか、やつぱ」

いまだに攻撃をしていない一人の少年が、その光景を見て呟く。その声に反応してか、光輝に剣を抑えられていた少年が飛びのき、茂みの中に吹き飛ばされた少女が飛び出す。二人とも、一瞬にして攻撃をしていないその少年の下へと集まった。

「とりあえず、名乗ってくれない？」

光輝が軽々しく口を開く。それを待っていたのかそうじゃないのか

は分からなかったが、中央の、攻撃をしていない少年が口を開いた。
「我々はエスパー正規軍特殊任務専門部隊、『雷雲』。私は隊長の
いずも たけし
出雲武だ」

それに引き続いて、隣にいた少年が続けて話し出す。

「俺は同所属、霧沼^{きりぬま}ソラ」

武、ソラに続いて、少女が他の二人よりも大きな声量で話し始める。

「うちは『雷雲』の紅一点、南野^{みなみの ひより}日和」

少女、日和の自己紹介に、ソラがなぜかキレる。

「おい日和！ 俺より長く自己紹介すんなよ！！」

「いいじゃない！ 事実だし！」

「なにい！！ 俺は認めんぞ！」

「なによ！」

「なんだよ！」

「やめるソラ、日和」

いがみ合う二人を、隊長の武が制する。隊長の権力が大きいようで、二人はそれぞれ押し黙った。二人とも不完全燃焼のようだが、そんな二人を気に留めることなく、武は大地と光輝に向き直る。

「失礼した。それでは、そちらの自己紹介を……」

「俺達はカスタマーのエリート集団『虹七色』。俺は白亜光輝」

「同じく、深緑大地だ」

タメ語ではあるが、礼儀正しく、軽く頭を下げる。奇襲を警戒して、すぐに顔を上げる。武は、二人が頭を上げたのを確認すると、尚もいがみ合っている二人の隊員を睨みつけ、落ち着きを取り戻させていた。

「何故ここに現れた？」

大地は、ソラと日和を黙らせた武に表情を変えぬまま問うた。

「愚問ですね。もうお分かりなのでは？」

「……そうだな」

大地は、軽く息をつく。目の前の三人が自分達に何をしてこようかなど、言葉にされなくても、表情に変化がなくとも、その答えは容

易に考えられる。実際、先ほどそれをしてきたのだから。

「我々は、侵入者であるあなた方を潰しに来ました」

表情には、文字通り真剣な顔、つまりは真顔が映し出されている。傍らには、ソラが殺気すら見せる顔で、反対側には、それとは別の種類の殺気を帯び、少しばかりにこやかな表情をしている日和の姿があった。

「武、目標を叩き潰す」

その瞬間、武は滑るように地面を移動し、光輝の眼前まで迫る。殺気を満ちさせた拳で、光輝の腹部に一打を食らわせる。光輝は無論防御の能力を発動させている。が、その光輝の左足が、肉眼で見えるか見えないかの小さなものではあるが、僅かに後ろへとその位置を滑らせていた。大地の背筋に、冷たい汗が流れる。しかし、その大地を我に返らせたのは、飛び上がって剣を振り下ろしてくるソラの姿であった。

「切り刻む！！ 俺の剣で！！」

そう言いながら振り下ろされた剣は、大地の肉でも骨でもなく、はたまた構えていたバズーカでもなく、誰一人もない土へ叩きつけられた。

「何やってんのよ！」

大地が気づくと、大地の背後にはすでに日和の姿があった。ソラがひきつけている間に、日和が後ろへと回りこんだのだ。剣をかわすため、空中にいた大地の視界に、日和の手にはめられた光り輝く爪が入った。

「レッツキル！！」

日和がその一言を捨てるように、だがどこか楽しげに言い放ち、その爪を大地へと突進させる。だが、その爪が大地に当たろうと思っただほんの数瞬前、日和の姿は大地からまるで大砲のように遠ざかっていく。大地が放ったバズーカ命中したのだ。振り向きながらも、日和への攻撃のためにチャージしていたのだ。

「突き刺す！！」

バズーカ発射後、地面にうつ伏せの状態で倒れた大地に、ソラが文字通り剣を突き刺すように、刃先を大地に向けていた。大地は、頭上から振り下ろされた剣を、横になった状態のまま、左方向へと転がり、その刃をかわす。隙を見せまいと、大地は腰のホルダーにしまわれたハンドガンを、ソラへと発砲する。ソラは弾丸の動きを見切り、弾を一刀両断する。刃の方には、全くの傷がついていない。

「真つ二つ!!」

その言葉通り、大地を真つ二つにしようと、ソラは仰向けになっている大地の高さを維持したまま、地面と水平に横に剣を振った。だが、その剣は宙を切り、ソラは体勢を崩す。大地はこの状態を狙っていた。いつもは肩に構えるバズーカを、今度は腰だめに構える。砲口は、前ではなく後ろを向いている。その砲口から、火薬の力によつて飛び出してきた弾丸が放たれる。体勢が崩れているソラには避けようがなく、直撃を受ける。

「んぬああっ!」

ソラが砂浜のより遠くまで吹き飛ばされる。大地はチャージをしながらか立ち上がり、立て続けに武に向かって三発連続で弾丸を撃ち出す。

「く………!! これほか!!」

三発のうち一発を無防備な腹部へと直撃し、光輝を押していた拳が、光輝から離れ、武は、ソラほどではないが、やはり砂浜まで吹き飛ばされる。

「大丈夫か! 光輝!」

「ああ! 俺達はまだ、負けてない!」

光輝が本当に全てのダメージがないような顔で言った。

そう、俺達はまだ、負けてはいない!!

17、現れた友、その瞳は殺意に満ちて

紅蓮、闘也、秋人の三人は、エスパーの殲滅を完了していた。紅蓮の瞳は、未だどこかを彷徨っていた。闘也は、一回はその瞳を凝視し、憐れんだが、すぐに瞳をそらし、その感情を消し去った。

静まり返った戦場を、三人は一言も喋らぬまま離れていった。死体があちこちに転がっている戦場は、戦いに縁のない人が見ればなんと血なまぐさい場所だろうと思うだろう。だが、サイコストやエスパーは、それを四ヶ月以上も続け、それが終わり、二年経った今でさえ、戦いを続け、その命を散らすものがある。

「紅蓮！！」

闘也のその一声が聞こえたところ、紅蓮はすぐさまに周囲を警戒する。遠くの間山から、巨大な拳が地面に突き刺さる。紅蓮の回避の方向が間違っていたら、例え足だけでも、あの拳の下敷きになっていたはずだ。

「拳・・・・・・・・まさか・・・・・・・・」

秋人が僅かに震えた声で、その言葉を紡ぐ。その秋人に、闘也が叫ぶ。

「秋人後ろ！！」

「！！」

秋人が鋭敏な動きでその場を離れて、一秒と間をおかずに拳が突き刺さる。

フライブースターバック

空中移動加速安定装置に乗った一人の少年が、ゆっくりとこちらに向かってくる。闘也や秋人には攻撃の意志はないように見える。だが、問題は、向こうのほうだろう、と紅蓮は三人の状況を見て考えた。

「乱州だろ・・・・・・・・おい・・・・・・・・」

秋人が、尚も震えた声で少年に話しかける。データでは見たこともあるし、実際に会ったこともある。その上、話した——かどうかは

微妙であるが——こともある。闘也はその顔を歪ませて、向かってくる少年に叫んだ。

「俺と共に戦った、戦友であり、親友である、波気乱州だろ！」
「違うな」

少年は短く闘也に返答する。闘也はその顔を見る。乱州——であるう——人物は、その言葉の後に続けて言う。

「俺の名は波気乱州。カスタマー内エリート集団虹七色のPカスタムだ」

ピュアカスタム。それは秋人のときもそうであった。おそらくは乱州も同じなのだろうが、何か特殊な措置を施され、記憶を消されているのであろう。いや、正確に言えば、措置前の記憶を凝縮し、脳の隅に隅にと追いやったのかもしれない。

「俺の任務は、魂波闘也の捕獲。多少強引でも連れて行く」

無理やりでも闘也を連れて行くつもりというのは分かった。紅蓮は、うちにある力を呼び覚ます。相手は、秋人とは比べ物にならないほど強い。

「俺が倒す！！ 目を覚ませよ！ 乱州！！！」

闘也は声を張り上げ、向かい来る乱州と対峙した。

カスタマーの本部へと戻った冷雅と河川は、闇亜からの報告に渋い顔を作った。

「どういうことですか、あいつを出したんですか！」

事実を冷雅は再び闇亜に問い詰める。一方の闇亜は、表情を一つとして変えぬまま再び同じことを繰り返す。

「何回言えば分かる。今この時点であいつを出すことによって、向こうに精神的ダメージを与える。そのために出したのだ」

闇亜の言っていることは正論であり、河川は理解の顔を作っていたが、それとは対称的に、納得のできない顔を作っている冷雅が横にいた。

「まさか、あいつを一人で……！！」

「そのほうがいい。あいつは味方なら心強いが、敵では危険だ。手元に取っておくべきなのだ」

「せめて一緒に連れて行かせるよ……！！」

「口を慎め、冷雅」

上官であるべき闇亜に声を荒げる冷雅に、側近のユルが口を開く。

冷雅はその一言で静まる。「だが……」と闇亜が口を開いた時、冷雅は何かを感じ取ったのか、険しい表情を作る。

「あの三人を出した」

「黒い三彗星ですか……」

隣ですっと会話を聞いていた河川が闇亜に訊ねる。闇亜は、「そうだ」とうなずき、話を続ける。

「あいつらも、ショックを与えるには十分な材料だ」

「……」

冷雅は先ほどのユルの叱責から一言として喋ってはいないが、憤りを感じているのは、表情から安易に察することができた。

突き落とされた拳が、地面に激突し、地面をへこませ、アスファルトを跳ね上げる。空中移動加速安定装置から降り立った乱州は、いつにもない殺気に満ちていた。闘也は剣を作り出す。腕を剣に変えた乱州と、つばぜり合いになる。

「乱州！ お前も改造されたのか！？」

「お前には……関係ないッ！！」

乱州が闘也を弾き飛ばす。闘也は乱州を見やる。今まで、乱州と戦うことなんて、一度としてなかった。今、目の前にいる乱州は、もはや超能力戦争を共に戦った英雄ではなかった。ただのカスタマーの兵士に成り下がってしまった。

「お前を見ると……体中が疼くんだよオオッ！！」

乱州の目が、瞬間なくなり、まばたきのうちに覚醒した目を作り出す。体は銀色のオーラを纏い、腕には防御用のシールドが取り付けられている。乱州がムゲンを引き起こしたのである。闘也はより素

早くなつた乱州の動きをぎりぎりで見切る。

「くっ……！！！」

剣型の腕を振るい、乱州は鬪也を切り落とす体勢を作る。鬪也はなんとか斜め前方に回避する。反撃を試みるため、足を僅かに切るつもりで横に振るう。が、その剣の動きは完璧に見切られ、乱州が一気に距離を取られる。乱州は、ムゲンの覚醒を引き起こしたことによつて、空高くで鬪也を睨みつけている。

「乱州……俺が止めてみせる！！！」

鬪也の脳内で、全神経が研ぎ澄まされる。黄色い魂の色を纏つた鬪也は、空へと飛び出す。その手には、ソウルソードを約二分の一にしたものを二本構えた、ツインソウルソードが握られている。

「魂剣——百連斬！！！」

流れるようなスピードで鬪也の腕が動き始める。鬪也の剣のほとんどは、乱州の腕に取り付けられた盾で防がれる。鬪也の攻撃が止むと、乱州はその腕を伸ばして鬪也の腹部に直撃させる。完全に身動きがとれなくなった鬪也は、そのまま地面に叩きつけられる。

「これで、終わりだアアアッ！！！」

ゆつくりと、鬪也を押さえつける手が大きくなっていく。それと比例し、鬪也の体感重量も大きくなっていく。潰されると諦めた直後、乱州の腕が引つ込む。瞬間的に、鬪也の上を何者かが通り過ぎる。鬪也への攻撃を中断させたのは、紅蓮であつた。紅蓮は、パワーストーンを剣の持ち方で叩きつけようとしたが、それがかわされたようだ。だが、そのおかげで、鬪也はその腕から逃れることに成功した。

「秋人！！！」

乱州がその問いかけに反応し、後方を見ようとした。が、その動きは行われぬまま、乱州は後頭部を殴りつけられる。

「ちいっ！！！」

乱州の後頭部を蹴りつけた本人である秋人は、僅かによるめく乱州に、上空からの蹴り落としを食らわせる。乱州は少しばかり高度を

落とす。秋人の蹴り落としては、乱州の腰に直撃する。闘也は、そのチャンスを見逃すことなく、攻撃に転じる。体勢を崩した乱州に肉迫し、剣で乱州の顔を切りつける。乱州の左頬に切り傷が入る。闘也は、剣を切り替え、ソウルスティックへと変形させる。そして、そのまま乱州の腹部に突き刺す。棒なのでリーチは長いが殺傷能力は皆無とっていい。

「もう止めるオオツ!!」

闘也は乱州に一喝し、ソウルスティックを今度はハンマーへと変える。ごつごつとした打撃部分を、乱州の横腹に叩きつける。

「ぐあああつ!!」

乱州は、その体を吹き飛ばされる。あわやというところで体勢を立て直すが、戦うのにはすでに無理があった。闘也は、乱州とは別にサイコストの気配を感じていた。

「何だ……?」

闘也はその方向を向く。その瞬間、正面に黒い物体が現れる。そこから、闘也と同じ年であろう少年が飛び出し、闘也へと攻撃してきた。闘也は間一髪で少年の繰り出してきた拳を後ろへと下がつて回避する。闘也は、その顔を知っていた。黒い三彗星である。おそらく、一人だけということはないはずだ。やつらは、三人でいることで力を発揮する。

「そこか!!」

黒い三彗星のリーダー、黒田暗志がブラックホールから飛び出してくる。闘也は出てくる場所を予測しており、その予想に暗志はバツチりはまった。闘也は、勢いよく暗志へと蹴りを食らわせる。

「お前達も改造……?」

「俺達は元々カスタムだ。だからこそ!」

暗志が闘也に答える。だが、その答えが言い終わる前に、後ろからの攻撃を、ハンマーを剣に変えて受け止める。黒岸信自である。

「攻撃は俺達の意志だ!!」

「く……!!」

闘也は信自を足で引き寄せ、腹部を横切りする。僅かな流血を見た信自は、臆するかと思われたが、さすがに元不良だけはあった。

闘也を蹴り飛ばし、すぐに距離を取った。

「黒い流星の如く、この拳を叩きつける！」

信自が黒く変色した拳を闘也へと突きつける。しかし、その信自の攻撃は当たらなかった。薄緑のオーラを纏った秋人が、信自を殴り飛ばしたのである。秋人がムゲンを引き起こしたのだ。

「吸い込む！ こいつで！」

黒谷殺闇がブラックホールを作り出し、秋人と闘也を吸い込む。これは、回避の問題ではなかった。捉まってしまうばそこで終わりだ。

「くそ……！！！」

「闘也さん！！！」

その一言と共に、紅蓮が殺闇を蹴り飛ばし、ブラックホールを消滅させる。闘也は、目の前に来た暗志を斬りつけるが、ブラックホールに逃げ込まれる。気づいた時には、真上から組まれた拳を頭に叩きつけられていた。

「黒脳天！！！」

殴られた直後、闘也は真上を剣で横に斬る。が、そこに暗志の姿はなく、闘也の剣は空を切った。闘也は、一本のソウルソードを分裂させる。ソウルソードと同じ大きさのまま、二本の剣が生まれる。ツインソウルソードよりも攻撃力は高い。手数は僅かに減るが、その攻撃力がフオローする形になっている。ダブルソウルソードである。

「この動き、彗星ならではだ！！！」

暗志が背後から飛び出してくる。闘也はダブルソウルソードを暗志へと振り下ろす。しかし、暗志はやはりブラックホールへと逃げ込み、今度は下方から飛び出し、拳を後ろに引く。闘也はその動きを見切り、一回転する形で暗志にダブルソウルソードを振り下ろす。が、やはり暗志は、自らの進路にブラックホールを作り出し、そこに逃げ込む。

「くそ……いつまでもちよこちよこと……！」

闘也は誰もいない空を連続で切る。全神経を集中させ、空を切りまくる。いつしか、闘也の周りには、真空の刃が生まれていた。

「時空切断……！」

その瞬間、闘也の周りにあった真空の刃は、空を切り裂いた。攻撃が外れたわけではなく、本当に空間を切り裂いたのである。その時空の裂け目から、暗志はほうり出される。闘也はそれを見逃さなかった。闘也はダブルソウルソードを暗志の脚部へと滑らせる。真横に暗志の脚部を切りつける。下半身の衣服の下半分が破け、右足からは激しく流血しているのが見て取れていた。

「畜生……！！！」

暗志は一言呟くと、三つのブラックホールを作り出す。信自と殺闇がそれぞれブラックホールへと入っていく。暗志は闘也に言った。

「次は倒す！ 必ずな……！」

そういうと、自らも作り出したブラックホールに吸い込まれていた。遠くで倒れていた乱州も、よろよると立ち上がり、ブラックホールへと吸い込まれていた。

18、ミッションリザルト3

東暦二〇一一年四月。サイコストとエスパーの間で始まった超能力戦争が終結してから、約二年の歳月が流れていた。

闘也が首相であるエスパー諸島より、コピーングリスバンというものが少年によって盗み出された。彼の名は赤火紅蓮。闘也の小学校時代の唯一の友である。

その事件から数日、超能力戦争終盤にサイコスト側が投入した人工の改造超能力者、カスタムサイコストによる、サイコスト狩りが各地で勃発した。カスタム達の組織、カスタマーは、各地でのサイコスト狩りをやめることはなかった。かすたまーの目標は、生まれながら超能力者である純粹超能力者、ピュアサイコストである。そして、紅蓮や闘也も、そのうちの一人である。

カスタマー内のエリート集団、『虹七色』のメンバーの一人、青水玲雅は、紅蓮よりコピーリスを奪取し、撤退する。悲観し、挫折する紅蓮は、闘也の叱責の様相の慰めをかけられ、彼は再び、戦いを決意する。

虹七色のメンバーである深緑大地と白亜光輝は、エスパー諸島を襲撃する。だが、エスパーの正規軍『雷雲』の三人との戦闘に時間を費やすことになった。

カスタマーのトップに立つ男、黒田闇亜。暗志の父親である彼は、黒い三彗星と、超能力戦争の英雄である波気乱州を、紅蓮達の下へと派遣したのであった。

紅蓮、闘也、秋人の三人は、闇亜から送られてきた乱州、そして黒い三彗星との戦闘となる。闘也は、乱州を正気に戻そうと試みるが、失敗に終わる。乱州は、ムゲンを引き起こし、闘也もそれに対抗。黒い三彗星との戦闘時は、秋人も、超能力戦争後初めて、ムゲンを引き起こすことを成功させた。僅かな傷しか負わせることができぬまま、紅蓮達は彼らの撤退を許してしまう。

それぞれの戦いが終わらぬまま、戦いはその大きさを少しずつ拡大させていこうとしていく。パワーストーンを武器として、コピースがないまま戦う紅蓮。乱州との戦闘に悩まされる闘也。彼らを案じながらも、自分もまた、顔を翳らせる秋人。そして、エスパーは自分達の島々を守るのか。そして、カスタマーはついに本格的に動き始める……。

19、虹と雷雲

エスパ―諸島の襲撃、及び制圧。降伏したエスパ―も全て抹殺し、エスパ―諸島の完全入手。それが、今回深緑大地と白亜光輝に与えられた任務であつた。このエスパ―諸島の制圧を足がかりに、一気にピュアとの戦闘に幅を持たせるといのが目的らしい。エスパ―諸島は、日本からは、千キロほどの距離を有している。空中、海中からの襲撃が可能になり、海中からの襲撃時は、あわよくばそのまま地中へと潜り込み、地中から突如出現しての襲撃も可能となる。しかし、なにせ超能力戦争を起こした者達である。大地も光輝も、そう簡単には制圧はできないとは、作戦の開始前から、予想はついていた。だが、それとは反対に、反乱兵がいることから、状況によつては、自分達への加勢も考えられるため、不安ばかりが胸のうちにたまつていたわけではいなかった。

今、二人の前に立ちはだかるのは、エスパ―正規軍の、『雷雲』という隊らしい。二人の連携により、現在は優勢にはあるが、まだ、勝負が決したわけではない。このまま押し切れるとは思うが、思わぬ介入がないとも言えない。二人は、背後から近づいてきた『雷雲』の少女、日和の気配を感じ、再び戦闘を開始した。

「次は当たらないんだから――！」

大地が放つたバズーカを、日和はかわす。二、三発は食らつてはいるのに、それでもこれほどまでの動きを見せる。これが正規軍の特殊任務の部隊の実力かと、大地は感心した。が、感心ばかりしていて勝てるはずもない。しかも、敵に向かつてだ。

「させるかっ――！」

日和が、光の爪を大地へと横薙ぎに振るう。が、その爪は大地の肉体に触れる前に、光輝が受け止める。生身の人間ならば、光の熱によつて焼けているものを、光輝はなんなく受け止めた。

光輝が日和を受け止めているときに、大地には武闘スマッシュの能力を持つ

た、雷雲の隊長、出雲武の攻撃をかわした。武闘の能力はその名の
とおり、直接の素手での格闘技術である。敵との距離が皆無なため、
瞬発力は並ではない。

「なかなか！」

武の繰り出してきた蹴りを後ろに飛びのきながらかわす。その間に
もすでにバズーカを構え、武への標準を定め終わっている。大地は
躊躇なくバズーカのトリガーを引き絞る。砲口から飛び出した弾丸
は、真っ直ぐに武へと突き進む。武はその動きを見切り、真上に飛
び出す。バズーカが地面に激突し、小爆発を起こす。爆風が巻き起
こり、着弾地点から押し出されるような感覚が各人に襲い掛かる。
着弾地点の真上に位置していた武は、その爆風を利用し、さらに高
くへと舞い上がる。大地の真上につけた武に標準を合わせた台地は、
やはり躊躇なくトリガーを引く。

「隙だらけだ！」

撃ち出された弾丸が空中で爆散する。が、その爆発による煙幕の中
から、その煙を吹き飛ばし、武が突っ込んでくる。大地は武の拳を
右頬に直撃させられる。大地はその拳の力で吹き飛びながら回転し、
腰から木に激突する。

「おめえもな」

弾丸を切り裂いたソラが空中で大地へと咥く。大地は一時硬直す
る。わざと誘っているのではない。動くのに支障があったためであ
る。

「動けんか！ 深緑大地！！」

武は拳を大きな音を立てて鳴らす。俊足と呼ぶにふさわしい速さで
返答のない大地へと突進する。しかし、大地に武の拳は当たらなか
った。大地には動きはない。大地の前で光輝が防いだのである。光
輝は武の拳を受け止めると、そのまま押し返す。武は後方へと飛び
のく。光輝の左方から剣を構えたソラが、右方からは光の爪を展開
して日和が迫る。両方受け止める気で、光輝はその場でとどまる。
当たる………。光輝が予感した瞬間、ソラはバズーカによつ

て遠方へと吹き飛ばされていた。それを見た光輝は、すぐさま右を向き、日和の爪を体全てで受け止める。バズー力を撃ったのは、ほとんど動くことのできない大地であった。大地はゆっくりと立ち上がり、バズー力を肩に構えなおす、光輝は大地の前に立ち、大地をカバーする。

「すまない、光輝」

「守ってばかりはいられねえよ」

光輝は迫ってきた日和の攻撃を受け止め、腹部へと蹴りを食らわせる。日和が爪を引っ込め、腹を押さえる。光輝を乗り越え、背後へと回り込もうとしたソラが、大地のバズー力に撃ち落とされる。真正面から光輝に向かってきた武の拳とすれ違いざまに光輝も拳を繰り出す。光輝の拳は武に、武の拳は光輝の顔面に直撃する。

いける。確信を持てた。ここまでの攻撃を受けて、隠し玉があるとは思えなかった。窮地に陥るであろうと判断したら、すでに出しているはずだ。雷雲の隊長、出雲武はその風格さながらなキレるやつだ。戦って小一時間だが、それは容易に察することができた。光輝は武と対峙する。構えを見せる武に対し、光輝も防御姿勢をとる。武の拳が繰り出されたとき、彼は瞬発的に体をかみこませる。武の拳が誰もいない宙を圧迫する。光輝は、無防備となった武の腹部へと拳を突き出す。腹を押さえ、武の動きが鈍る。もう一撃を加えようと地を蹴ろうと右足に力を込める。が、その足は繰り出される前に、腰の携帯から鳴り響いた電子音によって力が抜ける。それは大地も同様であった。大地は、同じ方向から向かってきたソラと日和をバズー力で吹き飛ばすと、すぐさま光輝と大地は密集する。大地が携帯を開き、送られてきた暗号命令に目を通す。無防備な大地には、光輝が盾となり、攻撃を防ぐ形となっていた。

「撤退・・・・・・・・？」

「え・・・・・・・・」

光輝がその顔に驚きを隠せぬままちらりと大地を見やる。どうやら、向こうも礼儀正しいのか、攻撃を一時中断していた。不意打ちは卑

怯という騎士道精神からなのか、自分達の場合はどうなるかと考えた武士道精神なのかは分からないが、それはそれで、光輝の緊張を僅かに和らげるには十分な効果を持っていた。

「白亜、深緑は速やかに戦線を離脱し、本部に帰投しろ……………」
「ということらしい」

「どういつこつたよ、闇亜様は……………」

小さく闇亜への不信感を呟いた光輝だったが、すぐに前を向き直った。すでに防御の能力は解いてある。向こうにも武士道か騎士道かそれ以外かの心があるなら、承諾はしてくれるであろう。

「失礼、撤退命令が出た。攻撃の中断を願う」

大地は雷雲の三人を手で制す。言われる前から、すでに攻撃を中断してはいたが、念のためということらしい。

「超能力戦争でも、君達のようなエスパーには会ったことがなかったよ」

僅かに微笑みを見せる大地に対し、武も同様に、小さな笑みをその顔に浮かべ、返答してくる。

「こちらこそ、こんな強いサイコストを見たのは闘也様以来だ」

「撤退故、追撃を勘弁願う」

「無論、そちらも逃げ際の攻撃はよしてくれ」

「ああ」

大地は武へと手を差し出した。誤解を招く恐れがあるため、バズーカは光輝に任せていた。ソラと日和は、やはり警戒してか、剣を構え、爪を展開していた。

「手合わせ、感謝する」

「こちらこそ」

ここが戦場であることを度外視した上で、この光景を第三者が見て、誰がこの二人を敵対者だと思うだろうか。

そこには、敵でありながらも、人であることの精神を忘れていない姿が確認できた。

堅く握られた二本の手はゆっくりと分かれる。大地はバズーカを

光輝から受け取る。バズーカにセットしてあるボタンをいじくる。バズーカから、赤いプロペラがその姿を現す。命綱がしっかりと大地と光輝の腕に固定される。ゆっくりと二人をつるしたバズーカプロペラが浮上し、二人の体が地面から離れる。

向こうからは、ソラや日和を含めた雷雲の三人全員が、こちらに敬礼していた。大地は軽く頭を下げていた。その会釈には、ただの兵士には到底つかめないものがどつきりと乗っているのであろう。

光輝は、雷雲の三人と、離れていくエスパー諸島に向かって、敬礼した。

20、望まぬ戦い、望む戦い

紅蓮、闘也、秋人の三人は、炎天から南西を目指して進んでいた。無論、ただ闇雲に歩いているわけではない。

数時間前、乱州、黒い三彗星との戦闘からは二時間ほど経ったころだった。エスパール島に、カスタマーが襲撃したとの報告があった。侵入者は、虹七色の二人。名は、白亜光輝、深緑大地。エスパール正規軍特殊任務専門部隊、通称『雷雲』の三人が、防衛のためにその二人との戦闘を行っただけだが、劣勢のまま進んでいくらしい。途中で向こうはなぜか撤退をし、三人には軽傷という負け印がつけられた。

と、それともう一つ。遠方偵察をしていたエルガ・ハットより、「カスタマーの本部、悪くとも支部が隠れ家の位置を特定」という報告が闘也に入った。場所は、四国、本州間に位置する海峡。その奥底の海底に、カスタマーの兵士輸送艦が向かっていたという。紅蓮達は、その情報を元にして、炎天より南西に位置するそのポイントへと向かうことにした。途中でエスパール軍の小型バギーがあるというので、まずはそのポイントにということで話は決まった。

「闘也さん」

紅蓮は、自分の前を歩いている闘也に向かって、その名を呼んだ。感情を含まない冷やかな口調ではあったが、忠誠心は、その言葉には溢れるほど入っていた。

「目的地のポイントには、このペースで何時間かかりますか？」

エスパール軍より提供された小型バギーまでの残り時間を尋ねる。闘也はそれを聞くと、端末を操作し、残り時間を算出した。

「このペースなら、四時か……」

四時間でつくと言いかけた闘也に、戦慄が走った。闘也は咄嗟に横方向に飛び出す。闘也のいたところに、銃弾が通り過ぎた。背景に山が聳え立っている。ここはそのふもとである。銃弾は地面の岩

に当たると、失速し、岩の強度に負けて弾き飛ばされた。闘也は周囲に注意を向ける。方向、速度からして、相手はそこまで遠くにはいないはずだ。

「そこか！」

闘也は再び放たれた銃弾をかわす。そして、三日月が角張ったような武器を取り出す。持ち手のグリップ以外は鋭い刃である。

「行け！ ブーメランー！！」

闘也が、超能力戦争終結後、新たに習得した武器の一つ、それがこのブーメランである。敵の位置が特定しづらいとき、あるいはおまかにしか分からぬ時には重宝するものである。また、グリップ部分にはカメラがついている。闘也がテレパシーを送り、撮影タイミングを投げながらも設定し、飛んでいったところに、戦闘態勢をとるのである。

「外れてほしいな、俺の予感……」

秋人は小さくそう呟くと、闘也の位置を狙い撃ってくる方角を見つけた。

「見つけた……」

闘也は脳内へと伝わってくる情報を整理する。やはり、という当感と、まさかという驚愕が入り混じっていた。

「的射……」

秋人は、その一言に目を見開く。秋人は自分に銃弾が飛んできたのを察知し、滑るように左方へとその身を跳ばす。宙を切り裂いた銃弾は、やはり岩に当たり、弾き飛ばされた。

「……！ これは……」

小さく呟いた闘也の言葉は、明らかに秋人の顔に驚愕と焦りの表情を露にさせていた。

「属性タイプに気をつける」

闘也は、ブーメランをさらに作り出す。作りながらもそのブーメランを投げることを忘れることなく、次々と投げつける。彼方遠方へと飛んでいくブーメランのうちの二つが、狙撃ポイントからの放電

によって撃ち落とされる。その放電に当たることなく突き進んでいたブーメランの一つが、やはり狙撃ポイントからの攻撃で落ちる。その攻撃は、火炎放射。炎と雷。やはり、ブーメランからの情報は確かなものであった。

闘也達に攻撃してきたのは、超能力戦争の英雄、遠藤的射、白鐘由利！！

「敵が来る。戦闘準備はいいな？」

言われずとも、紅蓮と秋人の戦闘準備は完了している。

一分と経たぬ内に、狙撃ポイントから二人の少女が姿を現す。一人は、ショートヘアで、髪は茶色がかっている。パツチリとした目が特徴的である。だが、その可憐な顔とは裏腹に、その手には狙撃銃——スナイパーライフルが握られている。その隣にいる少女は、すらっとした体つきで、大人のような雰囲気すら漂わせている。髪は肩までおろされている。銃を持っている少女より僅かに鋭い目つきからさえ、大人の印象が受けられた。

二人の少女は、雷による防御膜で身を固めながらこちらへと向かってくる。闘也は、ソードを構えて待ち構えていた。二組の距離が五十メートルほどになった時、闘也は二人の少女に言った。

「的射！ 由利！ お前達もPカスタムとなったのか！？」

しかし、二人はその質問に答える気はさらさらないようである。代わりの答えが、ショートヘアの少女が口を開いた。

「狙い撃ちにする！」

的射は、スナイパーライフルにかかっているセーフティを解除する。向こうはいつでもこちらに撃ちこむことができる。

「自然の力、侮らないほうがよろしくて？」

その言動も、やはり大人っぽいな——と紅蓮は心中で思う。だが、紅蓮は自分が戦士であることを自覚している。目の前にいるのは敵である。闘也を撃ち、味方の秋人を撃ち、いずれは自分にもその砲弾を浴びせてくるであろう。元より闘也に手を出した時点で、闘也の指示以前から、紅蓮の胸は決まっていた。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」
紅蓮の言葉は、闘也にも苦い表情を作り出させるを得なかった。

21、新たな力

山を横にして、フライブースターパックで、一つの戦闘エリアに向かっている男がいた。いや、成人の男性というには、その様相も実年齢もあまりにかけ離れていて、少年と言ったほうが、的確である。カスタマー本部から、戦闘エリアの少し前まで、カスタマー輸送艦、『CSR-01 アオミ』で揺られながら進み、戦闘区域に進入すると同時に輸送艦から飛び出す。自分は兄と違って、任務には全うする。いや、結果的には、兄である冷雅も、任務は達成しているが、自分は兄とは違う。血の繋がりがあからといって、誰しも正確が同じなわけではない。

少年——青水河川は、岩陰からの銃弾と、その反対側から投げられている飛翔物を見て、河川は無線機に指を押し当て、本部に回線を開いた。

「こちら河川。目標との戦闘を試みる」

河川は、フライブースターパックに両手で掴む。テレパシーで、フライブースターパックの速度を上げる。加速をしていくフライブースターパックの上で、河川は、改めてこの任務の重要性を思い出す。今回、河川に与えられた任務は、魂波闘也、風見秋人、赤火紅蓮と交戦予定にある、遠藤的射、白鐘由利を支援し、最悪でも共に撤退をすることだ。今回の作戦時間は、闇亜の発表が始まる、十四時ちょうどまでの三十分間。河川としては、敵との交戦に十分間をかけ、その間に二人は少しずつ下がらせる。作戦終了五分前には、撤退しなければならない。

「ブースターバズーカ、燃料圧縮粒子チャージ完了」

加速を緩めることなく、フライブースターパックのバズーカの砲口を向ける。河川は、発射のトリガーを引き絞った。

「発射っ——」

ブースターバズーカの光が、その砲口から進った。

上空から光り輝くものが、燃料圧縮粒子のバズーカだと分かった紅蓮は、自分に向かってきたその圧縮粒子バズーカを後ろに飛び退いてかわす。バズーカの轟音に注意を向けた闘也と秋人も、その着弾点から、紅蓮と同じ動きでかわした。少年が、フライングスターパックから飛び降りてきて、的射達の前へと降り立った。

「名乗ってくれないか？ おそらくはカスタマーだとは思うが」

闘也はそう言いつつも、少年へと銃口を向ける。少年は、そのすらっとした体にほどよくついた筋肉の胴体とは裏腹に、顔はまだ幼さが残るものであった。

「カスタマー、虹七色。青水河川」

「……！ 冷雅の兄弟か！」

紅蓮は河川の名、青水というものから、冷雅との関係を尋ねた。

「兄をご存知で？」

河川は自分が冷雅の弟であることを、その一言で自白した。どうやら、そのことに関して隠すつもりはないらしい。

「その兄に伝えて欲しい」

河川は微動だにしない。それは紅蓮も同じではあるが、紅蓮の方は、怒りのこもったものであった。

「早いとこ、コピリスを返せとな」

「この戦闘を、生きて返れたら、そうさせてもらいます」

その口調すら幼いものである河川を、紅蓮は睨みつける。

「お二人さん」

河川は、的射と由利にその顔を向け、口を開く。

「間もなく『あれ』の時間です。あと二十分したら撤退するので、よろしくお願いします」

「………了解」

その問いかけに、的射は了承の返事を返す。河川が紅蓮へと向き直ったのを確認した紅蓮は、地を蹴り、一気に河川へと接近していった。紅蓮はコピフからパワーストーンを取り出し、河川へと横薙ぎ

に振るう。が、ブレのない動きで河川はそれをバックステップでかわす。紅蓮はかわされたのを確認すると、すぐに再び地を蹴り、河川へと急迫する。河川は、紅蓮の横をすれ違ってかわす。が、完璧にはかわせず、パワーストーンの先端部分が、彼の右腕をかすめる。「いつつ……！！！」

河川は、右腕の危険を感じ取る。河川は、黒い球体を両手を胸の前にかざして作り出す。黒い三彗星の使うブラックホールではない。はつきりしているのは、あれは少なからずこちらへと飛んでくることであった。

「ぐはあっ！」

球体が振り返った紅蓮に直撃する。小さいせいか、威力はさほど大きくなく、僅かに姿勢をよろめかせる程度であった。

河川は、誰にも見えぬよう、だが確かに、深呼吸を一回した。兄、冷雅の持ち帰ってきたコピーングリスバンと呼ばれる装置は、複製の能力の効果を向上させる効果が確認されている。とりあえずは、冷雅が使用者ということに決定し、冷雅がコピーリスを所有している。冷雅は喜んでいる表情は見せなかったが、四六時中コピーリスを肌身離さず持っていることから、少なくとも嫌悪していることはないであろう。自分が気に入っているのかを聞いても、怒鳴り返されるだけであるし、そつとしておくことを河川は決め込んでいた。

本部からの情報では、目の前の少年、赤火紅蓮の所有する能力は複製のみ。しかも、複製の能力は、コピーリスがなければ名前だけのものらしい。紅蓮がムゲンを発動させたことにより、新たな力、両爪を習得したのは、河川からでも容易に想像はついた

「オール……森羅万象の能力？」

「勘がいいな」

「知識力があると言って欲しいですね」

紅蓮の賞賛の言葉に対して、河川はいたずらっぽく言葉を返す。その一言が彼の感情を逆なでしたらしく、彼は河川へと、表情から想

像はできぬもので声を荒げる。

「関係ない。俺はお前を倒す」

「殺さないんですか？」

「状況によつては」

二人の間で、今にも戦闘が再開されようとしていた。口調だけでは、戦いが始まる気配は微塵もないが、その言葉は、まさに戦いを象徴するのには十分すぎるものであった。

「殺すっ！！」

紅蓮は河川に向かって突進してくる。両手の指の形で展開された金属の爪は、河川に、頭上から遅いかかる。

「殺らせるかつ！」

河川は、紅蓮の爪を、左手で受け止める。金属の爪は、河川の腕を両断するまではいかずとも、何かを持つほど力はこもらぬ腕となっていた。河川は、心中で紅蓮へと叫ぶ。

（コピリスが奪われ、悲しいか！ 赤火紅蓮！！）

（一度の挫折……経験して何が悪い！！）

河川はわざとテレパシーで紅蓮へと伝える。彼の口からは、相手を罵倒する言葉は出てこない。見た目からでも、それはすぐに察することはできる。しかし、彼は現在十三歳である。超能力戦争時は、僅か十一歳という若さで戦線に身を投じた少年であったのだ。戦いを経験して、まるつきり性格が変わらないという人間がいたら、会ってみたいとすら、河川は望んだほどである。十一歳だ。その年齢は、超能力戦争の英雄と言われた魂波闘也達よりも若いものである。戦場でも、数百人のエスパーを殺めてきた。戦いの極意とまではいかなくとも、ある程度の戦術は、応用まで身につけているのだ。

「はあっ！！」

河川は、両手から黒い球体を作り出し、それを紅蓮へと向ける。

河川ダメージの能力、外傷は、敵の攻撃を受け、そのダメージが蓄積されることで真価を発揮するものである。河川の身体にダメージが蓄積されるほど、両手の内より放たれる球体は、より大きく、より強い

ものとなる。世間一般で簡単に表記するのならば、捨て身だ。

「甘い!!」

紅蓮は咄嗟の判断で両爪を展開させ、その腕を交差させる形で黒い攻撃球体を斬る。紅蓮を避けるように、球体は分裂し、あえなく外れた。

河川が戦闘に参加したことにより、文字通り三対三の勝負となつたため、闘也と秋人は、各一人ずつを担当することとなった。闘也は、由利へと突撃する。それに了承した秋人は、的射へとその体を向けた。

火炎の球体を飛ばしてくる由利は、超能力戦争の時よりも、衰えるどころか、より強力な攻撃を放ってくるようになった。闘也は一喝しながらムゲンを発動させる。瞬発的な動きでその火炎球をかわし、さらに由利へと接近する。由利の放った雷を避けるのとはぼ同時に、由利の顔面に、闘也は強力な蹴りを入れる。その重みに耐え切れずに、由利は数メートルの距離を吹き飛ばされる。

「やめろ！ 由利！」

しかし、闘也の戦闘停止の呼びかけに、記憶を縮小された由利が答えるはずもなく、今度は地面に持っている杖を当て、地割れを起こさせる。闘也は地面に危険であることを察知し、地割れが闘也の足を直撃するのに呼応するように、闘也は空中へとその身を投げ出す。体勢を整え、空中から接近しようと構えた闘也に、今度は風を巻き上げ、近づけまいとしている。風は無色透明、見分けるのは困難を極める。闘也は、一度距離を置き、ブーメランを作り出し、自分と由利との間に投げ込む。ブーメランは風にあおられ、渦を巻いている風に乗った。

「そんなものが、効くわけがないわ!!」

しかし、こうなることこそが闘也の狙いであつた。風の動きを、ブーメランの動きから推測するためである。風はおそらく一つであろう。闘也は、その風が通っている部分の左右に、それぞれブーメラ

ンを投げ込む。由利は、そのうちの一つは、雷により、撃ち落としたが、残る一つは杖で受け止めざるを得なかった。闘也の手より放たれた力強いブーメランは、杖をはじき、由利にこれまでにない隙を作った。

「そこおっ!!」

闘也は、瞬間的と言っても過言ではない速さで、由利の後ろへと回り込む。回りこむ間に作り出したハンマーで、由利を上空高くへと打ち上げる。闘也は、一気に急上昇していく由利を追いかける。由利は抵抗して雷を数発放ったが、すでに闘也のものとなっていた戦いの流れは、その雷を闘也に当てることを許さなかった。

「目を覚ませ！ 由利イイツ!!!!」

ハンマーをツインソウルヌンチャクへと切り替える。勢いよく振り下ろされた二本のヌンチャクに、腰が強打する。そのまま、由利は地上へと落ちていった。

闘也が由利の放ってきた火炎球をかわし、戦闘が始まった頃、秋人もまた、的射との戦闘を開始していた。的射が銃弾を放つ余裕がないまま、秋人は一瞬にして的射へと接近した。そして、的射の目の前でその足を止め、頬に一発の拳をめり込ませる。なんとか踏ん張りを見せた的射は、銃から水を強力噴射した。それを、自らの頭上へと掲げる。

「的射ちゃん、止めとけて!!」

「軽々しく私の名を呼ぶな!!」

的射は、右手に握られた銃を、秋人へと振り下ろす。一方の秋人は、その振り下ろされた銃を「あらよつと」などと余裕の回避をした。的射がその銃を振り下ろしている間に背後へと回りこんだ秋人は、その銃を蹴り落とす。そして、的射の襟を掴むと、宙へとほうり投げる。

「女の子を殴るのは、俺の主義を裏切るが……」

秋人は、宙に浮いた的射へと一瞬にして追いつくと、両手を組んで

拳を作り、それを頭上からの射へと振り下ろした。

「今回だけは、許すぜ、俺！」

由利が闘也のツインソウルUNCHAKUで叩き落されたのと、ほぼ時を同じくして、的射も地面に叩きつけられた。

闘也も秋人も、二人の記憶が戻ることを信じて。

河川は、この戦況の不利を察し、撤退することを決めた。時間も残り少ない。的射、由利も戦える状態ではないし、連れ戻そうにも三対一という絶対的な数的不利と、超能力戦争の英雄が二人もいることを知っているため、河川は撤退することを決めた。

「戦えてよかったよ。赤火紅蓮さん」

小ばかりにしたような口調で河川は紅蓮へと話しかける。彼は、彼の持つもう一つの能力、回復ヒーリングの能力によって各所の傷を癒すと、素早くフライブースターパックに飛び乗り、その場を立ち去った。

カスタマー虹七色専用輸送艦『CSR-01 アオミ』の中で、モニターをじっと河川は見つめた。そこに、カスタマー司令官、黒田闇亜の姿が映る。

（ついに始まったか……）

自動操縦にて、一時その進路を本部へと取っていたアオミの中で、周囲に全くの警戒を示さぬまま、河川はその映像を見ていた。

『私は、カスタムサイコストで組織された『カスタマー』と言うものである。我々は、いずれの日本、いや、世界を支配しようと企むピュアサイコスト達に対し、我々は徹底抗戦をここに表明したいと思い、全放送を占拠し、この映像を流しています』

「来るぞ……」

河川は、ごくりとつばを飲み込んだ。

その映像は、闘也達にもしっかりと確認することができた。闘也の端末に、緊急通信が入ったのだ。相手は正規軍特殊任務専門部隊『雷雲』の隊長、出雲 武であった。すぐに闘也は映像回線を開い

た。

四、五十代の男が映像に映る。秋人、紅蓮もその映像をしつかりと見ていた。

『この戦いは、我々の自由を勝ち取り、自らの正義を貫き、今後の世界に、安寧をもたらすためのものです！！』

「何だよ、この映像……！！」

秋人がその映像を見て、僅かに怒りの声を上げた。闘也も口にこそ出さないが、その顔は怒りに歪んでいた。

『我々はここに、第二次超能力戦争の、開戦を表する……！！』

開戦——その言葉は、闘也の胸に深く突き刺さるものであった。ようやく止めた、サイコストとエスパーの超能力戦争。ようやく平和を取り戻すことができたと思っていた。

しかし、それは違っていた。一度戦いが起これば、それはまたいずれ、必ず起こることとなる。心のどこかでは分かっていた。その前兆として、『サイコスト狩り』も見て、実際にその襲撃にあった。結局、世界はまた、戦うばかりのものへと戻ってしまった。自分は、あのとき戦争を止めておきながら、再発を防ぐことができなかった。苦い思いで、闇亜の演説の最後の言葉を聞いた闘也に、柔らかな声が頭上から降り注ぐ。

「闘也……」

闘也ははっとして、その声の方を向く。的射であった。

「また、止めようよ。戦いを。それは、前にも闘也がしたことだよ」

その後ろには、由利の姿もあった。その表情から、二人には攻撃の意志が感じられなかった。二人は、記憶を取り戻したのである。闘也は、ゆっくりと立ち上がり、的射を優しく包むように抱きしめた。的射はその頬を赤らめる。

「ありがとう。俺はまた、戦争という言葉に閉じ込められるところだった」

闘也は、的射に優しく語り掛ける。ゆっくりと的射を離し、その両

肩にそれぞれ手を乗せる。

「そのために、まずは乱州を取り戻す。あいつが、戦いを起こす側にはなっちゃいけないからな」

僅かに険しい表情を的射に見せ、闘也はその口を開く。闘也の言葉が途切れると、的射も決意して、大きくうなずいた。

「うん」

超能力戦争の英雄達、そして、新たに加わった赤火紅蓮。彼らは、新たな戦い、『第二次超能力戦争』に身を投じることを決意した。

22、それぞれの道へ

「我々はここに、第二次超能力戦争の開戦を表す！！」

力強い声でそう発表したのは、カスタムサイコスト組織、『カスタマー』司令官、黒田闇亜である。闇亜の口ぶりに、ノーマルの意見は大きく左右されることは言うまでもないはずである。戦いを止める。闘也達がそう誓い、本当にそれが成し遂げることができるよう、闘也はある一つの策を打ち出した。

「現状では、カスタムサイコストの方が、ピュアよりもはるかに多い。となれば、戦力の補充は必須だ」

淡々とした口調で、闘也は、彼と共に戦う、紅蓮、的射、秋人、由利の四人へと説明をしていた。

「だから俺は、一度エスパー諸島に戻る」

闘也の説明、というよりは、策を聞いていた四人は、それに対し、同意の答えを返した。そして、闘也はさらに続けた。

「紅蓮は、エスパーのバギーへと向かってくれ」

「了解」

紅蓮は、闘也の言葉に対して、一見すれば素っ気ないものではあったが、中身は決意に満ちた返答をした。

「的射、秋人、由利は、一度沖合いに向かい、カスタマーを偵察してほしい」

その策に対し、三人は承諾の答えを返した。

話を終え、立ち上がった闘也の背後から、数十人のカスタムが飛び掛った。不意打ちではある。だが、百にも満たぬカスタムの力は極めて微弱であった。

「作戦、開始だ！」

「了解！！」

それぞれがそれぞれの返答を返し、戦闘が開始される。闘也はそのカスタムの中を流れるようにすり抜ける。強引に速さで逃げるもの

ではないこの回避に、カスタム達は追いつくことができなかった。

「頼むぞ！」

闘也は、振り返って銃弾を数発撃ちだす。その全ては、カスタムに命中し、そのまま闘也はムゲンを引き起こし、大空へと飛び立っていった。

紅蓮は、地を連続で素早く蹴りながら、闘也の示したポイントへとその体を運んでいた。すでに遠くなったが、後方では的射、秋人、由利の三人が、現れたカスタムとの戦闘を続けている。紅蓮の障害物になるものは、何一つとしてなかった。

（闘也さんからの命令……必ず果たしてみせる）

紅蓮は、決意も新たに、地を蹴り、さらに先へと進んでいく。いつしか、このように走っていた。誰にも構うことなく、一人で走っていた。闘也は、戦力補充のためにエスパー諸島に渡った。乱州を取り戻すとも言った。だが、紅蓮にはそれよりも大事なことがあった。コピリスの奪還。

奪取した青水冷雅より、コピリスを奪還する。同じように、コピリスをエスパー諸島より奪取した自分が言えるようなことではないのかもしれない。

山のふもとを一気に下り、岩肌の地面から、やがて地面は黄緑の短い若草が一面に生い茂る草原へと変わっていった。サツサツと音がかきたてながら紅蓮は尚も走り続けた。

的射、由利との戦闘地点から、歩いてのペースで二時間かかっていた。あの歩く速度を時速五キロとしたら、今はその六倍、三十キロである。このままのペースを維持すれば、二十分でバギー地点に到着できる。物事は早いほうがいい。だが、その目的は今の紅蓮には、関係なかった。闘也の命令を果たすため。そして、コピリスを再びこの腕に装着すること。戦いを止めることなど、ただ走り続けている紅蓮には記憶の隅で零れ落ちそうになっていたほどであった。

闇亜の演説を傍らで聞いていた深緑大地と白亜光輝は、その演説終了後、演説前に任されていた任務への出発を闇亜に告げ、二人は出発していた。

「闇亜様、本当に世界を変えるつもりなんだな」

光輝は、隣に座って小説を読んでいた大地にそれとなく呟いた。

「我々はそのために今こうして向かっていているのだろうか？」

人によれば、その言葉は苛立ちを覚えさせるものであるが、そのような言動にはなれている光輝には、苛立ちなど微塵にもなかった。

「行くぞ、光輝。出撃の時間だ」

「ああ」

大地につられて光輝も立ち上がる。光輝は拳を大地へと向ける。大地は、音一つ立てずに、光輝の拳に自分の拳を当てた。光輝は通信のモニターを開き、本部を呼び出す。

「白亜光輝、敵戦力を削ぎ落とす！」

光輝はそういうと、正面の出撃ハッチからその身を投げ出した。白い雲に覆われた空に、大地は本当に僅かな時間ではあるが見入った。大地は読んでいた本を後ろへ投げ捨てる。先ほどまで二人が座っていた椅子の間にあったテーブルの上に、本は綺麗に乗った。大地は開きっぱなしのモニターに告げた。

「深緑大地、目標を蹂躪する」

二人の戦士は、今、サイコスト協会香川支部の上空で出撃した。ピュアの作り出す世界を断絶するため。それにより乱れた秩序を、自分達カスタムが正すために。

（大地！！ 目標ポイントを発見した！！）

（了解。破壊する）

テレパシーで伝えてきた光輝の言葉に対し、大地もテレパシーで返す。バズーカを肩に乗せた状態で作り出し、そのバズーカに取り付けられているスコープを覗き込む。目標ポイントであるサイコスト協会香川支部を、スコープを覗きながらロックオンする。落ち行く中で、しっかりと標準を合わせる。スコープの自動標準決定装置の

レーダーが緑から赤に変わり、発射準備が整う。すでにバズーカのチャージも完了している。大地は声を張り上げ、バズーカのトリガーを引き絞った。

「当たれえっ!!」

大地のバズーカの方から、巨大な弾丸が放たれた。

眼下の爆発がバズーカにより起こったものであることは、光輝は熟知していた。放たれた弾丸は、一直線に突き進んでいった。放たれたのは一発ではあったが、それでも十分な威力を持っていた。少なくとも、敵の拠点のひとつを破壊する程度は。

「敵が来たか……」

異変に気づいたのであろう。ピュアサイコストがサイコスト協会が出てくる。光輝は、その中でこちらへと飛翔してくる敵を捉えた。

おそらく、飛んできたピュアの能力は、飛行能力とその速さを劇的に向上させる飛躍^{フレイ}か、翼^{ウイング}を作り出すことである程度の飛行能力と強力な旋回能力を持った翼^{フェザー}、それでもなければ、飛行能力は低くとも、攻撃方法が多彩である羽根^{フェザー}であろう。こちらに飛翔してきたのは六人。うち、三人は巨大な翼を展開してこちらへと向かってきている。巨大な翼は、飛躍か翼の能力であるが、速度的に見て、その全員が翼の方の能力であることを確信した。

（来るぞ！ 光輝！）

（分かってる！）

自分よりも高い場所から落ちている大地から、テレパシーによる警告が聞こえる。それに対してぶっきらぼうに答えを返すと、放たれてきた銃弾を防御の能力で受け止める。堅牢となった光輝の体に、ピュア達の放ってきた銃弾はほぼ全てはじき返された。徐々に近づいてきていたピュアのうちの一人が、黒煙を上げて地上へと落ち戻っていく。後方から大地がバズーカを撃ち放ったのである。大地はチャージもそこに、次々とバズーカを発射する。六発放ったうち、四発はピュアのいる場所をかすめることなく地上へと落下して

いき、それ以外の一発は、ピュアの発生させたバリア・シールドと呼ばれる電磁展開型戦闘盾に防がれる。しかし、残った一発はその盾を構えそこねた一人に命中し、さきほど同様、黒煙を上げて地上へと落下した。

バリア・シールドにより、大地のバズーカを防いだピュアが、多数の針のような羽根をこちらに飛ばしてきた。先ほどの予測通り、このピュアは羽根の能力を有していた。光輝は、地面に対し垂直に近い体勢から、平行に近い体勢に変更する。それと対称的に、大地は地面に対しほぼ平行となる体勢をつくり、光輝の真後ろについた。光輝は防御の能力を展開し、その羽根の攻撃を自身の体を持って受け止めて防ぐ。

「行くぞ、光輝!!」

「フォーメーション、X98!!」

空中からの奇襲時に使うフォーメーションである。大地は、光輝の後ろでバズーカをチャージする。大地は、光輝の肩にバズーカの一部を乗せ、チャージの完了したバズーカを三発撃ち出す。そのうちの一発は誰に当たることもなく地上へと落ちていく。しかし、これは牽制であることは、フォーメーション的にすでに熟知していた。それにつられ、敵の砲撃の甘さにより、油断したところへと撃ちこまれる弾丸を当てるのである。その作戦とフォーメーションは見事に成功し、二人のピュアが黒煙を上げながら共に地上へと落下していく。残った二人がこちらへと接近してくる。近接戦を仕掛けるつもりであろう。しかし、これこそがこの作戦の締めとなるものである。大地が少しばかり光輝から距離を取る。近づいてきた二人を、光輝はガツチリと捕まえ、腕で締め上げる。身動きの取れなくなった二人のピュアに、正確に狙いを定めた大地のバズーカが当たる。その二人も、やはり黒煙を上げて地上へと落ちていく。

「地上部隊を片付けるぞ!」

光輝は上方でバズーカのスコープから目を離れた大地へと叫ぶ。大地はうなずき、一気に地上へと突っ込んだ。

地上へと降り立った大地と光輝は、周辺に現れたピュアサイコス
トに、軽く笑みをこぼした。数としては三十ほどである。大地は、
バズーカの調整を開始する。一人のピュアが銃弾を放ってくるが、
光輝が大地の前に立ちふさがり、銃弾をはじき返す。今度は、その
真逆の方角から銃弾が放たれるも、やはり光輝が立ちふさがり、銃
弾をはね返す。三方向から同時に銃弾が放たれるが、光輝は今度は
左右だけではなく、前後の動きすら利用してその銃弾をはじき返す。
大地は、そんな光輝に囁くように報告する。

「変形、及びチャージ完了」

「了解っ！！」

光輝の言葉が返ってくると、砲口の大きくなったバズーカを、光輝
のいない方角へと向ける。

「ビーム微粒子集束砲、発射っ！！」

光り輝く極太の粒子砲がバズーカより溢れんばかりに飛び出す。一
瞬にして飲み込んでいくその極太ビームを自分もととも回転する。
光輝は、その動きに合わせて、軽々と大地の真上へと飛び上がる。
光輝のいた部分にも、大地の粒子砲が走る。一回転したところで、
大地の粒子砲は止まった。戦場は、その一発によって沈黙した。

「帰るぞ、光輝。任務は達成した」

「ああ。今日も疲れた」

「そんなことでは、決戦の時に後れをとるぞ」

「分かっているっ！」

何気ない会話を交わしながらも、二人は再び上空へと飛び去って行
った。

23、戦いの火花

太平洋の上空を闘也はやや早めに飛んでいた。全く変わらぬ風景に、半ば飽きかけていたが、その感情も、突如エスパ―諸島から送られてきた通信によってかき消された。

「緊急通信……!？」

闘也は、送られてきた通信が緊急のものであると知り、端末を起動させ、通信を開く。その動きは実になめらかで、その動作に一秒としかかることは無かった。

「どうした！」

《カスタムの襲撃です！ できれば、応援を!!》

その顔に焦りの表情を浮かべ、特殊任務専門部隊『雷雲』の隊長、出雲武が端末ごしに叫んだ。闘也は、自分ではそのつもりではなかったが、なだめるようにそれに返答を返す。

「今俺がそっちに向かってる。それまで持ちこたえろ」

《了解!!》

そこで端末に送られてきた短い緊急通信の会話は終わった。闘也は、端末を操作しながらも、さらに飛行速度を上げた。端末に、的射と紅蓮の顔が同時に映る。

「こちら闘也。エスパ―諸島が襲撃を受けているらしい。俺はそこで戦闘に入る！ そちらも各任務をしっかりと頼む！」

《分かった!》

《了解》

やや驚きの表情で、的射は返答し、紅蓮はその表情を一つとして変えぬまま闘也の命令とも取れる言動を了承した。そこで、闘也は端末を終了し、速度を上げたために早くも見えてきたエスパ―諸島へと突っ込んで行った。Lエスパ―島の一部分で爆発が起こる。木々の一部が黒煙を上げている。闘也はその有様に、自分の背中に悪寒が走ったのを感じた。自分の治める国が攻撃を受け、民が死に、木

々は焼き払われ、建物は崩され、動物達はその命を神の元へと送られる。

このようなことになってしまったのは、カスタムが第二次超能力戦争を開戦させたためか、それとも、それ以前に超能力戦争が起ったことか。

もしかしたら、自分達超能力者がいるから、こんなことになってしまったのか………？

「俺が倒す……俺の国を戦火に巻き込む者を！！」

闘也はレスパーへとその体を突撃させ、ご挨拶代わりに数発の銃弾をカスタムに命中させた。

草原を走り続けていた紅蓮は、闘也からの通信を切った後、森林地帯へと差し掛かった。目標ポイントは間もなくである。この森を入れれば、そこまで時間はかからないが、カスタムがバギーを攻撃している可能性も、今となつては否定できない。

「あれか………！」

目標ポイントが間近になったところ、視界に小さく写るバギーが見えた。紅蓮は足元にあった突起した岩に左足を乗せ、一気にバギーのいる地点まで跳躍した。

「レスパーの小型バギー……お前がリドガか」

紅蓮は、バギーに腰を下ろしていた老人に声をかける。バギーのドアには堂々とレスパーの銀色の紋章が刻まれていた。その銀色とは対照的に、バギーは濃い茶色である。いかにもバギーらしいものではあるが、やはり紋章の銀色とバギーの茶色はあまりにも不釣り合いであり、無駄に目立っていた。

「確かに、わしがレスパー正規軍、リドガ・デッサじゃ」

「闘也さんの部下である、赤火紅蓮です」

紅蓮は、懷から闘也の直筆にて書かれた証明書を取り出す。疑われぬようにと闘也より渡されたものである。その証明書には、闘也の直筆のサインだけでなく、レスパー軍上層部の一部しか所持してい

ないハンコも、ダメ押しするように押されていた。だが、その証明書を老人に見せようとしたところを、リドガは手で制した。

「君のことは、鬨也様よりよく聞かされておる。証明などいらんよ」
リドガはそのシワが入った顔に老人らしい笑みを浮かべる。この笑みは、戦いをする者の笑みではない。どこかで、自然と、小さな子供達とふれあいながら生きていくような人間なのだ。両親に抱きしめられ、笑顔の中で生きてきた人間なのだ。リドガもその笑顔の中で、笑顔で過ごしてきたのだろう。自分とは、全く違う生き方で・
・・・。

「見つけたぞ。赤火紅蓮！」

老人の笑みにより、一瞬沈鬱な表情を作っていた紅蓮が、聞き覚えのある声で我に返る。子供っぽさが残る声とその容姿、部下には数人のカスタムを引き連れている。つい先ほどに火花を散らせた相手に、紅蓮は言葉を返した。

「邪魔だ。立ち去れ」

冷徹な視線と表情で紅蓮は青水河川へと言葉を消した。河川の方は僅かに顔をしかめたものの、すぐに表情を戻し、紅蓮の冷徹な言葉に対して皮肉めいて言った。

「そう言って立ち去ったやつがいるのか？」

「・・・・・いないな」

紅蓮はその表情を変えずに、河川の質問に答えた。確かに、自分から出てきて、立ち去れと言われて立ち去る者が、どこににいるというのだろうか。少なくとも、ここに来たからには覚悟の上で来ているはずである。

「力づくで立ち去ってもらう」

「もうじき兄さんも来る。君はその前に倒したい」

「俺はまだ死ねない。任務中だからな」

紅蓮は冷徹な言葉を貫き通した。河川は僅かな怒りを込めた声で叫び、その地を蹴った。

「その任務、達成させない!!」

エスパー諸島のエスパー達は、闘也が到着するのを見た途端、高揚し、歓喜し、士気を高めた。モチベーションの上昇は、防戦一方であったエスパー達の戦況を百八十度回転させるとまではいかなかった。少しずつ、だが確実にその角度を変えていった。

「ソウルツインソード!!」

闘也は両手にそれぞれ小型の剣を作り出し、それを力強く握り締める。カスタム達は、いきなり現れた闘也に翻弄され、一瞬にして、戦闘続行が不可能となっていた。

「ソウルスナイパーガン」

闘也は、超遠距離仕様のソウルガンを作り出した。通常のソウルガンに、「スナイプカスタム」を施したこのソウルスナイパーガンは、敵に近づくのが危険であるときや、遠距離からの攻撃が適しているときに効果を発揮する。ソウルガンのカスタムツール「スナイプ」には、スコープ機能も標準装備であるため、文字通り、超遠距離仕様であった。

ソウルスナイパーガンのスコープを覗き込み、近づいてくるカスタムの兵輸送艦のエンジン部に狙いを定める。どんな強固な戦艦、輸送艦であれども、管制のいるブリッジか、艦の命であるエンジン部を破壊すれば勝利の軍配はこちらに上がる。

「当たれっ!!」

勢いよく撃ち出された鉛の弾丸は、まっすぐに輸送艦のエンジンを貫いた。

「後は頼むぞ!!」

「了解!!」

エスパー達の威勢のいい返事を待たぬまま、闘也はしエスパー島の奥へと風のように飛び去った。

途中、戦闘となっているエスパーとカスタムの戦いに、闘也は次々と介入し、カスタムを戦闘不能に持ち込んだ。闘也は、そのまま前進し、とうとうある場所へとたどり着いた。

エスパー諸島最高議会。エスパー諸島の政治の要である。ここでもうすでに戦いを傍観しているような者があれば、すぐにでも非難させなければならぬ。確かに、この最高議会には、最新のセキュリティシステムを搭載し、警備のロボットが、携帯型ビームガンを持して徘徊している。議会そのものにすら、ミサイルが多数搭載されており、緊急時には、敵の迎撃用として発射も可能である。しかし、最高議会は戦艦ではない。ミサイルも緊急のために、とりあえずつけているようなもので、ミサイルの搭載数も、そこまで安心できるものではない。警備ロボットがいまだに徘徊しているところを見る限り、まだ最高議会は襲撃を受けてはいないようである。

「エスパー島南部に敵部隊が集中している……」

闘也は、カスタムの放つオーラの濃さを感じし、その数が、南部に圧倒的に多いことを悟った。闘也は、すぐさま空中へと飛び出す。上空から見たところ、やはり闘也の予想は当たり、南部に敵部隊が集中していた。

あそこでは、「雷雲」の三人のオーラも感じ取れた。闘也はその身を翻し、別方向に敵部隊が少ないことを確認した後、敵の集中しているエスパー島南部へと風を引き裂いて飛んでいった。

闘也がエスパー諸島で戦闘を行っているころ、紅蓮は、殴りかかってきた河川の攻撃をかわし、誰に言うわけでもなく呟いた。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

紅蓮は敵の動きを見切るため、パワーストーンを使い、河川の攻撃を防ぐことを第一とした。放たれる黒い球体を、刃となったパワーストーンで受けとめる。火花を散らせ、その後、黒い球体は無に帰った。

「この攻撃、おそらくは……」

紅蓮の予想は当たっていた。河川が再び放ってきた球体の弾道を見切り、紅蓮は左前方へと回避する。

ダメージ
「外傷！」

紅蓮はムゲンを引き起こす。神経の一本一本が細く研ぎ澄まされる感覚が全身を駆け巡る。紅蓮は、次々と放たれる球体を、右にかわし、次はジャンプによってやり過ごし、三つ目に放たれた球体を両手に展開させた両爪で切り裂いた。

「そこ………！」

紅蓮は勢いよく河川へと両爪を切り落とす。河川の素の左腕が、その爪を受け止める。河川の左腕からは、血が滲み出ている。河川はそれを気にすることなく、左腕で受け止めたまま、紅蓮へと蹴りを食らわせる。

「ちいっ………！」

衝撃で怯んだ紅蓮に、河川が球体を放ってくる。今度の球体は大きく、先ほどとは、威力はおろか、その速さも命中率も上昇し、さらには、僅かながら、追尾機能すら加えられていた。

「ぐっ………！」

紅蓮は、両爪で受け止めはしたものの、その球体を諸に受けた。蹴りの衝撃の数倍の衝撃が、紅蓮に襲い掛かった。紅蓮は、小さな呻き声を上げ、後方でその様子を傍観していたリドガのバギーにぶつかる。紅蓮はすぐさまリドガに叫んだ。

「何をしている！　すぐにここから………」

「わしゃあ、援軍を相手しとくよ」

見ると、リドガが見つめる先に、十人ほどではあるが、カスタムが向かってきていた。紅蓮は、年老いていることと、エスパーであることにいささかの不安を覚えた。だが、その不安は、リドガの鬼のような眼差しによってかき消される。それは、まさに今獲物を狩ろうとする、獣のものであった。

「君の敵をお忘れかい？」

紅蓮が、はっとして正面に向き直る。すでに河川は、さらに流血がひどくなっている左腕から、先ほどよりさらに大きい球体を作り出した。ここで回避をすれば、バギーかリドガが狙われる。バギーが破壊されれば、ここに来た意味は微塵もなくなる。すなわち。

「任務失敗・・・させてあげます！」
勢いよく放たれた球体を、紅蓮は真正面から突っ込み、そして、最大に展開した両爪で受け止めた。

24、散り行く命

河川の放った黒い球体は、紅蓮が最大に展開した金属製の爪を破壊した。紅蓮はその金属片が飛び散るのを察すると、すぐさまその場を離れた。当初の三分の二程度まで砕かれた爪に、紅蓮は一瞬視線を送ったが、それを気にかけている時間はあまりに短く、砕かれて間を空けぬうちに河川へと切りかかっていった。

「まだ・・・・・・・・！」

紅蓮の攻撃は、河川が繰り出した右足にはじかれる。金属の爪が砕かれた部分は、尖っている場所も少なくなき、幾本かは、河川の右足に深く突き刺さった。

「離れる！」

河川は球体を紅蓮の目の前で作り出す。紅蓮がその存在に気づき、回避行動を起こすべく、地を蹴って後ろに飛ばうとしたときには、すでに球体は河川から放たれていた。

「ぐはああつ・・・・・・・・！！！」

紅蓮は、爪で受け止めることもできぬまま、後方へとその身を投げ出された。思い切り叩きつけられた頬が、紅蓮の吐血へとつながる。紅蓮は血を吐き出し、息を荒くしながらも、何事もないように軽やかに立ち上がった。

「君は、なぜ生きる？　なぜこうにもなるまで戦い続ける？」

河川は、口から下が血でぬれている紅蓮に、それとなく聞いた。紅蓮は、躊躇うこともなく、即答する。

「森羅万象の超能力者となるためだ！！！！！」

紅蓮の各所でスパークが起こる。誰にも見えないし、それは精神的なものであった。挫折を幾度も味わってきた。それに類する感情も、戦えないからと自分の能力を鍛錬し、それでも来て欲しいといわれ、中年ばかりの軍隊に入れさせられた屈辱。戦いが終わろうとし、安堵していたところに、両親の死。それから二年。決死の覚悟で単身、

エスパー諸島に潜入し、コピリスを奪った。だが、それすらも奪われた。

世界は、俺から全てを奪っていく。

両親もコピリスも、俺の人生を……………。

破壊されていく。

破壊されるまま、生きろというのか？

無理だ。破壊から創られるものはある。

だが、行き過ぎた破壊は創造すら破壊する。

なら、その破壊を……………。

「俺が破壊する。そのために……………」

自分には今、やるべきことがある。誰にも他にできるものがない。

「お前を討つ……………」

紅蓮は、その気力によって完全に復活した両爪を振りかざし、河川へと突っ込んでいった。

「甘い……………」

紅蓮は一喝し、河川へと爪を突き立てる。河川は攻撃を横転で受け流す。突き出した左腕を引っ込めると、最初の攻撃から間を空けずに紅蓮から見て左側へと逃げ込んだ河川へと右腕を突き出す。河川はほとんど使い物にならない左腕を立てにして爪の攻撃を受け止めた。爪は河川の左腕に深く突き刺さり、反対側よりその爪が姿を現した。貫通した爪の先は、赤い鮮血に彩られていた。

河川は、その幼さの残る顔に小さく笑みを浮かべると、その左腕を、腰をひねることで紅蓮の体勢を崩させた。紅蓮は、なんの対応もなせぬまま、河川に引き寄せられる。河川は、右手の中で作り出した巨大な球体を、ゼロ距離で紅蓮へと発射した。

「ぐあああつ……………！！」

紅蓮は、いまだに河川の左腕から、爪を抜けずにいた。体勢を崩されている今は、敵の攻撃を受けることすら、困難を極めた。河川の攻撃を中断させるには、もう、核を潰すしかない。核——心臓である。

「俺は……まだ!!!!!!」

紅蓮は、貫いた爪を真横に振るい、左腕に沿って突き進ませた。それに呼応して、河川の左腕の細胞は次々と死んでいき、河川の左手を両断し、爪を抜き取ることに成功した。

「はぁぁあっ!!!!!!」

「何……!!」

紅蓮は、半ば、獲物をひたすらに追いかける獣と化し、一気に爪を河川の右肩へと突き刺す。河川の肩から、腕に沿って爪を直進させる。先ほどの左腕の二の舞となった右腕を、河川は驚愕と呆然の目で見ていた。

「回復!」

河川は、急速なまでに細胞を回復させ、両腕を再生させ始めた。だが、紅蓮の攻撃が、それを許すはずもなかった。

紅蓮は瞬く間に右足を切断すると、両爪を頭上に振りかざし、並べた。陽光を受けて光り輝く金属の爪には、そのメタリックな色とは対照的に、血なまぐさい赤も混じっていた。

「これでええええっ!!!!!!」

紅蓮の両爪は、真っ直ぐに河川の心臓へと振り下ろされた。

カスタマー達の間で、『第一次超能力戦争』と呼ばれている前大戦。その英雄の一人である波気乱州。彼もまた、エスパー諸島襲撃のために、カスタム達と共にエスパー諸島へと足を踏み入れていた。各地で過激な戦闘が行われているなか、乱州は素早い動きで、次々とエスパーを昇天させ、とある一人の男との戦闘にもつれ込んでいた。エスパー正規軍特殊任務専門部隊『雷雲』の隊長、出雲武その人である。武の武闘の能力に、乱州は苦戦を強いられていたものの、その攻撃のクセを見抜き、徐々に戦いの流れを、乱州自身に引き寄せつつあった。

乱州は、武の繰り出してきた右腕の攻撃をムゲンの助力によって回避するなり、自らの拳を武に叩きつけた。武はよろめいたが、そ

こはやはり隊長なだけはある。すぐに体勢を整えると、高速移動による残像を、乱州に見せ付けてきた。乱州は、攻撃の方向を予測できずに、背後より飛び出した武に、背中を強打される。乱州は吹き飛び、地面を数メートル滑った。

「こんな攻撃！」

乱州は、すぐさま飛び起きるようにその体を起こすと、懷にもぐりこんだ武の攻撃を後ろへと飛び退いてかわす。今の動作が少しでも遅れていたら、あの拳の餌食となっていただろう。乱州は、攻撃後の隙となった武に、頭部への一撃を叩き込む。ふらつく武へと、乱州はさらに追撃する。腹部に拳を叩き込み、足を蹴りで払うと、巨大化した手を作り出し、武の両腕へと突き落とした。

「巨大腕——ギガントアーム——！」

潰された両腕の痛みは、武の吐血によって、乱州が認識するところとなった。乱州は周囲によってきたエスパーを、腕を伸ばして撃退する。乱州は腕を剣へと変化させると、武の喉下に当てた。

「死ぬ前に、仲間には伝えたいことはあるか？ 隊長さん」

武は、乱州を真っ直ぐに見つめる。そして、呟くように乱州へと言った。

「仲間には、生きると伝えろ。そして、お前も死ぬな」

武の思わぬ発言に、乱州は驚愕の表情を浮かべた。その表情を気にせず、武は続けた。

「仲間が悲しむだろう？ お前が死ねば。カスタマーの方も、闘也様の方も」

乱州は、自分の涙腺が僅かに緩んでいることに気づかなかった。が、任務は果たさねばと、武の襟を掴み、無理やり立ち上がらせ、右腕の腕剣を構える。

「来世で会おう」

武の最後の言葉が、武の口から放たれた。

「……………ああ」

乱州は、その腕剣を、武の心臓へと突進させた。

森林の中を、一つの影が飛びわたっていく。目標へと向かっていくその影の存在は、鳥達を空へと避難させることとなった。その影の所有者、青水冷雅は、河川の援護のため、戦闘の用意をし、虹七色輸送艦『アオミ』より、逐次出撃していた。

河川の出撃より十分後に、アオミを出た冷雅は、すぐさま河川にいるポイントへと跳躍していった。木を蹴りながら加速をつけ、目的地へと到着を早めるよう尽力していた。右腕には、紅蓮より奪取したコピーリスが装備されている。途中に進路を拒む枝が視界に入ったが、それを腰に収めていた鞘から抜き放った長刀でなぎ払った。そして、そのポイントへとたどり着いた。冷雅は、紅蓮との戦闘になっている河川を発見する。それに気を取られたのが災いした。右側に現れた枝が、彼の体に突き刺さったのだ。冷雅は、五秒ほど怯んだが、すぐに目を覚ますと、河川の方へと向き直る。

しかし、そのときすでに、河川の心臓に、紅蓮の爪が襲いかかるうとしていた。

エスパー諸島で、襲撃してきたカスタムを殲滅しながら進んでいた闘也もまた、同じような状態に陥っていた。

これまでにない数のカスタムである。闘也は、そのカスタム達に行く手を阻まれる。その射撃センスはかなりのものであった。闘也は、切りかかってきた一人のカスタムの右腕を、ソウルガンで撃ち抜く。それに続いてか、一斉にカスタムが飛び掛ってくる。闘也は、ソウルガンを変形させ、ソウルスティックを作り出す。背後から迫っていたカスタムを、ソウルスティックを横に振ってなぎ払うと、すぐさま回避行動を行った。闘也は、ソウルスティックを、ソウルツインヌンチャクに切り替えると、両方を同時に操作し、縦に振り、横に振り、一気にカスタムの数を減らす。背後に迫っていたカスタムの気配を感じ取ると、すぐさまソウルツインヌンチャクをソウルツインランスへと切り替える。そして、その二つの槍を、脇から後

るへと投げる。槍は見事に、そのエスパーの右腕に突き刺さった。

「数が多い……！」

闘也は、苛立ちの含んだ声で呟く。そして、今度はソウルダブルソードを作り出す。闘也は、叫びながら、残っているカスタムへと突進した。

「てええやあつー！」

見事に足を両断されたカスタムに気を配らぬまま、闘也は一気に突っ込んだ。雷雲の三人の戦闘域へと向かうためである。

「武！！ 乱州！！！」

しかし、その叫びは虚しく空に響いた。

紅蓮の両爪が。

乱州の腕剣が。

河川の心臓を。

武の心臓を。

貫いた。

闘也と冷雅は、場所は違えど、時を同じくして、仲間の、弟の名を叫んだ。

「武イイイイ！！！！！」

「かせええええん！！！！！！！」

25、ミッションリザルト4

超能力戦争。それは、超能力者でありながら、別種であるサイコストとエスパー間で起こったものであった。

エスパー諸島を襲撃した白亜光輝と深緑大地は、正規軍特殊任務専門部隊「雷雲」との戦闘の後、どちらに犠牲も出さぬまま、撤退に至った。二人はその後、本部へと帰還し、カスタマー司令官、黒田闇亜の声明を聞いたのち、サイコスト協会香川支部の破壊を成功させた。

一方の紅蓮達は、超能力戦争の英雄、遠藤的射と白鐘由利との戦闘に陥る。途中、冷雅の弟、河川との戦闘にもなるが、河川は、あれが始まると言い残し、撤退した。その後、紅蓮達は的射と由利を正気に戻すことに成功。一時の平安を得た。

しかし、その後すぐに闇亜が全世界に向けた声明を発表した。「第二次超能力戦争」の開戦を表明する声明を。

的射と由利を加え、決意を新たにした紅蓮達は、別行動をとることとなった。その中で、紅蓮は的射達との戦闘以前から定められていたバギーのポイントへと向かった。河川とのその日二度目の戦闘となり、紅蓮は、河川の撃破を果たす。

一方の闇也は、エスパー諸島の襲撃を知ると、すぐさま戦闘に参加。カスタムを殲滅していくも、乱州によって武が撃破される瞬間を目の当たりにした。冷雅もまた、河川の援護のために急いでいたが、結局、援護することは敵わず、河川を守ることすら許されなかった。

戦火はさらに広まり、彼らの思想も渦巻いていく。彼らの戦いは、今戦争として始まったのであった……。

26、激闘の後に

エスパ―諸島では、雷雲の隊長、出雲武の撃破と、残存勢力が少量であることより、撤退したと思われる。生き残ったエスパ―は、それぞれが、燃え始めた各地の森林や住宅の消火作業へと動き始めた。

沿岸のカスタムを偵察していた秋人、的射、由利は、そのエスパ―諸島より撤退してくるカスタムの予測ルート割り出すことに成功した。これにより、敵の本拠地の所在が明確となったのだ。つまり、三人の任務は、達成されたというのに等しいものであった。

彼ら以外として、単体で行動していた紅蓮は、カスタマーのერთ集團『虹七色』の一人、青水河川の撃破に成功。その時、怒りのままに攻撃してくる物体が紅蓮の視界に入った。

「うおおおおっ！――！」

勢いよく繰り出された拳を、紅蓮は易々とかわす。拳の持ち主は、河川の兄、冷雅であった。その目には、怒りと悲しみが渦巻く瞳が映っていた。紅蓮は、その瞳の理由を察した。自分が河川を殺したからであるのは、誰が言うまでも無く明白であった。

「赤火紅蓮………」

冷雅が、低い声で紅蓮の名を呼ぶ。紅蓮の目は、その声と瞳ではなく、すでに別のものへと移っている。紅蓮はちらと後ろを見やる。すでにバギー運転手であるリドガはカスタムを殲滅していて、エンジンをつかして、出発の時をいまかいまかと待っていた。

「貴様を………殺す………！！！」

拳が紅蓮へと突っ込んでくる。が、紅蓮はその大振りな攻撃を見切り、その右腕が紅蓮の側方まで突き出された時、紅蓮はパワーストーンがついたままのコピリスをもぎ取る。紅蓮は動きが鈍い冷雅の背中を蹴り押すと、すぐさまバギーへと飛び乗った。

「リドガ！」

「あいよー！」

威勢のいい返事と共に、バギーのエンジンは点火され、一気に森林地帯を走りぬけた。紅蓮も、当面の目的と、個人的な目的の両方を達成したのであった。

（冷雅……返してもらっぞ）

心中で、紅蓮は呟いた。

それから一週間ほどして、待ち合わせた紅蓮達は、敵の本拠地の正確な位置を、秋人ら三人から取得した。バギーは、五人乗るには十分な大きさである。紅蓮は補助席に、リドガの後ろには的射、その隣に闘也。さらにその後ろには由利が座り、その隣に秋人が腰を下ろしていた。

「あと百キロか……」

ぼそりと紅蓮の後ろに座っていた闘也が呟いた。百キロ先には、カスターの本拠地がある。海中にあるというのが一番有力な情報ではあるが、そこへ辿りつくには、困難を極めるであろうことは、紅蓮は熟知していた。

紅蓮は知りえないことではあったが、なぜ集合に一週間もの期間を有したかと言えば、闘也の当初の目的であった、戦力の増強のためである。数日間の交渉により、どうにか軍を手配することを約束されたらしい。

「……あ……あれは！」

秋人が身を乗り出してうるたえる。なんと、正面には巨大な鉄壁の砦が築かれていたのである。地平線にぼつりと見えたときには、山かと思っていたが、そうではなかった。全体が茶色がかった砦の各所には、数多のカスタムがうろろろしていた。数としては、軽く千人は超えているであろう。

砦の先には、おそらく海があるはずである。カスターの本拠地が海中に沈んでいる海が。さしずめ、ここは最終防衛ラインと言ったところであろう。紅蓮は闘也に、ここから徒歩で接近するべきだ

と提案した。闘也も同じことを考えていたようで、それに同意した。全員が一人ずつ、リドガへと頭を下げる。闘也が頭を下げようとした時には、リドガはそれを拒んだ。

「わしごときに、頭を下げられては困りますよ」

戒めであり、それでいて冗談でもあるようにリドガは闘也に言った。闘也を先頭に、五人はバギーを後にし、すでに巨大な建造物と見受けられた砦へと歩き出した。

バギー地点より数キロほど歩いた。すでに砦は見上げることその存在が確かなものになるほど迫っていた。紅蓮の横で、闘也は巨大なブーメランを作り出す。両手で持っても尚、引きずっている状態である。由利は、風を起こし、ブーメランの軌道を作り出す。闘也は、周囲の四人に「下がってる」と短く指示を出すと、自分はその場で回転を始めた。回転によってブーメランをより遠くに飛ばすためである。闘也の手からブーメランが放たれたとき、戦闘開始を告げる鐘が、紅蓮の中で確かに響いた。

「突撃する！ 一気に突っ込め！」

五人はそれぞれに走り出す。的射や由利は、後方での支援となるため、そこまで接近はしないが、接近戦が中心である男三人は、先陣を切って、砦へと突っ込んだ。三人全員が、ムゲンを最初から発動した状態での作戦開始であった。

「二百くらいか」

前方に防衛陣として現れたカスタムの数を見て秋人は呟いた。闘也は、その数を聞いて苦い表情をした。この数で苦戦するからではない。その数だけ、人を傷つけるからこそその表情だということを、紅蓮も秋人も知っていた。

目前に迫ってきたカスタムを前に、闘也はソウルツインソードを作り出す。二本の短剣を握り締めた闘也は、先陣を切っている三人の中でさらに先陣を切って敵軍の中へと突っ込む。引き続いて秋人も能力によって一気に敵軍へと突っ込んでいく。紅蓮は、左手の新た

なパワーストーンを握り締める。懐かしくも、新鮮な感じがコピーリスを握る左手に蘇る。紅蓮は、パワーストーンをコピーリスへとセツトし、ふたを閉じる。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

『パワーストーン——クロウ』

懐かしい金属音声が、紅蓮の戦闘開始の宣言に続いて聞こえた。

はるか上空にて、紅蓮、闘也、秋人の戦闘を見下す者達がいた。

彼らもまた、カスタマーエリート集団『虹七色』のメンバーである。

一人は、紫葉陽花という女性である。スラリとした体型

と、陽光を受けてよりいっそう際立つ金髪が特徴である。

その傍らで紅蓮達の戦闘を見ているのは、銀城龍我王である。二人を含め、青水冷雅、白亜光輝、深緑大地、そして、波気乱州が現在の虹七色の全メンバーである。先日、残る一人のメンバー、青水河川が撃破されたことにより、カスタマー本部では速急に新たなメンバーを探していた。

「陽花、よく見ておけ」

「……はい」

彼らの眼下では、火花を散らせながらの戦闘が繰り広げられていた。

紅蓮は、展開した爪で、次々とカスタムを切り刻んでいく。闘也は、心臓部は決して狙わず、必ず脚部と武装しか狙うことはなかった。秋人は、もともと殺傷能力がなかったために、次々と殴り倒れていた。戦闘開始前から感じてはいたが、やはり数が多い。三人で向かっていってもこれしか数を減らせていないとなると、敵はかなりの強者であることは容易に察することができた。

「ちいっ………!!」

紅蓮は両爪のパワーストーンをコピーリスへとしまいこむと、別のパワーストーンを懐より取り出す。紅蓮は、すぐさまそれをコピーリスにはめ込むと、一気に敵陣へと再突進していく。

『パワーストーン——ソード』

紅蓮の左手に、剣がしっかりと握られる。紅蓮は一気に敵陣へともぐりこむと、敵を一振りでなぎ払う。体勢を崩したカスタムも中にはいた。倒されたうちの一人のカスタムがうめき声を上げながら倒れた。

「くそお、強化型のこの俺があつ——！」

紅蓮はその言葉に引っかけりを感じた。元々強化されたような超能力者であるカスタムがさらに強化され、戦場に投入される。あつてはならない事実なのかもしれないが、それでもカスタマーはそれを難なく実行に移してきたのである。紅蓮は歯を喰いしげると、向かい来るカスタムを一閃した。

「これでっ——！」

紅蓮は残った十数人のカスタムを前に、コピリスのボタンを押す。コピリスが、そのボタンに反応して、音声を響かせる。

『フィニッシュアタック——ソード』

真空の刃となった剣が、カスタム達を両断した。この戦闘で、紅蓮は何人殺めたかは覚えていなかった。

第一防衛陣の沈黙。それは、この巨大要塞攻略の第一歩であつた。戦闘開始時、闘也の放った巨大ブーメランは、その空を薙ぎ、一直線に皆へと突き進んだ。風により、速度と軌道能力が上がったブーメランは、真横にずらりとならんだ砲台計二十基を破壊せしめた。その後、間髪入れずに防衛陣を落とされたのだ。敵は動揺を隠せずにはいられないはずである。

紅蓮は、正面より高速で迫ってくる二つの光を見つけた。

一つは、命令を成そうとする忠誠心が伝わってくる銀色の光。

もう一つは、復讐に燃える青い光であつた。

半ば、狂人と化していた。

弟を殺され、自分の一番嫌いな、自分の物を奪われるという失敗。その二つが、彼を怒りのエネルギーにより突き動かしていた。青い

怒りの光の中で冷雅は亡き者となった河川と、復讐の対象である紅蓮を、脳内に交互に映し出していた。いや、映し出されていたという方が正しいのかもしれない。

俺が奪うのは、物だけではない。

「青水冷雅、目標を奪い取る！！！」

対象である命も、だ。奪取^{スナッチ}の能力を持つ者の得物は、その命を奪い取るために、刃はその鋭さを増し、鎚はより堅牢になる。

冷雅は、腰の鞘より、一本の長刀を抜き取った。

ムゲンを引き起こした状態で、銀色の光を放つサイコストといえば、闘也の中に浮かぶ人物は二人としていなかった。

「乱州………」

闘也はその者の名を呼ぶ。聞こえていないのは分かっている。だが、呼ばずにはいられなかった。銀色の光が確かに近づいてきていた。

「俺が………倒す」

殺したくはない。今まで共に戦ってきた戦友であり、親友であるから。

だが、仇は討たねばならない。同胞^{エスパー}達の仇を。

乱州が唯一残された、罪を償う方法、それは一つしかない。

また、共に戦うこと。敵同士ではなく、今度は、味方として。

『闘也、こっちに敵が！ 虹七色だと思っ！』

無線機を通して、的射の焦りの声が聞こえてくる。闘也は、秋人へと指示を下す。

「秋人、援護に回れ」

「でも、お前達は………」

躊躇っている秋人に向かって、闘也は教えるように言った。

「これは、俺の……俺達の戦いだ」

「……分かった。死ぬなよ」

秋人が返答するまでに数瞬の時を有したが、その言葉だけを言い残すと、秋人は的射達の方へと走り去っていった。

自分には自分の、紅蓮には紅蓮の、秋人達には、秋人達の戦い方が
ある。

ならば、自分が今成すべきことは一つ。任務遂行などという堅苦
しいものではない。私怨すら含まれているかもしれない。だが、そ
れでもやらなければならない。戦いを起こしてはならない。戦いを
止めなければならないのだ。

だから。

「魂波闘也、目標を討つ」

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

27、運命の決戦

カスタマーの最終防衛ラインであるこの砦を後ろ盾に、襲撃敵戦力を減らし、敵を殲滅せよ。それがこの戦いにおいて、乱州に下された命令であった。最後に、ぼそりと、「できれば闘也は生け捕りたいがな」とぼやいていた闇巫の姿が思い起こされる。乱州は僅かに笑みをこぼす。

生け捕ってやるよ。俺のためにな。

乱州は、そう心中で囁きながらも、顔を引き締める。だが、それはこちらが相手よりはるかに強くなればできないことなのだ。互角と言つていいだろう。自分とやつとの差は。相手が上かもしれない。現に、前の戦闘により、乱州は敗北の二文字を叩きつけられたのだから。

「叩き潰す……俺の拳で……」

乱州は、小さくそう呟くと、ムゲンの覚醒を起こしている赤と黄の光へ向かつて、その腕を伸ばした。

敵の攻撃が、その戦闘の先手を取った。闘也は、伸ばされてきた腕を苦も無くかわすと、そのままその腕の持ち主へと突撃する。引き続いてもう一本の腕が伸びてくる。闘也はやはりそれを苦も無くかわすと、無防備な乱州へと、拳を叩きつけた。

「ぐうっ……」

乱州の小さなうめきが闘也の耳に入る。闘也は、両手を堅くコーティングする。闘也がこの二年間で習得した、新たな武器、その名はソウルグローブ。生身から剛鉄へと攻撃部分が変化したため、格闘能力が飛躍的に向上する。

「乱州！ もうやめろ！ 記憶を取り戻せ！」

「誰が……」

乱州が闘也の要求へと応答を返した直後、闘也の体は戦闘を不可能

とさせた。先ほど伸ばし、外れた腕が闘也へと巻きついたのである。長い腕は、そう簡単に放す気配がない。乱州は、腕を縮めることによって接近し、巨大化させた足を闘也へと叩きつけた。

「ちいっ!!」

尚もその攻撃は止まない。闘也は、身動き一つできない状態である。乱州が再び腕を伸ばしそれを縮めてこちらへと接近してくる。闘也に戦慄が走った時、乱州は何者かに殴られ、攻撃を中断された。その余波によるものか、乱州の腕がほどける。闘也は、殴りかかった少年を見やる。左手にパワーストーンを作り出すことに成功した紅蓮がそこに立っていた。

『パワーストーン——ボディー』

コピリスの機械音声が闘也の鼓膜を刺激する。紅蓮は新たなパワーストーンを入手したのである。

しかし、その紅蓮も、後方より迫りくる冷雅の攻撃を、瞬時に受け止め、押し返し、闘也と乱州より離れていった。闘也は、立ち上がり、腕剣を作り出した乱州を迎え撃つべく、ソウルソードを創り出す。闘也と乱州の剣が交じり合い、火花を散らす。闘也と乱州は互いに雄叫びを上げ、それぞれの剣に属性を付加する。闘也は炎を、乱州は雷を。

二つの剣の間で、火花がさらに散った。

秋人、的射、由利は、現れた虹七色の少年二人と戦闘を開始していた。数の上では確実にこちらが有利だが、その差をかき消すように相手の連携が戦力に組み込まれていた。

秋人が援護のために駆けつけた時、少年達がそれぞれ自己紹介をしていた。的射達は、内心驚きながらも、顔は引き締めたままだった。秋人自身も、そうだったからである。

「集中攻撃をかけるしかないか……」

秋人は、単調な戦闘スタイルを呟く。二対三での戦いなら、一人が陽動し、一対一で戦っている間に、残り二人でもう一人を集中攻撃

する。それが一番効果的なのではないかと秋人は考えた。秋人に、大人げな声が聞こえてくる。

「秋人！ 大地の相手を！」

由利の声である。由利は、火炎球や放電によって大地へと攻撃を仕掛けてはいるが、それらの攻撃の全ては防御の能力を所有する光輝によって阻まれていた。

秋人は、すぐさまその場を離れる。的射と由利が大地へ集中攻撃をかける。しかし、その攻撃は、かなり手前にて光輝に防がれる。しかし、これが狙いである。光輝の後方では、大地がバズーカのチャージを行い、間もなく充填が完了するところである。秋人は、高速の能力を一気に開放する。速度が上がり、瞬く間に秋人は大地の眼前まで迫っていた。その速度の勢いにまかせ、秋人は自らの右拳を大地の右頬へとぶつけた。

「しまった！」

光輝の焦燥の声が鼓膜を震えさせる。こちらが取った。この戦闘を。二人しかいない敵戦力を分断すれば、数の多いこちらが有利である。さらに、光輝のほうには、まともな攻撃能力はない。それは、秋人にも言えることかもしれないが。

「もらったああっ！！！」

秋人は、その右腕を大地へと突き出す。倒れている大地に当たることは必然的と思われた。だが、その拳が大地に当たることはなかった。その前に何かが当たったのである。それは、右手である。無論、秋人や大地の物ではない。だとしたら考えられるのは一人しかない。い。

「やらせない………」

右手を突き出した光輝が、怒りの目で秋人を睨みつける。秋人は、すぐさま距離をとる。あのままあそこにいたら、大地のバズーカにゼロ距離で撃たれかねないからだ。

「わりいな、大地。後でなんかおこる」

「生還したらな」

二人のささいな会話の後、すぐさま相手の攻撃が開始される。秋人には光輝の隠し持っていたハンドガンが、的射と由利には大地のバズーカがそれぞれ襲い掛かる。秋人はハンドガンがこちらに向けられたのを感じ、すぐさま回避の行動を起こし、見事に成功したが、フルチャージされた大地のバズーカに、的射と由利は被弾した。

「由利ちゃん！ 的射ちゃん！」

秋人は二人の名をそれぞれ叫ぶ。秋人は怒りに身を任せて大地へと突進していく。接近するにあたり、光輝の銃弾が向かい撃たれたが、秋人はその弾幕の中を、身をかめながら接近していく。秋人は、光輝のハンドガンを右足で蹴り飛ばす。両手それぞれに握られていたハンドガンは、いとも簡単に光輝の手から離れた。秋人は、それに目もくれぬまま大地の背後へと回りこむ。秋人は、その場で腕を軸にして一回転した。足がちょうどよく大地の腰部に直撃し、吹き飛ばされた大地が光輝とぶつかった。

「たあああつ！！！」

秋人は、左拳を光輝の顔面に、右拳を大地の顔面にそれぞれ振り下ろした。

これは、憎しみで戦っている。

冷雅との戦闘になった紅蓮が最初に思ったことはそれであった。攻撃の一つ一つ、あるいは、動きの一つ一つが、怒りに満ちた鬼神のものである。紅蓮には、冷雅がここまでなつた理由は予想がついている。冷雅が細い長刀を横薙ぎに振るい、一時距離を取る。紅蓮は剣を左手に構えて冷雅へと突っ込む。冷雅はそれを空中に飛んで回避する。紅蓮も空中に飛び出し、それと同時に剣を振ったが、追撃にはならなかった。

背後に回りこんだ冷雅が、細い刀身を持った長刀——太刀を頭上から振り下ろす。紅蓮は即座にその動きに対応し、剣で太刀を受け止める。

「あんたが河川を殺した！！！」

紅蓮の脳裏に、河川に爪を突き刺した瞬間と、冷雅が怒りと悲しみをこめて突撃してきたときの瞬間が順に蘇る。そうだ。俺が殺した罪を背負う気は、紅蓮にはさらさらなかった。何せ、これは向こうがけしかけてきた戦争だ。誰かが死んで当然である。

「あんたのせいだえええっ!!!」

冷雅の押し込んでくる太刀が重みを増してくる。紅蓮は、その勢いを利用して冷雅の剣を受け流すと、腰部を右拳の甲で殴りつけた。

「これは、俺の戦いだ!!」

紅蓮は冷雅へと叫ぶ。復讐のために、冷雅がここに来たことは分かっている。その目標も、十分に承知している。目的は、自分。そう、紅蓮を殺すため、河川の仇を討つために、冷雅は来たのである。なら、それに対してしっかり戦うのが戦士であるはずである。

「赤火紅蓮………あんたを………殺す!!!」

振り向きざまに太刀で薙いだ。紅蓮は咄嗟に回避行動をとるが、右腕が肘より前の部分より切られた。両断とはいかないが、傷は深い。幸い、紅蓮の利き手である左手は無事であった。紅蓮は、再び横薙ぎに振るわれた太刀をかわす。冷雅が大きな隙を見せる。紅蓮は冷雅の背後に回りこむと、冷雅の背中を十字に切り結んだ。冷雅のうめき声が聞こえたが、紅蓮はそれに気を向けることなく、冷雅の左肩から、右のわき腹までを、斜めに切り下ろす。冷雅のうめき声がさらに大きく聞こえる。紅蓮は、傷だらけの背中を左足で蹴り飛ばす。背中へのダメージが大きいのか、冷雅は地表へと落下していく。紅蓮は、追撃しようとはしなかった。地表へと落下していく冷雅の姿を、ただただ見つめていた。

「俺の戦いだ………」

紅蓮は再び同じことを呟いた。自分の戦い。だからこそ、ここで追撃はしなかった。

地上の芝のおかげで、落下によるダメージは軽く済んだ。冷雅は、落下した瞬間に、完全に闘争本能をくじかれていた。背中が痛

む。おそらくは流血しているはずである。現状を確かめようと、背中に手を伸ばそうとしたが、背中の痛みが、その動作を拒んだ。冷雅は、空中で何もせず、ただ黙ってこちらを見ている紅蓮を見上げた。何もしてこない。

情けをかけられたのか。復讐の相手に……！！

冷雅の中で、全身の力が蘇ってくる。そうだ。なんのためにここに来た。河川が、こんな敗北を見て喜ぶはずがない。彼の気力は、限界を超えるギリギリまで来ていた。

冷雅は、全身を使って体を起こす。口の中に感じた苦い血を、つばと共に吐き出す。口元を右手で拭き、真っ直ぐに紅蓮を睨む。河川の仇を討つ。それ以外の理由で、俺がここで、あいつと戦う理由はない。戦えるなら戦うしかないのだ。

冷雅の気力が、限界を超えた。

紅蓮達が剣を交えていたところ、闘也も乱州と拳と剣を交錯させる戦いを続けていた。

闘也は、正面から伸びてきた腕をかわし、接近する。尚も伸ばされる腕をかわし、乱州へと接近していく。先ほどの攻撃と同じ。後方から腕を巻きついてこようとしてきたのは明白であった。

「させるかっ！」

闘也は振り向き、ソウルブーメランを生成する。勢いよく投げられたブーメランは、腕の部分を通りぬけた。しかし、すでにその場所に腕はなく、ブーメランの攻撃をかわし、さらに接近してくる。闘也は右手にソウルソードを生成し、巻きつこうとよってきた腕を切りつけた。その攻撃に怯み、腕の動きが止まる。この隙を闘也は狙っていた。闘也は一瞬にして乱州の背後に回りこむと、ソウルソードをソウルハンマーに切り替え、その背中に叩きつける。乱州は苛立ちのこもった声を漏らすと、すぐさま体勢を立て直し、拳を巨大化させ、接近戦を強制させる。闘也は、ソウルハンマーを放棄し、ソウルグローブを両手に装着する。繰り出された腕に、闘也も拳で

応戦する。二つの拳がぶつかった瞬間、誰に見えたものでもなかったが、激突する二人の波がぶつかっていた。

「ちっ……」

闘也は小さく舌打ちする。こちらが完全に力負けしている。やはり能力的相性では、直接組み合わせたりすれば、身体能力は必然的に魂^{ソウル}以上である。闘也は、この拳での組み合わせを降りた。闘也は、左右に自らの分身を創り出した。組み合わせは降りる。が、その組み合わせ、利用しなくては意味がない。闘也の創り出した魂はそれぞれに攻撃を開始する。攻撃を受けた乱州の腕の力が弱まっていることを、闘也は確信した。闘也は、その拳の真下をかくぐるように通ると、傷だらけの乱州の眼前まで迫った。闘也は、乱州に向かって真っ直ぐに剣を向け、それを突進させた。

「てええやあつ!!」

無論、殺す気はないし、殺したくもない。臓器は狙わないという彼の決心は固く、闘也は、乱州の左のわき腹の本当に端を貫いた。咄嗟の回避行動を取っていた乱州ではあったが、闘也の攻撃に間に合うことはなかった。

「がはあああつ……くそ……この俺が……」

うめき声を上げながら、結果に納得がいけないという乱州に向かって闘也は叫んだ。

「乱州！ お前は、俺の親友だあつ!!」

闘也は、乱州の腹部を蹴りつけた。すでに意識も遠くなってきたのか、乱州はほとんど身動きもせず、地上へと落下していった。闘也も、それを見ているうちに、自分も力なく落ちていることに気づいた。幸い、地面は芝である。自分も乱州も、特に怪我をすることはないであろう。と、彼は心中、安堵した。

地面が、思っていた以上にゆっくりと近づいていた。

28、感情と理性

気がついたとき、光輝は青空を見上げていた。青い空が映る視界の隅には、大小さまざまな雲の姿も捉えることができた。地面は柔らかい。おそらくは、草原の芝であろう。光輝は、顔面に鈍い痛みがあることを悟った。あのとき、高速の能力を使う少年に、^{スピード}顔を殴られ、気絶したのであろう。光輝は、頭を動かし、周囲を見渡す。その目は、相棒である、深緑大地の姿を求めている。

視界の隅に映る大地の姿を確認した光輝は、ゆつくりと立ち上がり、ふらつく足取りでありながらも大地の下へと向かった。光輝は、大地の傍らに座り込み、その身体をゆすり、相棒の名を呼ぶ。

「大地……大地……大地……」

返事はない。光輝はゆつくりとその耳を大地の心臓に近づける。結果を知るのが恐ろしかった。彼は、そんなはずはないと、かぶりをふり、大地の心臓に耳を当てた。

動いている。大地は生きている。

リズムカルな音を立てながら、心臓が動いているのを確認した光輝は、続いて思い出したように策敵に集中した。先ほどの三人がいとも限らない。最も、光輝が動き出した時点でなんらかの対応をしているだろうが。

「いない……な」

光輝は周辺の安全を確認すると、無線機で本部へと連絡する。

「こちら白亜光輝。深緑大地負傷のため、本部に帰投します」

通信回線を閉じた光輝は、カスタマーの輸送艦を呼び寄せる。レーダーでの索敵結果……敵無所在^{もんだいなし}。安全確認完了。流れていく文字が伝える結果に、光輝は安心した。光輝は、砦を回り込む形で撤退した。適切な、理性での対応は、彼らを無事、本部へ帰還することとなった。

一方、そんな光輝とは正反対に、いまだに感情で戦っている男がいた。弟の仇を討つべく、復讐の炎を紅蓮へと燃え上がらせている、青水冷雅である。

その冷雅の相手をしていた紅蓮は、先ほどでは考えられない動きをする冷雅に圧倒されていた。

「分からんだろう・・・俺があんたの家族を殺したと？」
「何っ!？」

紅蓮は、その冷雅の言葉に一瞬衝撃を覚える。家族を、一瞬にして失ったあの日。手元にあった。決して崩れることのないと思われていた平和の光。それを崩したのが、今の目の前にいる男だと言うのか。

「俺は、あの戦争で家族を亡くした!! 河川を除いてな!」
「家族を・・・!」

そのとき、紅蓮は、冷雅が自分と同じ境遇の者であることに気づいた。数多の死傷者を出した超能力戦争。その中に、紅蓮の家族、そして、冷雅の家族も含まれていたのである。

だが、と紅蓮は心中、かぶりをふった。

つまり彼は、憎しみで紅蓮の家族を屠り、弟を亡くした憎しみで紅蓮へと向かってくるのである。もし、冷雅が今こうして戦っている理由が、家族を殺されたための憎しみと復讐心であるならば。

戦いの中、戦士として最も恥ずべきものである。

感情に流され、その感情のままに全ての人間を屠っていく。感情のみでの戦いは、やがて自分すらも破壊してしまふ。そう、自らの理性が破壊されることによって。

「だからこそ俺は! 戦争を起こしたピュアとエスパーを許す気はない!!」

紅蓮は知った。彼の覚悟を。戦いを起こした元凶を叩く。ピュアサイコストと、エスパーを。それが、冷雅が戦う理由なのかもしれない。だが、それでも、殺した人間が自分と同じサイコストであることに変わりはない。

「そうさ、カスタマー創設の計画は、前大戦時より始動していたのだ！！」

怒りと憎しみを乗せた冷雅の太刀が振り下ろされる。紅蓮は、左手に構えた剣でその太刀を受け止める。二つの剣の間で、火花が散る。冷雅がそのつばぜり合いを制し、紅蓮の体勢を崩す。冷雅は、もはや防ぎようのない紅蓮の首に、剣をめり込ませる。しかし、その太刀が紅蓮の首を跳ばすことはなかった。太刀を横薙ぎに振るつた先に、紅蓮の姿はなくなっていたのである。冷雅が剣を前に突き出している間に、紅蓮は背後に出現し、その背中に、腕を伸ばして殴りつけた。

そう、紅蓮は、乱州の能力の複製である、身体的能力を、首に太刀がめり込む瞬間に使ったのである。

背後からの攻撃に対応が遅れた冷雅は、苛立ちに舌を打ちながらも、追撃に備え、太刀を両手に構える。紅蓮は、その間にも冷雅の視界に入らぬよう動き回り、冷雅の真横より、剣先を滑り込ませる。その攻撃は、冷雅の反応力により、浅い切り傷を冷雅の身体に刻みこんだだけであつたが、確実なダメージにはなっていた。紅蓮は、その反応力に感嘆しながらも、追撃の手を緩めるような愚行は犯さなかつた。頭上より紅蓮は剣を振り下ろす。冷雅は、やはり紅蓮の動きに反応し、太刀で紅蓮の剣を受け止める。

「お前の憎しみだけで、世界は変わらない！」

紅蓮は、つばぜり合いを捨てて。押し合っていた剣を、太刀から放すと、すぐさまその太刀を握っている冷雅の右手を切りつける。いきなり行われた攻撃は、冷雅の手より、その太刀を落とす結果となつた。

「世界は、人類全ての手で変わるものだ！」

「世界は俺を見放した！」

「俺だって……見放されているっ！！」

紅蓮は、冷雅の言葉をほぼそのまま返した。そうだ。自分は世界より見放されている。両親を無くし、能力は幼きころから特訓したも

のの報われることはなかった。そして、今日の前にいる少年に、自分にしか持てない物だと思っていたコピーリスを盗まれた。だからこそ、世界は自分を見放している。だが、見放されたから、戦っているわけではない。

「あんたには、まだ魂波闘也が残っているだろうに！！」

「肉親など、俺にはもういない！ お前のように！」

剣が無くなった冷雅は、よけることに精一杯になっていた。紅蓮は、尚も斬撃を繰り出す。その全てがかわされたものの、冷雅の動きに、紅蓮は完璧に対応していた。

「ならば何故お前は戦う！」

冷雅が、紅蓮に対して愚問を投げかける。紅蓮は、その質問に率直に答えた。

「森羅万象の、超能力者となるためだ！！」

目の前に、一人の少年が立っていた。親友であり、相棒であるはずの少年、波気乱州である。闘也は、視界がぼやけていることを自覚していた。目の前から、殴りかかってくる親友の姿が映る。ぼやける視界により、回避もままならぬ闘也は、その拳を直に食らった。体が半回転し、地面へと倒れる。闘也は、その攻撃により、目を覚ました。乱州との戦いは終わっていない。腕を剣にした乱州は、闘也の心臓目掛けて剣を振り下ろす。が、その腕を心臓に突き刺すところには至らなかった。

闘也は、ソウルハンマーを心臓の前に突き出す。ハンマーにはじかれた腕のしびれに苛立っている乱州に、闘也はソウルハンマーを投げつける。隙のできた乱州を確認した闘也は、体勢を立て直し、乱州の攻撃に備え、ソウルツインソードを創り出す。乱州が、かぶりをふって我に返り、こちらへと突進してくる。

「まだだ……まだ終わっていない！！」

横薙ぎに振るわれた剣は、闘也の衣服に傷を入れる程度にとどまった。闘也はそのことに気をとられるような愚行を犯すことは無く、

すぐさま反撃に転じる。勢いよく振り下ろしたソウルツインソードは、乱州の剣のうち一本で防がれる。闘也は、そのつばぜり合いを続けることはなく、すぐに距離を取ると、ソウルツインソードを投げ捨てる。再び振り下ろされた乱州の剣を、背後に回りこむことで回避する。

闘也は、ソウルダブルランスを創り出す。両腕の脇に抱えられた二本の槍は、真っ直ぐに乱州へと向けられている。闘也は、すぐさま攻撃を開始し、ソウルダブルランスのうち、左腕に抱えた一本を突き出す。乱州は、その動きを見切り、僅かな隙間を作りながらも回避する。そのソウルランスを掴むと、乱州は闘也より引き抜く。闘也は、ソウルランス一本を使いまわし、乱州が奪ったソウルランスとぶつけ合った。それぞれの槍から、時折金属同士がぶつかることにより発生する火花が散り、誰の目に止まらぬうちに、その姿を消していった。闘也は、距離を置き、ソウルランスを投げ捨て、ソウルソードを構える。突きの構えである。乱州は、その攻撃の意図を察したらしく、闘也と同じように、ソウルランスを投げ捨て、腕を変形させて、剣を作りだす。闘也をまねるように、乱州は、突きの構えを取った。

次で、決める。決着を。

二人は、声に出さずとも、決着をつけることをその動作で決めていた。闘也は、つま先で地面を蹴りつけ、一気に乱州へと飛び込む。乱州も同様に、地面を勢いよく蹴り、闘也へと接近した。剣を互いに向け合った二人には、それぞれに、もはや迷いはなかった。

「はあああああつ！……！」

「てえやあああああつ！……！」

二人の雄叫びが、同時に響く。

闘也は、それでも殺そうとはしない。心臓よりはるか下、わき腹よりも中央よりの部分をその剣の狙いにした。

二人の剣が、それぞれの腹部へと入っていき、腰よりその剣先を見せ、貫いた。

紅蓮と冷雅の戦いも、その頃終局を迎えようとしていた。

紅蓮は、回避され続けているにもかかわらず、攻撃を続けている。冷雅の動きは極めて機敏であった。一瞬の隙を突き、背後より剣を振るっても、前方へ回避され、高速の能力を使い、敵をかく乱しても、さしたる結果は得られなかった。紅蓮は、またも攻撃を外す。紅蓮の剣さばきや、狙いは悪いものではない。しかし、感情を燃料としている敵の動きの方が、それに勝っただけの話なのである。

正面より剣を横薙ぎに振るった紅蓮は、やはり敵の機敏さに苛立ちと感嘆を織り交ぜた舌打ちを繰り返していた。その苛立ちが隙となり、冷雅の蹴りが腹部へと直撃する。紅蓮は、目の前の怒り狂った少年を睨みつける。コピリスから剣の能力を抜き取り、かわりに両爪のパワーストーンをコピリスにはめ込む。

『パワーストーン——クロウ』

期間音声が紅蓮の鼓膜を刺激したところ、冷雅が眼前まで迫っていた。紅蓮は、冷雅が殴りかかるうと拳を引いた隙を見逃すことはなかった。たった今装着したばかりの両爪で、冷雅の腹部を貫く。その攻撃により、その拳を引いたまま前に突き出せなかった冷雅は、驚愕の表情を見せている。紅蓮は、両爪をそのまま真横に滑らせ、引き裂こうとした瞬間、冷雅の殺気が彼の体を硬直させた。

「ちっ………」

舌打ちを小さく実行した紅蓮に、腹部に爪が突き刺さったままの冷雅の拳が顔面に鈍い衝撃を与えた。紅蓮は、その痛みに耐えながらも、自らを束縛するこの殺気を振り払おうとしていた。冷雅が、懷より、刃先の短い剣を取り出す。刃渡りは十センチ程度のナイフである。

隠し玉………！！

紅蓮は、そのままであれば自分は心臓であれ首であれ、その意識ごと引き裂かれることが可能であることを知る。紅蓮は、そのナイフが繰り出される前に、爪を腹部より抜き取り、蹴りを冷雅に食ら

わけ、距離を取った。

「く……青水冷雅、撤退する……」

苦悶の声で冷雅が無線機へと告げる。その一言を言い終えぬうちに、冷雅は遥遠くへと飛び去っていった。

あれからどれほどの時間が経ったのか、彼には分からなかった。突き立てられた剣が腹部を貫いた瞬間、意識が途切れた。自分が突き刺した相手も同様であろう。

乱州は、血がまだ少しずつ流れ出ている腹部を押さえながら、ゆっくりと立ち上がった。目の前に人影が写る。今までの物事が全てフラッシュバックする。一瞬、頭を強く抑えねばならぬほど強い頭痛が乱州を襲う。頭痛が治まったとき、乱州は、自分が突き刺した『親友』の姿を見た。

俺が……殺したのか？

いくら記憶を失っていたとはいえ、自分は鬪也を、親友を殺してしまったのか。相棒を。自分にとって、誰にも変えることのできぬ相棒を。

乱州は、鬪也の前に膝を屈した。膝を屈したままの体勢で、乱州は鬪也の名を呼んだ。

「鬪也……鬪也……」

返事はない。乱州は、自分の耳を相棒の心臓に当てようとはしなかった。ただただ、自分が傷つけたことに苛立ち、自分がそのことになんのためらいもなかったことに心を痛めた。乱州の雄叫びが、空虚な戦場に響いた。誰も彼を慰めようとはしない。誰もいないから、それは当たり前であるが、もし仮に誰かがそうしても、乱州は雄叫びを上げ続けるか、邪険にその人を振り払っていただろう。

「……す……」

雄叫びを上げている乱州の耳に、一つの声が聞こえた。乱州の雄叫びは、一瞬にして収まる。ほとんど動かない体から、声が聞こえる。

「んす・・・・・・・・乱・・・・・・・・州・・・・・・・・」

「——っ!!」

目の前の声に、完全に乱州は驚愕していた。と同時に、彼は期待に心が満たされていくのを感じた。

そうだ。闘也がこの程度で死ぬはずがない。自分が、ここまでされて死んでいないように。自分よりも強い闘也が、この程度で死んでいるはずがない。乱州は、指が僅かに動いたのを見逃さなかった。親友の、相棒の名を叫ぶ。

「闘也!! おい・・・・・・・・闘也!!」

閉じ続けていたまぶたが、乱州の声に反応し、ゆっくりと動き始めた。

「乱州。記憶は・・・・・・・・」

かすれた声で、闘也は聞いてきた。思考回路がままならないせいなのかもしれない。現に自分は、こうしてここで、相棒の身を案じているのだから。

「戻った・・・・・・・・さっきの攻撃でな」

「よかった・・・・・・・・」

闘也は、ゆっくりと、体を起こそうとする。腹部の傷が影響しているのか、うまく立つことはできていない。乱州は、闘也の起床に手を貸した。闘也の目には、安堵と驚愕が混じっていた。そして、その目は、潤んでいた。闘也の瞳より、しずくが落ちていく。

「泣くなよ、お前が・・・・・・・・さ・・・・・・・・」

闘也の姿を見た乱州の涙腺は、すでに緩みきっていた。乱州は、その膝を屈した状態より、土下座の姿勢へと移り変わる。

「闘也・・・・・・・・本当に悪かった!!! 俺は、お前を——」

「気にするな」

乱州は、その一言に顔を上げる。闘也は、その顔に笑みを作っていた。

「俺だって、もう気にしてない」

「・・・・・・・・ありがとう」

二人の間で、再び笑いが取り戻された。
ようやく、砦の制圧の第一歩である戦闘は終了したのであった。

29、それぞれの過去

紅蓮と冷雅がその剣を交える時より二年半ほど前、エスパーは、サイコキネシストに対し、超能力戦争の開戦を発表した。サイコストは、そのエスパーに徹底抗戦の意を表し、戦争は始まった。各地で人が死ぬのが当たり前となった、殺戮の四ヶ月であった。

両親と弟と共に暮らしていたノーマルの少年、青水冷雅は、その悲惨な戦争の被害者となった。炎天より僅かに南に位置するその場所、冷雅は一瞬にして家族を失った。両親が必死の思いで弟、河川を逃がしたものの、河川の怪我也、並大抵のものではなかった。

冷雅は、そのとき、自分が無力であることを知った。自分には、誰も守れない。誰に対しても、守られる側だった。彼は、小学生のころより、いじめの被害を受けていた。彼には、その屈辱を晴らすことはできなかった。唯一残った肉親の河川でさえ、今は意識を取り戻してはいない。当時中学一年であった冷雅は、雪のちらつくようになった十二月のとき、カスタムサイコストというのを募集しているのを確認した。

「俺の・・・力・・・」

冷雅は、自分も、どこかで戦っている超能力を得ることができるとに喜びを感じていた。これで、もう誰も守れないことはない。誰も傷つけることもない。

彼は肉體改造を施され、ついに奪取の能力を手にした。その能力は、冷雅には落胆を覚えさせるものであったが、それに付属するように渡された太刀は、彼のお気に入りとなった。が、そんな喜びが、長く続くことは無かった。

戦闘により、河川の病院の一部が崩壊したのである。

奇跡的に、その病院が一瞬のうちに崩れ落ちるようなことはなかったものの、その病院の外見は、すさまじいものであった。外部塗装はもちろん、鉄骨も完璧に決り取られ、病院内部の骨組みをあら

わにしていた。その報せを聞いた冷雅は、戦慄を覚えるよりも先に動き出していた。決り取られた部分の病室に、河川がいたとしたら・
・・・・。冷雅は、その不穏な予感をかぶりを振ってかき消した。僅かな希望を、深い絶望を胸に、冷雅は病院の前まで走り抜けてきた。病院の横では、警察にレスキュー隊、そして。その病院の医師達がいた。そのほとんどは壮年から老齡期の者達だ。動かぬその医師に、冷雅は怒りを覚えた。

冷雅の腕が、その医師の襟元に突き出され、引っ張り上げる。

「おい、あんた医者だろ！ 患者の救助はしねーのかよ！！」

「病院が崩壊したらどうするんじやつ・・・・・」

「自分の命を優先する気か！！」

さらに怒りを伴って襟元が手繰り寄せる冷雅を、周辺の警官が取り押さえる。冷雅は、その束縛から逃れようともがく。

「くそつ、放せ！ 河川に・・・・・弟に会わせろ、くそつたれ！！」

冷雅は、警官の顔面を蹴りつけて、束縛を解いた。そのまま、警官や医師に構うことなく、病院内へと突っ込んだ。

「君、待ちなさい！」

警官や医師から制止の声が飛んだが、そんなもので止まる冷雅ではなかった。病院内に飛び込むと、階を探し、そこを駆け上がる。病院までを走った時よりも、数段速く走っていたのは、冷雅の自画自賛ではなかった。

河川の眠る病室に足を踏み入れた冷雅は、その病室が無害であったことに胸を撫で下ろした。冷雅は、河川の状態を即座に確認した後、すぐに行動に移った。河川を抱きかかえ、病室を飛び出す。階段を上る時ほどではないが、風を斬るが如く走った。すれ違ったり、追い越したりする人影はない。おそらく、患者以外で病院内にいるのは冷雅一人であろう。冷雅は、一階まで駆け下りた後、病院を飛び出した。

病院から河川を抱きかかえたまま飛び出した直後、周囲を警官に

取り囲まれた。理由など、冷雅は分かりきっていた。だが、自分の手元には河川がいるのである。ここで降参して「すいませんでした」と手錠をかけられるよりも、警官を突破したほうが、冷雅個人的にも、状況的にもよかった。

「・・・・・・・・」

じわじわと寄ってくる警官が目を見張ったのは、冷雅が警官の一人を殴り飛ばし、その場を逃げ出した直後のことであった。

河川を無事、別の病院への入院が決まらせ、冷雅は久々に腰を下ろした。走りっぱなしであった。戦争が始まり、家族の死をかいま見、河川を治療すべく病院に走り、その後病院から河川を奪うように救出し、別の病院まで走ったのだ。入院の手続きやらを済ませるのも、立ったままであった。

冷雅は、心の中に渦巻く黒いものを感じ取った。黒い。近づけば破壊されるような黒。それが、自分の中に芽生えているのを、冷雅は感じていた。冷雅は、入院の手続きを済ませた後、住宅街をぶらついていた。すでに戦争も終盤に差し掛かっているらしい。自宅に帰っていく夫婦や親子の姿はあちこちに見受けられた。

冷雅は、その時、自分の中にある黒の正体に気づいた。

そう、これは、真つ黒な憎悪だ・・・・・・・・！

紅蓮は、銃を片手に戦場を駆けていた。自分の両親が殺されるとも知らずに。

紅蓮は、隊長の正人の指示により、北朝鮮へと渡ることとなった。炎天からへりに乗り込み、北朝鮮へと赴いた。他の兵士達と共に北朝鮮に乗り込んだ彼は、エスパーの偵察のために来ていた。しかし、紅蓮は自分達と共に闘也達が来ていることに気づかなかつたし、向こうも気づいては無かった。

「終わらないな」

帰りのへりの中、隊長の木下正人は呟いた。紅蓮は、そちらにちらと目をやったが、すぐに目をそらし、聞く体勢となった。

「何がです？」

紅蓮は、正人の呟きに応じ、問いただした。正人へ、すぐにその答えを返した。

「戦争だよ。人が死ぬか生きるかしか選べないなかで、俺は生きたくない。早くこんな世界を抜け出したい」

「・・・・・・・・願って終わるなら、とつくに終わってます」

「・・・・・・・・！」

紅蓮の一言に、正人は驚愕を禁じえなかった。願いだけで、戦いも、ましてや戦争も終わらない。争いは、願うだけでは解決しない。言葉なり、力なり、なにかしら行動しなければならない。そんなことは、とつくに分かっている。

「俺だって、戦争になれと思っていたわけでもない。だが、戦いたくてここにいるわけではありません」

「ならお前は、何故ここにいる？ 何故戦う？」

正人は紅蓮に問う。紅蓮は、しばらくの時を置く。紅蓮が、戦いに身を置く理由は、未来であれ、今であれ、変わるものではない。紅蓮は、横にいる正人を、人によれば睨みつけるように見られてもおかしくない状態で、目を細めて言った。

「森羅万象の超能力者となるためです」

「・・・・・・・・オールと呼ばれる能力か」

「・・・・・・・・はい」

紅蓮は、自分の言いたいことを言い終えると、先ほど同様、正人から視線を外し、ゆっくりと目を閉じた。正人は、人に大きな声を出されたからと言って、感情的になったり、「よくも上官に向かって！」などと権力を振りかざすような真似はしなかった。正人は、それ以上聞こうとはせず、「そうか」とだけ返答し、黙り込んだ。それから数時間後、日本の姿がはつきりとしてきた。

紅蓮が両親の死を目撃したのは、それから一日と間をおかぬときであつた。

冷雅は、自分の中の憎悪をはつきりと認めた。そうだ。自分は不幸者なのだ。両親は殺され、弟も重傷である。こんなことをしたのは誰だ。なぜこんなことが起こった？ 誰かが始めたから、こんなことになったのだ。誰かが始めなければ、戦いは起こらなかった。河川は傷つかなかった！ 両親は死ななかった！

冷雅は、自分の前で、僅かに微笑みを見せる夫婦の姿を目撃した。家の中に入っていく夫婦が、憎たらしく見えた。自分達が生きていれば、それでいいというのか！？ 他の人の命の尊さを忘れ、自分だけが、生存本能に従って生きようとする。

この野生の獣が・・・・・・！ なにを偉そうに！

夫婦が家のドアを閉めたのと同時に、冷雅はその夫婦に走り出した。冷雅は、塀を飛び越え、ドアを蹴り破ると、中の夫婦を、自らの太刀で両断した。切られた夫婦からは、それぞれ同じ単語が聞こえた。

「紅蓮・・・・・・生き・・・・・・」

「生きてくれ・・・・・・ぐれ・・・・・・」

冷雅の目に、一枚の写真が映る。家族の写真である。写真のうち、二人はこの夫婦である。もう一人は、無愛想な顔をした少年である。表札より、この二人の名字が「赤火」であることはすでに彼の知識に入っていた。いつか、赤火紅蓮も、自らの手で殺す。だが、今はそれをすべきではないと、冷雅は思った。戦争ももうすぐ終わる。家に帰ってきた、哀れな少年の叫びでも聞こうと、冷雅はその家の周辺で待つこととした。

冷雅の耳に、その少年の心地よい悲鳴が聞こえたのは、それから数時間後の話であった。

紅蓮と冷雅、二人の因縁は、ここより始まったのであった・・・・・・

30、ミッションリザルト5

カスタマーによる、エスパー諸島の襲撃。それは、エスパー達に大きな兵力的打撃を与え、形勢を自らの方に寄せようとしたカスタマー最高司令官の闇亜によってもたらされたものであった。

そのエスパー諸島襲撃により、エスパーの有力な部隊である、『雷雲』の隊長、出雲武が、カスタマーの虹七色に所属している乱州によって殺害された。

また、紅蓮は、当初の目的であるバギーとの合流地点にて、河川と戦闘となり、見事、河川を殺害し、突破の糸口を掴んだ。が、その光景を目の当たりにした河川の兄、青水冷雅は、弟を殺された悲しみと怒りを武器に紅蓮に襲い掛かる。しかし、紅蓮はそんな冷雅の精神的隙を突き、見事、奪われていたコピーリスを冷雅より奪還し、離脱したのであった。

それから一週間後、再び集合を果たした紅蓮達五人は、秋人達の情報より、カスタマーの本部位置を特定。その海中へと進もうとしていた。が、その進路に立ちはだかったのは、最終防衛ラインとでも言わんばかりの巨大な砦であった。

紅蓮、闘也、秋人、的射、由利の五人は、この砦を攻略するべく、戦闘を開始する。

しかし、紅蓮達それぞれに、虹七色が襲い掛かり、砦の攻略は困難を極めたのであった。

砦の攻略の中、乱州と戦っていた闘也は、乱州を取り戻すため、必死の戦闘を続けていた。双方に甚大な被害をもたらしながらも、闘也の行動は功を成し、乱州を正気にし、取り戻すことに成功したのであった。

虹七色所属の、白亜光輝、深緑大地と戦っていた秋人、的射、由利は、圧倒的なコンビネーションと、光輝の防御の能力に苦戦を強いられるものの、秋人の能力を最大限に活かし、光輝と大地の撃退

に成功。辛くも勝利を収めたのであった。

そして、感情のままに戦っていた冷雅と剣を交えていた紅蓮は、感情により乱れている剣戟けんげきをすり抜け、ことごとく切り傷を刻み込んだ。冷雅の能力が真の力を発揮したため、逆に攻撃を受けることもあったものの、なんとか勝利を収め、撃退に成功。だが、紅蓮はその戦闘の中で自分の両親を殺したのが冷雅であうことを伝えられる。撃退はしたものの、紅蓮の中には、引っかけが生じていた。

第一次超能力戦争。その中で、両親を失い、弟の河川も、重体という悲劇をぶつけられた冷雅は、その原因を模索した。彼は、その途中、自分の中にあるのが憎悪であることに気づき、小さな笑みをこぼしている赤火家の夫婦を殺害したのであった。そう、そのとき紅蓮は、任務により、北朝鮮へと赴いていたのである……。砦とりでの攻略を果たせなかった紅蓮達であったが、新たな戦力、乱州が復帰し、六人は、再び砦攻略へと乗り出そうとしていた……。

31、戦士達の拳

紅蓮達が、砦の前方にて死闘を繰り広げた翌日、新たに乱州を加えた六人は、カスタマーの最終防衛ラインであろう砦の陥落作戦の作戦会議を行っていた。巨大な構造物なだけに、並大抵の攻撃では崩れない。また、真正面から破壊しようとも、カスタム達の攻撃が行われることは必然的であり、無謀であった。砦は、この地点からでさえ、その巨大さが見て取れた。

「どうする？ 地面に穴でも掘るか？」

秋人の提案は、意味が不明であった。誰も、その意見に賛成の意を表す者はおらず、乱州に駄目押しをされる結果となった。

「掘ってどうすんだよ」

「うぐぐ……」

その言葉に押された秋人は、それ以上しゃべることをやめた。かわりに、由利が口を開く。

「ねえ、闘也と乱州は、融合はできないの？」

紅蓮は、その言葉を理解しかねた。闘也と乱州の友好度は、はたから見ていてもすさまじいものでもある。しかし、融合などということもできるのかと、彼は驚愕していた。

「無理と断言はできないが……」

闘也の言動より、できない確率の方が高いということが証明された。おそらく、ムゲン同様、その融合とやらも、第一次超能力戦争を最後に行われていないのだろうと、紅蓮は予測した。言動からしても、おそらくそれは事実であろう。

「できないことはないだろ」

今度は、乱州が言い出した。融合ができるかどうかの質問に否定的な闘也に対し、乱州は肯定的な意見を突き出したのである。紅蓮は、表情には出さぬものの、どこかで憤怒を覚えた。果たして、それでいいのだろうか。他の意見を押し切ってまで、自分の意見を貫

き通す。戦場でも、そのような性格や、生き方、戦い方がときに勝利につながることもあるかもしれない。だが、そのたった一人の身勝手な意見により、その戦士全ての命が天に召されることだってあるのだ。そう、それはエゴだ。それでは、何も守れるはずがない。紅蓮がその一言を言おうと口を開いた瞬間、周囲は彼の予測と思考を裏切る反応を見せた。

「乱州がそう言ってるなら、大丈夫ね」

的射は、その顔に僅かな笑みを見せながら周りに賛成意見を求める。周囲は、それに抗ったり、何か言いたそうな表情を見せず、頷いていた。全員が、乱州一人の意見に賛同したのである。由利は、それに安心したように、自分の作戦案を話し始めた。

「闘也と乱州で、背後に回りこんで、融合を利用して砦を陥落させる。秋人は、正面から攻撃して、陽動。私達は、正面の敵部隊を相手する。どう？」

一見、簡単そうな作戦ではあるが、実際そうでもない。陽動のための秋人がヘマをすれば、命を落とす上に、いざと言う時、紅蓮達の援護に回ることもできない。この六人の主力である闘也と乱州二人が抜けることによって、戦力の損失は著しいものである。ましてや、このときに虹七色が来れば、状況はさらに悪化する。それを踏まえて尚、この作戦を実行しようと言うのだろうか。

「秋人の陽動さえ上手くいけば、作戦の成功率は上がる。秋人、お前の動きが、全員のためになる。分かっているな」

闘也は、秋人に返答を求めた。闘也の言葉には、反論のしようがなかった。

その翌日、傷も各々が癒えて来た日であった。六人は、それぞれの役割を確認した後、早朝、作戦を開始した。

紅蓮は地上でのカスタムとの戦闘である。紅蓮は、的射、由利と共に戦場へと低空飛行しながら向かっていった。右腕にはコピリスがしっかりとまっていた。利き手である左手には、長さとしては、

腕ほどの剣である。紅蓮は、目の前に現れた人影を見やった。肩よりは長くないものの、短いとはい切れぬ髪、比較的大きく見開かれた目。女性である。紅蓮は、一瞬その事を不審に思ったが、その女性が自分に向かって剣を滑らせてきたことを境に、敵と認識した。紅蓮は、滑り込んできた剣を腹部の手前で自らの剣によって受け止める。そのまま、相手の剣が押しやらぬうちに数歩後退し、敵の姿を見やった。敵は、後方に自らの分身をいくらか創り出すと、こちらに叫びながら接近してきた。紅蓮もそれに呼応するように、叫びながらも突進する。

「赤火紅蓮——」

「紫葉陽花——」

「戦鬪を——」

「目標を——」

「開始する——」

「挟み撃ちにする——」

数的では圧倒的に不利なこの勝負で、いかにして相手の数を振り切り、本体への攻撃を行うかが、この戦鬪では重要になってくる。しかし、厄介なことに、敵は全く同じ分身を作り、こちらに攻撃を仕掛けてくる。鬪也の魂の能力は、分身が僅かに白みがかっているのに比べれば、本物を見分けるのでさえ、神経を使うこととなる。紅蓮は、右手に銃、左手に剣を握り、向かってきた四つの敵に向かつて銃を乱射する。しかし、撃ちだされた銃のうちほとんどは敵をすり抜けるように回避され、残りは当たったものの、完璧に偽者であった。計三人の陽花が、紅蓮に向かって切りかかる。紅蓮は、最初の二人の斬撃を剣で受け止め、側面より躍り出てきた一人を蹴り飛ばし、自分を押さえつけていた二人の剣を押し返し、跳ね除けた。バランスを崩した正面の二人に流れるような動きで腹部に剣を滑らせる。どちらも綺麗に両断したものの、偽者であることは明確であった。先ほど側面より襲い掛かってきた一人が本物である。おそらく、他の分身がいれば、そちらに乗り移ることが可能なのであろう。

ここも、闘也の魂の能力に比べて、厄介な部分である。

「河川を殺した……あなたを殺す！」

「貴様も憎しみで戦っているのか!？」

「そうさせたのはあなただ！」

敵が切りかかってきたのを見た紅蓮は、素早い動きで真横に滑るように避けた。周囲を陽花とその分身に囲まれる。紅蓮は、それぞれ一斉に切りかかってきたのをムゲンを発動させることで感じ取った。

紅蓮は、無意識のうちに体を動かしていた。

紅蓮が戦闘を開始したところ、闘也と乱州は、それぞれがムゲンを引き起こした状態で、皆の後方へと進んでいた。秋人の陽動が成功したのであろう。敵の姿はなく、ここまではスムーズにことが運んでいた。

後方に達した時に、闘也は、乱州との呼吸を合わせる。そして、融合を開始する。融合は、二つ以上の肉体と神経を融合させることにより、肉体や神経の共有が可能となる。能力も使用可能となるため、闘也達にとっては、切り札となるものである。しかし、融合する瞬間、融合中、融合解除の瞬間は膨大な気力を消費する。一日に四、五回も融合すれば、勝利することは愚か、戦闘続行すら、厳しい状況に陥ることとなる。

闘也は、自らの肉体を前面に押し出す。融合中は、融合したものと士で、誰の肉体を前面に出すかを決めることができる。当然、前面に出た方の能力は強力になるし、使いこなしも利く。しかし、融合の肉体変換で、肉体を前面に出していない者は、肉体を前面に出している者に比べ、体力は温存できるが、気力が持たない。バランスが重要な融合は、今になっても、使用できる者は少ない。

「乱州、準備はいいか？」

（ああ。いつでもいいける）

闘也は、巨大な剣を作り出す。その剣は、徐々に巨大さを増してい

きついには、砦の高さほどの大きさまでなった。

闘也は、その剣を一人で持つことなど不可能であった。そのため、乱州の能力、身体^{ボデー}により、筋力を上げ、剣を楽に振るえるようになったのである。闘也は、その巨大な剣を、高周波振動させる。小刻みに震える剣は、この砦の陥落作戦に非常に有効なものである。最も、闘也の気力的問題で、この状態を保つ時間は極端に短い。だからこそ、闘也はすぐさま行動に移った。

砦の側面より、剣を滑り込ませ、一気に斬り進んでいく。止まることのない剣を、闘也と、精神のみの乱州は見つめ続けていた。しかし、やはりこの一撃で決めたい。その思いを胸に、闘也は叫んだ。「はああああああつ!!!!!!!!!!」

砦の中心部を滑っていた剣は、闘也の意思のままに、いつまでも砦が途切れるまで、すべり続けていた。

的射、由利は、カスタムとの戦闘を開始していた。剣が振り回され、銃が放たれる。数多の攻撃を、的射と由利はそれぞれの反射神経を駆使して回避していた。的射は接近してきたカスタムに、銃口より噴出した高水圧の剣で両断する。由利は、三人のカスタムに囲まれる。その三人が一斉に切りかかる。由利は、杖を振りかざし、杖の先端より放電させる。その放電をともに食らったカスタムの二人は沈黙したものの、もう一人が背後から迫っていた。

「くっ………」

最後のあがきとでもいうように、杖を構えた直後、カスタムの剣がはじかれ、その後両腕に銃弾が撃ちぬかれる。的射の咄嗟の判断により、由利はなんとか救出することができた。

「………！ この感じ！」

的射は呟く。前方より迫りくる人影が四つ。一つは、虹七色の青水冷雅。あの時、紅蓮との戦闘により、大きく負傷したにも関わらず、再び戦場に乗り込んでくる。一体、彼の回復能力は限界があるのだろうか？

そして、残りの三人は、元は仲間であつた、黒い三彗星。暗志、信自、殺闇の三人である。的射は、遠距離狙撃用のスナイパーライフルから、近距離用のハンドガンに持ち変える。両手それぞれにグリップされた銃のリロードを済ませると、的射は叫びながらも接近した。

「戦つても……失うしかないのにいつ!!」

的射の中の神経が一気に研ぎ澄まされる。同時に、視界が一気に開き、体が一瞬にして軽くなる。目は獲物を見つめる真っ直ぐなものであつた。的射は、ここで再び、ムゲンを引き起こしたのである。

「はあああつ!!」

的射は銃を乱射し、冷雅と黒い三彗星へと接近する。冷雅はムゲンを引き起こしていることにより、空中に飛び出して射線を回避し、暗志達は素早い横移動の動きで回避に成功した。三人に向けて銃を撃つていた的射は、上空より剣を振り下ろす冷雅に気づけなかつた。

「あ……!!」

しかし、その剣が的射に触れることはなかつた。冷雅の存在に気づき、上を見上げた時、一つの影が、冷雅と共に落下するのが一瞬、本当に一瞬の間見えた。もしムゲンの発動がなければ、今の瞬間的な光景を目にすることはできなかっただろう。的射より少々離れたところで、砂煙が上がる。銃を撃ちながら後退した的射は、横目でちらとそちらを伺つた。冷雅を押さえつけたのは、上空より飛んできた秋人であつた。

「やらせるかよつ!!」

はき捨てるように言い放つた秋人は、さらに殴りかかる。的射は、すぐに神経をそちらから外し、目の前に迫り来る三人の姿に神経を集中していた。

的射は、スナイパーライフルから銃弾を撃ち込む。しかし、その攻撃は殺闇の創り出したブラックホールに吸い込まれ、吸収される。的射は、スナイパーライフルを廃し、ハンドガンを構える。的射は、後退しながらも銃を三人に続けざまに浴びせかける。十発ほど撃ち

込んだうち、五発以上は不発に終わったが、各一発ずつ、三人の腕、もしくは肩に命中した。的射は、その勢いに乗るように、体を前方に突進させる。スナイパーライフルを握り締め、高水圧の水剣で、三人に振るう。しかし、その水剣は宙を薙ぎ、隙だらけの的射に、ブラックホールにより接近してきた暗志が襲い掛かる。

やられる……！！

しかし、その暗志の攻撃が的射に命中することはなかった。由利の火炎球が暗志を吹き飛ばしたのである。

「的射！」

「ありがと、由利！」

短く礼を述べると、的射はハンドガンに持ち替える。的射は、左右に飛び回りながら、銃を撃つ。全ての弾が外れてしまったものの、的射は銃の発射を止めない。的射は、由利の援護を受けながら後退し、リロードする。

「これでえええっ……！！！」

的射が撃ちだした三発の銃弾が、三人それぞれの体に命中した。

32、違う正義

幾つもの影。それが本物が偽者か、見当がつくものではない。反応はできている。回避も危うくかわしているといったことはない。

しかし、紅蓮は翻弄されていた。全方位からの攻撃は隙がなく、動きを読むのに、かなり気力、体力共に大きく消費する。かといって、気を緩めれば、その時点で切り刻まれ、戦闘は愚か、動くことすらできなくなるかもしれない。紅蓮は、回避しながらも、襲い掛かる影のいくつかをすれ違いざまに腰の辺りを両断する。が、襲い掛かるのは全て偽者で、いくら斬っても、相手の数が減少する様子は一向に見られなかった。

「くっ……」

襲い掛かるうちの一人が、紅蓮のわき腹を、剣をかすめて通りすがった。紅蓮は、どうにかその攻撃網を逃れ、コピリスにパワーストーンを二つ同時にはめ込む。

『パワーストーン——クロウ・コピー』

機械音声が響き渡り、紅蓮は自分を追ってくる幾つもの影を睨みつけた。紅蓮は、両手に装着した金属製の爪を一瞬ではあるものの見据えると、その爪を五本ずつ、計十本を切離し、宙に展開させた。

「これが両爪の真の能力……」

紅蓮は、その爪を追ってくる——おそらくは偽者の——陽花へと放った。

「自立機動型両爪——サイコ・クロウ——!!」

直後、その爪は襲い掛かる陽花の心臓を次々に貫き、破壊した。爪が突貫したうち、全てが偽者であったが、突貫する爪を唯一かわした一つの影を紅蓮は見逃さなかった。

「そこっ！」

紅蓮は、サイコ・クロウを本来の場所へと呼び戻す。爪はそれぞれが所定の位置へと戻り、紅蓮はそれを確認するまでもなく、一気に

陽花へと突進していった。

「まだだっ！！」

紅蓮が両爪を突きたて、陽花の心臓を貫いたところには、陽花はすでに分身を創り出し、そちらへと移動していた。紅蓮は、後方に陽花の気配を察した。案の定、陽花は分身を作りながら後退していく。紅蓮は、それを逃がそうとはしなかった。

「逃がすかつ！！」

紅蓮は、一度は閉まっていた爪のうち、両親指、両小指の部分に当たる計四本のサイコ・クロウを宙に展開させる。紅蓮と互角かそれ以上の速さで飛び回る爪は、休む間もなく次々に分身を破壊していった。紅蓮は、真正面に突進する。サイコ・クロウは、紅蓮の横、または斜め前方で、次々に分身を破壊し、ついには陽花本体一人となった。紅蓮は分身を出そうと身構えていた陽花に、左手の三本の爪を突き出し、腹部を一直線に貫いた。紅蓮の左手の中で、陽花の能力である分身のマイセルフパワーストーンが生まれた。紅蓮は、その後右手の爪も突き出し、その後すぐに抜き取り、ゆっくりと落ちていく陽花の姿を見ていた。

陽花が目を覚ました時、目の前には、自分の上司とも言える銀城龍我王が立っていた。陽花はその姿を確認すると、すぐさま体を起こし、龍我王の前に跪いた。龍我王が何かを喋ろうと口を開いていたが、その口より言葉が発せられるよりも先に陽花の口は動き、言葉を発していた。

「申し訳ありません、龍我王様！ 次こそは必ず……！！」
腹部から血を大量に流しながらも陽花は龍我王へと謝罪の言葉を述べる。しかし、龍我王より返ってきた言葉は、彼女の予想を覆す言葉であった。

「消えろ」

陽花は驚愕していた。まさか、自分がこのような言葉をかけられるとは思ってはいなかったからである。まだ、自分は復讐を果たして

いない。こんなところで、無様に、しかも、上司に殺されるのか、私は………！

だが、それでもいいと、陽花は思った。

これで、彼の元へと逝ける。好きだった彼の元へ。

今は亡き、青水河川の元へ――。

龍我王は、驚愕する陽花の顔に気をとられぬことなく、短く言葉を つないだ。

「――役立たず」

その一言と共に、龍我王の右掌から一本の粒子の線があふれ出した。その線は真っ直ぐに陽花の額を貫通し、やがて消えた。

「貴様は、俺達の戦いに不要だ」

龍我王が陽花に向かって呟いた最後の言葉は、彼女に届くことはなかった。

龍我王は、自らの手によって葬られた陽花を背に、ゆっくりと歩き出した。振り返ることは、一度としてなかった。龍我王は、遠くで起こっている戦闘に目を向けた。無論、彼に介入の意思はなかった。先ほど、陽花を葬ったのも、上からの命令ではなく、龍我王の独断であった。例えば上からの叱責を受けようとも、例えば虹七色から外されようとも、そんなことは、たいしたことではない。生きられさえすれば、自分は再び戦場に赴き、戦うことができる。そして、もし死ぬならば、上の命令による『処刑』ではなく、戦場で相手の攻撃を受けて『戦死』する道を選ぶつもりでいた。

ふと、その遠くの戦闘区域で戦っている青水冷雅のことを思い出す。やつも、いずれ消えねばならない。世界は、黒田闇亜が操るでもない。導くでもない。自分、そして、銅石、王金が、愚かなサイコスト、エスパー、ノーマルを平和の下に置く。

そう。世界を導き、平和の下に置き、世界の変革を促すのは、俺達だ――！

戦闘の中、一人静かにムゲンを引き起こした由利は、的射の精密な射撃に、感嘆の意を表していた。

的射の放った三発は、暗志の右足、信自の右腕、殺闇のわき腹を正確に撃ちぬいたのである。的射の射撃能力の腕は、第一次超能力戦争時より、すでに心得ている。時間のおかげでもあるのか、彼女の射撃能力は格段に上昇していたのである。彼女は、小さく息をつく。そして、思考の中で、一つの答えを導き出した。

（これが、ヒトなのね……）

互角の戦いを、冷雅と秋人は繰り返していた。冷雅は超高速で接近してくる敵に翻弄され、攻撃を絶え間なく当てられた。だが、何度も同じ攻撃に当たるわけにはいかない。冷雅は真後ろから接近してきた秋人に向かって剣を薙ぐ。秋人は、接近しながらもその刃をかわし、冷雅の後方に回り、拳を突き立てる。冷雅は再び剣を向けようと尽力したが、遅かった。鈍い拳の痛みが、頬を伝い、全身に痛みを覚えさせる。

「くそっ……！！」

冷雅の中で、全神経が研ぎ澄まされる。視界はまるで雲ひとつない空のように、開放感に満たされる。冷雅は、左前方より接近してくる秋人の気配を感じ取ると、その方向に向かって愛用している太刀を薙ぐ。しかし、斬撃はことごとくかわされ、対角上にかわされる。この後の行動はすでに予測済みである。冷雅はすぐさま後ろを振り向き、秋人へと剣を薙ぐ。しかし、やはりその斬撃はかわされる。今度は、冷雅の右手方向に回避し、こちらに接近してくる。どうやら、当たるまでこれを繰り返すつもりらしい。

「ちょこまかとおっ！！」

冷雅は太刀を振るい、向かい来る秋人に斬撃を浴びせる。しかし、その斬撃は一つとして秋人に当たることなく、宙を切り裂くだけであつた。

「憎しみで戦って、何が変わる！？ 何を得る！」

秋人は、回避を行いながら冷雅に向かって呼びかける。冷雅はそのことに気を取られずに、攻撃を続ける。秋人は、自らの発した言葉を言い終えて三階ほど斬撃をかわした後、再び冷雅に向かって呼びかける。

「得るのは、それによつて殺された人の——」

「憎しみつか——」

冷雅は最後の一言を言おうとした秋人の言葉を自ら口にした。冷雅は、半ば困ったような表情を見せ、斬撃をかわしながらも言い放つ。「分かっているなら、何故——」

「俺はなア——」

冷雅は、秋人の言葉をまたもさえぎり、今度は自らの意見を、秋人に向かって言い放つ。この程度の言葉に、惑わされる自分ではない。戦いの中で、迷いが生じ、迷いを引きずったまま戦えば、満足した結果を得ることはできない。だからこそ、冷雅は自らの意見を口に、相手に伝えることによつて、自らの思いをより強固なものにしたのである。

「それでも構わねえんだよおおっつ——」

冷雅の怒りと決意の言葉は、秋人の動きを一瞬鈍らせる。ここは戦場だ。そして、今まさに戦闘をしている。敵に隙を見せれば——

殺られるだけだ。

「俺は、それでも——」

亡き両親の姿が浮かぶ。

「『俺達』のために——」

つい先日、自分を残して死んでしまった河川の姿が映る。何にしろうか。笑っている。

「復讐を果たす——!!!」

冷雅は怒声と共に太刀を振り下ろす。攻撃の手ごたえを、冷雅は感じた。しかし、秋人の姿はなかった。剣が両断したのは、幻影ではあるのではあるうが、河川であった。冷雅は、驚愕しながら今は亡き弟の姿を見た。周りに敵はいなかった。いや、敵どこるか、自

分と河川以外には、生物は何一ついないような感じさえした。幻影の世界の中で、河川は冷雅に、まるで誰かの伝言を伝えるためだけのように言った。

「僕は、憎しみで戦って欲しくない」

「な．．．．．お前は殺されたんだ——」

「殺されたから殺して、僕は戻ってこない——」

「——！！」

冷雅は、そこで河川の言葉に半ば呆然とする。なら、このまま戦うなどというのか。お前を殺したやつを倒して、それでこそ、お前が報われるのではないのか。確かに、殺したから殺す。殺すから殺される。そんな憎しみの連鎖の果てが、やがて自分の破滅だということも分かっている。だが、それでも、この思いだけは、晴らさないといけない。例え、河川が死んだのが、河川の覚悟の上であっても。

「僕は死んでいない」

「何を．．．．．」

言いかけた冷雅の言葉は、河川によってあまりに簡単さえぎられた。

「僕は、兄さんの中で、生き続けている」

冷雅は、その時になって、「僕は死んでいない」という言葉の意味を理解しはじめた。

「だから、今こうして会っている」

「．．．．．」

冷雅は黙り込んだ。ここで何か言わなければならないのではないかと焦りの気持ちが生まれる。しかし、それは不要といってもおかしくはなかった。俺達は兄弟である。たった一人、肉親として戦ってきた。俺達は、二人で一つだ。何故それを忘れていた。自分はいつだって、河川に支えられて生きてきた。ここで自分が折れては、河川の気持ちは報われないのである。冷雅は、一度ゆっくりと目を閉じ、そして開く。目の前には、幻影の河川の姿がある。

「悪かった．．．．．」

冷雅は、その幻影の世界の中で、最初で最後かもしれない涙を流し

た。河川は、その涙をふき取るでもなく、冷雅を慰めるわけでもなかった。

「俺はまだ、死んでいない……………」

「兄さん……………」

河川は、笑っていた。その笑顔につられるよう、冷雅もその顔に笑みを作る。

「だから、お前も生きている！」

「うん！」

その瞬間、冷雅はその幻影の世界より引き戻された。

冷雅は、その瞬間悟った。

今、自分は勝てない、と。

「青水冷雅、撤退する」

冷雅は、通信機に向かって呟くように伝えたと、その場を飛び去っていった。

結果、闘也達による皆の陥落作戦は、「成功」の二文字で飾ることとなった。皆は、融合した闘也と乱州により、見るも無残に両断され、その進入経路をあらわにしていた。陥落作戦が終了して間もなく、待機していたエスパー海軍の強力を得て、ついにカスタマーの本部に乗り込むことが可能となったのである。エスパーの用意した戦闘装備搭載型潜水艦は、その巨大さに圧巻するものも多かった。エスパーの所有する軍隊は、数でこそカスタマーに劣るものの、兵器や、移動用、戦闘用の戦艦などは、軍隊らしいものであった。

この潜水艦には、偵察用小型魚雷、戦闘用大型魚雷、機関砲、対空ミサイル、水中専用耐水装甲ミサイルランチャー、近接戦闘用高周波ブレードランチャーが搭載されている。この戦艦並の武装を積んだ潜水艦で、まずカスタマー本部を攻撃し、陥落作戦を試みるつもりらしい。

ちなみに、この潜水艦は、エスパー独自の核研究により開発されたコアエネルギーシステムと呼ばれるものを搭載している。このシ

ステムにより、この潜水艦は、高機動性を実現したのである。最高速度は時速百キロを超える。敵の攻撃をかわすことは容易いものである。また、それにより、最後の切り札として、そのエネルギーを一点に集中させることにより、高エネルギービーム砲の発射も可能となっている。これは、もし戦争になってしまった時のために、闘也がぼつりと呟いたことであつたが、それをエスパー達は真に受け、ここまで作り上げたのであつた。

闘也も、まさかここまでするとは思っていなかったたので、表情に翳りを見せたものの、仕方なく乗り込むことに決めた。

「気を引き締めるよ。戦闘の可能性は大いにあるんだからな」

闘也は、誰を見ずとも、そう警告した。その警告に、一番最初に答えたのは、紅蓮であつた。

「覚悟はできています」

紅蓮のその一言は、闘也が問いかけた五人全員の答えであつた。

そうだ。全員の覚悟はできている。自分も、そのつもりである。六人全員が、人殺しを楽しんだことは、一度としてない。だが、自らが殺めたものを見て、恐怖し、戦意喪失するような肝の据わっていない者もいなかった。本当は、自分の覚悟を確信したいから、こんなことを聞いたのかもしれない。気を引き締める。それは、今までだつてずっとそうしてきたことなのだ。今さらそれを確かめることもないのである。

「早く終わらせよう………」

そこで闘也は、初めて後ろを振り返つた。

「戦争を………」

五人は、それぞれの返答を闘也に返した。

33、戦いの海へ

砦での戦闘を制した六人は、ついにカスタマー本部へと進み始めた。海中に敵の気配はなかった。あたり一面が、青い海である。しかし、その青は深度を増していくごとに、青緑に変わり、やがてにごった黒系の青へと変色していった。実際は、上空より照らす太陽の光が弱まったためにこうなっているのであるが、そんなことを気にしている暇など、紅蓮達に与えられなかった。

『闘也様、一斉掃射を開始します』

「頼む」

通信機のモニターより映し出された指揮官らしき人物に、闘也は依頼するように返答した。その短い通信が切れた数秒後、僅かな揺れが感じられた。それと同時に、暗闇になりかけていた海がまばゆい光に照らし出された。潜水艦のミサイルや魚雷が、カスタマーの本部に命中したのである。紅蓮を含む六人は、戦闘の準備を早々に済ませていたため、いつでも戦闘の開始は可能であった。水中戦闘用の専用酸素ボンベを背負い、六人の瞳はそれぞれが険しい顔をして、その光の先を見つめた。

『闘也様、進入ルート確保しました。ビーム砲の発射後、出撃をお願いします』

「了解」

先ほど同様、短い会話が二人の間で交わされる。その後、今までない大きな振動が紅蓮達を襲った。前方では、こちらの放った巨大なビーム砲が見えた。そのビーム砲が光を失ったのと同時に、六人は内部への侵入のため、戦闘の開始を宣言した。

「白鐘由利、戦闘を開始します」

「風見秋人、目標に突撃する」

「遠藤的射、目標を狙い撃ちにします」

「波気乱州、目標を叩き潰す！」

「魂波闘也、目標を討つ!!」

五人の宣言の後、決意を確かめていた紅蓮は、ゆっくりと目を開け、通信機に向かって宣言した。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する!!」

その紅蓮の宣言を合図に、彼らのいた場所は一瞬にして水中に変化した。ボンベは正常に働いており、戦闘、移動に支障はない。六人は、すでにそれぞれがムゲンを引き起こしていた。闘也の黄、乱州の銀、秋人の薄緑、的射の薄桃、由利の白。紅蓮は、その名どおりの、赤を身に纏っていた。六人は、最終決戦の場へと、突き進んで行った。途中に三十人ほどの防衛部隊がいた。水中戦慣れしているのであるが、数でも能力でも、こちらのほうに分があった。

「はああっ!!」

闘也はソウルソードですれ違いざまに四人ほどを切り落として通りすがった。的射は後方よりスナイパーライフルを連射しながら接近し、その連射によって八人ほどを戦闘不能にした。秋人は、やはり高速の能力で余裕があるらしく、少し遊びながらも十人ほど葬ったが、闘也の「秋人、目的が違う!!」と罵声を浴びせられ、軽く舌打ちをしたものの、闘也に従い、先へと進んだ。

由利は風と水的能力を使い、三人ほどのエスパーを殲滅した。乱州はその後、四人ほどのカスタムを殴り飛ばし、先へと進んだ。乱州が紅蓮へと通信を送る。

「赤火! とどめはよろしく」

少々明快な声が通信機越しに聞こえてくる。紅蓮は、「了解」と小さく返すと、両爪を展開する。左手の爪を目の前のカスタムの心臓へと突き出す。

「てえやああっ!!!!」

紅蓮の爪は見事カスタムの爪に深く突き刺さり、そのまますれ違うように引き裂いた。紅蓮はそのまま、前の五人に続いて高速の能力で近づいていった。

一方、外部からの攻撃により、混乱を招いていたカスタマー本部では、黒田闇亜が、デスクを叩いて苛立ちを隠しきれずにいた。

闇亜は本部では最深部の階にいる。つまり、一番相手からは遠いため、さしずめ最終防衛ラインもその上でどうにかなるわけである。現在、このカスタマー本部には、千ほどのカスタムがいる。また、それ以外にも、雇われたノーマルの兵士もいる。虹七色も、まだ数人残っているし、黒い三彗星も、手元にある。戦力的には、ピュアに十分対抗できる。ましてや、相手はたったの六人。そう、六人で千を超える軍勢に勝負を挑んでくるのである。

「六人とは、無謀な」

闇亜も無論、戦闘はできる。少なくとも、虹七色のトップ3と言われる王金羅神、銀城龍我王、銅石剛柔と、同等かそれ以上はある。側近として、ユル達も戦闘に加勢する。少なくとも、自分は戦闘では後れを取ることはない。

「ユラ、こちらの兵総数は？」

闇亜は、三人いる側近の一人に問いかけた。ユラと呼ばれた側近は、惑うことなく、現状を知らせた。

「正規軍は千二十九。傭兵及びそれに準ずるものを合わせて千五百七十二です」

「ユロ、外部装甲の損傷率は？」

今度は、ユロという側近に向かって聞く。ユロもまた、戸惑うことなく、すぐさま答えを返してきた。

「六十二パーセントです。安全武装領域、八十パーセントまでの修復に一時間かかります」

「修復の必要はない。するなら……」

そこで闇亜は一旦そこで言葉を区切る。ユルに指で命じ、通信装置を持ってこさせる。

「やつらを撃退してからだ」

「了解」

ユロがその一言を呟くように返答するのを確認した後、闇亜は、そ

の通信機の設定を開始する。キーボードの上で、闇亜の指がタップダンスを踊り一瞬にして、設定完了のモニターが表示される。

「全カスタムに通告する！」

闇亜は、目の前にあるマイクに向かって怒声を浴びせるように言った。

「ここは、なんとしても守らねばならない！ 我々が世界を導くためにも、ここを死守するのだ！！！！！」

闇亜は、その一言を、カスタム達に伝え終わると、誰の返答も待たずに通信を切断した。闇亜は、目の前の側近三人に命じる。

「挨拶がわりだ。全員行け」

「しかし、闇亜様は………」

「構わん。やつらは損傷箇所から言って地下六階より侵入してくる。七階で、ノーマルの傭兵達と共に戦闘するのだ」

「了解………」

三人は、全く同じ返答を闇亜に返すと、闇亜の前から姿を消した。闇亜は、その後、誰を見ることもなく、呟きながらもとあるシステムの立ち上げを開始していた。

「日本も、世界も、我々が導き、我々が動かす。これは、そのための力となるはずだ………」

闇亜が立ち上げようとしていたのは――彼にとっては――世界を導くために必要なものであり、また危険なシステムでもあった。

紅蓮達は、見事カスタマー本部への侵入を成功させた。紅蓮の端末の計算によれば、ここは、カスタマー本部の地下六階で、最深部は十一階であった。紅蓮は、その十一階という歯切れの悪さに苛立ちを覚えたものの、すぐにその感情をかき消し、前方の敵機に意識を集中させた。

侵入は果たしたとはいえ、先ほどの攻撃で損傷した箇所より侵入したため、内部は未だに水中であった。もしかしたら、地下の方に水が流れているかもしれない。そうなれば好都合ではあるが、もし、

閉鎖などをしていれば、どの道水中での戦闘となる。もし、このままで地上戦闘となるなら、押し寄せてくる水を押し出すだけの推力が必要となってくる。それすらもなければ、後は外部装甲を補修、閉鎖し、水を上階に送るしか方法はないだろう。

『紅蓮、下に向かうぞ』

通信機ごしに、前方で端末を計算し、現在状況を確認した闘也の声が響く。

「闘也さん」

『どうした？』

「戦争が終わったなら、闘也さんはどうするんですか？」

紅蓮は、自分の質問の後に闘也が黙り込んだことに、一瞬の焦りを覚えたものの、その焦りを感じた直後に返ってきた答えにより、その焦りは吹き飛んだ。

『わからない』

「え………？」

返ってきた答えの意味が分からず、紅蓮は聞き返した。闘也は、その自分の返答を掘り下げて言い直す。

『戦争が終わって、自分が何をするのか、それは、終わらないと分からない。ましてや、俺が生きているかも、分からない』

『闘也』

傍らで二人の通信を聞いていた乱州が、その通信に介入してきた。

その口調はいつもながらの口ぶりであったが、紅蓮の表情、及び感情が揺れ動くことはなかった。

『全員、死ぬ覚悟で来てんだ。冷たいこと言うなよ』

『俺はこの水の方が冷たいと思うがな』

『そうかい』

そこで会話は途切れた。闘也に続き、紅蓮は下の階へと移動しはじめた。

上階より降りてきた六つの人影を確認した冷雅は、黒い三彗星と共に戦闘を開始することとを、カスター最高司令官、黒田闇亜に

伝える。闇亜は、それに対し、しばらく戦闘を待つように命じられた。六人が入ってきたと同時に、闇亜が冷雅達の眼前に出現する。

いや、これは実際の姿ではない。これは立体映像である。ここで挨拶でもする気なのだろうか？　しかし、冷雅には、闇亜がただ挨拶のためだけにここに来たとは考えにくかった。

「よくぞ来てくれた、汚らしいピュア達よ」

ここ、地下七階は、周囲からの水を押し返す特殊な空間の中にある。これは、カスタマーの技術力の結晶と言っても過言ではない。

「お前達を倒さなければ、我々は新たな道を進むことができない」
「道など、一つしかない」

闇亜が、闇亜の言葉に反論する。冷雅の意志は、そのときはそこではなく、すでに憎しみの対象の紅蓮へと向いていた。

「冷雅、後は任せる」

「・・・・・・了解」

闇亜の言葉は、冷雅には、最後の一言しか届かなかったが、それでも、返答を返すためには十分な言葉であった。闇亜の映像がその光を失い、消滅する。冷雅は、後方で待機していたンノーマル兵士達を、自らの前方に移動させた後、六人に向かって、一斉掃射を始めさせた。

「逃げたところで・・・・・・」

数多のマズルフラッシュと共に、銃弾が隙間なく撃ちだされる。しかし、その一発たりとも、その六人に当たることはなかった。それから一秒とも経たぬうちに、前方のノーマル兵士の半分が悲鳴を上げながら倒れる。六人それぞれが、自らの特性で攻撃を行ったのである。

「ちっ」

小さく舌打ちした冷雅は、紅蓮へと突撃する。紅蓮は、両手に金属製の爪を装備している。右腕には、一度は奪ったコピーリスがはめられている。冷雅は、使い古している太刀を振りかざし、紅蓮へと斬りかかる。しかし、その攻撃はいとも簡単にかわされ、蹴りを入れ

られる。

「貴様、まだ憎しみで！」

「感情をなくして、人は生きられぬ！！」

紅蓮の目が、ムゲン覚醒を起こした瞳にその姿を変える。冷がもまた、ムゲンを引き起こし、爪を振りたててきた紅蓮の爪を受け止める。

「そんなこと！！」

「お前に何が言える！」

紅蓮が言いかけた言葉をさえぎり、冷雅は反論する。そして、爪を押し弾き、剣を紅蓮に向かって薙ぐ。しかし、剣は宙を切った。冷雅が紅蓮に目を移したとき、紅蓮は両爪を宙に浮かせ、それを冷雅へ向かって突撃させてきた。いままで、このような武器を戦闘中にしようされたこともないうえに、冷雅にとってこの攻撃の免疫は低かった。

「こいつら……！！」

冷雅は、その飛び回る爪の突貫攻撃を、ムゲンの補助のおかげでどうにか回避していたが、これを押し切って紅蓮に近づくことは、困難であった。紅蓮の爪は、冷雅に向かって絶え間なく突貫してくる。冷雅は、回避しながらも、その爪のうちの一つを捉えた。

「奪取！！」

冷雅は、飛び回っていた爪w奪取の能力により、自らの物へと暗示をかける。その暗示に従ったのは、冷雅の掴んだ一つだけであったが、それでも十分な戦力にはなる。

「サイコ・クロウが！」

「行け！ クロウ！！」

冷雅の叫びと共に、たった一つではあるものの、爪が紅蓮に向かって飛翔していく。冷雅は、自分の中に電気が走る感覚を覚えた。サイコ・クロウは、基本的には脳波の干渉により、その所有者の意志に従って動く。中には、自律神経を持って飛翔するものもあるが、それでは所有者の立てた戦術がうまく働かない可能性もあるのだ。

『青水冷雅』

通信機ごしに声が聞こえる。冷雅は、紅蓮に突っ込みながら通信機にぶっきらぼうに返す。

「何ですか!」

『一つ降りろ。一気に攻撃する』

「くそ………了解!」

おそらく、最初の苛立ちの眩きも聞こえているのだろうが、冷雅にそれを気にするほど心の余裕はなかった。冷雅は、一度は近づいていたものの、少しずつ距離を取っていき、さらに下の階へと、黒い三彗星と共に降りていった。

34、求めていた代償

冷雅を下の階へと呼び出したのは、虹七色のメンバーであり、カスタマーのトップ3とも言われているうちの一人、王金羅神であった。傍らには、彼と同じくトップ3といわれている銀城龍我王と、銅石剛柔がいた。剛柔は、髪はツンツンで、銅色にその髪を輝かせている。龍我王もまた、その髪を銀色に輝かせている。後ろ髪は襟ほどまであり、耳にも少しばかりかかっている。前髪の方は、眉毛にかからぬぎりぎりのところである。羅神は、髪は短く、坊主よりも多少長い程度である。

「来たか………」

通信を送ってから一分の時を置かぬうちに、冷雅は黒い三彗星と共に現れた。背後にはまだあの六人の姿はない。

「何の用ですか？」

冷雅は、羅神に向かって問いたです。なるほど、呼び出したのはこのためだけではないと分かっているようだ。

「エスパーの反乱兵と正規軍がそれぞれ来た」

「………？　　どういことですか？」

聞き返す冷雅に対し、今度は龍我王が応答する。

「反乱兵がこちらに加勢し、正規軍が敵対し、こちらに向かってい
るらしい」

「エスパーが………」

冷雅の表情に一瞬の翳りが見えたが、羅神達はそれを気にすることとはなかった。その後、あの六人が地下八階へと降りてくる。闘也はソウルガンの銃口をこちらに向けている。同様に傍らにいる的射も狙撃銃をこちらに向けている。的射の隣には、由利が杖を構え、闘也の隣には元虹七色の乱州が拳をこちらに向け、いつでも腕を伸ばせるようにしている。

「この戦いは、カスタムとピュアだけのものではない。それだけは、

言っておこう」

「！……まさかエスパーが——」

「その通りだっ！……！！！」

龍我王が、鬨也の返答に対し、叫びながらも指で銃の形を作り、その指先より粒子状のビームを発射する。六人はそれぞれ別方向に拡散し、それぞれが攻撃を開始してくる。それに対し、七人はそれぞれが拡散しながら回避に成功する。紅蓮が、両爪を宙に展開し、サイコ・クロウを飛ばしてくる。だが、その技術は、何も向こうだけのものではない。

「行け！ サイコ・ヘア！」

ツンツン髪の剛柔は、そのツンツンを切離して宙に展開させる。そして、ツンツンの髪はそれぞれがクラッカーのような形となっており、それぞれの先からビームを発射する。紅蓮のサイコ・クロウが接近型ならば、こちらは射撃がメインの遠距離型と言ったところである。

「何——ぐはあっ——！」

紅蓮に、一つの影が飛び掛る。冷雅かと予測したが、それは違った。闇亜の側近の、ユロである。振り返ると、ユラとユルもいた。

「闇亜様の仰せのままに……」

二人は、全く同じ言葉を呟く。それが、二人の戦闘開始の宣言であることは、すでに羅神は知っていた。

飛び掛ってきた青年の一人を、紅蓮は邪険に振り解き、右手の爪を振り回す。だが、それを後方へのバックステップにより回避する。乱州は、その隙を見つけ、その青年に腕を伸ばし、その拳を叩きつける。

それに気づいた残り二人の青年も、こちらに接近し、攻撃を開始してくる。そのうちの一人を、横から割って入った秋人が蹴りつける。乱州は、もう一人の攻撃をかわし、左手の拳で殴りつけた。

「ユラ！ くそっ……！！！」

乱州に吹き飛ばされたユラと呼ばれた青年は、その声に振り返ることなく、再び乱州へと突進する。乱州は、腕を剣に変形させてその突進をいなす。紅蓮に飛び掛っていた青年を左肩から右のわき腹までかすれるように切りつける。

「ユロ……このおっ!!」

ユロを斬られたことにより、怒りを沸騰させたユラが、全身に鋭い針を身にまとい突進してくる。

「針か! この野郎っ!!」

乱州は、接近してきたユラを、剣で受け止める。乱州がそちらに気を取られている間に、ユロが背後から剣を突進させてきた。乱州は、全身の神経を研ぎ澄ませ、ムゲンを発動させる。

「何っ!!」

乱州がムゲンを発動させたと、剣を突き出したユロは驚愕し、その場で硬直する。乱州は、自らの体を量子化し、敵の攻撃を回避したのである。勢いあまつたユラの体が前のめりになり、剣が腹部に突き刺さる。ユロは咄嗟に剣を抜き取る。深く突き刺さる前に我に返り、抜き取ったのは、不幸中の幸いであった。

「俺は、ここだあああっ!!」

乱州は、剣を抜き取ったばかりのユロの背後に出現すると、その頭部を腕を巨大化させて殴りつける。無論ユロは吹き飛ばされ、咄嗟に針を消したユラと諸にぶつかる。

「頼む、ユル!!」

秋人と戦闘していたユルと呼ばれた青年が、一瞬にして乱州の眼前に現れ、特殊な波動を全身から噴き出す。その波動をまともに食らった乱州は、自分の体の異変に気づく。体が痺れ、動かないのである。そこに、ユルの拳が顔面に叩きつけられ、続いて腹部に拳をめり込まされ、先ほど顔を殴っていた右手を腹部へと叩きつける。そして、乱州の頭部をがっちり両手で押さえると、自らの頭をぶつけてくる。乱州の思考が一瞬揺らぐ。その一瞬のうちに、ユルの蹴りが腹部へと直撃する。乱州は、その体勢のまま、床に叩きつけ

られる。ユルは乱州の上空で拳を振り上げる。しかし、その拳は乱州に当たることではなく、背後に回りこんだ秋人が、腹部に蹴りを入れて不発に終わる。乱州は、僅かに麻痺毒の抜けてきた体を起こす。先ほど吹き飛ばされたユラが、こちらに向かって針を投げつけてくる。乱州は、それを左右に回避するが、やはりまだ麻痺毒が残っているために、右肩に二つの針を食らう。

「く………こんなっ!!」

乱州は、右肩の針を強引に抜き取る。ちらと目をやった先では、エスパー対エスパーの攻防が繰り広げられていた。

本部へと攻め込んできたエスパー正規軍と共に、反乱兵の相手をしていたのは、的射と由利であった。正規軍の中には、特殊任務専門部隊、『雷雲』の姿もある。対する反乱兵は、第一次超能力戦争を生き抜いた精鋭達に加え、見知った顔もあつた。的射の脳裏には、正規軍であつた二人の男の姿を捉える。

以前、闘也が指揮する正規軍の中にいたエルガ・ハットも、そのうちの一人であつた。傍らには、こちらも以前闘也より聞いていたサム・スピナーの姿もある。

「エルガ・ハット、目標を歪ませる」

「サム・スピナー、目標を狂わせる」

的射と由利に向かって、二人が接近してくる。的射と由利は、二人共遠距離が主体の攻撃である。そのため、接近戦では、相手に後れを取ることは、否定できない。一瞬にして距離を詰めたサムが、的射へと拳を突き出す。的射は反射的にスナイパーライフルの銃口より高水压を噴出させ、サムへとその水剣を薙いだ。薙いだ水剣は、サムの右足を奪った。それにより、バランスを崩したサムは、そのまま地面に激突する。的射は、ハンドガンを、サムの頭部へと向ける。的射は、トリガーを引く寸前に、サムへと謝罪していた。

「ごめんなさい………あなた達と道は違ふの………」

例え最終地点が同じだったとしても。

彼ら——反乱兵やカスタマー達と、道が交わることはない。

こつちがどんなに道を合わせようとしても。

向こうはそれを拒み、少しずつ離れていく。

近づくこちらと、離れる向こうによって、平行線ができてしまっていた。

しかし、そう考えている間に、彼の命は天に召されたのであった。それと同時に、このカスタマー本部へと乗り込んだ者達は衝撃を受けた。

要とも言える、魂波闘也が、カスタマーに敗北したのである。

紅蓮が、その状況を確認したのは、冷雅との戦闘中、一つの戦闘が終わったのを察知したためであつたからだ。

「闘也さん！！！」

しかし、呼んだ相手からの返答はない。紅蓮の意識は再び目の前の敵に捕らわれる。紅蓮へと太刀を振るう冷雅の攻撃を回避する。紅蓮は、冷雅の太刀を両爪で受け止める。冷雅は、その背後より、紅蓮から奪ったサイコ・クロウを突進させた。紅蓮は、そのことに間一髪で気づき、サイコ・クロウによる防御網を作り、その爪を弾き返した。冷雅の顔に焦りが見える。紅蓮は、その瞬間を見逃すことはなかった。すぐに冷雅の太刀を押しやると、サイコ・クロウを展開させる。

しかし、その爪を冷雅に当てることはなかった。

彼がサイコ・クロウと共に冷雅に接近した時、冷雅の周囲に、銅色のクラッカー型の飛翔物を取り囲んだ。それは、銅石剛柔のサイコ・ヘアである。冷雅は、そのことに半ば驚愕していた。が、押し返された直後、身動きはできなかった紅蓮は、咄嗟に行動を起こした。冷雅を蹴り飛ばし、その包囲網より脱出させる。各サイコ・ヘアの先端が光を蓄え、それが臨界に達し、光を放とうとしていたところに、紅蓮のサイコ・クロウが飛び込む。サイコ・ヘアは、紅蓮の爪により、全機打ち落されたのであった。

冷雅は、今起こった様々なことに対して理解しかねていた。混乱により、体が動かない。動こうという意識があったかもしれないが、彼の肉体は、それを拒んだ。

銅石剛柔。虹七色のメンバーである。銅色の髪の毛より展開するサイコ・ヘアは、こちらにとって大きな戦力となる。しかし、そのサイコ・ヘアは、敵であるはずのピュアではなく、自分に向けられた。何故自分に向けられたのか。誤射にしては、なぜああまで取り囲んだのかという疑問が残る。

裏切り——一つの単語が、彼の中を過ぎる。

まさか、彼らは裏切ったというのか。カスタマーを、仲間を、俺を。

しかし、その可能性を考えた直後に、彼の疑問は、もう一つの方へと向けられる。何故、紅蓮は自分を助けたのか。理由の見当がつかない。あいつが自分を助けることによる利益などないし、無論こちらも助けてもらおうとは思っていない。事実、助けられはしたのだが。

まさか、情けをかけられたというのか。俺が、あいつに……。

「………河川………」

弟の名を呟く。こんな時、彼ならどうするだろうか。「裏切るのか」と剛柔を罵るのか。「助けると頼んでいない」と紅蓮を軽蔑するのか。

俺が求めていたのは、こんな裏切りなのか。

「………違う」

冷雅は、自らの答えを否定する。サイコ・ヘアを失い、僅かに驚愕に歪んだ剛柔の姿を、怒りの鋭い目で睨む。

「………違う」

そうだ。この感情は、間違いようのないものだ。

「絶対に違う!!」

そつだ。感情を抑えて戦うなど、青水冷雅ではない。ただの一兵士だ。俺は、虹七色の誇りを持ち、戦い、弟を殺された代償を求めているのだ。

「俺は、こんなものを、望んではないっ！！！」

彼の体は、無意識のうちに動き出し、懐に隠し持っていた小型投擲用ナイフを、剛柔へと投げつける。剛柔は、そのナイフを回避し、指で銃の形を作り、ビームを発射してきた。

「裏切るのか？」

剛柔は、冷雅を皮肉るように笑みを作る。

「それはこつちのセリフだ！！」

（兄さん。兄さんは間違っていない）

「河川・・・・・・？」

脳内で、弟の声が響く。やはり、間違っているのはやつらしい。

冷雅は、再び攻撃をするため、放たれたビームを身を翻して回避し、地を蹴って近づこうとした。しかし、それは掴まれた右腕によって歯止めをかけられる。

「なっ、てめえっ！！」

「そうやって闇雲に戦うから、勝てない。代償が手に入らない」

「・・・・・・っ！！」

冷雅の無言の質問は、即答された。紅蓮の瞳は真っ直ぐで、冷静に状況を見極め、そして判断し、冷雅の戦闘にノーをつきつけたのである。

「現在の戦況は、不利だ。勝ち目はない」

紅蓮は、それだけいうと、すでに撤退を開始した他のやつらに続いて撤退していった。冷雅は、一瞬戸惑い、呆然としていたが、その後自分に襲ってきた絶え間ないビームの雨を確認すると、すぐに紅蓮達と共に撤退した。

35、ミッションリザルト6

東暦二〇〇八年十月。エスパーにより始まった第一次超能力戦争は、多大な被害をもたらし、死傷者も数多く出た。五人の少年少女達の働きにより、悲劇の戦争は、東暦二〇〇九年二月、終結へと持ち込んだものの、それによって家族や肉親を失った者は少なくなく、それに起因して戦う決意を起こした者もいた。

そんな、悲劇の戦争より二年。人工的に超能力者となったカスタムサイコストによる、サイコスト狩りが各地で派生。事態の收拾に気を急いだピュア達であったが、その後、カスタマー最高司令官、黒田闇亜より、第二次超能力戦争の開戦が発表された。

そして、その発表により、カスタムとピュアの溝は深まり、両軍の緊張はさらに高まっていった。

発表より一月。時は東暦二〇一一年五月。カスタマー最終防衛ラインの巨大砦へと挑む者達がいた。彼らは、第一次超能力戦争を戦った五人の戦士達、そして、赤火紅蓮という少年。

六人は、見事砦を陥落させることに成功した。紅蓮は、新たな力、サイコ・クロウを駆使し、その陥落作戦で大いに活躍した。

エスパーの力を借り、海中に潜むカスタマー本部へと乗り込んだ六人は、闇亜の側近であるユラ、ユル、ユロ。

虹七色のメンバー、青水冷雅。そして、その虹七色のトップ3といわれている、王金羅神、銀城龍我王、銅石剛柔と、戦闘となった。

また、戦いには、エスパーも参戦し、戦場は乱戦となる。

その中で、紅蓮は冷雅と戦闘。冷雅の攻撃をいなし、たたみ掛ける紅蓮に、衝撃の光景が写る。

六人の中では最強であろう闘也が、敗北したのである。紅蓮の驚愕は、戦闘での動きを鈍らせ、劣勢を見せたが、その中で、事件は起こった。

剛柔の使つ、サイコ・ヘア。紅蓮のサイコ・クロウと、概要は同

じではあるが、攻撃は全く正反対な武器である。そのサイコ・ヘアが、味方であるはずの冷雅の周りを取り囲んだのである。冷雅は、いきなりの出来事に身動きが取れなくなっていたものの、紅蓮がまさかの救出を行う。冷雅、紅蓮共に生き残ったのである。しかし、自らへの攻撃に激情した冷雅は、剛柔へと攻撃を仕掛ける。しかし、それにより、冷雅を裏切り者とみなした三人は、容赦ない攻撃を放ってくる。尚も攻撃しようとする冷雅を、紅蓮は引き止めた。紅蓮は、ただ引き止めただけで、ついて来いとは言わなかったものの、状況的に見て、冷雅は紅蓮達と共に撤退せざるを得なかった。

新たな仲間、冷雅と共に、再び本部への突入を試みる六人。しかし、彼らには、史上最大の敵が迫っているのである。

そう、魂波闘也が。

36、敗北を超えて

初めてだろうか？ それとも、記憶にないだけだろうか？まさかこんなことが起こるとは、思ってもいなかった。今頃、どうなっているのだろうか、自分達みたいにも、記憶の整理が行われているのだろうか。今まで心の中にあつた確信が、ここに来て揺らぐ。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

少年の横で、紅蓮はエスパーの潜水艦より本部へと向かっていく。

少年は、深呼吸を一つした後、紅蓮のまねをするように通信機に告げた。思考の中では、一人の少年の姿が映る。

「波気乱州、目標を叩き潰す」

彼が、叩き潰す目標でないことを祈って。

冷雅を含めた六人は、再び本部へと乗り込んだ。冷雅が敵とし、戦うのは、数あるカスタムの中のほんの一部。虹七色トップ3と言われている、あの三人のみ。

やがて、昨日戦闘を行った地下七階へと降り立つ。冷雅の目は、討つべき敵を探していた。敵の姿はない。六人は、それを確認すると、下の階へと足を運ぶ。地下八階。遂に冷雅は、敵を見つけた。

「そこかあっ！！裏切り者おっ！！」

冷雅は、雄叫びとともに剛柔へと突進する。剛柔が復活させたサイコ・ヘアでこちらにビームを飛ばしてくるが、そのビームは、冷雅をかすめることも許されなかった。紅蓮のサイコ・クロウで、すでにこの手の攻撃には、慣れきっている。いまさらかわせぬ冷雅ではなかった。

「裏切り者は、貴様だろうにっ！！」

剛柔は、人差し指と中指で銃の形を作り、その二本の指先からビームを発射する。直線的な攻撃を、冷雅は苦もなくかわし、右手に握った太刀を右下の方向より切り上げる。剛柔はその攻撃を後方に回

避け、今度は、ビームソードを創り出す。冷雅は、真上より振り下ろされたビームソードを太刀の刀身で受け止める。光剣と太刀の間で、激しいスパークが起こる。冷雅はそのビームソードを弾き返すと、太刀で右側より薙ぎ払う。剛柔はそれをしゃがんで回避し、足をすくうようにビームソードを薙ぐ。冷雅はムゲンの覚醒を引き起こし、そのビームソードを上空へのジャンプで回避する。剛柔もムゲンを引き起こし、こちらに一瞬にして追いついてくる。冷雅はこちらに真正面から接近する剛柔の攻撃を、真正面から挑む。またも二つの剣の間でスパークが生じる。冷雅は、その攻撃をいなし、剛柔の顔面に蹴りを入れる。

「飛んでけっ……クロウー!!」

すぐに冷雅は、サイコ・クロウを飛ばす。しかし、サイコ・クロウは、剛柔に届く前に、サイコ・ヘアとビームソードによってその役目を終えた。冷雅は、剛柔とのつばぜり合いに持ち込む。じりじりと剛柔のビームソードを押しやりながら、冷雅は言い放つ。

「下等なエスパーと、同じような事をして!!」

「貴様はそのエスパーと共に戦っている!!」

そうだ。奴らは裏切り者だ。エスパーは祖国を裏切り、反乱を起こし、人を危険に晒す。こいつは、こいつらは、それと同じだ。仕えるべき主を裏切り、自分達と敵対しようとしている。だが、向こうとて、その反乱兵のエスパーと共に戦っている。そうだ。矛盾しているのだ。この世界の、何もかもが。

「それは、貴様もだっ!!!!」

冷雅の怒号と共に、剣を押し弾き、がら空きになった剛柔の体を切り裂く。剛柔も、やはりトップ3と言われるだけのことはある。どうにか体勢を立て直そうとし、こちらの攻撃の被害を、左足を失うだけにとどめたのである。

「裏切った貴様が——」

剛柔は、ビームソードを、頭上から振り下ろす。

「言うセリフがあっ!!!!!!」

しかし、その攻撃は見事に外れる。冷雅は、剛柔の一瞬の隙を突き、背後に回りこんでいたのである。冷雅は、その剣をバツ印に振り回す。

「俺は——」

その後、背中 of 傷を気にしている剛柔の隙をまたも突き、前方に回りこむと、その剣を斜めに切り下ろす。

「憎しみの化身だああっ！！！！！！」

その冷雅の攻撃は見事に命中した。左半身を、肩口から大仰に持つていく。剣は、そこでとまることをやめず、さらに剣を沈ませていく。剣は、剛柔の左脇の部分に突き刺さる。しかし、突き刺さった深度は浅く、刺さっている時間も、短いものであった。

その攻撃から一秒と置かずに、冷雅の中にあつた覇気も消え失せ、力なく落ちていった。

冷雅と剛柔の激戦が行われていた頃、紅蓮は強化型カスタムを相手に奮闘していた。

「数が多い……」

ばやきながらも剣を振り回し、カスタム達を薙ぎ払っていく。後方から飛び掛ってきた三人のカスタムを、紅蓮はハンドガンで撃ち落とす。紅蓮は、剣をカスタムの集団へと投げ飛ばす。その攻撃に気づいた最前列のカスタム達は回避したが、その後方で、そんなこととは知らず突撃しているカスタム達は、見事に殺られた。

「赤火、後ろ！」

乱州の声が鼓膜を刺激する。後ろに敵がいることなど、言われる前からすでに承知済みである。紅蓮は、前方にジャンプし、そのまま半回転する。銃口の先に、カスタムの姿を捉える。紅蓮は、躊躇いもなくトリガーを引き絞る。鉛の弾丸は、一つして外れることなくカスタムに命中する。次々とカスタムは倒れていく。いままで、こんな光景を幾度となく見てきた。戦争が始まる前の、サイコスト狩りの頃も、戦争が始まってからも。両親が死んだときも。

『パワーストーン——クロウ』

「サイコ・クロウ！」

紅蓮は、両手に爪を装着し、その金属製の爪を宙に展開させる。合計十の爪はそれぞれが意思を持って動き回り、カスタムを次々と屠っていく。紅蓮は、コピリスに二つ目のパワーストーンを差し込む。『パワーストーン——ボディ』

乱州の能力である身体的能力を、紅蓮はその身に纏う。後方から迫るカスタム二人を、腕を伸ばして鎮圧する。引き続いて、左右から剣を持って襲い掛かるカスタムを、腕をクロスさせてそれぞれ撃破する。

爪が全てのカスタムを倒した時、紅蓮の目に次の階へと続くレバーを発見する。紅蓮はそのレバーを下ろし、階段の先に銃口を向ける。地下八階に続く階段を、ゆっくりと下りていく。身を乗り出して、紅蓮は銃口を向けた。部屋には、一人しかいなかった。紅蓮には、それが誰なのか分かっていた。

「闘也さん……………」

「闘也！！！」

紅蓮に続いて、乱州もその少年の名を呼ぶ。目の前の少年は、ゆっくりと頭を上げた。紅蓮は、その少年の顔を睨みつける。向こうの少年が、敵であることは十分に承知していた。

「さあ……………俺と殺しあおう」

「俺が、闘也さん……………あなたを止める」

紅蓮は、闘也から視線を離さない。その目は鋭くなっている。紅蓮は、パワーストーンを二つ、コピリスに差し込む。

『パワーストーン——コピー、クロウ』

コピリスの機械音声を聞き終えた紅蓮は、両手に金属製の爪を装備する。紅蓮は、後方の四人に、目の前の闘也に、この世界に向けて、言い放った。

「……………赤火紅蓮、戦闘を開始する」

紅蓮は、サイコ・クロウを、最大の旧友である闘也に向けて飛ばした。

37、闇は暗く、光は眩しく

紅蓮の放ったサイコ・クロウは、闘也のムゲン発動と同時に行った回避行動により、全てが宙を突進した。紅蓮は、宙の爪を呼び戻し、その後、自らもムゲンを発動させ、闘也へとその身を突進させる。紅蓮は、両腕をクロスさせて闘也へと振り下ろす。しかし、攻撃は易々と後退されてかわされる。再び突進して返す爪も、やはり回避される。闘也が攻撃に転じてくる。ソウルランスと闘也が呼んでいる、槍状の武器である。闘也は、その槍を紅蓮の頭部へと突き出す。紅蓮は、その槍の突進を、首を曲げて応じる。先ほどまで頭のあった場所に、ソウルランスが通り抜ける。紅蓮は再び攻撃に転じる。左腕の爪を振り上げ、闘也を引き裂き上げる。しかし、闘也はそれを身をかがめて回避し、伸び切った紅蓮の左脇の部分へ、ソウルソードを振り上げる。

「させるかっ!!」

その声と同時に、闘也のソウルソードはその場で止まる。紅蓮が射出した右手のサイコ・クロウが、火花を散らして、剣の進攻を防いだのである。次いで、闘也の右腕が、紅蓮目掛けて、先ほど同様、振り上げてくる。紅蓮は、左腕のサイコ・クロウを展開し、それを防ぐ。がら空きになった闘也の顔面を、ここぞとばかりに殴りつける。闘也は横に一回転しながらも空中で踏ん張りを見せる。闘也は、ソウルブーメランを創り出し、こちらへと投げつけてくる。数は三つである。

「そんなもの……!!」

紅蓮は、後退しながら爪を呼び戻すと、向かってきたブーメラン三つを、左爪で殴り落とし、右爪で殴り落とし、そして、両爪をクロスさせて殴り落とす。紅蓮は再び正面に視線を戻す。闘也は、すでに四つものソウルブーメランを投げていた。紅蓮は驚愕しながらも慌てて両爪で防御体勢を取る。最初のブーメランが、その両爪の防

御を、自らを犠牲にして弾く。がら空きとなった紅蓮の腹部に二つのソウルブーメランが食い込む。かろうじて、皮膚を貫いて突き刺さっていないが、打撃を与えるには、十分なものである。紅蓮が、そのブーメランを払おうと行動を起こす前に、もう一つのブーメランが腹部へと食い込む。紅蓮は、今度こそと、腹部に食い込んだブーメランを払おうと腕を振る。しかし、その行動は背後より飛んできた最後のブーメランによって拒まれる。背中にも、ブーメランは食い込んだのである。正面の闘也が、目を細めた。おそらく、この目を細めたのが見えたのは、間近で戦闘していた紅蓮だけであつただろう。それほど、見分けのつきにくい目つきの変化だったのである。

その目を細めた行動と同時に、紅蓮に食い込んでいたブーメランが発火し、痛神経を刺激する。瞬く間に、炎は紅蓮へと移り、紅蓮は、灼熱の炎に、その身を包まれる。もはや、ブーメランを振りほどくなどの問題ではなかった。

紅蓮は、その灼熱の炎の中で、雄叫びを上げた。

その光景を見ていた闘也には、ある異変が起きていた。目を細め、ブーメランを発火させたと同時の出来事である。頭痛が脳を締め付ける。脳内に響いた声に、闘也は意識を集中させた。

（……………そろそろ、あの力を使ったらどうだ？）

（王金羅神！！）

あの力、とは、羅神達が、戦闘へ赴く闘也に伝えた力のことである。詳しくはよく聞いていない。だが、闘也が立ち去ろうとした時の、羅神の小さな呟きにより、闘也はその力を使うことを恐れていた。

「まあ……………エスパーもどきが使って、命の保障はできかな……………」

エスパーとサイコスト、双方の血を持っている闘也にしてみれば、間違いなく、その力は死へと崖を飛び降りる行為に等しい、と彼は考えていた。

（いやなら、我が引き起こそう）

その言葉を最後に、羅神の言葉は止んだ。いや、向こうが黙ったと言うよりは、こちらが聞こえなくなったという方が正しい。激しい頭痛が起こり、その後、視界が瞬間的な暗闇に包まれる。停電なのか失明なのかと迷っている暇など、闘也に与えられなかった。全身に電気が走り、彼の体があちこちでショートする。闘也は、望まぬうちにその力を発動したのである。

ムゲンを超えた力——『轟嵐』——ゴウランを。

炎の中、紅蓮の思考は——同じ場所が違う場所かは定かではないが——回り続けていた。

「俺は……」

死ぬのだろうか。尊敬し、まるで影のように行動していた自分が、その尊敬した者の手によって。

死なされるのではない。殺されてしまうのだ。

だが、俺は何のために戦ってきた？

闘也を敵から守ることか？

家族の仇を冷雅から取るためか？

違う。俺には、戦う理由がない。

あるとするならば、浮かぶものは、一つしかない。守ることも、倒すこともない。

「森羅万象の、超能力者につ……！！！！」

その時、彼を覆っていたブーメランの炎は消えた。自然消火ではない。紅蓮の気により、炎がブーメランもろとも吹き飛んだのである。紅蓮は、先ほどもまでの炎の赤ではなく、ムゲンの色たる赤を纏っていた。だが、それだけではない。紅蓮を覆う赤い光は、流れる先に白く、半透明ともいえる微粒子を流していた。体の各所が、ムゲンとは比べ物にならないほどの力をみなぎらせる。紅蓮は、この力に驚愕はしていなかった。紅蓮の体は、紅蓮の思いに応えた。ただそれだけのことで、紅蓮は確信していた。

目の前の闘也も、同様の状態だった。魂の能力が起因して黄色い光に包まれた闘也の体。その光の中を、やはり紅蓮と同じ微粒子が流れている。いや、闘也のあれは、黄色というよりは、金である。黄金の輝きを身に纏って、闘也はこちらを真っ直ぐに見つめる。紅蓮も同様に、目を細め、対峙する相手に視線を向けた。

「・・・・・・・・」

戦う者同士に、本来言葉は要らない。何せ、殺しあうからだ。殺しあうのに、わざわざ言葉を交え、戦い抜く必要はない。無論、例外はあるが。

紅蓮は、両爪を装備したまま闘也へと突進する。闘也は、こちらと同じ状態になっていることを確信させるように、こちらの攻撃を容易く回避する。紅蓮は、それを確認すると、サイコ・クロウを、小指部分から跳ばす。闘也は後退しながらソウルソードを構え、突撃してきた二つの爪を切り落とす。そして、ソウルブーメランを勢いよく投げつけ、自らも突進する。

「その程度の攻撃・・・・・・・・」

先ほどの紅蓮への攻撃の応用のようなものである。一つに隙を取らせている間に、もう一つの攻撃を入れる。そのもう一つが、闘也にかわつただけのことである。

「効かん！！」

紅蓮は、右薬指のサイコ・クロウを飛ばし、ブーメランを受け止める。そして、ブーメランの真上から躍り出る。眼下には、こちらに気づいた闘也の顔が見える。紅蓮は、爪を闘也に向かって振り下ろす。闘也は、両手に構えたソウルソードでこちらの爪を受け止める。だが、紅蓮は抜け目なかった。先ほどブーメランを受け止めたサイコ・クロウを、闘也の背後より向かわせる。闘也は、その存在に気づいたものの、そうだったのは、彼のわき腹をサイコ・クロウがかすめる様に貫いてからだった。

しかし、闘也がそれでひるむことはなかった。すぐさま攻撃を再開してくる。剣をさらに強く紅蓮へと押しやる。紅蓮は、力ずくの

闘也を軽く受け流すと、サイコ・クロウを展開し、左腕とわき腹をかすめるように貫く。闘也は、こちらを振り返り、再び向かわせたサイコ・クロウを、全て切り落とす。爪全てを失った紅蓮へと闘也が突進してくる。紅蓮は、攻撃を後退しながらかわす。闘也が横薙ぎに振るった剣が、後方に回避した紅蓮の右腕に、かすり傷を与える。紅蓮は、コピリスにパワーストーンをはめ込み、剣を作り出す。『パワーストーン——コピー・ソード』

紅蓮は、後退だった情勢を打開すべく、闘也へ向かって突進する。サイコ・クロウが全て失われた今、頼れるのは己の剣技のみ。紅蓮は、闘也の横薙ぎに振るわれた剣を、下に回りこんで回避し、その左腕を振るい、左足から右肩までを、切っ先をかすめるように切り上げる。そして、一瞬の怯みを見せた闘也の顔面を、勢いよく殴りつける。紅蓮が狙っていたのは、この瞬間である。左手、右手それぞれの手中に、一つずつパワーストーンが生まれる。

紅蓮は、持っていた剣を投げ捨て、剣と複製の能力のパワーストーンを抜き取ると、代わりに今生まれた新たなパワーストーンをコピリスにはめ込む。コピリスの機械音声が、眼前から迫り来る者の持つ能力を淡々と告げる。

『パワーストーン——ソウル・ウェポン』

紅蓮と闘也の戦闘が激化してきたころ、乱州は銀城龍我王との戦闘になっていた。この隙を狙い、紅蓮達共々屠るつもりなのだろう。乱州は、繰り出された光の線を回避し、ムゲンを発動させ、右手を剣に変形させ、龍我王の頭上から斬りかかる。大振りな攻撃はあっさりと龍我王にかわされる。飛び退いた龍我王へと、乱州は拳を伸ばす。龍我王は、後退しながら防御体制をとる。だが、乱州の狙いは、腕を伸ばしての攻撃ではない。これはただの準備でしかない。伸ばした腕を、自分が引き寄せられる格好で縮める。普通に近づくよりも、圧倒的に速い。

「遅い……」

一瞬にして龍我王の正面にたどり着いた乱州は、伸ばしていない左

手の拳を巨大化させ、龍我王へと叩きつけた。手応えがあった。乱州は、攻撃の後、すぐに後方へと飛び退く。相手の反撃に備えてのものである。そして、その予感はある。

龍我王の放ったビームが、上空へと逃げた乱州が先ほどまでいた空間を貫く。乱州は、一気に龍我王へと接近し、右手を突き出す。しかし、攻撃は相手の回避により、存在意義を失う。乱州の目に、光の剣を輝かせながら接近する龍我王の姿が映る。乱州は咄嗟に振りかざした左手のシールドでその光刃を受け止めた。

「早く終わらせようぜ……こんな戦争はよおっ！」

乱州は、左腕でビームソードを受け止めながら、右腕を剣に変形させ、背後より突進させた。その存在に気づいた龍我王は、もう片方の手にビームソードを握り、それに応戦する。乱州は、シールドで龍我王の光刃を押し上げ、無防備な顔面に伸ばした右足で蹴りつける。その勢いで一回転した龍我王は、乱州の攻撃を回避することはできなかった。乱州は龍我王が回っている間に両腕を剣に変形させ、頭上よりそれらを振り下ろす。剣は龍我王の左頬を筆頭にかすめるように体全体を滑り降りていく。乱州は、剣を拳に戻し、顔面に、腹部に、胸部に、腕に、足に、拳を入れては抜き、入れては抜きを繰り返す。パンチの猛攻を食らった龍我王は、それでも意識を保っていた。攻撃を終了した乱州に、龍我王が握っていたビームソードが襲い掛かる。乱州は、その斬撃をかわし、距離を取る。次に龍我王は、そのビームソードを回転させながら投げつける。そして、自らも距離を取りながら両手の指先よりビームを放つ。そのビームは吸い込まれるようにビームソードに命中し、互いに反発しあったビームの一部が、不規則に乱州に襲い掛かる。そこに、先ほどから力スタムとの戦闘になっていた由利より、雷によるバリアが形成され、そのビームを弾く。乱州は、安堵と共にそのバリアの創造主に声をかける。

「白鐘！」

「私のことはいい！」

眉間にしわを寄せながらも由利は叫ぶ。振り返り、再び攻撃を開始しようとした由利の顔が、僅かながら笑みを作っているように乱州は見た。しかし、それに長い時間気を向ける余裕はなかった。尚も放たれる粒子の雨に、バリアは次第に小さく、弱くなっていく。乱州は、そのバリアを両腕に装備しているシールドに接続する。これでも乱州の属性は雷である。電力を供給し、バリアを展開し続けることも可能である。

「さあ、本番だぜ。ここからがな!!」

乱州は、両腕にバリアとシールドを展開し、龍我王へと突撃した。

38、轟く嵐

人類は、それぞれ自らの内部に、大きかれ小さかれ潜在能力を秘めている。無論、普段それが表に出ることもないし、テンポよく使いこなせることもまずない。サイコストの覚醒システム、ムゲンも同様と言える。

ムゲンは、所持能力の底上げ、もしくは根本的に成長させることによって、効果を激増させることができる。身体能力も向上し、普段できぬ動きが可能になる。飛行すらも、ムゲンによって可能になる。だが、前述の通り、誰もがそれを一発で使いこなせるはずもない。ムゲンは、それを発動中はもちろん、発動時、解除時にも精神的に疲労の蓄積がある。ムゲンが使えるのは、サイコストの中でも十分の程度しかいないと言われている。また、仕えたところで、それを適切に自分のものにすることができず、最悪死に至るケースすらある。

ムゲン。特徴はそのまま引き継がれ、それに更なる身体能力を加え、反射神経を格段に上昇させたのが、稀少究極覚醒システム、轟嵐である。ゴウランは、その能力の飛躍的上昇に比例し、精神的疲労も増える。ムゲンをなんとか使いこなせているようなものが発動させたら、一瞬でその生気を失う恐れもある。

しかし、そのゴウランを発動させた男が二人いた。しかも、二人共弱冠十五歳の少年であり、戦闘になっっている。巨大な力同士が、互いにぶつけ合い、戦いの火花を上げる。この戦いを、もし客観的に見るものがいたら、感嘆の声しか上げることができないだろう。二人の少年は、双方が高速で接近し、互いの剣をぶつけ、それを押し合いながら、自らの力を示さんとせめぎあっている。

その片方の少年——赤火紅蓮は、かつての友たる魂波闘也を相手に、一步として引かなかった。が、やはり、戦闘経験の差ゆえか、こちらの動きは、いつも数瞬遅れる。紅蓮はすでにそのことに気づ

いていた。だからこそ、解決策を練ろうと、様々なパワーストーンを用い、闘也へと挑んだ。が、どれも大きく戦果を上げることなく、むしろその隙が狙われ、逆に不利な展開を作っていた。

紅蓮は、二つのパワーストーンをコピースへとめ込む。コピースが、機械的な音声を放つ。

『パワーストーン——ソウル・クロウ』

（これしかない。今は……）

紅蓮の思考は、放たれた闘也のブーメランによって中断される。ブーメランをかわし、魂の能力を利用し、自らの分身を創り出す。そして、それぞれの両手の爪より、一人六機、全部で四十二機のクロウを展開さえ、闘也へと向かわせる。直撃コースは避けている。だが、傷をつけなければ、勝ち目はない。

闘也は、その全ての爪の軌道を予測したかのように、不敵な笑みをちらつかせる。そして、爪が闘也に当たる数瞬前に、闘也の目前でそれらの爪はことごとく弾かれた。

闘也も、魂の能力により、各所に自らの分身を創り出し、それを弾き飛ばしたのである。紅蓮は苦虫を潰したような顔を作った。さすがという感嘆が、紅蓮の中にあつた。闘也だから、受けるなりかわすなりするだろうと思つたが、まさかこんな方法で防御するとは思つていなかったからだ。

正直、紅蓮は気分がよいとも悪いともいえなかった。前大戦の英雄である者と、ここまで対等に張り合っているからだ。だが、戦闘が長引けば、戦闘経験の浅いこちらは不利だ。いくら対等に張り合っていると言っても、やはり僅かながらこちらに後れが生じている。向こうもこれには気づいているだろう。

紅蓮は、魂を四方から接近させる。微粒子を撒き散らしながらその無数の刃から逃げる黄色い光点は、逃げながらも、一つ、また一つと、サイコ・クロウの数を減らしていた。

「ちっ……拉致が開かない……！」

紅蓮は、自らのサイコ・クロウを爪より切離し、自らの周囲でビー

ムを放つ。すでに、紅蓮の右腕のコピリスには、粒子の能力のパワー・ストーンが埋め込まれていた。

その存在に気づいた闘也は、素早く反応し、距離を取りながら銃弾を放つ。しかし、その銃弾は爪の先より放たれたビームによって蒸発させられ、たとえかいくぐってきても、サイコ・クロウの位置の微調整により、宙を貫くだけであつた。

「闘也さん！」

紅蓮は思わず声を上げる。サイコ・クロウの放った一本の粒子が、闘也の左腕をかすめたからである。蒸発の煙が一瞬漂う。痛がる様子や、怯む様子がない。おそらく、衣類をかすめただけで、直接当たったわけではないようだ。紅蓮はそのことで少しほっとする。

もし心臓部に直撃していたらと思うと、寒気が彼に襲い掛かる。

紅蓮は、闘也を追尾させていたサイコ・クロウのスピードを上昇させ、闘也へと追いつかせる。紅蓮自身、まさか追いつくとは思っていなかった。しかし、紅蓮は妙な引つかかりを覚えていた。

闘也さんの反応速度がぶれてきている………？

長時間の戦闘だから、と割り切ればそれで済むだろうが、まさかこれほどまでで体力、気力が尽きるとは考えにくい。

今、自分と闘也さんは同様の力を使用している。紅蓮がその力の名を知るのもう少し先ではあったが、紅蓮には、反応速度が遅くなった闘也のことを考えるので精一杯である。

（闘也さんが、まさかこちらのサイコ・クロウに追いつかれるなんて………）

紅蓮は、そう思って初めて気がついた。

自分は、敵の身を心配している？

戦士であるはずの自分が？

だが、前にも似たようなことはあった。

青水冷雅。自分でも無意識のうちに彼を死の淵から引き上げた。何なんだ。一体。

俺の中にある、この救済力は………。

俺は、本当に、戦士なのだろうか……？

龍我王と乱州は、激しい攻防を続けていた。乱州が伸びはなった腕を、龍我王は難なくかわし、右手で銃を形作り、その指先から粒子を発射する。向こうはそれを左手に掲げたバリアで受け止める。

バリアに弾かれたビームは虚しく消散し、乱州の周囲を覆う。龍我王が一瞬の瞬きをする。しかし、その目を開けた時には、すでに乱州の姿はなかった。先ほどまで乱州がいた場所には、先ほどのビームの残骸、そして、それとは少し違う粒子だ。後者は、はじめ、人型を形成してはいたが、すぐに消散し、前者の粒子と入り混じった。一つの考えが浮かぶ。

「量子化……！！？」

龍我王の呟きから数瞬の時を置いて、後方より乱州が躍り出る。乱州は、両腕を剣に変形させ、それを自らの頭上より、こちらへ振り下ろすつもりらしい。龍我王は振り返りながら、両手それぞれに、ビームソードを握らせる。

「だがっ！！」

両手のビームソードで、乱州の剣を受け止める。二つの剣の間でスパークが生じる。乱州は、またも量子化する。龍我王は、焦りながらも背後に剣を振る。しかし、そこに乱州は現れなかった。背後に気配を感じた。龍我王は、すぐさま両手で銃を形作り、それを肩越しに後方へと発射する。

「ちくしょおっ……」

バリアで受け止めた乱州が苦悶の表情と声を上げる。龍我王は、二つの剣で乱州へと斬りかかる。乱州は後退しながら様子を見ている。「なら！」

龍我王は、両手それぞれに持っていた光剣を投げる。高速回転しながら突き進む光剣に向かって、龍我王は、ビームの奔流を浴びせる。粒子は剣に当たると、それを四散させ、広範囲に粒子を撃ち込むことが可能になる。これは、粒子の能力を使っている中でも、高度な

部類に入る。粒子の威力を、四散したときに、攻撃できるほどに保持し、尚且つ、剣を破壊しない。非常にシビアな威力ではあるが、だからこそ、切り札となり、効果がある。

「こちらの粒子が尽きるのが先か、やつのバリアが消えるのが先か・
・・・・」

消耗戦になることは、必至であつた。

龍我王の放った粒子は、周囲にも影響を及ぼしていた。

紅蓮のサイコ・クロウの粒子をかわしていた闘也に、別方向からの粒子が襲ってきたからだ。瞬間的にそちらへと視線を送る。案の定、龍我王の放った拡散粒子が、こちらにも向かってきたのだ。闘也は、粒子の発射主に叫ぶ。

「龍我王！！　ちっ！」

舌打ちの後、闘也は紅蓮より浴びせられる粒子をかわし、接近してきたサイコ・クロウを数機撃ち落とす。さらに接近してきた数多のサイコ・クロウを、ソウルツインヌンチャクで振り払う。

「数が多いんだよ！！」

闘也は、両手にソウルブーメランを握り、同時に投げつける。ソウルブーメランの刃に両断されたサイコ・クロウの爆発。その爆風を利用し、さらに加速したサイコ・クロウが、闘也へと襲い掛かる。闘也は、ソウルツインソードに切り替え、迫りくる爪を切り刻む。いつの間にか、周囲を囲まれていた。前方の二つを切り落としたところで、後ろの爪が一瞬触れる。ゴウランがなければ、直撃していただろう。

闘也は、接近した紅蓮の爪に対し、自らの剣をぶつけた。

乱州は、ようやくおさまったビームの雨に、安堵を覚えながらも、龍我王へと腕を伸ばし、攻撃を再開した。しかし、龍我王は、反撃どころか、受け止めもしない。ただただかわすばかりである。何か作戦でもあるのだろうか？

やがて、龍我王は、両手に構えていたビームソードを投げ捨て、

地上に降り立つた。そして、乱州へと叫ぶ。

「話がある。降りろ」

命令形の口調に苛立ちを覚えた乱州であったが、警戒を緩めることなく、距離を取ったまま、龍我王の話に耳を傾けることとした。

「お前達は今、重大な過ちを犯している」

「過ち？」

乱州は聞き返す。重大な過ちの意味が知りたい。それは、向こうは知っている。わざと焦らしているのは分かりきっていた。

「闇亜を知っているな？」

乱州は、その名前に聞き覚えがある。実際に会ったこともある。カスター最高司令官。乱州自身、Pカスタムの時に、顔を会わせ、服従していた。乱州は、自らの脳裏に闇亜の姿がよぎると同時に、龍我王が上官たる闇亜を呼び捨てしていることに気づく。やはり、カスターを裏切ったのは、冷雅ではなく、彼らなのだろうか？

「闇亜は今、世界に安寧と秩序を築き上げるために、ある計画に着手している」

龍我王は一人話し始めた。龍我王の言葉が真実であれ嘘であれ、耳を傾けておく必要は十分にある。だが、乱州には、彼が嘘をつくような小賢しい人間には見えなかった。

「新しい法律でも作っているのか？」

「違うな」

龍我王は、乱州の冗談めいた言葉に苦笑を漏らす。だが、すぐに顔を引き締め、乱州に向かって、まるで殺人事件の核心を言いぬくように言った。

「世界破壊だ」

「………何？」

思わぬ返答に、乱州は驚愕の顔を浮かべる。だが、龍我王は、そんな乱州に気を配ることなく続ける。

「世界破壊には、強大な力が必要。そのために、『虹七色』は作られたと言ってもいい」

「世界破壊なんて、そう簡単にできるはずがない——」

「できるさ。俺達やお前達が何だと思っっている？——超能力者だぞ？」

世界破壊を否定した乱州の言葉をさえぎり、龍我王は続けた。確かに、言っていることは筋が通っている。だが、世界破壊と、闇亜の目指す安寧と秩序に何の関係があると言うのだろうか？

「世界破壊によって惑い、怯える民衆に、闇亜は『答え』を授け、導き、自らを人類の絶対者とするつもりだ」

「絶対者などいない！　今までも、これからも！」

乱州は、龍我王の言葉に反論する。人類に絶対者などいないし、必要もない。乱州は、自らの意思をぶつける。

「それに、俺達と敵対することは、結果的に闇亜を守護するということだぞ！」

「ピュアを憎む気持ちに偽りはない！！」

龍我王の言葉に、乱州は怯み、押し黙る。

「そのために、我々はここ——カスタマー——に入った」

乱州は、その龍我王の言葉に、黙ることしかできなかった。

世界破壊。それが行われれば、世界は、地球は、地上に生きる人間達はどうなるのだ？

「死に、混乱するのは人間ではない」

乱州の無言の問いかけを読み取ったかのように、龍我王は続けた。

「破壊され、融合される世界達だ」

39、意志と力

紅蓮達が激しい戦闘を繰り広げている地下八階。その遙下の階。最深部たる地下十一階では、閻亜は着々と、龍我王の言う『世界破壊』の準備を進めていた。

民衆を導く者が、この世界には必要だ。なら、その役を誰が背負う？ エスパーのような下等な種族になど任せられない。反乱兵が上がっているならなおさらのことだ。ノーマルのような力を持たぬものなど、論外である。だが、ピュアサイコストに任せてはならない。人が自らの手で、自らをも超える力を手にすることに成功した。そして、その力を手に入れたカスタムサイコストこそが、世界を導くに相応しい種族なのだ。

人は、どんな言葉にも例えることができる。軟弱、非力、劣等、偽善、悪魔、鬼、死神……。そう、そんな短所しか持たないのだ。今上げた中でも、偽善などまだいい方であろう。周りには、よきことをしている『つもり』なのだから。

「このシステム、完成すれば、大きな力となる。これだけは、守りきらねば……」

閻亜の視線の先には、めまぐるしく動き回る文字列と、『システム』の原理や図解、その解説のために小さなウィンドウが開かれている。閻亜は、その資料に一通り目を通すと、彼の背後に沈黙していた巨大な装置に手を触れる。

他に誰がいる。世界の民衆達に答えを与え、導ける者は？ ノーマルもだめ、エスパーもだめ、ピュアもだめ。

「導けるのはカスタム——いや、我しかない……」

閻亜は、装置の端にあるレバーを下げ、『システム』立ち上げ始めた。

紅蓮の創り出したソウルから放たれたサイコ・クロウは、闘也に

よって全て撃ち落とすことに成功していた。武器を失った自らの分身をよそに、紅蓮は闘也へと突撃する。闘也は、振り下ろされた紅蓮の爪を後方に身をよせて回避する。がら空きになった紅蓮の顔面に、回し蹴りを入れる。闘也は、間髪いれずにソウルスティックを創り出し、器用に振り回す。流れるような連続攻撃に、紅蓮の回避は遅れ、闘也の繰り出すスティック乱舞の餌食となっていた。

「ん……撤退しているだろ？」

闘也は、地上でなにやら話し込んでいた龍我王が、更に深部へと撤退する様がよく見えた。闘也は、すでに引き際を感じていた。龍我王が撤退した今、こちらの戦力は十分ではない。眼下で戦闘を繰り広げ、虚しく命を散らしているカスタムの兵士達も、早い段階で全滅するだろう。

「ここは引くべきか——」

闘也は、先ほどの乱舞により身動きが取れなくなっている紅蓮を蹴り飛ばし、龍我王へ続く。だが、その進路は、六本の光の線により拒まれる。

「逃がすかつ!!」

紅蓮の声が、鼓膜を刺激するのとほぼ同時に、紅蓮は闘也の眼前まで迫り、自らの手に戻した爪を振り下ろす。間一髪で、闘也のソウルスティックが、闘也と爪の間に滑り込み、金属製の爪を受け止める。闘也は、その爪を弾き、ソウルダブルソードに切り替えると、紅蓮の爪を根元から切り落とす。それにより、武装解除された紅蓮の隙を突き、闘也は撤退する。

しかし、その眼前には、すでに紅蓮が待ち構えていた。闘也は、この行動の素早さに舌を巻く。どんなにこちらが撤退の隙を作ろうとも、激情ともいえる精神力で体制を建て直し、こちらに攻撃を積み掛けてくる。並のサイコストができる所業ではない。

「逃がさないとやった!!」

紅蓮の足が、怯んだ闘也の腹部を捉える。闘也はその反動で後方へと吹き飛ばされる。完全に出口とは離れてしまった。こうなっては、

一発で決めるしかない。

紅蓮が、二つのパワーストーンを抜き取り、新たに剣の能力のパワーストーンをコピーするにはめ込む。その動作に、一秒と時間はかかっていなかった。闘也は、まるで呼応するように、両手それぞれに握っていた剣のうち一本を投げ捨て、一本となった剣に力を込める。向こうも同じように剣を構える。おそらく、考えていることは同じであろう。

腹部を斬って、とどめを刺す。

その時、闘也は不意に昔のことを思い出した。

父と対峙したあの時。互いが腹部を斬ろうと飛び掛った時。

自らの剣が、父の命を、意志を、一閃したこと。

自分が殺めたのだと、彼はうなだれた。あのときの、まるで人生を悟ったような放心感、自らに対する苛立ち、怒り。

しかし、すでに闘也の中には、『迷い』の二文字は消えていた。

更に強く、剣を握る。それだけでも、勝てるような気がした。紅蓮が真つ向より突進してくる。闘也もまた同じように突進する。

かくして、二者は同時に咆哮する。二つの剣がそれぞれの体を一瞬のうちに通り過ぎる。おそらく、どちらにも剣が入ったはずであろう。問題はその後だ。どちらが早く、剣を手放し、地上に落ちるかで、勝負は決まる。闘也は、同じように剣を滑り込ませた者を見るべく、背後を振り返る。

俺が勝つ。絶対に――

しかし、相手の姿を確認する前に、彼の意識は閉ざされかけた。地面に落ちる感覚が全身に満たされる。誰かが抱きとめたような気がする。しかし、それが誰なのか、いや、自分が本当に抱きとめられたのか分からぬまま、彼の意識は暗闇の中に逃げ込んだ。

闘也は、本当に抱きかかえられていた。抱きかかえたのは乱州である。落ちてきた闘也を抱きかかえた乱州は、ゆっくりと闘也を床に下ろす。すでに戦闘は終了していた。周囲にあったのは、生き残

っている仲間達と、無残にも命を散らせたカスタム、そして、自らの目の前の親友だけだった。

ゆっくりとその耳を心臓へと近づける。だが、やはり恐れていた。その恐れから、途中で体が凍り付いて動かなくなる。怖かった。もし死んでいたらという不安に襲われて、乱州には、心臓に耳を当てることができなかった。しかし、その乱州を突き飛ばし、代わりに闘也の安否を確かめる者がいた。突き飛ばされた乱州は、ゆっくりと顔を挙げ、その者の顔を見やる。紅蓮である。紅蓮は、素早く呼吸の有無を確かめている。先ほど怯えていた自分とは正反対に、紅蓮は行動したのである。

紅蓮は、未来を恐れる自分を突き飛ばし、今を救おうとしていた。乱州は、そうでなかった自分を嫌悪し、俯いた。一通り作業を終えた紅蓮は、ゆっくりと立ち上がり、こちらへと向かってきた。乱州は、ゆっくりと顔を上げる。見上げた先にいる紅蓮は、腕を真つ直ぐ上に振り上げると、呆然としていた乱州の頬を殴りつけた。

何か言ってくるかと思っていたが、紅蓮は何も言わなかった。紅蓮は闘也を持ち上げ、撤退を開始した。やはり、戦力的には闘也抜きでは厳しいのであろう。他の三人も、撤退する紅蓮に続く。乱州は、自らの頬をゆっくりと触る。ひりついた頬からは、口にせずとも、紅蓮の意志が伝わってきていた。

「俺になくて、あいつにあるものって……一体……」

乱州は、その答えを今導き出すことはできなかった。

進んだ先で、気絶した冷雅を発見する。先鋒は、彼の攻撃を恐れ、ここに放置したのだらう。だが、乱州には、彼らと同じことはできなかった。

たとえ強制的とはいえ、一度は同じ者に忠誠を誓った者だ。特に仲が言い訳ではなかったが、それでも、どこか自分と同じ境遇の者のような気がした。だから、特に友好的ではなかったが、自ら離れようとはしなかった。

それは、今も同じであつた。

（たぶん、違つだらうな・・・）

倒れている味方を連れ帰ることが、あいつにあり、自分にはないものではないだろう。

乱州は、冷雅を連れて、エスパーの潜水艦へと撤退していった。

40、ミッションリザルト7

東暦二〇一一年四月。このころ、日本各地では。生誕時より超能力者であるピュアサイコストを、人工的に能力を得た、カスタムサイコストが襲う、『サイコスト狩り』が各地で勃発していた。

そして、同じ年の五月。カスタムサイコストで構成された独立軍隊組織『カスタマー』は、ピュアに対して、宣戦布告し、『第二次超能力戦争』を開戦させた。

戦争の早期終結のため、前大戦の英雄は次々と集まり、『サイコスト狩り』の犠牲者たる英雄達も救出されていった。

英雄ではないが、英雄達とともに戦う者がいた。赤火紅蓮である。彼の活躍により、カスタマー最終防衛ラインの砦の陥落にも、素晴らしい戦果を上げた。

闘也をはじめとする英雄達は、ついに海中に潜むカスタマー本部に潜入。各地で激戦を繰り広げていった。

しかし、その中で、魂波闘也は捉えられる。その後、再び本部へと乗り込んだ紅蓮達は、Pカスタムとなった闘也と対峙する。記憶をよせられた闘也に対し、紅蓮は単身、勝負に挑む。すさまじい戦闘の中で、紅蓮と闘也に、新たな力が解き放たれた。

ムゲンを超えし力、『轟嵐』——ゴウランである。

それにより二人の戦闘は更に激化していった。

その頃、波気乱州は、カスタマー内のエリート集団『虹七色』のトップ3の一人といわれる銀城龍我王と戦闘となる。龍我王の多彩な攻撃に、一時は苦戦を強いられた乱州であったが、その後、龍我王は攻撃を一時中断する。

そして、龍我王の口から語られる、カスタマー最高司令官、黒田闇亜の真意。それは、世界を時空的に破壊し、混乱に陥る世界の民衆を、自らの手で導くということであった。そして、龍我王達トップ3は、それに反対の意志を示した。しかし、龍我王を引き止める

ことは、乱州にはできなかった。し、世界破壊を行う手段すら分かなかった。

一方の、紅蓮と鬪也の戦鬪は、互いの一閃の後、鬪也の敗北に終わった。焦る乱州を押し飛ばし、賢明に身体の状態を確認したのは、つい先ほど鬪也との一閃を勝ち抜いた紅蓮であった。

乱州は、紅蓮にあって自分にはないものが分からなかった。

撤退した紅蓮達は、再び戦力を整えた後、再び本部に乗り込もうと画策していた。

一方のカスタマーも、今度こそ撃滅しようと、全戦力を投入してきた。

いよいよ、最後の戦いが始まるうとしていた。

41、戦いの光の中で

一旦の戦力補充及び、各員の治療のため、紅蓮達は数週間、本部よりやや離れた場所でその時を待っていた。

離脱直後、Pカスタムとなっていた闘也は正気を取り戻した状態で意識を取り戻した。そのことに安堵したのは、紅蓮だけではなかった。

そして、待ちわびたこの時が来た。

紅蓮達は、再び本部へと乗り込んだ。完璧に修理されているカスターマー本部の外部装甲に、エスパーの潜水艦のミサイルが着弾の花火を上げる。

再び開けられた巨大な穴へと、紅蓮達六人は突き進んだ。不思議なことに、海中への迎撃部隊はいなかった。何千といたカスタム兵士達だったのだろうか、すでにその数は大きく減らされ、おそらく数えるほどしかないだろう。

紅蓮達が乗り込んだ場所は地下九階。この下の階は、おそらく耐水加工をしてあり、水の浸入は防がれているだろう。そして、その予想は当たっていた。闘也を先頭に地下十階に降りる。酸素ボンベを投げ捨てる。目の前には——紅蓮が知らない者もいたが——虹七色のメンバーが揃っていた。これはそうそうたるものである。

白亜光輝、深緑大地、銅石剛柔、銀城龍我王、王金羅神。虹七色ではないが、黒い三彗星の黒田暗志、黒岸信自、黒谷殺闇の姿もあった。その八人は、全員、数多の戦場を潜り抜け、経験を積んできた者達である。数で言えばこちらが不利なのは明確であった。

だが——と、紅蓮は自問する。

俺を追う者がいるのか分からない。だが、それでもやるしかない。紅蓮には、ある一人の男との戦闘、撃破が命じられていた。その男は、ここにはいない。なぜなら、その男は、この下——カスターマー本部最深部に居座る男なのだから。

カスタマー最高総司令官、黒田闇亜。やつこそが、紅蓮の戦う相手であった。

「決着をつけるぞ。覚悟はできているな？」

紅蓮の前にいた鬪也が口を開く。次いで、乱州、的射、秋人、由利が口を開く。

「できすぎて怖いぜ」

「なくてここにはいないよ」

「今なら最高速度が出るかもしれない」

「覚悟も、自信もあるみたいね。みんな」

鬪也が紅蓮に振り向く。そして、紅蓮にも同じ問いをぶつける。

「覚悟はあるか、紅蓮」

紅蓮は、いつもと変わらぬ口調で、真っ直ぐに鬪也の視線を受け止めて言い返す。

「無論だ」

「相変わらずだな」

乱州が苦笑を漏らす。紅蓮の目つきは鋭かった。紅蓮は一度、ゆっくりと目を閉じ、一つ呼吸をしてから、再び目を開ける。それから一秒とおかず、鬪也の声が階全体に響く。

「行くぞ！！！！！！」

紅蓮達六人は、それぞれの相手へと走り出した。

エスパーの潜水艦の中で、少年は、『少年ではない者』の意志によつて目覚めた。

冷雅の体は、ゆっくりと起き上がる。各部に痛みはなかった。以前から愛用している太刀も、その足元で、静かにその時を待っていた。

ゆっくりと立ち上がった冷雅の体は、しっかりと太刀を握り締める。彼の右手が、その刃先に軽く触れる。触れた部分から、少量の血が溢れ、床に落ちた。彼は左手に黒い球体を創り出す。能力的な問題はなさそうである。彼は、自らのもう一つの能力で、右手の先

ほどの傷を癒し、かき消す。愛用の太刀を鞘に収め、酸素ボンベを取り付ける。

冷雅の体をのっとった少年は、ゆっくりと、だがきつく、『自らの兄』の右手を握り締める。少年は、通信機に向かって、出撃を告げる。

「青水河川、目標との戦闘を試みる！」

兄の体と、弟の意志は、水中空間へと放り出された。

地下十階の各地で激しい戦闘が行われていた。紅蓮は、その戦闘の中をかいくぐり、先へと進む。地下十一階への階段を塞いでいるゲートを蹴り飛ばすと、その先へと進む。今までよりも長い階段が、まず紅蓮を待ち受けていた。紅蓮は数段平気で飛ばしながら突き進む。

やがて、一つの部屋にたどり着く。紅蓮は、自らの真正面に立つ男の姿を見やった。男はこちらの存在に気づき、振り返る。紅蓮は、このうえない警戒の目を作る。男はこちらに視線を注がせると、口元を歪ませ、不敵な苦笑を漏らした。

「よく来たな。赤火紅蓮」

「・・・・・・」

紅蓮は何も言わず、ただ男の顔を見ていた。男は、紅蓮の鋭い目に怖気づくことはなさそうである。逆に、紅蓮が怖気づくことも、絶対的になかった。

「貴様にとっては、我は伯父ということになるかな？」

「何・・・・・・？」

紅蓮には意味が分からなかった。母からも父からも、伯父伯母の話は聞いたことがない。いや、もしかしたら自分が聞こうとしなかっただけかもしれない。だが、そこで紅蓮に一つの疑問が生じる。

黒田闇亜は、黒い三彗星、黒田暗志の実父である。もし自分の伯父であるなら、暗志と自分の血は繋がっていることになる。その上、闇亜の両親は、すなわち紅蓮、暗志双方の祖父母ということになる。

のだ。昔、母親の父がなくなつたときに、一度会っているはずだ。だが、自分と同年代の者がいた記憶はない。

「まさか……………」

母の……………浮気？

「まさか！！」

「そうだ。君の母親は、我の弟と浮気していた。おっと、子供に言うことではなかったか？」

子供扱いされたことと、小ばかにされたことに苛立ちを覚えた紅蓮であつたが、そのことをすぐに振り切ると、コピリスを起動させ、パワーストーンをコピリスにはめ込む。

『パワーストーン——クロウ』

小気味のいい機械音声が鼓膜を刺激する。紅蓮の目は鋭い。獲物を追い求める獣の如しである。

「伯父を殺せるかな？ いや、君ならできるだろうな」

闇亜はやはり小ばかにした口調で紅蓮に言い放ってくる。紅蓮はそれを無視し、そして、闇亜と戦闘すべく、一言発する。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

秋人は、白亜光輝、深緑大地のコンビと、一人で対峙していた。向こうの連携は前より衰えることなく、逆に精度が増し、ギリギリまでひきつけたり、やはりギリギリのところで退避してその背後からバズー力を撃ちだされたりしている。相手の攻撃に完璧に翻弄されていると言えは大げさではあるが、劣勢という二文字に偽りはなかった。

「後ろ！？」

秋人はバズー力を肩に乗せてこちらに銃口を向けている大地へと接近する際に、背後に気配を感じる。咄嗟に行つた上空への回避の後、光輝の拳が宙を殴りつける。秋人は、先ほどよりも格段に速いスピードで、大地の背後に接近する。しかし、その拳は、大地に当たる前に、光輝の掌に納められる。秋人はすぐにもう一方の腕を突き出

すが、その時にはすでに大地は上空でバズーカを放っていた。しかし、まずいことに、光輝は秋人の拳を掴んで放さない。否応なしに、秋人は投げ上げられ、大地のバズーカの餌食となっていた。

「くそおっ！！ 何だよ一体！」

秋人は毒づき、体勢を立て直し、大地のバズーカを警戒しながら、光輝へと突進する。光輝に接近していると気づいた大地が、チャージしていたバズーカを連続で撃ちだしてくる。秋人はその射線を容易く回避し、光輝の眼前へと躍り出る。そして、光輝のわき腹に右足で蹴りを入れる。が、それは光輝の防御の能力で言うまでもなく防がれる。だが、秋人は光輝への攻撃を継続した。無論、考えがないうけではない。すでに秋人は、光輝撃破のための策を、少ない脳で考えていた。

本部突入前に、闘也より入れ知恵されたことである。

「防御の能力は、基本的にどんな場所でも完璧に防ぎ、傷一つもつけさせない。だが、それでも能力は完全ではない。防御の能力の使用者の一箇所だけ、無防備な場所が存在する」

淡々と話す闘也に、秋人は質問する。

「それはどこだ？」

「分からない。それは使用者によって異なる。だが、もしその部分を攻撃できれば、相手には大きなダメージになる。防御の能力は、体全体を強化する代わりに、一箇所が極端に弱い」

やはり淡々と話す闘也に、脳が足りない秋人は同じ質問をしてしまった。

「それはどこだ？」

「………分からない。しかし、防御の能力に熟練したもののほどこ、その範囲はどんどん小さくなる。心してかれよ」

「分かった。ところで、それはどこだ？」

秋人は決してわざとではなかったのだが、闘也の方は怒ったのか、それを通り越して呆れたのか、秋人の質問に答えを返すことはなか

った。

剛柔が五つのサイコ・ヘアを真正面から突撃させ、それぞれから粒子ビームを放たせる。その幾重にもなる粒子を回避し、その回避行動の中で放った球体で一つを破壊する。だがそこで、わき腹に焼け付く痛みが走る。河川を貫いた粒子が、河川の前方へと直進し、やがてその力を失う。

（後ろ！？）

振り返った瞬間、粒子を放ちながらこちらに接近するサイコ・ヘアが視界に入る。先の五つを囷に、虎の子の二つを背後より迫らせたのだ。河川は、サイコ・ヘアを破壊すべく、球体を創り出す。だが、それを放つ前に、剛柔の光剣を太刀で受け止めざるを得なかった。

「くううつ・・・・・・」

河川は呻き声を漏らす。だが、その劣勢を跳ね除け、河川は太刀を振るった。

「くそおおおおおつ！！！！」

河川は素早い動きで敵の死角に回りこむと、太刀で横薙ぎに振るう。剛柔の背中に一筋の切り傷を作る。河川は立て続けに太刀を振るい、次いで右足、左腕に切り傷を負わせる。致命傷を与えられぬことに河川は憤りを感じてはいたが、それでも、剛柔には十分なダメージとなっていた。

「僕と兄さんが、こんなところで・・・・・・」

河川は呟き、そして剛柔へと向かっていく。太刀を振るい、剛柔へと振り落とす。

「死んでたまるかあああつ！」

黒い三彗星と戦闘を繰り広げていたのは、的射と由利である。

しかし、戦闘開始直後より、二人は劣勢に追い込まれていた。

黒い三彗星は、中学時代より時間とともに過ごしていた。そのせいあってか、息の合いようも恐ろしい。融合と、それぞれの能力を

フルに活用しての戦闘スタイルは、彼女らを圧倒していたのだ。融合など、そうそう連発できるものではない。それをあっさりやつてのけるところを見ると、彼らは、「絶対に勝つ」という強い意志とそれを支える驚異的な集中力でここまでの戦闘を繰り返しているのであらう。さすが、元不良ということだけはある。

数では相手は勝っている。連携力も高い。その上、自軍基地という地の利も向こうにはあった。

黒い三彗星の三人が、殺闇の創り出したブラックホールへとその姿を消す。周囲の警戒は怠らない。背後より感じた気配は、完璧に当たっていた。由利が飛び出す。そして、その背後にいた暗志の姿を確認し、的射は前方に飛び出しながら、ハンドガンの銃口を向ける。的射と由利がすれ違った瞬間、的射のハンドガンの銃口から、一瞬のマズルフラッシュの後、銃弾が放たれる。それと同時に、由利は火炎球を作り出し、的射の背後より迫っていた信自へと向かわせる。的射の放った銃弾は、狙いこそ正確ではあったが、体を半回転させた暗志の横をすり抜ける結果に終わった。一方の由利の方は、目の前に現れた殺闇のブラックホールに吸い込まれて不発に終わる。

「今のは――」

由利の真横につけた暗志が呟く。

「いい攻撃だった」

その言葉と同時に、暗志の創り出したブラックホールより、先ほどの由利の放った火炎球が現れる。的射は慌てて左手から水を噴射させ、消し止めようとするが、それは威力を軽減させるだけに終わり、常人では耐えられない熱さに襲われる。的射は耐え切れずに悲鳴をあげ、床に倒れ落ちる。

「きやああつ！」

「的射！」

的射の被弾を知った由利が的射の名を呼んでくる。的射はよろけながらも立ち上がる。先ほどの攻撃で的射がしばらく戦線復帰できないと踏んだのか、由利に攻撃を集中させてくる。由利の方は、ま

もに攻撃できていない。もし何かしら攻撃すれば、最悪の場合ほとんど身動きのとれぬ的射に向けられる可能性だってあるのだ。

——私のせいで、由利が死ぬ？

「そんなこと!!」

的射はスナイパーライフルを構え、由利に猛攻をかける黒い三彗星に向ける。あの連携は、三人いてこそのものである。ならば、そのうちの一人でも満足な動きができなけれ、連携は崩れ、こちら側の『連携』の利が生まれるのである。

「絶対に——」

引き金を抑える指に力が入る。スナイパーライフルのスコップは、まるで影のように、三人のうちの一人、暗志を追っている。暗志が左拳を振り上げたその瞬間が、彼女が狙い撃つ隙となった。

「させるかあああっ!!!」

的射のスナイパーライフルから、鉛の弾丸が放たれた。

42、刃の先の因縁

闘也は、王金羅神との戦闘を繰り広げていた。互いに一步も譲らぬ戦闘は、文字通り、消耗戦である。どちらが先に力尽きるか。気を抜けば、負ける。

「お前ら、世界破壊を支えるようなことを！」

「我々も、全てが終わった時に止めるつもりだ！」

龍我王の言っていた『世界破壊』については、すでに乱州より耳にしていた。

強制的な世界破壊。それにより混乱する民衆に答えを授け、導き、自らの支配下に置き、自らの秩序を作り上げる。それが、乱州が聞いた闇巫の狙いらしい。世界破壊が行われた時、地球は、世界はどうなるのだろうか？ そんな傲慢な導きなど、人間には必要ないのだ。むしろ、邪魔である。

「それじゃあ遅いだろ……！」

闘也は、ソウルソードを羅神の光剣にぶつけながら続ける。

「世界破壊を止めたいなら、一刻も早く——」

「もはや止めることなどできん！」

「ここに来て、ホラを吹く気か！」

「一度動き出したシステムは、どうあっても止めることはできない！」

そこに来て闘也は、向こうの策略めいたものを感じる。そうやって嘘を吹き込み、こちらに精神的に失脚させる気なのかもしれない。だが、一方で本当なのではという気も起きる。もしそのシステムとやらがすでに動き、停止不可能なら、止めるより先に、ピュアである自分達を倒す。双考えれば、今ここで闘也達の相手をしていることに合点がいく。

「諦めるのか！？ そうやって……！」

闘也は羅神を弾き飛ばし、ソウルブーメランを投げつける。羅新は

苦もなくそのブーメランを回避し、かわりに粒子ビームをこちらに撃ちだしてくる。闘也は、高速で迫ってくるそれらをムゲンの助力もあってなんとか回避する。

ソウルスティックを創り出した闘也は、それを羅神の周囲を浅海しながら時折突撃し、それを振り回す。ヒットアンドアウェイの攻撃に羅神は完全に飲まれていた。

「人は、諦めの塊だ！」

羅神が遂に闘也の動きを見切り、軽々と回避する。光剣を作り出した羅神が、闘也に斬りかかる。闘也は咄嗟に突き出したソウルスティックでその光剣を受け止める。高濃度に圧縮された粒子はじりじりとソウルスティックを焼き進んでいく。闘也は、そこで無理に押し返さずに、半回転して光剣を受けながす。間髪入れずに闘也はソウルスティックをソウルランスに切り替え、それを投擲する。投げられた槍は羅神の光剣で切り裂かれるが、闘也が接近するには、十分な時間稼ぎとなった。

「そこおっ！！」

闘也は羅神の懐にもぐりこむと、ソウルツインソードで切り刻んだ。闘也の剣が動き始めると同時に羅神も回避行動に転じたが、それでも、かなりの斬撃を羅神に叩き込んだ。

「ぐうっ……！！」

羅神が呻きながらも吹っ飛ばされる。羅神が体制を立て直したところには、すでに闘也は羅神の眼前へと迫っていた。

しかし、闘也は攻撃でできなかった。剣を振り上げる寸前、羅新の指から放たれた粒子ビームが、闘也の右足を貫いたからである。ビームの半分ほどが、その足を包む。直撃ではないようだが、ダメージは大きい。ビームとともに消え去った足の一部分を憂いながら、闘也はソウルガンを創り出し、それを羅神へと放つ。しかし、その攻撃は羅神を遠ざけるだけの結果に終わってしまった。

闘也は、足の痛みには耐えながらも、ソウルダブルソードを創り出し、羅神に向かって振り回す。しかし、大雑把な攻撃は全てが宙を

斬るだけである。羅神は、自らの光剣を闘也に向かって横薙ぎに振るう。闘也はそれに対する反応が遅れた。ムゲンの助力ではどうにもならない。距離的にも限界と思われたその時、彼はその光剣に当たることなく、回避に成功した。

彼はそのとき、ムゲンの助力ではなく、ゴウランの助力で回避したのである。

紅蓮の思考は、目の前の男のためにめまぐるしく動いていた。その理由は、闇亜が数多の能力を紅蓮にぶつけていることにあった。こちらが攻撃に転じれば、向こうは光輝の使う防御の能力で防ぎ、こちらが距離を取って攻撃すれば、羅神や龍我王が使う粒子の能力を用いてくる。その上、闇亜は分身の能力で個体数を増やし、こちらに圧倒的な数的不利を生み出していた。紅蓮は距離を取り、迫りくる粒子を回避しながら、サイコ・クロウを、拳から切離す。

「サイコ・クロウ!!」

紅蓮の放ったサイコ・クロウが次々と分身の闇亜をかき消す。が、その間に闇亜は新たな分身で逃げ延びている。これではただ闇雲に時間を浪費するだけである。紅蓮はコピーリスにパワーストーンをはめ込む。

『パワーストーン——クロウ・ソウル』

電子的な雰囲気機械音声が告げると、紅蓮の周囲には、幾つもの魂が現れた。

魂と分身の能力の違いはいくつか上げることができる。分身の方は、精神的な気力の消費を抑えてあり、ほぼ無限に出現させることが可能である。しかし、その分身は能力が常に一定で、所有者の基準値より上回ることはない。さらに、分身はそれぞれが同一の動きをするため、戦略性は大きく損なわれる。その上、死亡する部分に攻撃された場合、一瞬で消滅してしまう。反対に、魂の能力は、それぞれの分身が異なる動きをさせることが可能で、戦略にも幅が出る。分身の能力とは違い、体を半透明にすることで攻撃の回避も可

能で、逆に実体化して所有者の護衛も可能である。感情によって、個々の魂の能力も変化するのも、分身にはない特徴である。つまり、感情によっては、分身よりも強くも弱くもなるということである。また、能力使用時の気力消費は、魂の能力の方が格段に大きいのも、分身に劣る部分と言えるよう。

「魂波闘也の能力か」

闇亜が呟く。しかし、その呟きは紅蓮に聞こえることはなく、紅蓮はサイコ・クロウで次々と分身を屠っていく。

（拉致が開かない。なんとか戦況打開の楔を打ち込まなければ・・・）

紅蓮が苛立ちを覚えながら口の中で呟く。闇亜はこちらば分身と次々と屠っていくにも関わらず、分身を出しながら逃げ延びている。紅蓮は痺れを切らした。本物たる紅蓮は、一瞬にして闇亜の本体と思われる者に近づく。躊躇なく振り下ろした両腕は、あっさりその姿を消されて不発に終わる。

「何!？」

紅蓮は、自らに隙ができたことを悟った。だが、向こうからの攻撃はこなかった。紅蓮は惘然とした表情のまま、床に足をつける。ゆつくりと巨大な装置の背後から闇亜が現れる。紅蓮の真正面に立つと、口を開いた。

「紅蓮よ。私の能力がなんなのか分かるか——いや、もうすでに分かっているんじゃないのか？」

実のところ、紅蓮はまだ闇亜の能力を特定できずにいた。確かに多彩な能力を併用している。そこには迫力めいたものを感じるが、それ以外に特徴という特徴はない。

そんな気持ちを読み取ってか、闇亜が苦笑を漏らしながら続ける。「何せ、お前は赤火紅蓮なのだから」

そこで、紅蓮の中で、何かが警報をかきたてた。恐ろしいほどの覇気。能力という能力を全て集結させた、何にも劣ることのない、伝説の能力。

紅蓮だから。それで合点がいった。そう、それは紅蓮の目標であり、戦う理由であり、夢であり、生きる糧であった。コピリスを奪取したのも、乱州達と手を結んでまで、闘也との対立を拒んだのも、全てはそのための小さな、だが確実な一歩のためだったのだ。紅蓮は、自らの追い求めてきた物が、今目の前にあることを悟った。

「まさか……」

ありえないという思いはある。だが、おそらく紅蓮のありえないという思いは否定されるだろうし、闇亜の方もそんな質問を待っているのだろう。紅蓮は、目の前にいる男の声に耳を澄ませた。

「我の能力、それは——」

信じたくない。

嘘だと言って欲しい。

だが、紅蓮が否定したい事実を闇亜は受け入れず、あっさりとその事実を突きつけた。

「森羅万象——オールだ！」

紅蓮の中で、驚愕が全身を駆け巡る。鼓動が早くなり、息苦しくなる。だが、何とか紅蓮はそんな姿を晒すまいと、断固立ち続けた。正確には、立ちすくんでいたという方がいいのかもしれない。

「貴様は……」

紅蓮の中にある一つの思いが、全身に駆け巡る。

「貴様は……」

震えるような声で同じ言葉を二度、闇亜へと呟く。悲しみに震えているのではない。怒りで震えているのだ。紅蓮は、自分でも驚くほどの声で怒鳴りつけた。

「貴様はオールサイコストではない!!!!!!!!!!!!!!」

その時、紅蓮を纏っていた赤いムゲンの光の尾に、光の微粒子が混じったことを、紅蓮は感じていた。

怒りに任せていても、今はこの力を使うしかない。紅蓮の決意は固い。

紅蓮は、ゴウランを発動させたのである。

いまだ防御の弱点位置の特定が完了していない秋人は、二対一と
いうこともあり、さらなる苦戦を強いられていた。こちらが弱点を
探していることを察したのだらう。先ほどよりも、しなやかでより
強固な連携をこちらにぶつけてきたのである。秋人は、襲い来るバ
ズーカの雨をしのぎ、光輝に接近する。高速の能力を瞬発的に完全
解放し、背後へと回り込む。秋人は、手当たりしだいに攻撃を開始
する。後頭部に始まり、首、肩、腕、背、腰、尻、足、かかとを攻
撃する。そして、その中で一つ、たった一箇所の小さな部分ではあ
ったが、手応えを感じた。いつものような、なんだがのれんを押し
ているようで、岩石を叩いている感覚がない。それは、直に触れた
時の、独特の温かさである。秋人は、勝機を見出した。その一箇所
は、足の膝裏。そのほんの一部が、弱点であるのだ。
「見つけたぜ！ テメーらの短所をな！！」

的射、由利と、黒い三彗星との戦闘はいまだに続いていた。
暗志に向けて的射が放った一射は、確実に暗志の左腕を捕らえた。
暗志は、その攻撃意欲をくじかれ、バランスを崩して、床に激突し、
血のにじみ出る左腕を押さえなければならなかった。的射は、暗志
が戦闘復帰の可能性をそぎ落とされたことによって、勝機を見出し
た。

文字通り、こちらの連携が勝る。

要である暗志の戦線離脱により、残った二人の連携は、あっけな
く崩れ始めた。的射の撃ち放つ弾も、完璧に捉えるまではいかなく
とも、全てが、確実に着弾していた。ダメージは小さいが、ちりも
つもればなんとやらだ。

「的射！」

由利が叫びながらこちらに振り返り、杖の先を向ける。その意図を
理解した的射は、すぐさま滑り込むように床に伏せる。直後、由利
の放った火球が、背後から襲い掛かっていた信自に直撃する。同時

に、由利が飛び上がる。的射は、由利の足があつた場所の先に見える、殺闇の脚部に狙いをつける。万人には一瞬に思える時間でも、正確に撃ちぬくための時間は、的射には十分すぎるほどあつた。

的射が殺闇に向かって撃つた弾丸は、真つ直ぐに殺闇の右足を貫く。それに呼応して、殺闇は床に倒れこむ。床から撃つていた的射に戦線復帰した暗志が襲い掛かる。しかし、的射が回避行動に出るより先に、由利の高電圧仕様の『プラズマウィップ』と呼ばれる鞭型の武装によつて、虚しく不発に終わった。

この瞬間、遠藤的射と白鐘由利は、黒い三彗星、黒田暗志、黒岸信自、黒谷殺闇に勝利したのであつた。

河川が振り下ろした太刀を、剛柔は後方に飛び退いて回避する。

河川は、湧き上がる憤りを、そう簡単には抑えることはできなかった。仮でも比喩でもなく、これは兄の体だ。傷ついても、最終的には肉体的な痛みは、全て冷雅が受けなければなくなる。

「行け！ サイコ・ヘアー！」

剛柔が分離させた六つのサイコ・ヘアをこちらに飛ばしてくる。河川は、反射的な動きでそれらを回避し、剛柔へと接近する。振り下ろした太刀は、あっさりと回避され、背中にやけつく痛みが走る。

剛柔が創り出したビームソードが、河川の――正確には冷雅の――背中を薙いだのである。幸い、かすただけで、致命傷ではない。

しかし、それも好都合といえ、好都合であつた。

何せ、こうなるからこそ、僕は強くなる。

外傷の能力によつて。

「僕に……いや、兄さんの体に――触れるなっ!!」

河川が振り向きざまに撃ちはなつた球体は、剛柔の放つた粒子によつて相殺されるが、続けざまに放つた一発はしたたかに剛柔の腹部を捉え、そのまま弾き飛ばした。剛柔はのけぞりながら吹っ飛ばされ、体勢を立て直し損ねていた。河川は、球体を放ちながら接近する。回避もままならないまま、剛柔はその球体を諸に二度も食らつ

た。壁に打ち付けられた剛柔へと、頭上から太刀を振り下ろす。しかし、壁によりかかったことで、体勢を立て直したのか、振り下ろされた太刀を、剛柔が光剣で受け止める。河川は齒噛みしながらも、さらに強く押し込む。しかし、ここで剛柔はこちらを押し返し、つばぜり合いを中断させる。河川は、そこからの立ち直りも速かった。すぐさま太刀を握る手に力を込めると、わめきながらも、剛柔の両手に傷を入れ、左手を手首から切断する。切断された先から粘度の高い赤い液体が流れ出る。

「うおおっ！！」

――殺れる。

確信的であつた。河川は、太刀を胸の前に構えると、そのままの体勢で剛柔に向かつて剣を貫かせる――はずだった。

剛柔は、当たる直前になって身を翻し、こちらの突きをかわしたのである。剛鉄の内壁に突き刺さった太刀から、いやというほどの振動が襲う。その隙をつかれ、剛柔に横っ面を蹴り飛ばされる。その勢いで剣も壁から抜けるが、完璧に体勢を崩してしまっていた。

その隙を敵が見逃すはずがなく、残っている右手の先から粒子ビームを乱射してくる。先ほど感じた感覚と真逆のそれが、脳裏にちらつく。

――殺られる！！

河川は、この時死を覚悟した。自分はもう終わった。ここまでののだ、と。

しかし、河川は諦めていても、それでも、まだ諦めない者もいた。突如、河川の視界がブラックアウトする。河川は、やられたのかと思っていた。しかし、すぐに視界は明るくなる。不思議なことに死ぬ直前のようなぼんやりした感覚はなかった。むしろ、鮮明な感じである。なぜか、肉体的な痛みが消えていたような気がした。そこで河川は、先ほどまでの自分と違うことに気づく。

自らの意志とは無関係に体が動き、襲い掛かる粒子の群れを軽やかに回避し、剛柔との距離を取る。その時、耳からではなく、脳に

直接響く声が、河川に届いた。そこで、河川は、先ほどまでと今の『違い』に気づく。

「河川！ てめえ人様の体を勝手に使ってんじゃねえ！！」

その声は、河川にとっては、聞きなれた兄の声であった。いきなりの叱責に、河川はしどろもどろに応える。

（え・・・ああ・・・あ！ ご、ごめんなさい！！）
ようやく紡いだ謝罪の言葉に対し、冷雅は返答する。

「よく耐えたな。サンキュ」

先ほどの叱責からころりと変わって謝礼の言葉を述べられた河川は混乱しながらも、心の中に生まれた温かいものに感動を覚えていた。

（兄さん）

「あん？」

（生きて帰ろう！）

冷雅は、好戦的な笑みを浮かべると、河川の言葉に対して返答する。

「あつたりめーだ。バーカ」

冷雅は、太刀をその手に握らせると、剛柔へと突進していった。

43、受け継がれる物、受け継ぐ者

秋人が光輝の弱点を見つけてからは、完璧に秋人が、勝利の波に乗りつつあった。すでに、戦闘は終わりがかけていた。相手がいくら攻撃をしかけてこようと、最高速度に程近いスピードを出して動き回る秋人に、当てられるものではなかった。逆に、その攻撃が隙を生み、秋人の攻撃チャンスとなっていた。敵二人はたじろぎ、すでに秋人の独壇場であった。

秋人から見れば、相手が隙を作るような状況になれば、まず負けることはないらしい。

しかし、そんな秋人だからこそ、相手がわざと隙を作ったことを見抜けなかった。

大地が放った銃弾を回避し、大地の背後に回りこみ、腕にうなりを上げて振り下ろす。しかし、その攻撃は横合いから殴りかかってきた光輝によって阻止される。体勢を崩した秋人に、大地のバズー力が吸い込まれるように命中する。二人が秋人との距離を詰め、光輝は腕を、大地はバズー力を突き出してきた。秋人は、咄嗟に開いた白く巨大な翼で受け止める。細かい粒子状の砲撃以外はほとんど防げるこの「ウイングシールド」であるが、この時は、すでに緩みかけていた集中力と、向こうの気迫が相まって、翼を破いて進んでくる。

大地の砲口がその翼を突き破り、秋人を睨みつける。秋人は、その砲口が、僅かずつではあるがチャージしていることを悟った。大地のバズー力が、フルチャージによって大口径粒子エネルギーを発射することは、すでに噂で耳にしている。この距離で粒子ビームを撃ちこまれば、比喻ではなく死に追いやられる。

「俺がつ……」

秋人の呻きを嘲笑うかのように、バズー力がチャージされていく。
「死ぬわけには——」

間もなくその砲口が臨界に達する。そして、その時がきた。砲口の内は溢れんばかりの光が見える。秋人は声をあらんかぎりに張り上げ、翼を動かし始めた。

「—— いかないんだあああつ!!!!!!!!!!」

直後、翼は展開され、しがみつくように翼に攻撃していた二人が突き飛ばされ、同時に大地のエネルギービームもその砲口からまばゆい粒子を放出した。

秋人は間髪入れずにその翼から羽の矢を無数に飛ばす。羽は二人に大量に突き刺さり、ゆつくりと下降していく。光輝は、直前で僅かに防御の能力を発動させたのだらう。大地の真下につけると、大地を受け止め、そのまま光輝もろとも床に激突し、彼らの戦いはその幕を下ろした。

龍我王は、先ほどまで乱州相手に善戦していた。だが、今は違った。実のところ、この戦況打開は乱州によるものではなく、秋人の吹き飛ばした大地によるものであった。

大地が吹き飛ばされると同時に発射された、大口径エネルギー粒子ビーム砲が、戦闘中であつた龍我王と乱州との間に割り込んだのである。乱州はその存在に気づき、龍我王の攻撃を回避する形で後退しながらバリアフィールドを発生させ、光の奔流を防ぎきった。

一方の龍我王は、乱州の思惑通りの行動を見せ、右半身に大きなダメージを負った。頭をかすめるように、光が迸り、右腕を肩口から持っていかれる。右足の損害も並ではない。右目が見えない。先ほどのビームで、右目の視神経がやられてしまったようだ。

「くそ……… 大地め!!」

自分を苦戦に持ち込ませた同僚の名を吐き捨てると、龍我王は右手の指先から粒子を撃ち出す。乱州はその単調な攻撃を易々と回避し、こちらに接近してくる。

「けど、だからって!!」

龍我王は右腕をうならせ、乱州へと振り下ろす。乱州は腕を剣へと

変形させ、その斬撃を受け止めると、すぐに身を翻して龍我王をいなし、背後から腕を伸ばしてくる。衝撃がもろに背中に響く。龍我王は、右半身のせいで体勢を立て直せずにはいた。どうにか立て直したところには、すでに床に激突していた。向こうから再び拳が襲い掛かる。龍我王は上空へと飛び立ち、その拳を回避すると、接近してくる乱州に牽制の粒子ビームを撃ち込む。

「命が惜しくないのか？ お前は！！」

乱州が叫びながら剣を振り上げてくる。その剣が、龍我王の足に届く前に、乱州へと粒子を放つ。ゼロ距離のため、狙いは正確であった。もつとも、向こうも咄嗟の機転か、攻撃の勢いか、射線をずらさせ、心臓に向かうはずだった粒子は、腹部貫通に終わってしまったが。相手の腹部の粒子が消えかかったころ、左足の感覚が消え失せる。

「左足を犠牲にして……………！？ 生意気な！！」

「貴様が言うな！！」

龍我王がその光剣をがむしゃらに振り回す。しかし、その光剣が乱州に届く前に、乱州が粒子となってその姿を消す。

「量子化か！？」

呟いた直後に、乱州が真横に出現する。

「——だがっ！！」

龍我王は、その光剣を乱州へと袈裟懸けに切り落とす。が、それは相手の腹部をかすめる結果に終わる。乱州がその腕を巨大化させ、それを後ろに引いた。そして、その腕が、無防備な龍我王へと襲いかかってきた。

「巨人拳——ギガント・アームパンチ！！！！」

乱州の放った巨大な拳が、龍我王にぶつかる。乱州はそのまま拳を伸ばし続け、床へと激突させた。

「世界を……………壊す……………わけに……………は……………」

拳に妨害されてか、龍我王の最後の言葉を、乱州が正確に聞き取ることが不可能であったが、それでも、ここでの戦いは、終わったのであった。

「これがゴウランか……」

闘也は、ゴウランを発動させ、羅神相手に翻弄していた。相手の攻撃は、全てをゴウランの反応力でカバーし、それによって生まれた隙をつき、攻撃に転じる。時に離れ、時に接近し、剣をぶつけ、かわし、打ちかかる。それを繰り返しているうちに、こちらは完璧なまでの戦いを生み出していた。

闘也は、羅神の背後に回りこむと、素早い動きで十字に切り結ぶ。左手に握っていた剣を投擲し、それをかわすために隙ができた羅神に突撃する。

「貴様……その力!!」

羅神が声にドスを聞かせながら闘也の剣に対応してくる。闘也の剣を跳ね除けた羅神が、後方に退避する闘也に向かって光剣を薙ぐ。

「返してもらっぞ!!」

「これは、貴様がもつべき力では——ない!!」

二つの剣の間で火花が飛び散る。闘也は、剣を巨大化させてさらに押し込み、羅神は光剣の出力を上げて応戦してくる。火花はいつしかスパークとなり、戦場に赤い大輪を咲かせる。闘也は、その剣をさらに強く押し込む。さすがに、重量で不利な光剣は、じりじりと羅神へと近づいていく。このまま押されれば、自らの粒子の剣によって焼かれ、回避に徹しても、この剣に体を分断されるだけとなる。

「もらったあああっ!!!」

闘也は叫びながら剣をさらに押し込む。ついに耐え切れなくなったのか、羅神は右方に逃げ出す。命を絶つことはできなかったが、左手を肘上から持っていく。続けざまに放った一振りで、右足を付け根から切断すると、ソウルブーメランを投擲し、諸に食らって体勢をくずした羅神が呻き声を上げる。

闘也は、剣を元の大きさに戻す。そして、その剣をきつく握り締めた。羅神は牽制とばかりに粒子を放つ。闘也はその攻撃に怯むことや、無理にかわすことはなかった。無駄に動いて、敵をしとめ損ねることを避けるためだ。右肩と左膝を、粒子がかすめる。最後のあがきとばかりに、羅神が光剣を作り、遮二無二振るってくる。しかし、闘也はその攻撃に当たることはなかった。ソウルソードの剣先は揺るがない。真っ直ぐに羅神の首元に直進し、腕を引く。斜め上へと振り上げたソウルソードは、その頭を体から跳ね除けた。

勢い余って一回転する。体に、羅神の光剣が僅かに触れ、焼け付くような痛みが、一瞬の襲撃の後、跡形もなく消え去った。

「紅蓮……」

闘也は、下階で戦っている旧友へと呼びかけた。

「死ぬなよ……」

冷雅もまた、他と同様、善戦していた。剛柔の放つサイコ・ヘアを易々とかわし、お返しに太刀をふるって頭上より躍り出る。剛柔はなんとかその斬撃を受け止めるが、完全に力負けしていた。冷雅はにやりと口元を歪めると、一気に押し込み、剛柔の左腕を肘上から大仰に斬りおとす。剛柔は冷雅を恐れてか距離を取る。その間にも、後退しながら放ったサイコ・ヘアが襲い掛かる。冷雅は、弟の能力を使って、襲い掛かるサイコ・ヘアの一つを撃ち落とす。しかし、熱線が降り止むことはない。冷雅は、上空に飛翔し、その直後に急降下する。背後に回りこんだ後に、その太刀がうねりを上げる。剛柔の右腕は、肩口から切り裂かれる。次いで右足も斬ろうとしたが、それは正面に割って入ったサイコ・ヘアによって拒まれる。残り五つか。厄介だな」

剛柔を確実に仕留めるためには、あのサイコ・ヘアを撃墜するところが絶対的であった。冷雅は、冷静な状況分析で、すでにそれを承知であった。もっとも、河川の方は軽率な攻撃で、逆に窮地に陥らされたが。

「おらあっ！！ 邪魔すんじゃないっ！！」

黒い球体を作りだし、それを空中を飛び回るサイコ・ヘアに向けて放つ。放った十発のうち、二つは見事サイコ・ヘアを捉えたが、残り七つは、冷雅の狙いが甘かったことと、サイコ・ヘアの回避運動が相まって、全てが虚しく消散した。

残り三つとなったサイコ・ヘアが、先ほどまでとは比べ物にならないスピードで動き回り、冷雅を狙ってくる。ビームの速度も速い。左腕を、一発の粒子がかすめる。威力もかなり上がっている。

おそらく、サイコ・ヘアは、数があるうちは、その熱量にものを言わせて攻撃し、数がなくなったら、その分一機に与える気力の量も多くなり、機動力、突貫力、威力等が大きく伸びるのだろう。

（数がダメなら、個々の能力を高めるということか……）

「お前にしちゃ、よくわかってんな？」

（このくらいは当然分かるよ）

そんな他愛もない話をしている間にも、粒子はいたるところから高速で接近している。冷雅は、それをことごとく回避し、球体を発射する。先ほどとは違い、今度は冷雅も狙って撃つ。機動力は大きく伸びているとはいえ、やはり狙って撃つたものは、確実にその目標を捉え、爆散させた。

サイコ・ヘアは、その数を減らされたことでさらに素早く動き回っていた。冷雅は、そのビームを反射的にかわしながら目標を狙って撃ち続けている。素早い動きは、なかなか当てさせてはくれない。冷雅が同時に二発撃ち出した時、うち一発がサイコ・ヘアに当たり、爆発する。残るサイコ・ヘアは一機。機動力も、粒子のスピードも尋常ではないだろうが、闇雲に残り一機を追うより、本体を殺害させることが効率的であると、冷雅は判断した。

冷雅は、自らの持つスピードを限界まで引き出す。すでに両腕を失くした剛柔にとって、防壁はたった一機の、だが強力なサイコ・ヘアしかない。撃ち出される粒子ビームは、接近する冷雅と相まって、かなりの速さで接近する。だが、冷雅はそこで停止し、回避行動に移るような愚行は行わない。体をひねりながら、その攻撃をか

わし、剛柔の真正面につける。冷雅は、その胸に、太刀を突き刺した。

終わった。冷雅は確信した。自らを裏切った者を、自らの手で、闇に葬りさることができた。

だが、安堵した直後に、背中に切り裂かれる痛みが走る。幸いかすめたようだが、サイコ・ヘアはこちらにその先を見せると、嘲笑うかのように粒子をチャージし始める。

「しまった！」

その粒子が、臨界に達し、冷雅に向けて放たれた。

森羅万象。この世の物の全てという意味を持つこの四字熟語は、紅蓮の誇りであり、夢であり、目標であった。

だが、夢は、紅蓮にとっては掛け値なしの悪夢であった。

なぜあいつが持っている？なぜあいつが習得している？

なぜあいつが、森羅万象の超能力者なのだ！？

紅蓮の戸惑いは、動きを当然の如く鈍らせる。放たれる無数の粒子ビームを、必死にかわすも、十発に一発は、ほんのわずかではあっても、紅蓮の体をかすめるものであった。すでに、何百発と放たれている粒子ビームを、紅蓮は憎々しげに睨みながら、それでもなんとか回避運動に徹していた。

（防戦一方の展開……。これでは長く持たない）

理性では分かっているても、肉体は紅蓮の思うようには動いてはいなかった。ゴウランを発動してこんなものでは、ムゲンを最大まで引き上げて使用している向こうの方が、はるかに有利である。それは、外面だけではなく、精神面からしてもだ。

紅蓮は襲い来る粒子の群れをかわすと、お返しとばかりにサイコ・クロウを放ち、爪先から粒子を発射させる。しかし、すでに精神的に後れを取っている紅蓮のクロウは、狙いが粗く、全てが宙を貫くだけである。

「我が導く！ この能力を使って……！」

闇亜がこちらに急速で接近してくる。振り下ろされたビームソードを、背後に回りこんでかわし、爪を振り下ろすが、それは闇亜が振り向きざまに爪の前に突き出したビームソードで受け止められる。「そう、我こそ、森羅万象の使い手となるカスタムサイコストだ！……」

そこで紅蓮は、自分がいままで間違っていたことに気づいた。

自分をここまで動かしたのはなんだ？

自分をここまで導いたのはなんだ？

自分が、これまで戦ってこれたのはなぜだ？

答えは一つしかない。紅蓮も、すでにその答えに気づいていた。

何が正しいとか、間違っているとか。導く者が誰とか、民衆だとか、世界破壊だとか。

そんなもの、今ここで戦う理由には、当てはまらない。当てはまるのは一つ。そう、それは、紅蓮の誇り、夢、目標。

「違う……」

紅蓮は闇亜の言葉を否定する。爪と光剣の間のスパークの眩しさも、今の紅蓮には感じない。

「俺が……」

紅蓮は、爪に力をこめると、一気に闇亜を押し出す。紅蓮は、一喝して、闇亜を吹っ飛ばす。

「森羅万象の超能力者だ……」

闇亜が、壁に勢いよく叩きつけられる。紅蓮は、コピリスからパワーストーンを抜き取り、そして、新たにはめ込む。紅蓮の原点の力を。

『パワーストーン——コピー・クロウ』

コピリスの機械音声さえ、今の紅蓮には、ただの無機質な音にしかならなかった。紅蓮は闇亜に向かって言い放つ。

「黒田闇亜。かつて、闘也さんが言ったとされる言葉を知っているか？」

「何？」

闇亜が、驚愕と懸念をその顔に浮かばせて聞き返す。紅蓮は、闇亜の返答を聞いた直後に、再び口を開く。

「世界を統べるのは、サイコストでもエスパーでもない。たった一人でも、人の話を聞き入れ、それを世の中で提案していく力のある『人間』だと」

その言葉を聞いた闇亜が口元を不敵な笑みを浮かばせて、こちらへと突進してくる。

「なら我がその一人だ!!」

しかし、紅蓮の言葉は、一人の人間という部分ではない。

「貴様は自らのエゴを押し通す独裁者に過ぎない! そうだ——」
紅蓮は、爪をぴたりとくっつけ、まるで一本の刃になったかのように変形させる。何事も寄せ付けぬような威厳すれ漂っていた。紅蓮も、闇亜同様に突進する。

「貴様は、森羅万象の超能力者ではない! ましてや、人を導くなど、愚の骨頂!!」

紅蓮は勢いそのままに闇亜にその刃を突き立てる。

闘也が、二年前にそんな言葉を残したというなら、自分も、それに付け足してやろう。歴史に名を残す気はないが、それでも、自分が生きた証が欲しい。

今、死に行く貴様に、この言葉を送ろう。エゴを押し通さんとしていた男に。

「世界を導くのは、この世界に住む、全ての人間だ!!」

紅蓮の爪が闇亜の心臓に深く突き刺さる。最後のあがきと、光剣を振り回してくるが、それは空いている右手の爪で腕ごと斬りおとす。左手の爪をさらに深く差し込み、背中からその爪が突き出る。紅蓮は、そこで自分のもう一つの能力を解き放つ。ゆっくりと左手の中に、物体が生成されていくのが実感できた。紅蓮は闇亜の胸部を蹴りつけ、その体から爪を引き抜いた。

両爪の能力を解くと、強く握られた左手の中には、まばゆい光を放つパワーストーンがあった。

「これが、俺の力……」

ついに手に入れた。

待ち望んでいた、心の底から、幼き時から渴望していたもの。それが、いままさに自らの手の中にある。

紅蓮は、二つのパワーストーンを抜き取ってコピフにしまいこむと、新たに創られたまばゆく光パワーストーンを、コピリスにはめ込み、ふたを閉める。コピリスから、待ち望んでいた単語が発せられる。

『パワーストーン——オール』

44、森羅万象の超能力者

背後より迫ったビームは、黒い球体に直撃し、相殺される。冷雅が隙を突かれたとき、河川が一瞬にして冷雅の体をのつとり、後退しながら球体を作り、盾代わりとしたのだ。河川は、その勢いのまま、所有者のいなくなったサイコ・ヘアを、太刀で真つ二つに切り裂いた。

「終わったか……」

押しのけるようにして、冷雅は河川の意識を内面に閉じ込める。あたりは閑散としていた。すでに戦闘は終わっていた。いや、紅蓮の働きによっては、もしかしたら、戦争も終わっているのかもしれない。

「！……何だ？」

何かが近づいている気がする。とてつもなく大きなエネルギー。サイコストやエスパーの接近に反応する、この頭痛が、それを知らせていた。

「闇亜様が暴走したのか？」

（まさか……赤火……紅蓮？）

しかし、その時の兄弟二人には、その答えは分からなかった。

戦闘を終え、乱州の怪我の具合を確かめていた闘也もまた、強大なエネルギー反応を感じていた。隣に座り込んでいる乱州もまた、同様らしい。

「かなり強い……サイコスト反応……」

乱州が、感覚的部分から予想を述べる。黒田闇亜が、紅蓮との戦闘の中で、膨大な力を解き放った可能性がある。急いで下階へと、闘也と乱州は向かう。途中で、的射、秋人、由利の三人も合流し、地下十一階へと降り立つ。

そこにいたのは、無残に引き裂かれ、ほとんど原型をとどめてい

ない闇亜と、これまで以上のエネルギーを持った紅蓮であった。

「紅蓮！ 終わったのか？」

闘也は、いまだ鋭い眼光を闇亜に向けている紅蓮に呼びかける。だが、紅蓮の方はその鋭い眼光のまま、五人を睨みつけた。

「まだ、終わってない。全てを、破壊しつくすまでは！！！！」

何だ？何を言っている？

「俺が、森羅万象の超能力者だっ！！！！」

紅蓮とは思えないような、狂ったような叫び声が鼓膜を振るわせる。闘也には、未だ理解ができていない。

不意に、紅蓮が、拳を握り締め、静かに目を閉じると、紅蓮の周りを、まるで電磁のような球体が包み込む。その能力の存在を知っていた乱州が、闘也の横で焦りながら口を開く。

「あれは爆発だ！ 止めないとまずいぜ！」

「的射！」

乱州の言葉を聞いた闘也は、すぐに的射に呼びかける。的射は、すでに自分が名前を呼ばれた理由を分かっているようで、すぐにスナイパーライフルを構えると、その標準に、紅蓮の右腕を重ね、銃口より弾丸を発射する。

しかし、狙いは正確で、その上命中したというのに、銃弾は弾き飛ばされ、当の紅蓮には、傷一つなかった。

「防御！？」

銃弾を発射した的射は、驚愕に満ちた声を上げる。

闘也の中で、一つの仮定が生まれ、そして、その仮定が、まっとうな真実となつて、目の前の光景に映し出された。

「森羅^{オール}万象に……飲まれているというのか……」

あいつが求め続けていた力、森羅万象。先ほどの彼の言動も考慮すれば、揺ぎ無い真実となっている。

爆発の能力によるエネルギーチャージはいまだ続いていた。爆発の能力は、エネルギーを蓄積させ、それを一気に放出させることにより、広範囲にわたる電磁爆発を引き起こす。対要塞戦、重要施設

破壊、奇襲、奥の手など、一撃必殺としては申し分ない威力を有しているのだ。その恐るべき力の範囲は、どんなに狭くとも、五キロはゆうに超える。熟練している者なら、百キロ先にも、爆風等の影響を及ぼすこともある。紅蓮がどの程度使いこなせるかは不明だが、距離を取っておくに越したことはない。エネルギー解放は、チャージ開始より五分もすれば臨界に達する。その前に、距離を取らねば、自分達は電磁による熱で焼かれ、肉体を残さぬまま死ぬであろう。それだけは避けねばならない。

「急ぐぞ、ここもあぶねえ！」

秋人が半ば慌てながらも指示を下す。秋人に続き、的射も上階へと向かう。乱州もそれに続いて上階へと向かう。由利が、微動だにしない闘也に気づき、声をかけてくる。

「闘也、早くしないと、紅蓮のチャージが——」

「分かっている。すぐに行く」

「・・・・・・闘也・・・・・・」

耐えかねて、由利も上階に撤退していく。闘也は、エネルギーチャージを続ける紅蓮に向けて言い放った。

「紅蓮！ 皆攻略戦の地で、決着をつけさせてもらうぞ！」

紅蓮からの返答はなかった。だが、それでもいい。決着をつけ、あいつを正気に戻すのは、自分達が今一番しなければならぬことなのだ。何せ、闘也達五人には、紅蓮により正気を取り戻してもらった借りがあり、責任がある。

その責任を、こんなところで放棄されてたまるか。

「いつものお前らしく、正々堂々とな」

最後の言葉には、軽く皮肉を含んだつもりであったが、紅蓮はおそらく気にしてはいないだろう。闘也は、エネルギーチャージをする紅蓮から、矢のごとく離れた。

膨大なエネルギーを感知した後、闘也をはじめとする五人が最下層へ降り、しばらくしたところで、五人のうちの三人が現れる。そ

の三人の最後尾にいた乱州が、冷雅の姿を見つけ、近くに寄ってくる。

「冷雅。紅蓮が爆発の能力を使ってくる！ここもおそらく崩壊する。すぐに逃げるんだ」

普段は揚々としている乱州が、ここまで真剣な目を向けるといふことは、よっぽどの重大事なのだと悟る。冷雅は、乱州のその言葉を信じ、更に後から来た由利と共に、本部の上階へと進んでいた。そこで冷雅は、彼らの中に、闘也が混じっていないことに気づく。

「魂波闘也は？」

「すぐに来るっていつて、紅蓮のところに残って——」

由利が全て言い終える前に、一度彼らの頭上を超え、こちらに気づいて速度を落としてきた人影が写る。闘也である。彼は、あの短時間でここまで戻ってきたのである。冷雅はそのスピードに感嘆していたが、そんなことを言っていられる状況ではないことは、重々承知であった。

「皆攻略戦の場所で、やつとの決着をつける」

「あそこで？」

冷雅は聞き返したが、それに対する返答はなかった。闘也がスピードを速め、こちらを引き離していく。闘也に続いて、乱州と由利もスピードを上げた。冷雅もそれにならって、スピードを速め、本部を更にも上っていった。

水中へと飛び出したところには、すでに先を進んでいた秋人と由利に追いついていた。十分な息を整えて、水中へと身を投じる。緑がかった青い水が、闘也達を包み込む。水は、入ってきた時と同様、冷たかった。開戦から二月ほど、六月も終わりに近づいていたが、暑さは全く感じられなかった。海面からは程近いのに、暗い。おそらく、黒雲が空を覆いつくしているのだろう。そして、その予測は当たった。

海面に幾つもの水柱を立てながら、闘也達は海から飛び出した。

空自体暗いため、水から飛び出した時によくある眩しい感覚は、全くなかった。雷鳴すら聞こえる空であった。今すぐにも、雨が降りそうである。

「急げ、遅れたら間にあわねえよ!!」

当たり前のことを秋人が慌てながら言う。パニックで思考回路がショートして、燃え出しているのかもしれない。雨でも降れば、彼の脳内の火災も収まるだろうか？ そんなことを考えながら、闘也は苦笑を漏らした。

45、自らを断ち切り、全てを破壊する

チャージを続ける電磁の中で、紅蓮は集中していた。

自分は間違っではない。戦いを憎んでいるわけでも、家族を殺された憎しみがあるわけでもなかった。それでも、戦い続けた。いくらダメージを受けても戦い続けた。たった一つの目標のために。それはすでに叶った。だが、そのパワーストーンをつけた瞬間、体がついていかなかった。恐ろしいほどのエネルギーは、紅蓮の筋肉系の神経を侵し、半分のとった状態であった。それゆえ、制御が利かない。そんな中でも、紅蓮は集中していた。筋肉的にはのつとられ、すでに意識も朦朧としはじめていた。それでも集中していたのは、能力に完全に飲み込まれないためだ。サイコストが、能力を飲み込むのではなく、逆に飲み込まれたら、それは人として処罰される。それだけは避けるためだ。

「チャージ終了。予測爆破範囲、半径二十二キロ以内」

二十二キロの中に、闘也達がいらないことを、紅蓮は切に願った。脳内から、能力から自分からか、声が聞こえた気がした。

——自らを断ち切り、全てを破壊する。これで。

「爆破」

その一言と共に、紅蓮の周囲を覆っていた電磁が一瞬縮小し、その後一気に膨張する。建物が次々と崩れ、水が流れ込んでくる。しかし、その水も、爆発の熱に促されて水蒸気爆発を起こし、紅蓮には届かなかった。

冷雅を含めた六人の眼下で、巨大な水柱が上がる。だが、それより先に、電磁球が、膨張してこちらに接近してくるのが映った。闘也達は、それに気づくと、一気に撤退を開始する。電磁球は尚も膨張し、迫ってくる。秋人が的射や由利を押しながら、全速力で飛び、闘也や乱州もまた、冷雅を引きながら逃げていた。冷雅も、それな

りのスピードを保持し、完全に後れているわけではなかったが、ただ飛んでるだけでは、逃げ切る可能性も下がっていた、と闘也は後々感じていた。

どのくらい飛んだらうか。電磁の爆発は収まり、辺りの草原は見るも無残な姿となっていた。

「すさまじいな。初めてなのに、ここまでとは」

闘也は感嘆の声を漏らした。

冷雅は、皆のあつた場所へと戻った。その中に、二つの人影があった。その距離では冷雅は分からなかったが、弟の河川は、ある程度予測できていたらしい。

（兄さん、あれ、光輝さんと大地さんじゃ……）

そして、その予測は的を射ていた。かなり負傷してはいたが、それでも、二人とも生きていた。

「冷雅！？ しぶとく生きてたのか！？」

「しぶとくは余計だ。そっちこそ無事か？」

「あれを食らって無事なわけがないだろう」

大地がこんな状態でありながら冷静に言う。口調とは裏腹に、怪我はひどかった。戦闘での負傷もあるだろうが、それでも傷は多すぎた。

「治療するぞ」

「応急処置より、本格的な治療の方がいいんだがな」

その光輝の言葉に、皮肉が込められていたことに冷雅は気づいた。脳内の河川の助力もあって、回復の能力を発動させる。その能力を見た二人は驚愕に顔を歪ませていたが、事情を説明すると、すぐに顔を緩めた。

闘也は、今日何度目かの深呼吸をした。大きく息を吸い、吐き出す。遥遠くに、一人の少年の姿が見える。少年は迷うことなくサイコ・クローを展開し、その爪先から粒子ビームを撃ちはなってくる。

闘也に向けられたその粒子を、軽々と回避すると、闘也はソウルソードを作り出し、向かい来る少年へと真正面から突っ込んだ。

牽制と奇襲を併用して放ったサイコ・クロウは、予想通りあっさりとかわされたが、それでも構わなかった。紅蓮は、ゆつくりと、いつも言ってきた言葉を放った。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

五人の英雄が、それぞれの持ち場をわきまえながらも、こちらに攻撃をしかけてくる。今思えば、紅蓮はこの五人を同時に相手するのは初めてであった、でも、なぜか、後れを取る気はしなかった。根拠はない。でも、そんな気がした。

秋人が先頭に突っ込み、背後からの射と由利が遠距離攻撃を放ってくる。紅蓮は後退しながらその攻撃をかわす。その間にも秋人は接近し、殴りかかってくる。紅蓮は爪を振り回して接近を拒んだが、軽かわされ、その拳をぶつけられる。すでに背後には乱州が回りこんでいた。伸ばした腕の先の拳が諸に当たる。

「こんな……」

五人。たった五人である戦争を終結に導いたと言われている。大半の者は信じられないだろうし、紅蓮ですら、（闘也以外は）半信半疑であった。だが、五人同時に相手をした途端、その半信半疑はどこかに消え去り、あれは事実だったのだと認めざるを得ない。

頭上から闘也がソウルソードを構えて躍り出る。紅蓮は爪でその剣を受け止め、はね返す。しかし、相手を吹っ飛ばした直後に、秋人が蹴りを入れてくる。紅蓮は体勢を立て直し、サイコ・クロウを展開する。十の爪はそれぞれ展開し、迫り来る乱州と秋人を牽制する。紅蓮は、粒子の能力でさらに二人を追いつまむ。今度は下方から襲い掛かってきた闘也が、シオルダータックルをぶつけてくる。いきなりの突進に虚を突かれた紅蓮は回避できぬまま、体勢を崩す。

再び闘也が正面から斬りかかってくる。紅蓮は、それを作り出した剣で受け止めると、はね返そうと力をこめる。だが、今度はそう

簡単には離れなかった。こちらがいなそうかと動きを見せた直後、闘也は上空に逃げた。その時であった。闘也の飛び去った後から現れたのは、的射と由利の遠距離攻撃であったのだ。紅蓮が咄嗟に使った防御の能力がなければ、今頃は蜂の巣であっただろう。

五人での流れるような連携。下手をすれば、味方を殺しかねないというのに、彼らは絶妙なタイミングで、自らの体を傷つけず、また確実に、紅蓮を追い込んでいった。

「速い！」

すでに紅蓮の眼前に、秋人が迫っている。人一人分もない隙間で一気に加速し、拳をぶつけてくる。紅蓮はたまらず吹っ飛ばされる。乱州が接近しながら腕を伸ばして追撃してくる。闘也もだめ押しとばかりにソウルブーメランを投げつけてくる。

「この程度で……」

——負けてたまるか。

紅蓮は体勢を立て直し、ソウルブーメランを弾き飛ばすと、乱州の腕を掴む。右手にきらめく刃を、紅蓮は躊躇なくその腕に振り下ろす。しかし、乱州の腕は、切れる前に消散し、紅蓮の腕から消えた。

龍我王との戦闘で見た、量子化の現象。

身体的能力だからこそでできる技。

勝つためでも殺すためでもなく、生きるために、死なぬために習得し、発動させた技。

これが、あの波気乱州の戦い。

「はあああっ——」

背後より出現した乱州が、腕を巨大化させ、こちらに突き出す。堅い拳がしたたかに紅蓮の体を殴り、そのまま急降下していく。

体勢を立て直そうとしていた紅蓮に、空中にとどまる五人の姿が映った。

追撃をすることもなく、ただじっと、こちらを見据えている。もうこれないと判断したのか、それとも。

（俺に、情けをかけるつもりか！！）

敵に情けをかけられることが、どれだけの屈辱であるかを、紅蓮は理解していた。いや、しているつもりであった。

しかし、このときばかりは、情けをかけられたことによる苛立ちや怒りが、全身を包み込んだ。そう、彼らにとつて自分は敵なのだ。敵ならば、速急にこころした方が、向こうにはいいし、やられるこちら側も、逆にすがすがしい。だが、こうまで何もしてこないと、さすがに抑えきれない。

感情の抑制。それにより紅蓮の戦闘能力は引き出され、戦場でも迷いを作ることなく勝ち抜いてこれた。怒りも、同情も、迷いも、敵に対する哀れみも、感情を抑制することで、全て脳で感情として処理される前にかき消してきた。

しかし、ここに至って、遂にその感情抑制のリミッターは外された。

紅蓮は、体勢を立て直すと、サイコ・クロウを展開し、遠方に見える五人へと粒子を発射させながら接近させる。

「こいつら……」

自分に情けをかけたやつに、もはや手加減する必要はない。対する五人は気づいていないかもしれないが、紅蓮はまだ、実力の半分程度しか出していない。ゴウランも発動させていない状態なのだ。向こうは、おそらく自分達の連携力でその手加減に気づいていないのだ。思い込みをしている。

こちらの連携力が、相手を翻弄している、と。

その油断が、命取りであることを教えてやる。

「まずは貴様からだ……！！」

紅蓮が目をつけたのは、秋人であった。

秋人は、その恐るべき反応力とそれに対応するスピードによる回避力と、一撃離脱による、敵撃破を主流としている。自らが武器を持たない分、もう一つ的能力、飛躍により出現する翼を武器代わりになっている。秋人を囿や、体勢や陣形を崩すために先行してきたら、

こちらが大きく不利となる。そう考えての判断であった。

紅蓮は素早く相手に向けて粒子を発射する。秋人はいとも容易く回避し、逆に攻撃に転じてくる。しかし、紅蓮は、長年の共闘により、すでに相手の弱点にも気づいていた。

秋人は、頭が悪い。面と向かって言ったことはないが、確証はある。そして、その馬鹿さ故に、攻撃が単調であるのだ。大抵は真正面から突っ込んでくる。よほどの自信を兼ね備えているのだろうか、自信だけなら、誰だって持つことができる。

「隙だらけだ!!」

紅蓮は、粒子を撃ちこみ、秋人の右翼、左足を貫く。秋人雅バランスを崩し、紅蓮との距離を取る。だが、その行動さえ、紅蓮の計算内であり、作戦通りであった。

紅蓮は続けざまに粒子を撃ちこむ。急激に失速した秋人に当てることは容易であった。どうにか翼を盾にして防ごうとしたが、ビームはそのまま左翼を貫通し、右肩に吸い込まれるように近づき、貫いた。完璧に失速した秋人は飛行機が墜落するかのように、回転しながら落ちていった。

「秋人!!」

闘也が、友の名を呼ぶ声が聞こえる。だが、紅蓮はその声に構っている暇はなかった。すぐに次なるターゲット――由利に向かって、粒子を撃ち込んだ。

46、敗北の兆候

紅蓮の次なるターゲットが、由利であることを闘也が感づくのは、由利に向かつて粒子が撃ちこまれ、それを咄嗟に防いだ由利の姿を確認してからであった。由利の展開した、対粒子圧縮砲電磁展開型周囲包装球体盾、バリア・フィールドに、紅蓮の撃ちはなった粒子がはじける。元々、このバリアフィールドは、稀に見る高エネルギー集束型の大口徑ビーム砲を防ぐことを前提に設計してある。指先から放たれる程度の粒子は軽く防ぐことが可能である。

「なめたまねを……」

由利がうめき声と共に漏らし、その粒子の群れがおさまった隙を狙って、火炎球を作り出し、それを紅蓮に向かつて連発する。しかし、紅蓮はその火炎球を楽々とかわし、由利に接近してくる。由利の少し前で、的射が牽制とばかりに銃弾を放っているが、機敏な紅蓮の動きに、その弾はついていけなかった。耐えかねて、乱州が腕を伸ばし、闘也もソウルソードを構えて接近する。一瞬にして紅蓮の真正面にたどり着いた闘也は、勢いよくソウルソードを振りぬく。しかし、その攻撃はかわされ、尚も由利に接近する。後から伸びてきた乱州の腕に掴まり、その伸縮性を利用して、一気に加速する。距離が縮まると、闘也は、その腕を放し、勢いのままに突っ込む。

しかし、ソウルダブルソードに切り替えたにも関わらず、闘也の剣は宙を薙ぐだけの結果に終わった。それほど紅蓮の加速が凄まじいものであったのだ。

——間に合わない。

すでに紅蓮は由利の真正面につけ、その爪を立てて、由利の右腕を肩口から切り裂く。無残だった。闘也は、この上ない戦慄を覚えた。闘也は蹴り飛ばされて地上へと落下していく由利に構っている暇はなかった。急加速で紅蓮の真正面まで接近すると、ソウルソードを煌かせ、横薙ぎに振るう。今回は両爪で軽々しく防ぎ、弾き飛

ばすと、闘也を蹴り飛ばす。間髪いれずに、乱州が腕を伸ばして攻撃を開始するが、それすらもかわされ、距離を取られる。

闘也は体勢を立て直すと、自分達より遙上空からこちらを見下ろす少年を見据えた。

ここまで徹底的にやるとは、やはり紅蓮の感情も残っているのだろうか？ それとも、ここまでの徹底さも、能力によるものなのか？すでにこちらの戦力は大きく削られ、早くも秋人と由利を失った。的射は遠距離型であるゆえに、近づかれると弱い。近接戦闘用の武器として、スナイパーライフルの銃口より、高水压を噴射することによる水剣を備えているが、その攻撃は範囲が広すぎて、下手をすればこちらも巻き込みかねない。大振りでなければならぬほどの噴出量であるため、使い勝手ははなはだしく悪いのは事実だ。

乱州は、的射とは対照的に、接近戦型である。遠距離攻撃といったら、腕を伸ばしての攻撃以外、これと言ったものはない。遠方からの攻撃は、シールドとバリア・フィールドで防ぐことができる。乱州の使用するバリア・フィールドは、由利とは正式名称が異なり、対粒子圧縮砲電磁展開型前方防御電磁集束盾と呼ばれる。つまり、その能力を向上させる代わりに、前方のみを防御することになっている。

対する紅蓮は、前能力を使いまわすことができるため、弱点が皆無に等しい。闘也は歯軋りするほどに、強く歯を喰いしばった。

圧倒的なまでの存在感、そして、その強さそのもの。紅蓮の放っているものが、闘也達をここまでの劣勢に追い込んでいるのは、明確な気さえた。

紅蓮は、その両爪を展開させ、サイコ・クロウをこちらに突進させてくる。闘也達は、その攻撃の軌跡を読みぬき、易々とかわす。しかし、サイコ・クロウはその攻撃の手を緩めず、急旋回して、再びこちらに向かってくる。今度は、粒子ビームをその爪先から放ちながら。

三人は別方向にそれを回避する。しかし、これこそが紅蓮の目論

んでいたことであつた。

戦力の分断された三人のうちの一人——的射へと、サイコ・クロウを集中させ、一気に追い込みをかけてくる。的射はそのビームを、爪を、何とかかわし続けていたが、サイコ・クロウの放ったビームの一つが、彼女の携行しているスナイパーライフルに命中し、爆散する。その爆発に吹き飛ばされた的射に、すでにサイコ・クロウは接近し、右腕をビームが貫くと同時に、彼女の左足は無残に爪に貫かれ、引き裂かれる。

「的射！！ 的射ッ！！」

返事はなかった。的射はただ悲鳴という絶叫を上げながら、地上へと落下していく。闘也の奥底が、マグマのように煮えたぎっている。すでに、その怒りのマグマは、彼の体を通して噴火寸前であつた。

「よくも的射まで……！！！！」

愛する者を撃たれた悲しみ、怒り、撃つた者に対しての憤り、苛立ち。そして、何もできず、ただ失うだけの自分に、闘也は心底憤りを覚えた。あの時と同じだ。

超能力戦争の中ごろ、闘也の母親が、エスパーの八幹部の一人によつてさらわれた。闘也達は彼の母が捕らわれている山への侵入ルートと、それを成功させるための作戦を立案し、決行した。一方の八幹部の一人、ファーガは、闘也の母を殺す宣言をし、指定された場所に来なければ、仲間も殺す——と。

しかし、闘也はそれに対し、自分が来るまでは殺すなと伝えていた。しかし、闘也達がその場所に向かつた時には、すでに母は帰らぬ人となっていた。実は、その時に、闘也は覚醒し、ムゲンを初めて引き起こしたのである。その悲しみや怒りの感情を覚えたあの時と、今この瞬間の光景が、いかなほどダブっていた。

「くそおおっ！！！！」

闘也は怒りに身を任せ、雄叫びを上げながら、上空にたたずむ紅蓮へと突っ込む。

「闘也！ あのバカ！」

背後から乱州の制止の声が飛ぶが、闘也はそれに構っている暇はなかった。再び向けられたサイコ・クロウのビームを、爪を、軽々とかわすと、さらに接近する。魂の能力が怒りという感情によって、その能力を膨張させ、通常よりもはるかに大きな反応力を生み出していた。

両手それぞれに、剣を作り出す。闘也はダブルソウルソードを構え、紅蓮に向かって、交差させた。

「……………」

切り結んだ先に、紅蓮はいなかった。すでに闘也の攻撃を読みきり、距離を取り、攻撃に転じていた。

四方からサイコ・クロウがその爪先に粒子を臨界させ、すでに放っていた。そして、後方からは紅蓮もビームを撃ちはなっている。

「闘也！ どけー！」

口調は激しかったが、それは闘也を嫌っているのではなく、必死になっっているものであることを、闘也は知覚していた。

闘也が紅蓮に攻撃をかわされた時から、すでに乱州は行動を起こしていた。身動きのできない闘也を突き飛ばし、バリア・フィールドを展開する。いくつかのビームは、その盾に弾かれる。が、その場所以外にあったサイコ・クロウが、乱州の左腕を、右足を貫き、細く鋭く尖ったサイコ・クロウの一つが、乱州の腹部を貫通する。何かがはちきれするような痛み。乱州は、その痛みに耐えていたが、すぐに耐え切れなくなり、血を吐き出した。

「がはっー！」

「乱州ー！」

闘也の、相棒の声が聞こえる。乱州は、このときようやく見つけた。紅蓮にあつて、自分にはなかったもの。そして、それを自分は今、手に入れた。

たとえ自らの手で誰かを傷つけても、それが愛する者であるなら、自分の命を投げ出しても、救う。それが、今までの自分には足りない

かったのだ。

「闘也……」

乱州は、口元から、腹部から、血を流しながら相棒の名を呼んだ。

「俺は——」

絶対に死なない。という言葉は、乱州の口から出ることはなかった。紅蓮が、乱州の眼前に現れ、たった今空いた腹部のすぐ上を蹴りつける。その蹴りは、想像以上の威力があった。そのまま、乱州は地面に向かって急降下していった。

負けて戻ってくるな。

勝って戻って来い。

どんなに傷ついていてもいい。生きてさえいれば、俺は。

乱州が落とされたことに闘也は愕然としていた。頭の中で噴火寸前であったマグマが、遂に噴火した。

「うあああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

闘也の猛獣のような雄叫びの後、闘也を包む黄色い魂の色は、まるで金にその色を変えたように、まばゆい微粒子を撒き散らし始めた。

47、真の敵は己

紅蓮の目の前には、怒りに燃え盛った闘也がこちらを睨んでいた。その眼光は鋭く、紅蓮とほぼ互角の眼光であった。

闘也は、一つ、大仰の深呼吸をした後、再びこちらを睨みつけ、そして、真正面から突っ込んできた。紅蓮は、サイコ・クロウを展開し、それを闘也へと向ける。サイコ・クロウの先から発射された粒子は、まるで闘也に命中するのを拒むように、闘也の横を抜けていく。紅蓮は、すぐにサイコ・クロウを呼び戻すと、斬りかかってきた闘也を、両爪で対抗する。二つの金属の間で激しく火花が散る。紅蓮は、がら空きになっている闘也の腹部を蹴りつける。闘也はよろめいたが、紅蓮が追撃する前に体勢を立て直し、距離を取りながら、弾丸を撃ち込んでいる。

——怒りが包んでいても、冷静な判断ができる。いや、怒っているからこそかもしれない。

「ぐうううれえええん！！！！！」

闘也が怒号を飛ばしながらこちらへと接近してくる。粒子を撃ち込んだが、そう簡単には当たってはくれない。さらに距離が縮まり、小ぶりのソウルツインソードで頭上から叩きつけてくる。紅蓮はそれを、後退しながら粒子ビームを撃ち込んで拒む。紅蓮の放った粒子ビームが、闘也のソウルツインソードに命中し、弾き飛ばす。

紅蓮はその隙を見逃すことなく、粒子を撃ち込む。牽制代わりに放ったソウルブローメランを貫通し、粒子は闘也の左肩に命中する。

「くっ……！！！」

闘也の苛立ちの声が届く。紅蓮は、これを機に接近する。闘也の方は接近を許すまいと弾丸を放ってはいるが、もう遅い。一気に眼前まで接近すると、闘也が右手にグリップしていた銃を切り裂く。紅蓮は、剣を作り出し、その切っ先を闘也の腹部へと突き刺した。

一瞬、ほんの一瞬であったが、時間が止まった。紅蓮はそう感じ

た。

しかし、すぐに時間は現実に従い、動き始めた。闘也が紅蓮を蹴りつけて、強制的に自分の腹部から剣を抜き取る。なんという強引な状況回避。だが、そうでなければ面白くない。

「これで終わらせる。今度こそ……」

紅蓮は、自らの傍らに、僅かに白く、薄くなつた分身を作り出す。魂である。紅蓮の魂は、実体の紅蓮同様、両爪を装備していた。紅蓮は、まるで命令するかのような口調で叫んだ。

「いけよ！！ サイコ・クロウツ！！！」

実体を含めた五人の紅蓮の指先から、サイコ・クロウが放たれる。計五十のサイコ・クロウを前に、闘也は成す術がなかった。どうにか回避しようと試みていたが、サイコ・クロウの先から放たれた粒子は、闘也の各所を、まるで切り刻むように貫いていった。そして、闘也は声を漏らすこともなく、堕ちていった。

「俺が……」

紅蓮は、自分自身に、確認あするかのように行った。

「森羅万象の超能力者だ」

地上で光輝と大地の手当てを終わらせたあと、冷雅は、上空から落ちてくる一人の少年を見つけた。秋人である。紅蓮との戦いに敗れたのだろうか。運のいいことに、こちらに真っ直ぐに堕ちてくる。

「おいおい！ 何だよ！？」

冷雅は、かろうじて秋人を受け止める。ひどい傷である。ビームの貫通によるものだろう。各所は、綺麗に丸い穴を、いくつも空けていた。

「河川！」

冷雅は弟の名を呼ぶ。その当の弟は、すでに状況を理解しているらしい。あっさりと冷雅を押しつけ、治療に当たる。各所の傷はひどい。それは先ほども感じていたことである。それだけ、ひどいということであつた。

河川は、その治療に専念し、空けられた各所の穴を塞ぎ、内部から治療する。その時もう一つの人影が堕ちてくる。今度は、少女である。さっそく効果が出たのであろう。秋人は飛び起きる。

「あ、まだ動かない方が……」

「軽く走るくらい、治療前でもできるさ」

そう一言言つと、秋人は走り去り、遠くに映った少女を地上で受け止め、数秒とかからぬうちに戻ってくる。

連れ帰ってきた秋人の顔には、恐怖と不安しか見えなかった。少女は右腕を肩口から引き裂かれていた。秋人の目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。

（治せるか？）

「うん。腕の一本や二本、数分あれば、なんとか復活はできる」

しかし、その数分の治療が終わる前に、新たな人が人が、空から落ちてくる。秋人は、再びそちらへと駆け出し、連れ帰ってきた。的射である。こちらもかなりの状態であった。爆発により、微量ではあるが、放射能を浴びている。治すことはできそうだが、何より時間がかかる。河川は、由利の治療と並行して、的射の治療に当たる。由利の治療が終わったところ、やはり新たな敗北者が空から落ちてくる。

「まさか、そんな……」

たった一人で、すでに四人も倒したというのか。紅蓮は？

河川は、的射の足を復活させると、すぐに秋人によって運ばれてきた乱州の治療に当たる。左腕、右足、腹部には、おそらくサイコ・クロウ本体が突貫したであろう痕がある。河川の目は絶えず患部のチェックをし、次々と回復させていった。

しかし、河川、その内部にいる冷雅、そして、治療された四人が息を呑んだ。

無数のビームが空中で網のように展開した後、一人の少年が、音もなく堕ちてくる。彼らは、その堕ちてきたものが、誰なのかは、

重々承知であった。

運ばれてきたのは、闘也であった。いたるところうい粒子によって貫かれ、腹部は剣で突き刺されたらしい大きな痕があった。

「闘也！」

「おい、闘也ッ！！」

「闘也あっ！！」

「闘也！！ 闘也！」

四人はそれぞれが、最も信頼している友の名を呼んでいる。河川は彼らの気持ちを羨ましく思いながらも、治療を開始した。患部のダメージが大きかったが、それでも何とか、治療に成功した。

五人の体調が回復したころ、空中ではいまだ、一つの赤い光がとどまっていた。冷雅は、隊長格たる闘也に言った。

「俺達ができるのは、このくらいしかない。だが、闘也。約束して欲しいことがある」

「何だ」

闘也が聞き返してくる。冷雅は、その返答が聞こえると、再びその口を開く。

「あいつを……紅蓮を倒せ。けど、絶対に殺すな」

「えっ？」

闘也が疑問を顔に浮かべている。冷雅の意志は、決意は、揺るがない。

——お前らなんか、あいつを殺されてたまるかよ。

「紅蓮は、俺が殺す。この手で」

本心であった。闘也はそれに対し、返答した。

「分かった。俺達は、あいつを倒す……いや、止めてみせる」

「頼む」

その一言を告げると、五人は、上空の赤い光へと向かっていった。

途中、彼の目には、驚きの光景が映る。五人は、ゆっくりと近づき、一つの体となって、紅蓮へと向かっていったのである。しかし、

その時の冷雅や河川には、あの現象の正体が分からなかった。

地上からかなりの速さで、巨大な一つの光がこちらに向かっていくことは、すでに紅蓮も確認していた。その光はすぐに紅蓮の目の前まで接近する。光は、紅蓮を欺くように、眼前を通過すると、距離を取って旋回し、こちらに向かってきた。

「融合か！」

紅蓮の中で、今彼らに起こっている現象を確信する。紅蓮は、粒子ビームを放ち、闘也達の接近を拒む。しかし、闘也達はその熱線を、まるで最初からこちらが狙っていないかのように、鮮やかに回避する。紅蓮の中で、相手の華麗さ、鮮やかさに対する憤りが芽生える。紅蓮は、両爪を装備すると、振り下ろされたソウルソードを受け止める。かなりの力だ。いくら両手持ちとはいえ、この押してくる感じは、今までとは比べ物にならない。闘也達が、見限ったのか、剣を放し、距離を取ってくる。遠距離攻撃でも仕掛けてくるつもりだろうが、そうはさせない。紅蓮の指先から、ビームが発射され、吸い込まれるように闘也達に向かった。

しかし、そのビームあ、彼らの目の前で弾け、消散する。由利のバリア・フィールドである。強固な粒子砲用の防御壁は、紅蓮の扱う粒子程度では、びくともしない。

見ると、闘也達は、握っていた剣を大きくし始めた。しかも、時折闘也が使う大きめの剣を超え、更に巨大化していく。あれよあれよという間に、その剣は、まるで巨人が両手持ちでようやく扱えるような巨大さに変化した。

「これほどまでとは……」

感嘆と驚愕を感じずにはいらなかった。第一次超能力戦争の折、最終決戦において、彼らが使用したとされる、人類史上最強の剣。その巨大さは聞いてはいたが、これほどまでとは思わなかった。油断していた。侮っていた。だが、いまさら逃げるわけにはいけない。逃げることは、すなわち負けることだ。自分に負けは許されない。

戦うことでしか生きられない自分が。

紅蓮を包み込んでいた赤い光が、微粒子を撒き散らしながら輝き始めた。

出現させた巨大な剣を、闘也は躊躇なく紅蓮へと振り下ろした。

一方の紅蓮はそんなことにやられるはずもなく、防御の能力で防ぎきる。闘也は、すぐに剣を放すと、急接近して、紅蓮の腹部の僅か下を薙ぐ。紅蓮は、攻撃を見切り、かなりの速さで後ろに飛び退く。紅蓮もまた、剣を作り出す。巨大化させ、いつも闘也が使用している、ビックソウルソードほどの大きさにはなった。紅蓮は、その剣で太刀打ちしようとしているのだ。

闘也は、先ほどと同じ場所に剣を入れる、今度は命中した。紅蓮の左足が、無残にも引き裂かれ、切り口から大量の血が噴出す。闘也はこの隙を見逃すはずもなく、今度は腕を斬りおとすべく、剣を振り下ろす。それに対し、紅蓮は大剣でそれを受け止める。どちらの刃も、無駄な刃こぼれが一切なかった。闘也は、決心を決めた。紅蓮は、この上なく力を込めて押してきている。これで決めるしかないのだ。

闘也は、その手先から炎を生み出し、紅蓮へと着火させる。火は瞬く間に紅蓮の体を包み込む。ゴウランによる光の赤、灼熱の炎が生み出す赤は、色合いとしては、この上なく絶妙なものであった。引き続き、秋人の風が舞い起こり、その炎の威力をさらに高める。

「ぐあああああつ！！！」

紅蓮のうめき声が聞こえる。できることなら、こんなことはしたくない。だが、しなければならぬ時なのだ。その後、射撃の水が、炎全てを、一瞬にしてかき消す。ひりつくような痛みを、今紅蓮は味わっているのであらう。そこに、乱州の雷が紅蓮を直撃する。水を通して、紅蓮の体には、通常以上の電流が走っている。闘也は、こんなことをしてしまったことを、この上なく後悔していた。

しかし、それでも紅蓮は倒れなかった。一度は弱まった力を、再び強め、じりじりと押し込んでくる。

「紅蓮！！ もうやめろ！ 俺だって本当は、こんなことはしたくない！」

「うるさいっ！！」

しかし、反論した紅蓮の意志は、あっけなく崩されることとなる。

闘也は、紅蓮の握り締めていた剣を半ばから切り裂いた。先ほどまで彼が手加減していたように、こちらも手加減をしていたのだ。無論、手加減なしでは、すでに帰らぬものとなっているだろうが。

闘也は、弾かれ、落ちてくる剣の破片を利用し、紅蓮へと一気に接近する。

腕を巨大化させ、紅蓮を、晴れ間が見え始めた空へと殴り上げる。紅蓮は力なく投げ出されている。むろん、それで終わる気はない。疾風の如きスピードで接近し、様々な角度から、殴り、蹴り、紅蓮の動きをさらに鈍らせる。鈍くなったところに、スナイパーライフルを構え、銃弾を発射する。紅蓮の右肩に、吸い込まれるように当たった銃弾は、そのまま貫通し、空高くへと消え去った。そして、闘也は両手を広げ、全属性を開放する。威力を弱めてある高水圧の水が叩きつけられる。地上から高速接近してきた岩が、細かく砕かれ、その破片を飛び散らせ、電気が迸る。切り裂くような風が紅蓮を包み込み、身を焦がす炎が全身を覆っていた。

その全属性がおさまり、紅蓮は、どうにか意識を保ち、なんとか浮いている状態であった。闘也は、右手に、ソウルソードを握らせる。もう、ここまでできたからには、迷いはない。

迷いながらも、戦い、答えを導き出す。迷わなければ、戦いの中で、はつきりとした答えがあるはず。

だが、それはただの決め付けに過ぎない。人は迷い、悩み、そして、その先の答えを見つけることができる。人は、迷わなければ、答えを見つげ出すことはできない。未来を掴み取ることはできない！！

「うおおおおおおおつ！！！！！！」

ありつたけの声をあげ、紅蓮の腹部に、その剣を刺す。勢いよく、剣を抜き取る。紅蓮が力なく地上へと落下していく。体の力がふつと抜ける。その瞬間、五人を繋いでいた融合が解けた。

本当にこれでよかったのだろうか。友を傷つけ、（今は味方とはいえ）敵である冷雅の言うことを聞いて。それで本当に、戦いのない、平和という言葉が、真に送られる世界が来るのだろうか。分からない。分からないから、苦しい。

でも、だからこそ、悩むのだ。迷うのだ。人は、人間は、その答えを知るために、迷うのだ。

「終わるのか。これで」

闘也は、地上にその足をつけたと同時に、傍らにいる四人に聞いた。「これで、世界から本当に、争いはなくなったのか？ 終わったのか？」

「分かんね」

乱州が、ややぶつきらばうに答える。だが、その先の言葉が本音であることは、すでに闘也は知っていた。

「でもこれで、とりあえずこの戦争は終わるだろ」

真実であった。カスターマー最高司令官、黒田闇亜は葬られ、カスターマーという組織は、崩壊の一途をたどることになるのだから。

「皆の願いが、一つになれば、終わるよ。きっと。これからは、それをがんばんなきゃ」

的射の声が聞こえる。闘也は的射に目を向けると、かすかに笑みを浮かべた。

「じゃ、どうする？食べ物で世界統一しようぜ！ 織田信長みたいにさあ！」

脳の足りてない秋人が、無意識にそんな単語を口にする。

「食文化が違うでしょ。それに、日本統一したの、豊臣秀吉よ」

由利が、苦笑混じりに秋人の間違いを訂正する。秋人はえっ、と声を上げたが、乱州がそれに追い討ちをかける。

「食べ物で日本統一したわけじゃねえしな」

「そんなあ」

秋人が肩を落とすが、それによって周りは終始、笑いに包まれた。

そうだ。戦争は終わった。

こうして笑いあえる日が、戻ってきたのだ。

戦争は終わったのだ。

「どっかの焼肉屋でも行くか？ 戦争終結祝い。おごるよ」

「おっ！ 闘也太っ腹あ！」

「よっしゃあ！ 食いまくるぜ！！」

空は、暗雲を完全に排し、澄み切った青空になっていた。

48、終わりと破壊

東暦二〇一一年、五月。各地で勃発していた、「サイコスト狩り」は、さらにその規模を広げていき、エスパーにも、刃を向けていた。カスタムサイコストで構成された、独立軍隊組織「カスタマー」。最高司令官、黒田闇亜をトップとし、活動を開始した彼らは、ピュアサイコストに対し、「第二次超能力戦争」を開戦させた。

この、「第二次超能力戦争」は、後に、「カスタム紛争」とも呼ばれ、カスタムサイコストの影響は、世界に響き渡っていた。

同じ年の七月の初め。カスタマー最高司令官、黒田闇亜は没し、二ヶ月にもなる、「第二次超能力戦争」は、ようやくその戦端を閉じた。

この戦争に対して、民衆からは、戦争にしては、早期解決となり、良い結果であったという者が多かった。確かに、あれだけの大規模な兵力を持ちながらも、たった二ヶ月での終結。むろん、この早期終戦には、彼らの姿もあった。

かつて、エスパーによって始まった「第一次超能力戦争」を終結させた、五人の少年達。彼らの活躍により、戦争が終わったのは言うまでもない。

彼らがいなければ、あるいは長期化し、泥沼の戦いになっていたのかもしれない。彼らの居場所は、何も戦場だけではない。それを知っているからこそ、民衆は、歓喜に満ち溢れ、英雄を称える。

そして、もう一人、この戦争を終結させるために尽力した少年がいた。

赤火紅蓮である。

公には、あまりその名を聞かぬ紅蓮ではあるが、それでも、彼が実力者であり、英雄達と同等の力を持つことは、多くの人たちに伝えられていた。だが、彼が求め続けていた力に「飲まれかけた」とは、誰も知らなかった。

紅蓮は、家族のいた場所に一人、たたずんでいた。開け放した窓からは、夏の湿っぽさを吹き飛ばす、乾いた風が通り抜け、部屋の中の物をたなびかせている。

ふと、紅蓮はテーブルの上においてあった、一枚の写真に目が留まる。笑っている両親の間で、無表情で映っている自分。紅蓮は改めて、自分がこの笑顔を二度と見られないのだと悟った。失ったものは、二度と戻らない。自分が殺してきた者の中にも、家族がいるし、愛している者もいる。それを、自分は断ち切ったのである。罪の重さは、十分に分かっていた。だからあの時、鬨也達にやられてよかったと思っていた。

自分はまた、大切なものを失うところだったのだ。

左耳に装着している無線機から、通信が入る。

『こちら、サイコスト協会、炎天支部。炎天中央広場にて、反乱兵が出現。撃退にかかれ』

「了解」

紅蓮は、家を飛び出し、炎天中央広場へとたどり着く。すでに、木々は倒れ、子供が遊ぶ遊具も無残にも破壊されている。反乱兵がこちらに気づいたのか、（かなり遠くからではあったが）突撃してきた。紅蓮は、無線機に向かって、そして、目の前の反乱兵に向けて、そして、自分自身に向けて、言い放った。

「赤火紅蓮、戦闘を開始する」

しかし、紅蓮や、鬨也達は分からなかった。

たった二ヶ月で終結したとは言え、この戦争は、新たな戦いへの布石であることを。

闇亜が行おうと画策した世界破壊が、すぐ近くにまで迫っていることを。

別の世界でまた、世界破壊が行われようとしていたことを。

世界が本当に、破壊されるということ。

48、終わりと破壊（後書き）

未来少年2nd、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

一応続編を掲載予定ですので、お心準備のほど、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2468r/>

未来少年 2 nd

2011年7月8日09時37分発行